第四巻

伽羅先代萩

國性爺合戦

辨慶上使

蘭平物狂

彦山權現誓助太刀

河竹繁俊
渥美清太郎
編

時代狂言傑作集

第四巻

東京 春陽堂發行

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

第四巻

時代狂言傑作集

東京
春陽堂發行

目次

挿繪の目次と說明

澤村訥升
一勇斎国芳画

川海老蔵
井筒
市川團蔵
一勇斎國芳画
澤村訥升
一勇斎國芳画

解説

「伽羅先代萩」が現今度々演ぜられるやうな形式になつた迄には、數次の變遷を經てゐる。而して、現今演ぜられる所のものは、天明五年正月、江戸の操り芝居「結城座」にかゝつたのが、その最初なのである。先代萩の骨子たる「伊達騒動」については俗説が盛んに行はれてゐるが、大畧次のやうな事件である。

萬治三年少將兼陸奥守伊達綱宗が隱居したので、その嫡子龜千代丸が年僅か二歳であつたのに國を賜はつた。寛文八年十二月龜千代丸は元服し、御諱の一字を賜はり、四位の少將に任じて綱基となつた。仝十一年一族家人よりの訴訟により、執政の宅に於て決せんとしたが、その時狼藉が起り、家人原田甲斐宗輔といふものが、伊達安藝宗重を切り、外に怪我して死ぬ者もあつたので仝四月三日に一族家人等の罪が定められたといふのである。又兵部少輔宗勝に就いては、兵部少輔宗勝（伊達と稱す）は政宗の末子である。（十男だといふ）。正保元年將軍家からめされて、綱宗隱居の後その子龜千代丸は幼稚であるから、國の政務は兵部少輔が家人等と相談して行ふべき旨を仰付けられた。が宗勝は一人で自分勝手に國政をみだしたので、國中の上下これを恨む事が甚しかつた。時に伊達安藝宗重といふ者があつたが、これは左京大夫綱宗

（政宗の曾祖父）の十二男であるが、この有様を見て心痛し、この儘では國も遂に滅ぶる事と憂ひて、度々宗勝を諫めたが、聞入れないので、意を決し將軍家へ訴へて御裁斷を願ひ、領民を救はうと寛文十一年二月に關東へ來たり、一封の書を献じて事の體を言上した。幕府では早速に板倉内膳正重矩の宅に伊達の頭人等を召集めて糺問せられ、三月二十七日には大老酒井雅樂頭忠清の宅に召集めて對決させたが、この日伊達家累代の家人原田甲斐宗輔は宗勝の無二の與黨であつたが伊達安藝を切り捨てゝ執政の座に切込まうとするのを、有合はせた人々が馳集つて甲斐を切つて捨てた。伊達の家來で傷を受けて死ぬ者が二人、忠清の家來にも亦死んだ者がある。四月三日には各々罪が定められ宗勝は土佐國へ流され、子息市正宗興は豐前國へ流罪となつた。

有名な仙臺侯と遊女高尾との事については、伊達綱宗は遊蕩に流れ、大川の三股に船を浮べて高尾を手にかけたりしたその行跡で、隱居閉門仰付けられたといふのであるが、一方高尾考によると「是は唄淨瑠璃に面白く作りなせしが、やがて誠の如くなりしものなり。高尾はやはり御館にめし使はれて後老女となり、老後跡を立て下されしは、番士杉原重太夫又新太夫と代々かはる〳〵名乘りて、（祿玄米六百石）、今目付役を勤むる重太夫即ちこの末也」とある。とにかく、この高尾の事については諸說紛々として明確には知られてゐないのである。高尾の代數

についても、初代といはれ、又二代とも稱され、四代目だとも傳へられてゐる程である。

この先代萩の狂言は世界を東山時代に持ち込んだもので、仁木彈正は原田甲斐、外記が伊達安藝、細川勝元が板倉内膳正、山名宗全が酒井雅樂頭と、それ〴〵附託されてゐるのは云ふ迄もない。が、この伊達騷動を一番初めに脚色した作は東山時代ではなくて、奧州軍記の世界に持ち込んであつた。即ち延享三年十一月、江戸森田座の興行で名題を「大鳥毛五十四郡」といふ。四世團十郎が尼公と貞任、初代菊五郎が權の太夫女房お照といふ役に扮したといはれる。

次に現れたのが大阪中の芝居、嵐七三郎座で、安永六年四月十日からの興行、名題は「伽羅先代萩」、角外題に「奧州秀衡跡目爭論」とあつた。作者は奈川龜助。これは餘程現在の「先代萩」に似てゐる。小治郎親衡の妻と治郎秋衡の妻とが、各々夫の事を話合ひ、夫治郎は氣短か故伊達の治郎秋衡といはひで、伊達秋々々々と申しますなどゝいふせりふがあつたといふ。その時の役割は、

梶原景時（初代中村歌右衛門）乳人政岡、伊達治郎（中山來助）、榮御前（中村治郎三）、秩父重忠、松ケ枝節之助（初代中山文七）、高尾（尾上粂助）、八汐（桐山紋治）、常陸坊海尊、山伏眼通坊（初代淺尾爲十郎）等。

この芝居では梶原は山名宗全、重忠が勝元、海尊が仁木彈正、治郎が外記にそれぞれ當るわ

けである。この芝居は翌七年に、京都の竹本春太夫座で淨瑠璃にとりたてられ、御靈芝居場までは院本として出版もされたといふ。

次に現はれたのは、伊達騷動へ累の筋をつき交ぜた「伊達競阿國戲場」である。安永七年八月江戸中村座上場、初代櫻田治助の作であつた。この中先代萩に關係のある役割を摘出すると、渡邊民部(四世幸四郎)仁木彈正(大谷廣右衞門)荒獅子男之助、勝元(五世團十郎)山名宗全(中島三甫右衞門)渡邊林左衞門(大谷友右衞門)等であつた。

對決の所で白布の文字判らず、林左衞門その布を卷いて腹切れば血汐の中に呪咀の文字あり、仁木の企み顯はれしとか、勝元の捌き役大當りなりと、「歌舞伎年代記」に誌してある。

その次に出たのが現存の「飯焚き場」のある「伽羅先代萩」である座名と年月とは前に記したが、作者は江戸作者の松貫四、吉田角丸、高橋武兵衞の連名で、大體の骨組みは、第一葛城山、[illegible]山、第二伊達上屋敷門外、第三貝田屋敷、第四浮世渡平住家、豆腐屋、第五堅田浦、道行夏野の雨し井、堅田浦浮御堂、第六竹の間、飯焚き、第七上使馨應、第八衣川定倉屋敷、第九對決といふ順序になつてゐる。

然しこの作はこゝに收錄した現存の先代萩そのまゝではない。第一に仁木彈正といふ役名がなく、貝田勘解由といふ人物がその代りになつてゐる。山名宗全も細川勝元もなく、その代り

が梶原景時、秩父重忠であり、對決といつても樣々の人物が出て來て、義經公の面前で行ふのである。伊達明衡といふ役名も見える。八汐も彈正の妹でなく渡會銀兵衛の女房になつてゐるので、五行本にも政岡の愁歎の言葉に「せめて人らしい者の手にかゝつて死ぬ事か、素性賤しき銀兵衛が女房づれの手にかゝり、なぶり殺しを現在の」とある位である。思ふにこの義太夫淨瑠璃は、前述した飯焚きまでを版行した院本を、前後首尾相整ふやうに手を入れたものであらう。

現行の脚本は、竹の間と飯焚きとを院本からかり來つて、對決は殆んど「伊達競阿國戲場」あたりから持つて來たもので、その間に矛盾を生じないやうにしたものである。さうした集合せ物だけに飯焚きから對決に移る所が、あまり突然すぎるやうに考へられる。

この狂言の「床下」へ出る荒獅子男之助は、院本では松ケ枝節之助といふ端役にすぎないものであるが、（但しそれは床下だけの話。原作では對決などでは活躍してゐる。）五代目團十郎が伊達の七役にこれを演じてから、名も荒獅子男之助と、荒事らしく改め、今日のやうな大役になつたのである。もつとも荒獅子男之助といふ名は、二代目團十郎が「太平記阿國戲場」（享保九年）といふ芝居を演じた折にも見え、その他時々用ひられた名前ではある。男之助と同じく、床下の仁木は五代目の幸四郎が無類の大當りをとつてから、今日のやうな型が殘つたので

ある。今でも仁木は四ツ花菱の幸四郎の紋を使ふにきまつてゐる。一見識あつた七代目團十郎さへ、この役では幸四郎を眞似て左の眉の上に黒子をつけたとさへいはれてゐる。

この作の價値は、何といつても飯焚き場の政岡の母としての至情と乳母としての苦忠と相錯綜した悲劇的情調を漂はした場面と、床下の繪畫美とにある。仁木の白塗りの一癖ありげな面魂と、赤塗りの男之助の勇と相對照した所に價値がある。仁木は無言、男之助の怒號に近い言葉にもこの剛柔の對照は窺はれる。しかも背景は眞黒で簡素な床下である。この場は歌舞伎劇の存する限り、いつまでも珍重されることであらう。たつた數句の院本の文章からあれだけの大舞臺を構想した狂言作者の腕も亦型を殘した俳優達の頭腦も共に推賞するに足るものである。

「國性爺合戰」は正德五年十一月朔日から、大阪竹本座にかゝつた淨瑠璃で、作者は云ふまでもなく近松門左衛門である。

支那明朝の末、永明王の御代、我國では後光明天皇から後西院天皇にかけての御宇、將軍は德川四代家綱の時代。明朝は衰微して李自成の叛亂があつたりして、遂に淸朝の聖祖のために滅されてしまつた。この明朝の沒落以前、明朝の臣鄭芝龍といふ者が故あつて我國に亡命し、肥前平戸に流寓してその地の田川氏の女を娶り、一子を設けた。この子が鄭成功である。成功

十四歳の時父芝龍に從つて明に歸り明朝の回復を計つたが成らなかつた。隆武元年（我國の正保三年）、鄭芝龍は遂に清朝に下つたが、成功は從はなかつた。永曆十五年（我國の寛永元年十月）鄭芝龍の殺されるに至つて、成功も支那の地を離れ、東寧（今日の臺灣）に據つて尚も清朝に抗したが、その翌年康熙元年の五月、鄭成功は臺灣で歿し、彼の意志は遂に達せられずに終つた。これより先、鄭成功は自力だけでは回復の出來ないのを知つて、我國の德川幕府にその救援を願つた事がある。紀伊大納言德川賴宣などは大乘氣で、自分一人だけでも救援に出かける意志はあつたが、當時の幕府當事者は評議の結果、不可なりときまつたので、沙汰止みになつた。

　この日本生れの混血快男兒をつかまへて、一篇の劇を構成したのが「國性爺合戰」である。次にこの梗概を述べる。

　初段は支那の場。大明十七代思宗烈皇帝は光宗皇帝の第二の皇子、日每遊宴を事として三夫人、九嬪二十七人の世婦、八十一人の女御があつた。皇帝は何不自由ない身ながら一つの不滿は皇子のない事であつた。所が今度三千第一の御寵愛華清夫人が御懷姙になつたので、天地の神々に御祈禱あり、乳母にも近頃男兒を產んだ大司馬將軍吳三桂の妻、柳歌君が定められた。そこへ隣國韃靼から使者として貝勒王といふのがやつて來て、韃靼大王は華清夫人に見ぬ戀に

あこがれてゐる故、貰ひたいと申出す。右將軍李蹈天は、兼ねて韃靼に心を通はすもの、早速に承知せよといふが、吳三桂は之れを罵倒する。貝勒王は怒つて大軍を以て押しよせるといふ時、李蹈天は左の眼をくりぬいて出すが、それは一味である印であつた。貝勒王は表向きはその忠識に感じ立歸る。帝は逆心を御存知ないから李蹈天の忠義を賞し、御妹栴檀皇女を下されんとする。中の段になつて厭がる栴檀皇女をば梅と櫻の花合戰を行ひ、櫻が勝てば厭でも嫁入らなければならないと御諚がある。その梅方が負ときまつた折、吳三桂が駈付けて蹈み散らし帝を諫めるが、目のくらんだ帝は逆鱗の餘り吳三桂を散々に打擲する、その時、閧の聲が起り韃靼は攻め來り、帝は崩御するに至る。切になり吳三桂は華淸夫人のお供をして立退くうちに、后は鐵砲に當り吳三桂は今はこれ迄とその腹をさき皇子を助け出し、自分の水子を代りに腹へ押しこみ、若宮を守護しいづくともなく立去る。一方柳歌君は栴檀皇女のお供をして立退くが、敵方におつ取り卷かれ、遂に皇女を船に乘せて流し、自分はそこで討死する。

第二段の口は本卷收祿の序幕。この後へ栴檀皇女の舟が流れて來て、事の顚末を知り皇女を女房小睦にあづけ、一官夫婦和藤內は支那をさして船出する。和藤內といふ名は「母が和國の和の字を用ひ、父は唐人唐の聲をかたどつて、和藤內三官」といふのである。切は千里ケ竹、和藤內は父に別れ母と共に甘輝の城をさして行く途中、千里ケ竹といふ大藪へ迷ひ込む。折柄、

一匹の猛虎が飛び出すので和藤内之と戰ひ勝負の見えないのを、母の才覺で伊勢神宮のお札をさし上げると、神國の神の御名に恐れて虎は逃げる、そこを取つて押へ、折柄虎狩りに來た李蹈天の家來共を散々になやまし、皆自分の家來にする。

第三段の口は本卷輯錄の二幕目。切は大詰。

第四段は栴檀皇女小睦の道行があつて、九仙山の場になる。呉三桂は若宮を守護し九仙山に登ると二人の老人が碁を打つてゐる。これこそ明朝の御先祖高祖皇帝と青田の劉伯溫とが仙人になつたので、兩老人の仙力によつて、呉三桂は國性爺の勇ましい戰振りをパノラマのやうに見せられる。兩老人が去つて氣がついてみると仙界の事であるから、一瞬の中と思つたのが五年の年月を經過してゐたのである。そこへ一官國性爺が來て、若宮を守護して三人は城へ行く。

第五段は甘輝、呉三桂、國性爺等が軍評定の最中、一官が拔駈けして敵陣へ切り込む。三人は驚いて駈けつけ一官を助け、韃靼王は千枚の罪に處し、李蹈夫をひねり殺す。若宮は皇帝となり、國安全に治まるに終る。

この作の出來た當時の竹本座の有樣を見ると、初代竹本義太夫は正德四年九月十日に卒し、この後をついだのが、後に二世義太夫になつて斯流中興の祖とまで仰がれた政太夫であるが、この人生來小音で人氣がなかつた。義太夫の死は大打撃であつて、竹本座の存亡にまで影響があつ

た程である。義太夫と共に義太夫節發達のために一方ならぬ盡力をして來た近松にとつては、大事な場合である。この時近松はこの題材をつかんだ。そして思ひ切つて破天荒な九仙山の景事を案出して書いたのである。政太夫はこの時三段目の切、即ち獅子ケ城の段を語つたが大當りで政太夫の位置はこの時に定まり、竹本座の基礎は固まつたといつてもいゝ。「國性爺合戰」の興行は三年越し、十七ケ月の久しきに渡つたといふ。尙これより以前の興行には、間にのろま人形、どうけ、からくりなどをやつたのであるが、「國性爺」以後は、かういふ事は全くなくなつたと傳へられる。

この作の竹本座上場の後に三都の各座で直ぐ上場された。翌享保元年の秋には、京都都萬太夫座で上演され、その時の役割は、

甘輝（柴崎林左衛門）、錦祥女（津川かもん）、老一官（藤川平九郎）、貝勒王（菊田善右衛門）、和藤內母（初代芳澤あやめ）、小むつ（菊川喜代太郎）、李蹈夫（三保木儀右衛門）、和藤內（榊山小四郎）等

享保二年三月十五日からは大阪中の芝居で演ぜられた。その時の役割は、

和藤內（竹島幸左衛門）、甘輝（市川佐十郎）、一官（嵐三十郎）、小むつ、錦祥女（佐野川花妻）、栁歌君、和藤內母（初世荻野八重桐）等であつた。

江戸でも、享保二年五月五日から中村座で「國性爺實船」の名題で、曾我五郎後に和藤內（二世團十郎）、曾我十郎後に甘輝（市野川介十郎）の役割で演じてゐる。

市村座でも同じく五月に初代大谷廣次の和藤內で出したが、これは大當りで、十月まで打續けたといふ。

森田座でも松本幸四郎が「國性爺後日合戰」で、五月に國性爺を演じてゐる。かく三都で同じ狂言を出すといふ事は、當時にあつては殆んど異例で、いかにこの作が大評判だつたかといふ事を證して餘りある。和藤內といふ荒事の人物については、近松が二世團十郎の荒事に暗示を受けたのだといはれてゐる。尚後世の人は「曾我會稽山」「雪女五枚羽子板」と共に時代物に於ける近松の傑三作と稱してゐる。

この作は支那の世界でありながら、甘輝錦祥女ともに日本式の義士烈婦である所が注目するに足る。要するに世界が支那といふ事が目新しかつたので、人氣を博したので、內容は在來の近松の時代物と同じ性格である。も一つは近松がお國自慢を隨所に點出せしめてゐる點も時人の氣に入つた所でもあつた。

和藤內の母親には、不思議に名がない。歌舞伎に演ぜられた時でさへ名はつけられてゐないのである。縛されてゐて「唐猫」の作りに、動きの多い有名な難役である。

近松はこの「國性爺」についで和藤内が臺灣へ渡つてからを題材とした「國性爺後日合戰」といふ作を享保二年に竹本座で出したが、これは大不評判に終つた。紀海音も之に倣つて「傾城國性爺」といふ作を書いてゐる。

「御所櫻堀川夜討」は元文二年正月廿八日から竹本座の舞臺にかゝつた淨瑠璃劇で、作者は文耕堂と三好松洛兩人の合作。全部で五段物である。

初段の口は鎌倉問注所の場。右大將賴朝は都の守護に任ずる舍弟義經が、平家の連判狀もよこさぬを始めとして、種々の不都合のあるのを叛逆の證なりとし、討手をさし向けようとすると梶原景時は自分の忰景高に討手の役を云ひ付ける。梶原をやつては義經公の一大事と、源氏譜代の臣澁谷土佐坊昌俊は自分を討手にと申出す。梶原は昌俊をやる事は不承知なので昌俊は熊野の牛王に起請文を書いて疑をはらし、景高諸共都へ上る。中は石部の場。義經の臣平時忠がひそかに梶原の旅館へ訪れて、兼ねて一味の二人だから義經を滅す計を廻らす。堀川で平家の連判狀を時忠から景高に渡さうとする時、横合から何者とも知れずそれを奪ひ取つて立去る。後で判るがこれは土佐坊昌俊であつたのである。切は義經の堀川御所。御臺所の侍人によつて時忠の積惡あらはれ、能登[illegible]鈴の岬へ流罪になる。

二段目の口は五條橋の場。義經が牛若丸の時こゝで千人切をしたその供養とて、駿河次郎が奉行となり、切られた者の回向をする。身分の賤しからざる女が來て、夫の父がやはり討たれたといふが年月を合はしてみると、その日は義經の父義朝の命日にあたり、義經はその日は人を殺さないから父を殺した者は他の人だといはれて歸る。中は粟田口の場。こゝへ毎夜追剝がでるがこれは伊勢三郎で老母の看病の費用を得る爲に非道な事をするのである。切は大津宿はづれ三郎宅の場。三郎は元來源氏の家人であるが、父を義經に討たれたといふ思違ひから浪人し、醫を業としてゐるのである。妻が駿河次郎に聞いて來た話で父の敵は義經でない事が判る。そこへ一人の侍が腹の病を直してもらひに來て、話の末其の侍が父の敵である事が判る。侍といふのは土佐坊昌俊である。三郎は親の敵と切りつけるが、昌俊は平身低頭して、義經賴朝の御仲直りあるまで敵討は待つてくれといひ、その代り盜んだ連判狀を渡す。三郎は尙も討たうとするが、老母の意見によつて承引する。「伊勢三郎義盛と土佐坊昌俊が契約金石の如く預りの我が命唯今持つて歸り申す、さらば〳〵」と立ち別れる。

三段目の口は堀川御所。伊勢三郎は再び源氏に味方し、土佐坊に貰つた連判狀を土産に歸參する。梶原が卿の君の首を討てといふ。切がこゝに收錄した序幕。

四段目の口は道行伊勢土産。時忠の御臺の伊勢參宮道行。途中梶原が御臺を捕へようとする

のを藤彌太が助けるが、實は前から藤彌太と梶原との間には約束があつての狂言なのである。中はこゝに收めた二幕目。切になつて土佐坊昌俊が夜討に來る。伊勢三郎はその二心を笑ふが矢を調べてみると矢尻の拔いたものであつた。義經その義心に感じ、自分の家來にと勸めるが、土佐坊は契約によつて伊勢三郎に討たれる。

五段目は「花扇邯鄲枕」といふので靜御前が舞つて、賴朝義經御仲和睦の瑞相を現す。

この芝居が江戸の舞臺に始めて上演されたのは、安永二年三月、市村座で
義經（市村羽左衞門）、侍從太郎、土佐坊（坂田半五郎）、武藏坊辨慶（大谷廣次）、伊勢三郎、磯の禪司（尾上松助）、おわさ、靜（中村松江）、藤彌太（市川團三郎）等の役割であつた。

この作は、三段目に娘の信夫が父親の手にかゝつて殺され、四段目で男の藤彌太が母親の手にかゝつて殺される、二つの子殺しを取扱つた所を山にしたものだといはれる。三段目の所謂辨慶上使では、「生れた時の産聲より、外には泣かぬ辨慶が」、大泣きに泣きくづれる所に興味があるのは云ふまでもない。

「倭假名在原系圖」は寶曆二年十二月七日から豐竹座に上場された淨瑠璃劇で、作者は淺田一

鳥、浪岡鯨兒、並木素柳、豐竹甚六の連名である。この作は元文三年正月に竹本座へかゝつた「行平磯馴松」といふ文耕堂、竹田正藏、三好松洛三人の合作になつたものを改作して、これに松風村雨の筋をつけ加へたものである。

江戸で演ぜられたのは寶曆十年の秋中村座で、役割は、

蘭平（中村助五郎）、在原行平（中村七三郎）、松風（瀬川菊之丞）、飛脚忠次（澤村宗十郎）等で、助五郎の蘭平が大當りであつた。

この四段目を常磐津で演ずる事があるが、その始めは弘化二年三月、中村座でやつた時で、名題を「蝶の來て手元狂ふやつくり髭、狂亂雀の百迄」といふ。此時の役割は、

蘭平（四世歌右衛門）、行平（市川九藏）、與茂作女房おりく（岩井松之助）、大江音人（關三十郎）等で、常磐津は四代目の文字太夫、三味線は岸澤式佐であつた。

「彦山權現誓助劔」は天明六年閏十月十八日から竹本千太郎座にかゝつた淨瑠璃劇で、作者は梅野下九、近松保藏の合作。竹本座では近松半二、三好松洛等の合作「妹背山婦女庭訓」以來の大當りを得たといふ。

これは「鎮西御軍記」といふ寫本によつて脚色されたもので、角書には「御陣九州地理八

道」と記してある。一説には、六助は宮本武藏、一味齋は無二齋、京極内匠は佐々木巖流にあてた趣向であるともいはれてゐる。

全部で十一段物である。芝居でするのは、こゝに收めた分だけであるが、他に尚種々の場面があるから、荒筋だけを書いて見よう。

第一段は住吉の場。京極内匠は新參の侍ながら、指南番とて門弟を引連れて遊山に來る。後に郡音成の御臺が衣川彌三郎、腰元お菊などを引きつれて遊山の折、神主が出て神馬が嘶いて止まない事を言上する。所へ三韓とくねぎの城主車騎將軍木曾官といふ者が來て、久吉の朝鮮征伐の無駄な事を笑ふ。彌三郎むつとしてその勝負を占ふとて、木曾官とお菊とが神馬を引きあふと、木曾官では動かないが、お菊が引けば動くとて大いに喜ぶ。

第二段は彦山の山中。毛谷村六助は召抱へに來た音成の家來を追歸す。所へ高良明神が顯れて軍術の祕書の一卷を渡す。明神といふのは一味齋の假の姿であつた。

第三段は、本卷の序幕であるが、その他に木曾官が朝鮮征伐の爲の地圖を音成に獻上するが、來合はせた久吉に、木曾官實は明智の殘黨四方天但馬守なる事を見顯され、遂に切腹する時に京極内匠に、實は明智光秀の遺子なる事を知らせて死ぬ。

第四段は周防國八幡宮の場。

第五段は一味齋邸、お園出立の場。
第六段は須磨の浦で、本卷の四幕目にあたるが、本文ではお菊だけが返り討にあふのである。
第七段は瓢棚の場。こゝで內匠は光秀の子である事をはつきり知るのである。蛙丸といふのは、光秀が最後まで帶してゐた刀なのである。
第八段は杉坂墓所。即ち五幕目である。
第九段は毛谷村、此脚本の大詰である。
第十段は、六助は立浪家へ行き內匠に今一度試合を申し入れるが、內匠は聞入れない。六助は殘念に思ふ所へ家老轟傳五右衞門の盡力で試合をすることが出來て打ちすゑる。切になつて六助は、主君を持つための久吉公御前相撲が始まる。三十七番は勝つたが最後に加藤正清の臣三浦又藏のために負け加藤の臣となり、貴田孫兵衞と改名する。
第十一段は敵討。お園の主君郡音成からは、衣川彌三郎が檢使として來る。皆々本望を遂げて終る。
江戶の劇場で始めて演じたのは寛政八年で、三座が共演した。都座では、六助(市川八百藏)內匠(片岡仁左衞門)、お園(阪本のしほ)、友平(中村仲藏)、等。河原崎座では、六助(坂東蓑助)、內匠(市川高麗藏)、等。桐座では、六助(澤村宗十郎)、お園(瀨川菊之丞)等であつて、

何れも大當りであつだ。

この作を讀んでゆけば、自然に判るが、三幕目で死んだ筈の春風藤藏が、四幕目の返り討の手傳ひをするなど、大變な矛盾がある。これは前に云つた通り須磨浦でお菊だけが殺されるので、四幕目は全然後の狂言作者の入れ事だからである。返り討の場は、何となく天下茶屋でゞもあるやうな、在來の敵討物と一味共通した味さへある。狂言作者がお園方に同情を起させ、内匠を敵役にしようとばかりする爲に、かうした改惡が生ずるのである。

（例によつて、本卷の校訂、解說に際しては、文學士間民夫氏の援助、研究に俟つ所多いことを附記して謝意を表する。大正十五年三月下旬、河竹繁俊しるす。）

伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）

伽羅先代萩（先代萩＝四幕）

序幕

大磯三浦屋の場
鎌倉花水橋の場

役名　足利賴兼公、大江鬼貫公、鹽澤丹三郎、大場道益、男達浮世渡平、奴五郎平、井筒女之介、梅澤小五郎、侍○△□◎、夜鷹そば仁八、太鼓持言孝、仕出し等、三浦屋高尾、仲居四人、禿其他。

本舞臺三間の間、平舞臺、正面中障子のある襖、上手に一間の附屋體、障子立て切りあり。いつもの處に木戸口、三浦屋といふ掛行燈を掛け、すべて三浦屋座敷の模樣。爰に顏役侍○△□◎、大臺酒肴を取散し、酒盛りをしてゐる。仲居○△腰帶を罠にして持ち、太鼓持言孝、狐釣りの踊りを踊つてゐる。此見得賑やかなる狐釣りの唄にて幕あく。

皆々　釣ろな〳〵、信田の森の、狐を釣ろな。

トよろしくあつて納まる。

仲居　サア〳〵、一つお上りなされませいなア。

ト皆々捨ゼリフにて酒盛りあつて、

侍○　ときにいづれも、我君頼兼公、この三浦屋へ日々お通ひなさるれど、あの高尾太夫はぴんしやん〳〵と振り付けて、御前の御心に隨はぬとは、心憎い奴ではござらぬか。

侍△　左樣でござるテ、それといふもあの高尾には、島田重三郎と申す浪人者の間夫がござるとのこと。

侍○　我君頼兼公は五十四郡の御主人、金銀は元より、何一つ御不足のなき御身なれども、あの高尾が靡かぬとは、此道ばかりは。金銀づくではいかぬと見えまする。

侍△　われ〳〵始め各々なぞは、金はなし。男は惡し、女郎が振るのは無理ではござらぬテ。

言孝　イヤそのやうに曰うべからず。假令男が惡くとも、女の惚れないといふこともげえせん、私なぞは御覧の通りの變面でござりますが、いろが出來て實に困りまするテ、ハヽヽヽ。

仲○　又言孝さんの惚氣でござんすか。

仲□ ほんに、をかしい人ぢやわいなア。

ト此の内言孝、花道を見て、

言孝 アレ、向うから、殿様と太夫さんが見えるわ〳〵。

侍○ ナニ、御前様がお歸りとナ。

侍△ 早く爰らを片付けい。

仲居 アイ〳〵、合點ぢやわいなア。

ト皆々酒肴を片付ける。賑やかな鳴物になり、花道より頼兼公を先きに、高尾、禿、女之介、小五郎、仲居二人、奴一人附添ひて出て來り、花道に止り、

頼兼 「淺香山、影さへ見ゆる山の井の、淺くも人を思ふものかな。」それは陸奥こゝはまた、名に大磯の廓景色、深くも迷ふ頼兼が振られて通ふ小夜千鳥。

高尾 その桂木の君ならで、夜の契りも絶え〴〵に、持成悪しき不束も、賤しき身ぞと汲み分けて、淺くもあらぬ山の井の。

女之 姿も伊達な我君のお側に附添ふ某は、その名も井筒女之介。

小五 お後に立ちし私も、ちつとは粋な梅澤屋小五郎といふ剽輕者。

仲△　常々馴れし此郷の、曲輪の内のおもしろさ、梅が枝諷ふ鶯の、その聲鳴きも自ら。

奴　片言混りに奴めも、君を祝うて千代八千代、此の色里を鳴り歩く、その名も丁度雷五郎平。

頼兼　サア／＼太夫、少しく早う三浦屋へ、參らうではあるまいか。

高尾　そんなら殿さん、子供來や。

仲居　サア、ござんせいなア。

ト鳴物になり、皆々本舞臺へ來りよろしく居並ぶ、

侍○　我君樣には、御機嫌よろしう。

四人　恐悦至極に存じまする。

頼兼　サア／＼太夫、チト浮き／＼としやいなう。

高尾　エ、モ、何ぞと言ふと浮き／＼してと、假令浮かうと浮くまいと、私が勝手でござんす、モウ
モウ構うて下さんすナ。

頼兼　ア、コレ、何もそのやうに腹立つ事はない、さう言うたが氣に障つたら、堪忍して機嫌直して
たもいなう。

侍○　これは又我君樣、あんまりでござりまする。如何に全盛の花魁でも、我儘氣隨も程があるに。

侍△　言はしておけば方圖がない、我君樣のお詞を、用ひぬのみか言ひたい三昧。
侍□　地藏の顏も三度とやら、大腹中の御前でも、附添ふ我等が料簡せぬ、露はに言うて何もかも、此場に於いてほざかさうか。
侍◎　間夫狂ひは止しにして、此の日本國に二人とない、足利左金吾頼兼樣といふお大盡に。
四人　もう好い加減に靡くがよいわ。
仲△　モウシあなた方、何を言はしやんすえ、高尾さんに限つて間夫狂ひの何んのといふやうな。
仲○　そんないやらしいことは、神掛けてござんせぬわいなア。
仲◎　何も知らしやんせぬくせに、入らぬことを言はしやんせずと。
仲□　引込んで、
四人　居やしやんせいなア。
奴　イヤ引込んぢやアゐられねえ、島田重三郎といふ色男のことは、此の曲輪で誰知らねえ者はないわ。モシ高尾さん、下世話にいふ慾の世の中、見る影もねえひつてんな、浪人を抱いて寢ようより、大盡の伽羅で作つたお旦那に、抱かれて寢るのが當世と言ふものだ。
高尾　ホヽヽヽ、あんまり悋氣なそのお詞、間夫といふではなけれども、あると思へばあるにして、

曲輪の意氣地で言はうなら、假令醜男貧でも、心意氣に惚れるのが、女郎の習ひでござんすぞえ。それを兎や角いはしやんすは、無粋な人の大きな野暮、お前方も女郎衆に惚れられなさんす心なら、少しは粋にならしやんせいなア。

侍〇　エヽ、どう言へばかう言ふ。

皆々　見すく知れた。（ト言掛けるを）

頼兼　アヽコレく、其方たち、そりや何を申す。假令如何ほど身を悪樣にいたすとも、此頼兼さへ何んとも申さぬに、無禮な奴め、控へてをれ。

皆々　デモ、餘りと申せば。

頼兼　ハテ、控へいと申すに。

皆々　ヘエイ。

頼兼　左樣な事は取りおいて、酒にせいく。

仲居　アイく。（ト大臺の物を持出す）

頼兼　コリヤ小五郎、これへ參れ。

小五　ハツ。

頼兼　この上は、高尾は余が身請いたして館へ連れ行く、其方三浦屋の亭主に其趣を談合いたして、萬事よろしく計らうてくりやれ。

小五　ヘイ、それでは、花魁を身請なされまするか。

女之　恐れながら我君様、高尾を身請の儀は暫くお控へなされませ。

頼兼　其方までが入らざる諫言。是非とも高尾は身請して館へ連れ行く。余が心に随はずば。

女之　スリヤ、どのやうに申しましても。

頼兼　エヽ、くどいわえ。ソレ小五郎、少しも早く。

小五　畏まりました。（ト奥へはひる）

頼兼　最前より餘程の銘酊、誰かある枕持て〱。

ト奥にて浮世渡平。

渡平　そのお枕、持參いたすでござりませう。

侍　あの聲は、浮世渡平。

ト合方變つて、奥より浮世渡平侠客のこしらへにて出來り、そこにある袱紗を取つて、頼兼の履きて出たる伽羅の駒下駄を載せ、頼兼の前へ出し、

渡平　浮世渡平が君へ捧げる御枕、イザ、お召し遊ばされませう。

ト頼兼見て起直り、キッとなつて

頼兼　コリヤ我が履き歩く此ぽくりを、枕にせいとは奇怪千萬。

渡平　アイヤ、此のぽくりこそ我君にはよきお枕。

頼兼　ナント。（ト誂への合方になり）

渡平　お足に掛けし此品を、頭に當てることならぬを、御存じあつて何故に、天下に尊き大切の、寶を以てぽくりとなすとは、餘りと申さば勿體なき、淺ましき御身持。沓新しうして冠とならざる本文は、三つ兒も知つた世の譬、名木々佛も生ずる砌り、是は冠り是は沓と、上下の差別はあらざれども、巧の善惡その業にて、枕ともなりぽくりともなる。君は正しく天下の御連枝、尊き御身を輕々しく、かゝる遊里へ御成は、則ち伽羅をぽくりの如し、佞人輩は惡巧みに御心惑はし沓を枕の御有樣、浮世渡平が諫言を、何卒聞し召し下され、御歸館あるやう我君樣、偏に願ひ奉る。

ト思入にて言ふ。

頼兼　ヤア小ざかしき渡平が詞、其方如きが諫言に歸館すべきや、二度と申すな、聞く耳持たぬ。

女之　唯今渡平が申せし如く、何卒御許容遊ばすよう、佞人輩の甘き詞に惑はされ、お聞入れはござらぬか、チエヽ情ない我君樣。

ト侍○△□◎奴思入あつて、

侍○　佞人輩とは我々が事を申すのか、コレ、殿樣のお側にをれば、假令どんな事があらうとも、御意に入るのが侍の則ち忠義といふものだ。

侍△　それ〳〵、忠臣藏の侍でも、今時滅多に油斷はならねえ。

侍□　お爲ごかしの正月言葉、尻尾の方から剝げさうだ。

侍◎　お氣に入りの我々を、大方嫉むのでがなあらう。

奴　渡平とても其通り、町人の分際で、餘計な口を叩かずとも、何處かそこらへちよこ〳〵と、つぐんで默つてゐるがよいわさ。

侍○　これが世に言ふ盲目蛇とか申すのでござらう。

侍　左樣でござる。

皆々　ハヽヽヽ。

ト嘲笑ふ。女之介キッとなつて、

女之　ヤア、おのれら如きに論は無益。アイヤ我君、唯今申上げる如く、只管御歸館下さるやう、偏に願ひ奉る。

ト言へども頼兼默つてゐる故、

女之　あいや、御家に關はる大事なれば、御歸館なさるとお詞を、下し置かるゝそれ迄は、いつかな此座は去りませぬ。

頼兼　詞を返す憎い奴ら、達てと申さば手は見せぬぞ。

女之　御用ひなき上からは、生きて益なき臣等が身の上、イザ、すつぱりと遊ばされませう。

頼兼　オヽよい覺悟だ、觀念いたせ。

ト立上る。高尾是を見て支へる。此時下手より鹽澤丹三郎、立文を持ち出て來り、

丹三　御前樣、暫く〳〵、暫くお待ち下されませう。

頼兼　ヤ、其方は鹽澤丹三郎、予を止めしは其方も異見か。

丹三　イヤ、御異見申入れるに非ず。執權仁木彈正殿、女之介が命乞の一書。

頼兼　又直則が痴言であらう、しかし執權よりの一書とあれば。

ト文を取つて開き見て、

ヤ、こりや高尾が年季證文。

高尾　エ、、そんなら私の。

丹三　高尾太夫は今日より館へ根引、則ち身請調ひし上からは、三浦屋の年季は是迄。殿のお側へお伽の手廻り。

渡平　成程なア、御家老は御家老だけ、火を以て火を治めるのお計ひ、イヤ恐入つたものだなア。

頼兼　有繋は直則。予が心を推量して、高尾を身請せし上は、これから直に歸館じや〳〵。

丹三　則ち御歸館なさるには、お忍びのことなれば、お乘物では人目に立つ、お步行にて土手傳ひ、花水橋より三つ又川へ、新たに造りし新造下ろし、その名も直に高尾丸。

頼兼　オ、舟にて歸館いたすであらう。

女之　スリヤ我君にはお館へ。

頼兼　女之介には目通り叶はぬ。

丹三　各々方には見え隱れに、道を隔てゝお後より、御館へお歸りあれ。

侍　承知いたしてござりまする。

言孝　太夫さんは私共が、お送り申して後よりお船へ。

丹三　某は何かの事ども取片付け、お後よりお船へ參るでござらう、又渡平には申付ける用事もあれば、暫く跡へ殘つてお吳りやれ。

渡平　畏つてござります。

丹三　大門口にお駕籠の用意もいたしてござれば、仲居共はそれ迄お送り申してくりやれ。

仲居　アイ〳〵合點ぢやわいなア。

賴兼　太夫を始め皆の者も、後から早う來て給や。

女之　我君樣には御機嫌よろしう。

賴兼　詞かはすも奇怪ぢやわえ。（ト思入）そんなら高尾。

高尾　どうでも私は、

賴兼　後からおじやえ。

賴兼先に、言孝、仲居四人、三浦屋といふ提灯をつけ、門口へ出る。高尾思入あつて、

高尾　「別れても、ほどは雲井に隔つれど――」

賴兼　「――空行く雁のめぐり逢ふまで。」必らず共に待つてゐるぞや。

仲居　サア、ござんせいなア。

ト唄になり、皆々花道へはひる。高尾思入あつて、

高尾　如何に勤めの身なればとて、辛氣なことではあるわいなア。

渡平　その歎きは尤もなれども、一先づ館へござつた上、折を見合せ暇の願ひ、唯何事も鹽澤樣へ、お任せ申しておいたがよい。

丹三　如何にも渡平が申す如く、身共に任して、酒でも飲んで氣を取直し、少しも早く君のお側へ。女之助にも身共が取做し申して、やがて芽出たう歸參も叶はん。

女之　何分よろしく、鹽澤氏。

丹三　渡平には身共と一緒に、奧へ來やれ。

渡平　左樣なれば、鹽澤樣、高尾殿、

高尾　どうで此の身は。

渡平　ハテマア、ござれといふに。

ト唄になり、高尾を先に、丹三郎、女之介、禿、渡平奧へはひる。後に侍四人奴殘り、

奴　ナント何れも方、日頃より何かにつけて心憎きは女之助、折を見合せして遣らんと、思ひをつたに君の勘當、よい氣味ではござらぬか。

侍○　猶この上は、丹三郎と浮世渡平。
侍△　彼奴等二人を讒言なし、
侍○　君の御前を遠ざける、工風が則ち肝要でござる。
奴　下郎でこそあれ、拙者も鬼貫公の一のお味方。
侍○　首尾よういたすその時は、我々共は高祿取り、
侍△　ナント旨い話ではないか。
奴　左樣でござる。
皆々　ハヽヽヽ。

ト下手より、大場道益、醫者のなりにて出て來り、

道益　これは〳〵何れも方、これにお出でなされましたか。
侍○　誰かと思へば大場道益。シテ鬼貫公にお賴みありしかの一藥。
侍△　今日爰へ持參の約束、唯今まで相見えねば案じをつたが、ようこそ入來。
道益　左樣にござりまする、大切なる御用なれば、延引いたさば如何と存じ。直樣藥を持參いたし罷越しましたれば、外々へ泄るゝやうな儀は決してござらぬ故、此儀御心配御無用に願ひまする。

侍○　何から何まで念の入つたる道益老、鬼貫公も其儀に付き、お忍びにて先刻駕に此家へお出であつて、奥の一間に御座あれば、

侍△　此趣を鬼貫様へ、少しも早く、

皆々　お知らせ申さん。

鬼貫　アイヤ知らせに及ばぬ。大江鬼貫、委細是にて聞き届けた。

ト合方になつて、奥より鬼貫公出て來り、

道益老、大儀々々、シテ彼の一藥調ひしとナ。

道益　南蠻秘法の一藥、調合いたしてござりまする。

鬼貫　オヽ、過分々々。シテその藥は。

道益　ハツ、是に持參いたしてござりまする。

ト鬼貫思入あつて、

鬼貫　豫て某が企に一味の其方、疑ふには非されども、一方ならぬ藥の調合、他言いたさぬ誓紙の一書、此場に於て認められよ。

道益　御尤もなるその仰せ、元より荷擔の我等なれば、何しに御辭退いたしませう、御意の通り認め

ますでござりませう。

鬼貫　ソレ五郎平、硯紙を遣はせ。

奴　ハツ。

ト硯箱を持ち出る。道益書くことあつて、

道益　御覽下されませう。

鬼貫　オヽ過分々々、然らば藥を。

道益　ハツ。

ト諸士○△□○四方へ氣を配る。道益懐中より藥包みを取出し、

道益　左樣なれば豫て持參いたしてござりまする、藥と共に御覽下さりませう。則ち是でござりまする、此藥を食物の中へ入れて食する時は、總身痺れて忽ち即死、外に類なき家傳の一藥。

鬼貫　スリヤ是が、毒藥トナ。此上は鶴喜代に喰はする手段が肝要、又調伏の儀も彈正に申付けおいたれば、首尾調ふは知れた事、此藥の手に入るも道益が働き、滿足々々、當座の褒美二百兩、一兩々々に足利家の極印あれば、改むるに及ぶまい、ソレ受取りやれ。

ト小判二百兩を紙に包みし儘出す。道益取つて頂き、

道益　こりや思掛けない大枚の褒美。有難う存じまする。
鬼貫　某は何れもへ、密々に申し談ずる儀もあれば、道益には用事も濟まば、暫く此場を遠ざかつてくりやれ。
道益　私事も首尾よく御用を濟ましたれば、最早お暇いたしまする。
鬼貫　遠慮に及ばぬ、歸宅しやれ。
道益　左樣ござらば鬼貫樣、お暇いたすでござりませう。
鬼貫　必らず人に悟られまいぞ。
道益　そこに如在はござりません、左樣なれば、何れも樣。
侍〇　道益殿。
道益　近日お目にかゝりませう。

ト道益花道へはひる。後に鬼貫思入あつて、

侍〇　鬼貫樣、首尾は上首尾。
奴　嘸御滿足に、
皆々　ござりませうナ。

鬼貫　何れも力にも某への忠節、重疊々々。それに就き、其方達に用事あり。
侍　シテ、我々へ御用といふは。
ト此時奥より浮世渡平、出掛りゐて立聞きすること。
鬼貫　豫て申付けおいたる一儀、今宵を過さば何かの手遲れ。コレ。（ト囁く）
侍　スリヤ、賴兼めを。
鬼貫　シイ。（ト制して）首尾よういたせよ。
侍　花水橋に待受けなし。
鬼貫　片時も早く。
侍　心得ました。
ト此時浮世渡平思入あつて奥へはひる。侍○△□◎は身支度をして、よろしく花道へはひる。鬼貫、奴、五郎平殘り。
鬼貫　五郎平、近う。
奴　ハツ。シテ下郎への御用の儀は。
鬼貫　某思ふ仔細もあれば、後刻綱に歸館いたさん。其方は是より直に、大場兄弟をな。

トよろしく討てといふ思入あつて呑込ませる。

奴　ム、、スリヤ、道益兄弟を。

鬼貫　元より賤しき大場道益、毒薬調合いたせし事をば、他へ洩らしなば一大事、今宵竊に彼が家へ忍び入り、人知れず、（ト思入あつて）な、心得たるか。

奴　成程、こりや御尤も、蟻の穴より堤の崩れ。彼奴等兩人仕舞うて取るには、何んの手間暇ござりませうや、お氣遣ひなされますな。

鬼貫　オヽ出來した〳〵。五郎八、必らずともに抜からぬやうに。

奴　心得ました。

トツカ〳〵と花道へ行き掛る

鬼貫　コリヤ、待て〳〵。

奴　ハツ。（ト立戻る）

鬼貫　隣家の者に悟られぬやうにな。

ト五郎平は心得たといふ思入ある。

鬼貫　ム、。早や行け。

奴　ハツ。

ト見得にて、よろしく揚幕へはひる。鬼貫思入あつて奥へはひる。上手より以前の渡平窺ひ出て、

渡平　聞けば聞く程恐ろしい、鬼貫殿の企み事、四人の奴等が受込んで出て行つたる今の様子、頼兼公の御身の上に、凶事でもあつては一大事、コリヤかうしてはゐられぬわ、行く道筋は花水橋、後より追付き見え隠れに。さうだ。

ト行掛けるを奥より中間出て、

仲間　渡平め、覺悟。

ト斬つて掛るを、ちよつと立廻つて當て、花道よき處まで行き、

渡平　少しも早く、オヽさうだ。

ト尻を端折る、是にて中間見事にかへる。是れを木の頭、渡平は逸散に揚幕へはひる。早き合方にて此道具廻る。

本舞臺三間の間、花水橋の飾り附よろしく、浪の音、時の鐘にて幕あく。と爰に夜そば賣仁八、火を起してゐる。側に素見○△□立掛りてゐて、

□　蕎麥屋さん、モウ何時だえ。

仁八　イヤモウ、時はのべつに聞かれますので、さつぱりと分りませぬ。

□　違えねえ、しかし俺ッちは地廻りだから、毎晩爰を通るが、ついに見懸けねえ蕎麥屋の行燈、さうしてお前は新米かえ。

仁八　イエモウ、私は此稼業は古くしてゐますが、しかし蕎麥粉は新粉でござります、ハヽヽヽ。

□　イヤ、面白い蕎麥屋さんだ。

ト此の時蕎麥を拵へて出し、

仁八　大きにお待遠でござりました。

○　蕎麥屋さん、俺ア込みでくんねえ。

仁八　ヘイ／＼、畏りました。

ト皆々捨ゼリフにて蕎麥を食ひ、

皆々　こいつア素敵だ。

□　こんなに旨くして賣つちやア、合ふめえぜ。

仁八　イヤモウ褒められて言ふぢやアござりませんが、蕎麥粉は高し、鰹節は高し、實に引合ひませ

ん。

△　さうだらうよ、夜鷹そばには珍らしい鹽梅だ。

　　トよろしく蕎麥を食ひながら、

○　蕎麥屋さん藥味はあるかえ。

仁八　イヤ、お藥味はございませぬが、三味ならございます。

□　ナニ藥味はねえが三味がある。そいつア珍らしい。三味とはどんなものだえ。

仁八　ハイ〳〵、是でございます。（ト藥味を出す）

△　何んだ。こりやア當り前の藥味ぢやアねえか。

仁八　イエ〳〵、歷々の蕎麥屋さんでは藥味を出しますが、私は夜鷹そばやのことでございますから、葱に、唐辛子に、大根おろし、これで三味でござりまする。

○　成程、こりやア理窟だわえ。

□　イヤ三味とあれば、マア〳〵、エヘン、三位中將此廓様。

△　何を言やアがる、こりやアもりぢやアねえ、かけだわ。

□　違えねえ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

□　是れから並木の夜見世をば、ひやかして歸らうぢやアねえか。

皆々　それがよからう、サア／＼行かう／＼。

ト皆々下手へはひる。花道より、バタ／＼になり、以前の侍○△◎、五、六頬冠り尻端折りにて出て、直ぐに本舞臺へ來て、あたりを窺ひ、

侍○　イヤ、何れも。かねて伯父君鬼貫公、五十四郡を横領なさんと思立ち、

侍△　それに荷擔の我々共鬼貫公の御内意受け、彼の頼兼をまんまと惰弱に仕立て上げ、

侍□　御家老仁木彈正樣の計らひにて、三浦屋の高尾を身請けなせしも、

侍◎　頼兼が身持をば、世間へ知らせん一つの計略。

侍五　忍びの事故供をも連れず、花水橋まで駕籠にて來り、三つ叉川より舘と聞く。

侍六　先に廻つて、竊に討取り來れよと、鬼貫公の御指圖。

侍○　モシ仕損ぜし其時は、惰弱を言立て頼兼は、押籠隱居。

侍△　大場道益に申付け、毒藥を以て鶴喜代丸を仕舞うて取るは、何んの手間暇。

侍□　さうなる時には、鬼貫公の御子息は、殿に近きお血筋なれば、

侍○　差詰め跡目は知れたこと。

侍五　大望成就の其上に、

侍六　われ〳〵共は立身出世。

皆々　左様でござる。

トバタ〳〵になり、花道より奴五郎平走り出て来り、皆々を見て、

奴　何れも様。是においでなされましたか。

侍○　オヽ五郎平か、シテ〳〵頼兼めは。

奴　向うに見ゆる提灯が。

侍○　確に四つ手駕籠。

侍△　正しく頼兼。

侍□　爰に待受け、

侍◎　たつた一突き。

侍五　必らずともに、

侍六　御油断めさるな。

侍〇　ア、コレ。

ト皆々囁き、上下へかくれる。花道より、駕籠屋四つ手駕籠を擔ぎ出て來り、直ぐに本舞臺へ來る、以前の侍出て提灯を斬り落す。駕籠屋逃げて下手へはひる。侍皆々駕籠へ刀を刺し通す。纈衆以前のこしらへにて、扇を持ち、駕籠の後へ拔け出で、皆々を相手にちよつと見得。

〽君は今駒形あたり朧夜に、啼いて明せし山ほとゝぎす、月の顔見りや思ひ出す、よい〳〵〳〵、よいやサ。

ト此内時鳥笛好みの立廻り　トヾ見得になる。禪の勤めになる、花道より浮世渡平、一本差し、尻端折りにて出て來り、花道に止まり、

渡平　御前樣か。

纈衆　そちや渡平。

渡平　君に仇なす佞人共、浮世渡平が來たからは、覺悟極めてそれへ直れ。

皆々　何を小癪な。

ト是より三味線入り禪の勤めになり、よろしく立廻りあつて見得。誂への鳴物になり、トヾ皆々花道へ逃げてはひる。渡平花道よき處まで追つて行く。

頼兼　モウよい〳〵、永追ひ無用。

渡平　ハア、

ト本舞臺へ來り、

頼兼　御身に過ちなかりしか。チエ、忝い。

シテ、是より予は、如何致さん。

渡平　ハツ、御前樣には、是より道を左りへ取り、南禪寺通りを眞直に、豆腐屋の三郎兵衛とお尋ねあつて、暫くそれにて御休息。

頼兼　南禪寺とは何時やらの開基であつたナ、オ、それ〳〵。保元平治の頃の開基であつた。

渡平　御意の通りにござりまする。

ト頼兼行き掛ける。

渡平　アイヤ暫く。

ト手拭を出し、頼兼に頬冠りをさせる。

頼兼　「飲めども盡きず、汲めども盡きず。」

ト謠ひながら橋の上へ行く。

渡平　御前様お忍びの儀なれば、お謡ひの儀は。

頼兼　是れもならぬか。忍びといふものは、窮屈なものぢやなア。

ト行きかける。以前の侍△頼兼を見て、

侍△　頼兼覚悟。

ト斬つて掛る。ちよつと立廻り、渡平押へて頬冠りを取り、顔を見て、

渡平　ヤ、わりや大子泥介だナ。エヽコレ、御前でなくばなア。

頼兼　苦しうない。斬つてしまへ。

渡平　ハア。（ト見事に斬る。）

頼兼　見事。

ト扇を開くを木の頭。

見事々々々々。

トこの模様よろしく、浪の音佃にて、ひやうし幕

二幕目　御殿竹の間の場

役名　鶴喜代君、千松、忍の者嘉藤太、乳人政岡、八汐、沖の井、松嶋、小槙、腰元等。

本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し竹に雀の銀襖。日覆より同じく大欄間をおろし、すべて竹の間の模様よろしく、琴唄にて幕あく。と行列三重になり、花道より鶴喜代壺折衣裳、千松袴一本差し、鶴喜代の刀を持ち、此前後に腰元六人桃色の着附、黒帶のこしらへにて附添ひ、鶴喜代竹馬に乗り出て來り、

皆々　殿様お馬。

千松　此方は後の槍持。

鶴喜　よウ槍持つた。

皆々　ハイドウ／＼。

鶴喜　先退け／＼。

ト言ひながら、皆々本舞臺へ來り、鶴喜代褥の上に住ふ。

千松　アイ。

腰一　扨々、よい慰みをいたしましてござりまする。

腰二　モウ是を止めにして、外のことに致しませう。

腰三　いつもの通り千松殿と、睨めくらを遊ばしませ。

腰四　但し殿様を桃太郎にして、千松を犬か猿に致しませうか。

腰五　それ／＼私共が鬼になり、鬼が島はどうでござりまする。

腰六　それがお厭なら十六むさしは如何でござりまする。

鶴喜　厭ぢや／＼。

腰一　左様なら、何ぞ殿様のお慰みになりますやう。

腰二　それ／＼、此の武者繪盡しを御覧遊ばしまして、

皆々　成程、それがよろしうござりませう。

鶴喜　モウ馬事は止めぢや／＼。

ト鶴喜代思入あつて、

腰一　乳母を呼べ〳〵。

政岡様、お待兼ねでござります。

ト是にて矢張り右の合方にて、正面の襖をあけ、政岡裲襠衣裳にて出て来り、

政岡　ハツ、我君様、御殿の内のお慰み、嘸面白うござりませう。

鶴喜　コレ千松、おりや金時といふ、強い武士ぢやぞ。

千松　イエ〳〵。金時より辨慶が強うござりまする。

鶴喜　イヤ〳〵、それでも金時が強いわいなう。

千松　イエ〳〵、辨慶が強うござりまする。

政岡　コレ〳〵千松、どうしたものぢや、殿様へそのやうな事を申上げるといふことが、あるものかいなう。

千松　それでも私が辨慶が強いといへば、彼方は金時が強いとおつしやる故。

政岡　これはしたり、どうしたものぢや。此母が常々言聞かせおくことを何と聞いてゐやる、お主様と勿體ない爭ひ立て。殊に若君様は御病中といひお褒への聞えもあれば、必ず騒ぐまいと言ひおくに、不行儀な。もう其方のやうなものは、お目通りには叶はぬ、サア、お次へ立ちや。

ト政岡手を取り下へ遣る。千松しを〳〵と行き掛る。

鶴喜　コレ政岡、悪いことがあるなら、堪忍して遣りやいなう。

腰一　モウシ、あのやうに御意遊ばす程に、けふはまあ堪忍してお上げなされませ。

皆々　私共がお詫言でござりまする。

政岡　ハツ、御前様の有難いお詞といひ、皆様の御挨拶、今日は許しまする、重ねてきつと愼みませうぞ。

千松　御免なされて下さりませ。

政岡　皆様へお禮を申しや。

千松　有難うござりまする。

政岡　此上は雀に知行をお取らせ遊ばしませ。

鶴喜　雀に知行。

ト此時時計鳴る。バタ〳〵になり、花道より腰元一人出來り、

腰元　ハツ、政岡様へ申上げまする、仁木彈正様の妹八汐様。斯波左京様の御内室沖の井様、井筒女之助様の御内方松島様。是迄お上りにございます。

政岡　ナニ、皆様お揃ひにて、是迄お出でとナ。

腰元　左様にござります。

政岡　是へお通し申しや。

腰元　ハツ。

ト引返してはひる。三味線の亂れになり、花道より八汐、沖の井、松島、何れも裲襠衣裳にて出て來り、花道へ並ぶ。

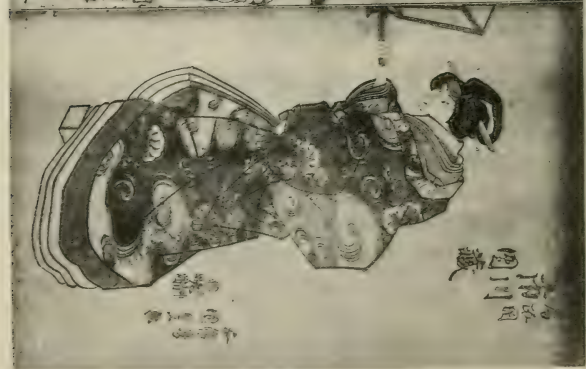
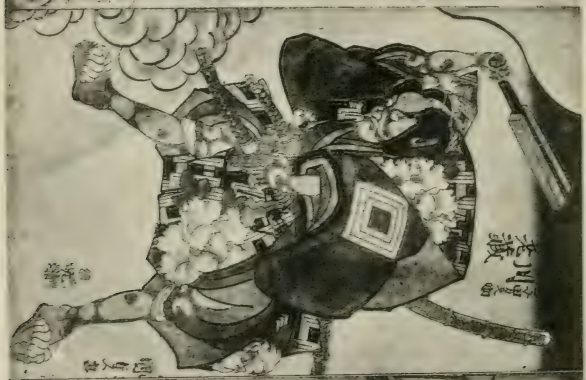
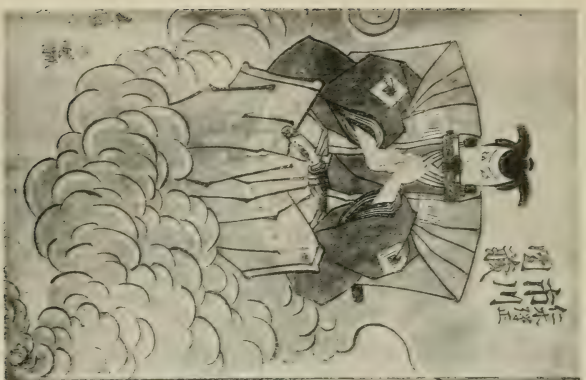
政岡　これは〳〵どなた様にもお揃ひなされ、ようこそ御出仕、若君様にも今日は、餘程お快い御様子にござります。

八汐　伯父君鬼貫公御名代として、兄彈正左衛門御機嫌伺ひのため出仕と存じますれど。

沖の井　男體せし者は堅く無用と、お止めなされし鶴喜代君の御病症、それ故夫左京が名代として、妻の沖の井。

松島　私とても同じ事、女之助が名代として妻の松島。

八汐　お取次ぎ。

三人　お願ひ申上げまする。

政岡　是は又改まつたお詞。何のお取次ぎに及びませう。先づ〳〵是へ。

八汐　左様なれば、お許しなされて。

三人　下さりませ。

ト右の鳴物にて、本舞臺へ來り、下の方へ住ふ。

政岡　殿様へ申上げまする。出仕の衆へお詞下しおかれませう。

鶴喜　オヽ、皆よう參つたなア。

三人　ハツ。

ト八汐、沖の井、松島平伏する。管絃になり、

松島　これは〳〵有難い君のお詞、暫くお目見得致さぬ內、おとなしう御成長遊ばしました、なア沖の井様。

沖の　左様にござります。あのやうにおとなしやかにお成り遊ばされしも、偏に政岡様のお育柄と申すもの。

松島　左様にござりまする。上つ方のお守役は大抵の事ではござりませぬ。政岡様にも嘸嬉しうござりませう。

政岡　是れは〳〵御挨拶、恐入りましてござりまする。
八汐　イヤお二人ながら、お心易いは常の事、その御挨拶より、言はねばならぬ詮議の筋。
政岡　ナニ御詮議の筋とは、何ぞ氣遣ひな事ではござりませぬか。
沖の　今日私共が、お見舞の出仕とは表向き。
八汐　伯父君鬼貫公、兄彈正より、こなさんへのお疑ひ。
政岡　ナニ、此の政岡への疑ひとは。
沖の　此程より當お館に怪しい事共、鶴喜代樣のお身の上に掛りし事、それに就き鬼貫公彈正樣より嚴しく仰せらるゝ處に、鶴喜代君他へ出で給ふ事を嫌ひ、猶又政岡を離し給はぬとの事、就ては鬼貫公彈正樣にも、早速君の御前へ出づべきなれども、
松島　それとても、若君樣には、男體したる者をお嫌ひ遊ばすとの事、それが卽ち御病症。
八汐　それ故にこそ鬼貫公、彈正の名代として此の八汐。
沖の　夫々の役目の名代。
松島　連立ち參りし、
三人　右の樣子。

政岡　是はまア御苦勞に存じまする、若君樣にも殊の外の御機嫌、マア御ゆるりと遊ばしませ。

八汐　イヤ落着きなさるな政岡殿、腕白盛りの鶴喜代君、一切外へとてはお出でなされず、殊に男は嫌ひとて、此館は女護が島ぢやと下々の取沙汰、唯何事も御病氣々々と言立て、其癖御典醫にもかけず、看護なさるゝお前の心、合點が行かぬとあるお疑ひ。

政岡　これは又何事のお尋ねかと存じましたれば、鶴喜代君の御病氣、元より打臥し給ふ程にてはなけれども、御殿の內もお廊下を限り、一切おひろひ遊ばさぬ故、男體せし者とては厭ぢや／＼とやんちやばかり御意遊ばし、男と言うては私が悴千松、其外は御覽の通り女中ばかり、此政岡を片時もお離し遊ばさぬも、御病氣の業と存じまする。

八汐　ソリヤ御病氣ではない、憚りながら無理我儘、お育ての惡い故、賴兼公には御隱居遊ばされ、其お跡目をお繼なされば、御幼少でも大國の主人。

松島　アイヤ八汐樣、憚りながら鶴喜代君へ對し、チトお詞が過ぎまする。

八汐　ハテ、何と申すも君の御爲。

松島　假令御爲なればとて、御幼君の御氣に逆ふ强異見で、御病氣が重つてはお家の大事でござりまする、そこへお心付かぬとは、チト御粗相かと存じまする。

沖の　何は兎もあれ朝夕の、御膳はお進み遊ばしまするかナ。

政岡　サア其の御膳がお進み遊ばす程ならば、別してお案じもございませねど、何をお進め申しても、此四五日は一向に御斷食でございまする。

皆々　ナニ、スリヤ斷食とナ。

沖の　ム、。それ程お食の進まぬ若君樣、お顏の色澤おやつれとても見えぬといふは、ハテ。

八汐　成程ソリヤよい氣の付け所。四五日お食の進まぬ若君樣が、何處に一つお惡さうな樣子も見えず、是れが合點の行かぬ始まり、ナント皆樣、そろ〳〵と御詮儀なさるがよろしうございまする。

沖の　サア、何にもせよ大事の御病氣、篤と糺せよとある鬼貫公、又彈正樣の御名代たる八汐樣、私共は添人の役、政岡樣のお詞を疑ふではなけれども、配膳の品も變らば、若しや召上られまいものでもない、今日の膳部は此の沖の井、御膳番の女中方。

女一　ハツ、今日の御膳番は、私でございまする。

沖の　御膳を早く。

女一　畏まりました。

ト下手へはひる　女中一掛盤へ紫の袱紗を掛け持ち出て來り、沖の井の前へ置く。沖の井改めて、
鶴喜代の前へ据ゑて、

沖の　ハツ斯波左京が妻沖の井、今日の配膳、少しなりとも召上られ下さりませうならば、有難う存じまする。

ト辭儀をする。鶴喜代政岡を見て手を出すを、政岡袖を引き惡いといふ思入。

鶴喜　イヤ飯はほしうない、膳を下げい。

政岡　ム、（ト思入あつて）スリヤ、御膳はお厭と御意遊ばすか。

鶴喜　厭ぢや／＼。

沖の　イヤ憚りながら、左樣御意遊ばしては御身の毒、一家中の難儀、何卒御意に叶ふものを。

鶴喜　厭ぢや／＼。此の膳下げい。

沖の　ハツ、それ程お嫌ひ遊ばす御膳、差上げうとは申上げませぬ。

ト膳を下の方へ遣り

まことに怪しき御病症。

政岡　左樣でござりまする、御病氣と申すものは、上からは知れぬもの、何事無うお渡り遊ばすやう

なれど、御膳の時は厭ぢや〳〵と御意遊ばす故、お側に附添ふ私が心の内、御推量なされて下さりませ。

八汐　ソリヤ御病氣といふものは、人の心と同じ事で上から見えぬもの、それを見拔くは醫者の役、何故お藥を進ぜられませぬ。

政岡　サア其儀も色々と存じますれど、何を申すも御幼少より、お側離れぬ御前のお附大場道益、此程より行方知れず、其他は誰にても、男體せし者とては。

八汐　大方さうあらうと思うて、大場道益が妻の小槇、女ながらも名醫の聞えある故に、お次まで連れました、ソレ女中方、呼出しなさんせ。

腰一　畏りました。

ト花道へ向ひ、

お次に控へし大場道益殿の御内方小槇殿。御前のお召し、急いで是へ。

小槇　畏まりました。

ト合方になり、花道より小槇補襠衣裳にて出て來り、先道に平伏し、

お召に依つて小槇、出でましてござります〳〵。

八汐　オヽ小槇大儀。

小槇　ハツヽ誠に有難いお詞、大切な若君樣の御病氣、定めてお蟲の業、憚りながら私が習ひ覺えし鍼術にて、早速御本復を。

政岡　イヤ小槇殿、そのお療治は叶ひませぬ。

八汐　政岡樣、御療治は何故叶ひませぬナ。

政岡　サア小兒は豫め先づ鍼灸を忌むと、千金法と申す書に悉く記しあるとやら承はりまする。殊に餘の儀と違ひ、毒味のならぬ鍼術、僅か一分の違ひにてけいらく所を失ふ時は、忽ち命を落す。左樣の事もあるまいが、お覺えなされし小槇樣、又御幼少の若君樣、御身が動けば所の違ふ大事のお鍼、止めましたは、よもや私が誤りではござりますまい。

八汐　そのやうな難しい事は存じませぬが、唯御病氣さへ治ればよいぢやござりませぬか。

政岡　サア御病氣とは申しますれど、鶴喜代君は大事の御身と申すもの、事ある時は忽ちお家の亂れとなる、此程の御配膳といひ油斷のならぬ大事の場所、迂濶に療治は叶ひませぬ。

沖の　成程尤も、然し御病氣とあるを其儘にもなりますまい。唯御容態を伺うた上の、御評定がよろしうござりませう。

八汐　ソレ〳〵、鍼の灸のと言ふによつて、色々と理窟が難しい、唯お脈ばかりは。
政岡　お脈とあれば、兎も角も。
八汐　サア小槇、お脈を早う。
小槇　左樣なら伺ひまするでござりませう。
　　ト舞臺へ來る。政岡鶴喜代を膝へ掛けさせる。小槇脈を伺つてびつくりして、
ヤヽ、コリヤ、必死のお脈。
　　ト是にて皆々驚く、
政岡　ナニ必死の、
皆々　お脈とナ。
小槇　サア、此の脈は覆溢と申しまして、物を覆ふが如し、上より下へ傾くなり。溢とは外へ出るお脈ぞや、死を脱れぬといふお脈體でござりまする。
八汐　それ程の御病氣、死脈も打つまいものでもない、唯見た所では、死脈が不思議な樣子ぢやが、物はためし、小槇、此の御殿を離れて今一度。
小槇　別間へお出で遊ばすがお厭なら、お廊下でなりと今一度。

松島　成程、コリヤよい所へ氣が付きました、ソレ、少しも早く。

ト鶴喜代小槇花道へ行き、小槇脈を見て二度びつくりして、

小槇　ヤア、コリヤ御平脈にござりまする。

政岡　ナニ、御平脈とや。

小槇　それにて見れば必死のお脈、今あれにて伺へば常に變らぬ御平脈。とんと合點が參りませぬ。

八汐　合點の行かぬ事はない。コリヤ舘の内に、若君を害せんと窺ふ曲者ありと覺えたり。

松島　かゝる時節の時なれば。

腰一　御殿の隈々、お庭の隅々手分して、

腰二　大切なる若君様を窺ふ曲者、

腰三　詮議をするがお側の役。

腰四　そんなら皆さん。

皆々　心得ました。

ト皆々長刀を持ち立掛る。八汐思入あつて、

八汐　ヤア騷ぐまい女中方。まこと若君を害せんと忍ぶ者あらば、猶以て竊に〳〵、此のお舘にては

覆溢といふ死脈、覆溢の文字は溢は溢るゝ、上より下に傾き、内より外に出る脈體、察する所怪しき者は、此の天井にありと覺えたり。ソレ、女中方。

皆々　心得ました。

ト早舞になり、皆々長刀にて天井を突く。是にて黒門天の忍びの者嘉藤太飛びおり、鶴喜代に掛る。

嘉藤　鶴喜代觀念。

松島　扨こそ曲者。

皆々　動くまいぞ。

ト松島嘉藤太とちよつと立廻り嘉藤太を當て、皆々にて鈴の緒にて縛り、松島活を入れる。嘉藤太心附く、沖の井思入あつて、

沖の　何者に頼まれた、サア、尋常に。

皆々　白狀しや。

嘉藤　イヤ知らねえ、覺えはねえ。

沖の　覺えないとは言はさぬ、ソレ、女中方。

腰元　心得ました。

嘉藤　痛え〳〵。
腰元　言はずば斯うして。
嘉藤　弛めて〳〵。
腰元　サア眞直に。
皆々　白狀しや。
八汐　コリヤ曲者、そちや何者に賴まれて、斯る天井へ忍び入りしぞ、眞直に白狀なさば、そちが命は助けて遣はす、白狀せねば科は脫れぬ、コリヤ外に賴み人があらうがナ。
嘉藤　スリヤ、白狀すれば命は助けて下さるか。決して口へは出すまいと約束はしたなれど、モウ斯うなつちやア仕方がねえ。鶴喜代を殺して吳れと賴まれました。
皆々　シテ、その賴み人は、何者ぢや。
嘉藤　サア、外でもねえ、そこにゐる政岡殿に賴まれた。
政岡　ナニ、此の政岡が賴みましたとは。跡方もなき僞り者。
嘉藤　コレサ〳〵政岡殿、モウ斯うなつちやア仕方がねえ。あれ程賴んで置きながら、今更知らねえと言拔けても仕方がねえ、何もかも言つてしまふ。たかゞ斯うだ、鶴喜代君を首尾よく殺し、

政岡　我子千松を世に立てなば、褒美として新地千石遣らうとある故、假令切身に埴の榜門でも、決して口へは出すめえと約束したがもうこれ迄、手詰となれば是非がねえ、サア政岡殿、男の德でせえ白狀したに、モウ好い加減に此方の口から賴んだと白狀して、わしが命は助けて下せえ。

政岡　コリャ聞えた。察する處此の政岡に意趣ある者が、罪に取つておとさん企み。サア何者に賴まれた、サア眞直に白狀しや。

八汐　上から見えぬ人心。ハテ恐ろしい企みぢやなア。

政岡　八汐樣のお詞とも存じませぬ、大事の大事の鶴喜代君、御成長遊ばすを指を折り日をかぞへこそ致せ、どう致して勿體ない。

八汐　モウよい〳〵、さう白狀すればそちに科はない、科人は政岡、是から此の八汐がきつと詮議をする程に、覺悟して待つてゐや、アイヤ曲者、よう白狀した。其代りそちが命は助けて遣はす、其方の勝手次第、ソレ、腰元　縛めを。

嘉藤　有難うござりまする。

腰○　畏まりました。（ト嘉藤太の縛めを解く。）

嘉藤　すんでの事に、あつたら命を。ヤレ危ねえ事の。ドレ、そろ〳〵と歸らうか。

ト立上り花道へ行き掛るを松島止めて、

松島　曲者待ちや。待てと言つたら、まあ〳〵待ちや。

ト是れにて嘉藤太舞臺へ戻り、

嘉藤　シテ、まだ、何ぞ用があるか。

松島　詮議が殘つた。

ト是れにて嘉藤太下手へ住ふ。

八汐　コリヤをかしいわいの、明白に白狀した曲者、科人は政岡殿でござりまする。

松島　サア、その政岡殿は乳人役、若君を害せんと思はゞ、廻り遠い人手を頼むより、外に手段もありさうなもの、僅か天井の破れよりおのれと飛下り、即坐の白狀。

嘉藤　ヤ。

松島　ハテ賴もしい頼まれし人、察する所、コリヤ政岡殿を罪に取つておとさん企み。そこらあたりに賴み人があるまいとも申されぬ、そこを思うて私が呼留めましたは、よもや誤りではござりますまい。

ト八汐嘉藤太へ目配せをする。嘉藤太心得、松嶋へ斬つて掛るを、松嶋扇にてあしらひ、嘉藤太八汐

ト斬つて掛るを、八汐當てる事よろしく、八汐懐より願書を出し、

八汐　何やら怪しき此の願書。ソレ、讀上げなさんせ。

ト腰元〇思入あつて、

腰〇　畏まりました。（ト前へ出て願書を開き）「敬白。大小の神祇を驚かし奉る、當時足利の跡目たる鶴喜代君が命根を速かに斷ち終つて後、我忰を以て家督に立てん事希ひ奉る。偶々毒殺を以て除かんとすれば、鬼貫彈正が忠心にて事成らず。我々が大望、忰を以て家を建て候はん事、神明佛陀の感應あらんもの也。百拜敬首、諸願成就なさしめたまへ。願主政岡の局、荒獅子男之助兩人敬白。」

皆々　ヤ、、、、。（ト驚く。政岡思入あつて）

政岡　此の身にとつて、露聊か存ぜぬ事。決して覺えはござりませぬ。

小槙　コリヤモウ若君樣のお脈より、そこらあたりのお脈が上つた。モウシ八汐樣、私は暫くお次へ。

八汐　成程、休息申付けませう。

小槙　有難う存じまする。

ト管絃になり、下手へはひる。

八汐　政岡殿、ちよつと是へ。

政岡　アノ私に。

八汐　如何にも。

ト政岡前へ出る。

政岡　シテ、御用とおつしやるは。

八汐　政岡殿、此の願書覺えがござんすか。

政岡　どう致しまして、恐ろしい此の願書、聊か覺えはござりませぬ。

八汐　お前が覺えのない此の願書に、何で宛名が書いてござんす。サア言譯がござんすか。

政岡　勿體ない、何で私がそのやうな事。

八汐　アノまざ〳〵しく言ひなさんすことわいなア。假令何と言ひなさんしても。斯ういふ願書の出る上は科人は政岡殿。サア言譯がござんすか。

政岡　サア、其の儀は。

八汐　言譯がござんすか。

政岡　サア、それは。

八汐　言譯は。
政岡　サアそれは。
八汐　サアそれは。
兩人　サア〳〵。
八汐　言譯なければ此上は、鬼貫公の御前へ連れ行き白狀さす。政岡立ちや。
沖の　アイヤ八汐樣、暫く。
八汐　何をお留めなされまする。
沖の　そりや政岡樣の企みでない、證人は此の沖の井。
八汐　又お前が理窟かいなう、是程明白に願書に名宛があつても。
沖の　サ、それぢやに依つて、證人は此の沖の井。こりや外々より科を塗るこしらへ願書。
八汐　オヽ、こりや聞きごと。シテ此の願書が、何んで僞物ぢやぞえ。
沖の　サア、よくお聞き遊ばせや、正直な願書にさへ神佛を憚り、何の年の男女と書くが法式、文の遣取するやうに、銘々の名を書かうか。ホヽツその如く顯れた其の時に、姓名の記しあれば、我と我身を訴人も同然、是程の企み事する者が、うか〳〵我名を書きさうなものであらうか、さ

りとては淺はかな八汐樣、達て此の御詮議なさるゝと却つて其身に疑ひが、掛るまいものでもございませぬぞえ。

八汐　ハテサテ能う言廻しなさんした。ほんに發明なことぢや。したが此八汐は伯父君の御名代、いはゞ鬼貫公も同じ事、それに添役の身を以て詞がすぎる沖の井殿。利口振らずと控へてござんせ。サア、此上は疑ひ掛つた政岡殿、我君のお側にはおかれませぬ、鬼貫公のお指圖、今日からは此の八汐が乳人役。

政岡　スリヤ、アノ御前のお側勤めを。

八汐　こつちの勝手は惡からうが、殿樣のお側勤めは此の八汐、伯父君の仰せ付けられぢや、伯父君樣の御意ぢや〳〵。ハイ、伯父君樣の御意ぢやがや。（ト思入あつて）ハツ御前樣へ申上げまする、今日よりは此の八汐がお側に附添ひお守り申上げまする、ほんにお仕合なお殿樣ではあるわいなう。

鶴喜　イヤ、そちは厭ぢや〳〵。

八汐　ほんにお子樣と言ふ者は聞分けのない、なんぼおつしやつても政岡は科人。言譯の立つまでは、獄屋へ入れておきますれば、お逢ひなさるゝ事は叶ひませぬ。

鶴喜　イヤ、政岡を獄屋へ入れるなら、予も一緒に行かう。
千松　御前樣がお出で遊ばすなら、私もお供致しませう。
鶴喜　オヽ千松も來い。獄屋へ行つて馬事して遊ばう。
政岡　アヽモシ我君樣。その獄屋と申しまする所は、なか〳〵お遊び遊ばすやうな所ではございませぬ。それは恐ろしい怖い所でござりまする。
鶴喜　その怖い所へ、何故其方を遣らうといふぞ。
八汐　エヽ如何に頑是がないとて、アレ御覽遊ばせ。あのやうな怖い小父を頼んで、貴方樣を殺さうとする政岡、オヽこは〳〵。大抵恐ろしい事ぢやござりませぬ。
鶴喜　イヤ〳〵、そりや嘘ぢや。予を可愛がる大事の政岡。おりや殺されても大事ない。
政岡　有難うござりまする、假令お命をお捨て遊ばしても、此の政岡と一緒に行きたいとは、よう御意遊ばして下さりました、エヽ有難うござりまする。
八汐　エヽ、何んのそれが有難い。假令若君の詞が重うても、言譯の立つ迄は鬼貫公の御意ぢや。政岡立ちや。
政岡　それぢやと言うて。

八汐　伯父君の御意を背くか。
政岡　全く以て。
八汐　此上は引立てようか。
鶴喜　八汐待て。
八汐　又お留遊ばしまするか。
鶴喜　それ程獄屋へ遣りたくば、政岡の代りに其方行け。
八汐　エヽ滅相なこと御意遊ばす、科人の代りに、此の八汐に行けとは阿呆らしい、左樣なら政岡の代りに千松を。
鶴喜　その千松も、予が家來ぢやないか。
八汐　假令御家來でござりませうとも、伯父君鬼貫公、執權彈正の申付なれば。
鶴喜　その彈正も、予が家來ぢやないか。
八汐　エヽ。
鶴喜　家來のくせに、予が言ふ事を聞かぬ奴は、皆獄屋へ入れい。
八汐　それぢやと言うて。

鶴喜　詞を背くか。

八汐　エヽ。

鶴喜　斬つてしまふぞ。

沖の　先づ〳〵お許し下さりませう。

八汐　ハテ、よう仕込んだものぢやなア。

沖の　實に栴檀は二葉より香ばしと、大國をしろしめす御器量表はれ、寛仁大度の今のお詞、此上は御意の通り政岡殿と御一緒に置きまする程に、御機嫌をお直し遊ばしませ、此願書は僞物にて外々よりの慥へ物、愈々政岡殿の忠義の程も表はれ、恐悅に存じまする。

八汐　スリヤ、鬼貫公の御名代たる、此の八汐が言ふ事は。

沖の　反古にはならねど私共も、お添人の役目を蒙る上からは、若君樣の御意に違ふは第一不忠。

八汐　ヤ。

沖の　サア、言はぬは言ふにいや勝ると、いつか其身に嵐吹く、御室の山の紅葉は、立田の川の錦なりけり。執權職を功に着て、今の詞の仇あらし、人の忠義を吹き散らす、色も八汐の紅葉は、立田の川の錦にも、勝りて深き我君樣の、お乳の人への情の詞、あなたは何んとお聞き遊ばす。

八汐　ありや頑是ない、子供のわやく。

沖の　頑是なうても五十四郡を、しろしめさるゝ君の上意。背いて臣下の道が立ちませうか。

ト是にて八汐ギックリ思入

鬼貫公は伯父君ながら、執權職をたまはれば、鶴喜代君とは主家來、禮を亂して八汐殿。上意を背くあなたこそ、ナント不忠であるまいか。

八汐　サアそれは。

沖の　貴方ばかりが御名代にて。私共は御名代でござりませぬか。

八汐　サア。

沖の　我儘氣儘の今のお詞、御返答がござりまするか。

八汐　サア。

沖の　サア。

兩人　サア〳〵。

沖の　足利九代の主人たる鶴喜代君の御前、八汐殿詞が過ぎる、お控へめされい。モシ、控へてござんせ。

八汐　そんならどうとも、御勝手次第になされませ。
沖の　此上は政岡殿、君のお側へ。
政岡　ハツ。

ト政岡立掛るを八汐睨める。

沖の　アイヤ政岡、召しまする。
政岡　ハツ。

ト立上り、八汐と顔見合せ、管絃になり、政岡八汐と入れ替り、政岡元の所へ戻る。

政岡　有難う存じまする。

ト鶴喜代に向つて禮をする。

松島　我君樣には御退屈、チト御座をお移し遊ばしませ。
沖の　ソレ女中方、その曲者を廣庭へ。
八汐　ソレ、その曲者は此の八汐が預かり、きつと詮議をせにやならぬ。
沖の　スリヤ、八汐樣が。
八汐　如何にも。

沖の　ハテナア、此の配膳は沖の井が。

政岡　イヤ、沖の井殿が据えられた此の御膳、政岡が預かりまする。

八汐　とはいへ政岡。

政岡　アイヤ、我君の、御意でござりまする。

ト唄になり、皆々奥へはひる。八汐残り、嘉藤太起上り、

嘉藤　まんまと首尾よく。

八汐　ア、コレ。

嘉藤　シテ此の上の御手段は。

八汐　此の上の手段といふは。コリヤ。

ト思入あつて八汐嘉藤太に囁く。

ナ、心得たるか。

嘉藤　スリヤ奥御殿へ忍び込み、

八汐　首尾よう致せよ。

嘉藤　アノ鶴喜代めを、たつた一突き。

八汐　ア、コレ。

ト押へるを木の頭。

竊に〳〵。

トよろしく裲襠を掛ける見得にて。

幕

三幕目

政岡飯焚の場

御殿床下の場

役名　仁木彈正、荒獅子男之助、忍び嘉藤太、乳人政岡、榮御前、八汐、沖の井、松島、腰元等、鶴喜代、千松。

本舞臺常足通しの二重、正面は簾襖、後に引抜き座敷遠見になること。眞中少し前へ出し、三方御簾を下ろし、すべて足利家奥御殿の體よろしく、管絃にて幕あく。

〽跡見送りて政岡が、まさなき事も身にかゝる、科ははれても晴れやらぬ、養君の行末を、誰に問ふべきやうもなく、心一つの憂き思ひ、物案じなる母親の顔をながむる千松に、鶴喜代君も打守り。

ト此内御簾を上げる。内に誂への臺子茶の湯道具一式よろしく飾り、以前の石臺雀の籠、上手へ直しあり。政岡立身にて以前の膳を持ち見得。鶴喜代千松よろしく住ひゐる。

鶴喜　コレ乳母、モウ何言うても大事ないかや。

政岡　ハイ〱、モウ外に誰もをりませねば、何なりとも御意遊ばせ、ほんに先刻に沖の井殿、君へ御膳を上げた時、豫て乳母が申した事、ようお聞入れ遊ばして、ようまあお上り遊ばさなんだなア、それでこそ此の乳母が、お育て申した若殿様。マアお出來しなされたなア。

〽褒むればあどなき稚氣に

鶴喜　ヤイ乳母、饑じいといふ事は、强い武士の言はぬ事と、常々其方が言うた故、予は言はねど先刻にから、空腹になつたわいヤイ。

政岡　オヽお道理でござります。けふは思はぬ事にて、御膳の拵へも遲うなり、貴方樣にも嘸お待兼ね、千松もよう辛抱しやつたなう、モウ拵へて上げまするぞえ。

〽立ち上れば

鶴喜　コレ乳母、是れを喰べては悪いかや。

政岡　アイヤ申し、其御膳を上げまする程ならば、乳母も苦労は致しませぬ、此程から怪しい事共、忠義厚き沖の井殿が、差上げられた此の御膳、疑ひはなけれども、油断のならぬ此の時節、上げてよければ此の政岡が上げまする、コレようお聞き遊ばせや、今お館には悪人蔓り、御近習小姓膳番迄、ちつとも心は許されず、忠臣の男之助は、讒者のために遠ざけられ、力とする者もなく、朝夕の御膳は、皆この庭へ棄てさせ、私が手づから拵へて差上げまするも、若し毒薬の企もと微塵心は許されず、空腹なもお道理ながら、御前のお怺へ遊ばす爲、此千松も四五日前から、

〽三度の食事もたつた一度、忠義故ぢやと怺へてをります。

コレ千松、其方はよう言ふ事を聞いて、何んとも言はずに辛抱する、オ、賢い〳〵、ほんに其方はつはものぢや。

〽褒むれば千松

千松　コレ母様、侍の子といふ者は、饑じい目をするが忠義ぢや、又喰べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲には食ふものぢやと言はしやつた故、わしは何とも言はずに待つてゐる、其代りに忠義をしてしまうたら、早う飯を喰べさせてや、それ迄は明日迄もいつまでも、かうきつと座つてお膝に手を着いて待つてをりまする、お腹が空いても饑じうない。

〽何ともないと澁面作り、涙は出づれど稚氣に、褒められたさが一杯にこちや泣きはせぬわいなう。

〽額を撫でゝ泣顔を隱す心は流石にも、名に負ふ武士の胤なりき。母は健氣さいぢらしさ、目に持つ涙心には、御前に聞かす褒詞。

政岡　オヽさうぢや、強いものぢや、イヤ千松はいかう強うなりやつたなう。

鶴喜　イヤ千松よりおれが強い、ヤイ政岡、予はちつとも空腹にはないぞや、大名といふ者は、飯も喰べずにかう坐つてゐるのぢやなう、予は強いものぢや〳〵。

政岡　是は又けうといふ事ぢや、さうお行儀な所を見ては、まだ〳〵千松などは叶はぬ〳〵、オヽ強い強い、さうお強うては、早う飯を上げざなるまへ、ドレ。

〽ドレ拵へうと搔い立て、傍に飾る黒棚より、取出す錦の袋物、風爐に掛けたる茶飯釜の、湯の試を千松に、飲ます茶碗も樂ならで、お末が業を信樂や、いつ水指をかしぎ桶、流す涙の水こぼし、心は淸き洗ひ米、釜に移して風爐の炭、直して煽ぐ扇さへ、骨も碎くる思ひなり。

ト此內政岡飯拵へよろしくあつて、

鶴喜 千松　アレ、モウ飯ぢや〱。

〽我子も共に悅び顏、見れば胸まで突掛くる、涙吞込み〱て、

政岡　モウ上げますぞえ。

千松　母樣、早う上げましてや。

政岡　オ、上げませいで何とせう、まちつと煮立つその間、お氣に入りの雀の子、モウ親鳥が來る時分、そこへ直してお慰み。

千松　アイ〱。

〽ついと千松が返事はすれど立惱み、歩む姿もたよ〱と　置き直したる小鳥

籠、忠と敎へる親鳥の、軒端の竹に飛びかはす、子は孝行に面瘦せて、はごくみ返す烏羽玉の淚を隱すうなひ髮、かゝれば直にに飯なり、

ト忍び嘉藤太出て窺ふ。

アレ、モウ飯が出來る〳〵。

〽と悅ぶ子。

政岡　コレ千松、何ともないと言ふ下から、忙しない何の事ちや、何時も唄ふ雀の唄、唄うて御前の御機嫌取りや、エヽどんな子ではあるわいなう。

〽呵られておろ〳〵淚、しやくりながらの濕り聲。

千松　こちの裏の齋壞の木に〳〵。

鶴喜　雀が三匹とまつて〳〵。

千松　一羽の雀が言ふ事にや〳〵。

政岡　昨夜呼んだる花嫁御々々。

〽竹の下葉を飛び下りて籠へ寄り來る親鳥の、餌食みをすれば子雀の、嘴さし

寄する有様に、

ト差金の雀籠の上にて舞ふ。

鶴喜　アレ〱雀の親が子に何やら喰はしをる、おれもあのやうに早う飯が喰べたいわいなう。

〽小鳥を羨む御心根。

政岡　オヽお道理ぢや。

〽と言ひたさを紛らす聲もふるはれて、

政岡　わしが息子の千松が〱。エヽコレ千松、殿樣の御機嫌を、エヽ何泣顔する事がある。小さうても侍ぢやぞや、コレ。

千松　七つ、八つから金山へ、金山へ。

ト此時雀飛散る。政岡思入あつて、

政岡　ハテ心得ぬ、今迄竹に戯れし雀、羽を搏つて飛去りしは。ムヽ。

ト政岡笄を抜き、天井を目掛け手裏劍を打つ。天井より忍び出て、

忍び　政岡觀念。

ト掛るを政岡立廻り押へる。鶴喜代見て、

鶴喜　怖いわいなう。

政岡　イヤ、何にも怖いことはござりませぬ。

鶴喜　そんなら早う、飯を呉れいヤイ。

政岡　ハツ。唯今上げまする、もちつと御辛抱遊ばしませ。

鶴喜　厭ぢや〱。

政岡　お聞分けのない若君樣。

ト又忍び掛るを立廻り、

〽一年待てどもまだ見えぬ〱。

鶴喜　乳母、まだ飯は出來ぬかや。

政岡　ハイ、モウ出來まする、そのやうにおせがみ遊ばすと、このやうな怖い小父が。

ト裲襠の裾より忍びを出して見せる。

〽二年待てどもまだ見えぬ〱。

千松　母樣、飯はまだかいなう。

政岡　エヽ、忙しない。そなたまでが同じやうに、行儀の悪い。

千松　イエ〳〵。わしは食べたくはなけれど、御前樣がお饑じからうと思うて。
政岡　エヽ、何のお强いお殿樣が、おせがみなされう、そりやそちがせがむのぢや。
千松　イエ〳〵、わしはせがみはしませぬ。
政岡　サア、せがまずば今の唄、聲張り上げて唄うて見や。
　〽言はれて淚の聲張上げ、
千松　ほろり〳〵とお泣きやるが〳〵。
　〽力なく〳〵泣聲を隱して連れる母親が、
政岡　何が不足でお泣きやるぞ〳〵。
　〽唄の唱歌も身に當る、淚はお乳が胸の內、子故の闇ぞ遣瀨なさ、若君小陰を
　打詠め、
鶴喜　アレ〳〵千松。狆が來る。呼べ〳〵。
千松　狆よ來い〳〵。
　〽呼べば駈け來る緣の上。

政岡　オヽよい所へよう來やつたなア、ほんにわれは仕合せ者、おすべりの此の御膳、殿樣の御機嫌直しに御褒美、ソレ喰べや。

〽紙打敷いて並ぶれば、悦ぶ體を見る若君。

鶴喜　乳母、予はあの狆になりたいわい。

〽羨み給ふ御風情、聞く悲しさをこらへかね。

政岡　オヽ道理ぢや〳〵。

〽日本國の其中に、幾億萬と限りなき、人の果報を請け給ひ。

五十四郡の御主人と、榮耀榮華は上もなき、

〽何暗からぬ御身にて、思ひがけなき御辛抱。

假令賤しき下々でも、斯ういふ事があるものか、ましてや、ついに見も聞きも、

〽涙ながらに政岡が、申す事とておとなしう、聞入れ給ふいたはしさ。

現在御內の御家來が、邪非道に組み從ひ、殺害せんとの企みとは、知つたる故に蔭身に添ひ、お健な御身を、御病氣と。

〽世間を僞り胴慾に、
稚い御身に朝夕さへ、思ふやうに上げぬ故、
〽鳥獸の餌食むをば、羨ましがるお詞は、御尤もともお道理とも、
言ふに言はれぬ、御身の因果。
〽雀や犬に劣つたる、宮仕して忠義ぢやと、言はれうものかと喰ひしばり、胸も煮立つ風爐先の、屛風にひしと身を寄せて、奥を憚る忍び泣、稚けれども
天然に太守の心備はりて。

鶴喜　コレ乳母、何で泣くぞいやい、そちや千松の喰はぬ內、おれ一人忙しないと思ふなら、モウ堪忍して泣いてくれな、おれが食べても乳母が食べずに死にやつたら惡いなア、千松、其方が死んでも惡いなア、そち達二人が食べぬ內は、何時までもおれは怺へてゐる。

政岡　ハイ〳〵〳〵、オヽようおつしやつて下さりました、有難うござりまする、乳母が今泣いたのはなア、アリヤ飯の早う出來る禁厭、何の悲しいことはござりませぬ、コレモウ淚はない、御覽じませ、ホヽヽヽヽ。サア〳〵今の禁厭で、モウ飯が出來ました、いつものやうに握々して

上げませう。

〽飯匕取つて手の内に、結ぶを千年と待侘びて、手を出し給へば、

ト菓子盆へ握り飯を載せて出す。

政岡　マア〳〵お待ち遊ばせや、吟味の上にも吟味せねば．御辛抱の甲斐がない。

ト千松一つ取つて喰ふ。政岡顔を見て、

先づお毒味。

〽千松が顔をながめて、

オヽ氣遣ひない、サア〳〵御前、お心靜かに召上られませう。

〽言ふにいそ〳〵御悦び、千萬石を手の内に、握る御身に引替へて、唯一握りの握り飯を、數の珍味と思召す、御心根の勿體なやと、君を思ひ我子を思ひ、心の奧の忍ぶ山、忍び涙の折柄に、

ト此時花道の揚幕より、腰元一人出て來り、

腰元　ハツ、政岡樣へ申上げまする。管領山名樣の奧方榮御前樣、唯今是へお出でござりまする。

政岡　ナニ、山名の奥方榮御前樣のお入りとナ、イザ、其の由を御披露。

腰元　ハツ。

ト下手へはひる。

政岡　其方は次へ、常々母が言ひし事、必ず忘れまいぞ。

ト千松に呑込ませ、奥へ向ひ。

イザ、御用意よくば、お出迎ひ。

ト奥にて八汐、沖の井、松島、

八汐　榮御前樣のお出迎ひ、

沖の　致しまするで、

三人　ござりまする。

ト是にて三人出てよろしく住ふ。

〽敬ふ襖押開かせ、山名宗全が奧方榮御前。

ト亂れになり、花道より榮御前被衣裲襠のなり、腰元菓子を三方へ載せ持ちて附添ひ、跡より腰元二人雪洞を持ち出て、花道へ留まる。

政岡　榮御前樣の御入りとござりまして、病中ながら館の主人鶴喜代丸、介添として乳母政岡。

八汐　執權彈正が妹八汐。

沖の　斯波左京が妻沖の井。

松島　井筒女之助が妻松島。

政岡　是迄お出迎ひ、

皆々　致しましてござりまする。

榮　病中の出迎ひ、大儀々々。夫持豐が名代なれば罷通る、許してたも。

政岡　先づ〳〵是れへ。

皆々　お通りあられませう。

ト皆々本舞臺へ來り、榮御前上の方へ住ふ。

政岡　ハツ、榮御前樣へ申上げまする、今日の御入り御用の筋、仰せ付けられませうならば。

皆々　有難う存じまする。

ト管絃になり、

榮　さればいなう、今日妾が參りしは、鶴喜代殿には御病氣に依つて、男體せしものをお嫌ひなさ

ると聞きし故、夫に代る此の榮、篤と容體見屆け參れとの言付、殊には食事も進まぬ由、何がなお口にあふやうと、管領職より進ぜらるゝ此の菓子、賞翫ならば使に參りし妾が大慶、八汐、よしなに計らうて下されい。

〽持たせし菓子箱差出せば、八汐引取り、

八汐　管領よりの進ぜられ物、後とも言はず唯今爰にて、御賞翫遊ばすがよろしうござりまする。

〽蓋押し開き、

テモマア、見事な、結構な、此のお菓子、どれぞお氣に入つたのを、一つお取り遊ばせ。

〽差出す、流石童の嬉しげに、立寄り給ふ鶴喜代君。

ト鶴喜代手を出しさうにするを、政岡留めて、

政岡　アヽモウシ御前樣・又そのやうなさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒になつたら何となさるゝ、此方へお越し。

〽政岡が、詞打消す榮御前。

榮　コレ政岡、其方は何で留めた。

政岡　サ、これは。

榮　管領よりの贈り物、怪しいと疑ひ懸けし乳母政岡、コリヤ此の儘では濟まぬわいなう。

沖の　イヤ憚りながら、コリヤ榮樣の思召しが違ひまする。

榮　ソリヤ、又何故。

沖の　ハテ、管領より下し給はるお菓子なれば、何しに怪しみませうぞ、唯今政岡が止めましたは、典藥より禁ぜられましたる毒斷ち物。

松島　左樣でござりまする、押へ控へは乳人の役、それ故唯今のやうに申したものでがなござりませう。なう政岡殿。

政岡　左樣でござりまする。

榮　スリヤ此の菓子に怪しい事はないと申すか。

政岡　何しに左樣な事が。

榮　さう思はゞ自らが、直々にお進め申さにやならぬ。

政岡　エ、。

榮　但し政岡、そちが進めるか。

政岡　サアそれは。

兩人　サア〳〵。

榮　ド、どうぢや。

〽と權柄押し、奥より走りて千松が。

ト バタ〳〵になり、奥より千松走り出て來り。

千松　母樣。その菓子、わしに下されや。

〽と引摑み、何の頑是も唯一口、八汐はびつくり榮御前、毒の企の顯れ口、忽ち惱亂目を見詰め、蹴散らかしたる折は散亂、八汐は透かさず千松が、首筋片手に引寄せて、懷劍ぐつと突込めば、

ト 八汐手早く千松を引付け、胸元へぐつと突込む。

〽わつと一聲七轉八倒。

政岡　ソレ、若君を守護せられい。

皆々　心得ました。

ト松島はじめ、皆々鶴喜代を守護する。

沖の　ヤア、科の實否も糾さぬ內、千松を手に掛けられた八汐殿。

皆々　御返答が承はりたい。

〽と詰めかくれば、

八汐　エ、何をザワ〳〵と、騷ぐ事はないわいなう、持豐公より下されし此の折、手籠めにした慮外者、手にかけしはお家の爲。

沖の　スリヤ、狼藉なせし千松故。

八汐　如何にも、手にかけ殺したのぢや。コレ見やしやさんせ、まだ息があるかして、ひく〳〵するわいの、オ、痛からう、道理ぢや〳〵、現在他人の私でさへ、酷い事したと思へば、このやうに淚がこぼれる、政岡殿。此方には悲しう思はぬかいなう。

政岡　ナンノマア、お上へ對し慮外せし千松、手に掛けられたはお家の御爲、悲しい事もございませぬ。

八汐　スリヤ是でも悲しうはないか。これでもか〳〵。これでも悲しうないかいなア。

〽嬲り殺しに千松が、苦しむ聲の肝先へ、こたゆる辛さ無念さを、ぢつと怺ゆ

る辛抱も唯若君の大事ぞと、涙一滴目に持たぬ、男勝りの政岡が、忠義は先代末代まで、又有るまじき烈女の鑑、今に其名は芳しき、榮は始終政岡が、素振に氣を付け打ほゝ笑み。

榮　オヽ、出來した八汐、管領職より下されし大切の御菓子、よしない小兒が差出た故、大事の企みを。サア、大事の菓子を荒した科、手に掛けしは八汐が働き、天晴々々、此上は政岡には、自らが巾聞す仔細もあれば、三人の者は暫く次へ。

三人　アノ私共に。

榮　遠慮して下されや。

三人　畏りました。

へ何と異變も沖の井が、深き心も和田津海の汐の八汐も打連れて、伴ひ一と間へ入りにける、後見廻して榮御前。

ト沖の井松島八汐腰元等はひる。

榮　年頃仕込みしそなたの願望成就して、嘸悅びであらうなう。

政岡　エ、何と御意遊ばす。

榮　サ、その驚きは尤も。隠すに及ばぬ、政岡近う。

政岡　ハツ。

ト本調子の合方になり、兩人思入あつて、

榮　東西分かぬ内よりも、取替え置きし其方の子の鶴喜代が身に恙なう、頼兼が誠の倅千松が此最期、嘸本望であらうなう。

政岡　エ、。

榮　取替子の事は先達より知つたれど、若しやと思ひ最前より、始終の樣子を試みるに、血を分けし我子の苦しみを、何んで氣强い其方でも、怺へて餘所に見てをらるゝものかいなう、確かな證據見る上は、包むに及ばぬ是を見や。

ト懐中より連判狀を出し渡す、政岡受取り開き見て、

政岡　ヤ、コリヤ、鬼貫公を始めとして、家中の諸武士は大半お味方。

榮　コレ聲が高い、何かの事は八汐に言付けおいたれば、萬事よしなに。

政岡　スリヤ、此の連判を私に。

榮　其方にしつかり預けるぞや。

政岡　確かにお預かり申しました、シテそなた樣には。

榮　妾は是より館へ歸り、此の場の樣子を。心急げば、是より直に。

政岡　榮御前樣のお立ち。（ト奧にて腰元三人）

腰元　ハ、ア。（ト出て來る）

榮　必らず政岡ぬかるまいぞ。

〽一人呑込み悠々と、館をさして。

ト榮御前腰元附添ひ、花道へはひる。

〽跡には一人政岡が、奧口窺ひ〳〵て、我子の死骸打見やり、怺へ〳〵し悲しさも、一度にわつと溜淚、せき入りせき上げ歎きしが。

ト政岡千松の吹替へを抱上げ、

政岡　コレ千松、よう死んでくれた、出來したなア〳〵、其方が命棄てた故、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違ひ、己が企みを打明けしは、親子の者が忠心を、神や佛もあはれみて、鶴喜代君を守らせ給ふか。有難や〳〵、是といふも此の母が、常々致へおいた事、稚な心に聞分けて、手

詰になつた毒害を、よう試みて給つたなう。オヽ出來しやつたく。其方の命は出羽奥州、五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす、まことに國の、
〽礎ぞや、とは言ふものゝ可愛やな、君の御爲豫てより、覺悟は極めてゐながらも。
せめて人らしい者の手に掛つて死ぬ事か、人もあらうに彈正が、妹づれの刄に掛り、
〽嬲り殺しを現在に、側に見てゐる母が氣は、どのやうにあらう、どうあらう。
思ひ廻せば此程から、唄うた唄に千松が。
〽七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ。
二年待てどもまだ見えぬと、唄の中なる千松は、待つ甲斐あつて父母に、顏をば見せる事もあろ、同じ名の付く千松の。
〽そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて、何の便りがあろぞいなう。
三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒なもの、食ふなと言うて叱るのに、毒と見たなら試みて、死んでくれいと言ふやうな、胴慾非道な母親が、又と一人あるものか。

〽武士の胤に生れたは、果報か、因果か。

〽いぢらしや。

死ぬるを忠義と言ふ事は、何時の世からの習はしぞ。

〽と凝固まりし鐵石心、流石女の愚に返り、人目なければ伏し轉び、死骸にひしと抱き付き、前後不覺に歎きしは、理 せめて道理なり。

ト政岡よろしく思入、此所へ八汐出て、

八汐　こつちの企みを知つたる政岡、おのれも生けてはおかれぬぞよ。

政岡　何を。

トちよつと立廻り見得。沖の井、松島、腰元大勢、手雪洞と長刀を持ち出て來り、

沖の　ヤア不忠者の八汐、そこ一寸も動くまいぞ。

八汐　此の八汐を不忠者とは。

沖の　汝等兄妹企みの段々、大場道益が妻の小槙が具の白狀。

松島　先非を悔いて後悔なし、悪事の條々訴へし上は、
沖の　最早遁れぬ、サア眞直に、
皆々　白狀しや。
八汐　モウ此上は、

ト立廻り突込む、是にて差金の鼠出て、連判をくはへ上手へはひる。

政岡　詮議の種の連判を、
松島　鼠がくはへて、
皆々　アレ〳〵。
沖の　女ながらも謀叛の片割。
政岡　我子の敵。
松島　お家の仇。
政岡　天命思ひ
皆々　知つたるか。

ト八汐を政岡抉る。八汐立身にて苦しむ。皆々引張りよろしく、知らせに付き御簾一面におろす。

誂へのせり上げの鳴物になり、此屋體せり上る。誂へ床下の道具になり、爰に荒獅子男之介、古例好みのこしらへにて、鐵扇を持ち、鼠を踏へたる見得にてせり上る。

男之　アヽラ怪しやなあ、今荒獅子男之介照秀が、佞人ばらの讒言に依つてお目通りを遠ざけられ、此御寢所の床下に、宿直なすとはいざ知らず、窺ひ寄つた溝鼠、うぬも唯の鼠ぢやあるめえ、此鐵扇を喰はぬ内、キリ〳〵一卷渡しやアがれ。

ト鐵扇にて鼠を喰はす。鼠花道すつぽんへ飛込む。ドロ〳〵掛焔硝にて、仁木彈正鼠の上下、眉間へ疵を受け、連判をくはへせり上る。男之介此體を見て、

男之　曲者。

ト仁木小柄を拔き、

仁木　エイ。

ト手裏劍に打つ。

男之　合點だ。

ト受留める。彈正印を結ぶ。

取逃したか。

ト足を踏出すを木の頭、

殘念(さんねん)や。

トきつと見得、よろしく、

ひやうし幕

ト幕引付けると、仁木一卷を懷中して、

仁木　ム、ハ、、、。

ト見得、悠々と揚幕へはひる。跡シヤギリ。

大詰　對決の場

役名　細川勝元、仁木彈正、外記左衞門、渡部民部、山名宗全、鬼貫公、山中鹿之介、笹野才藏、渡會銀兵衞、侍○△、近習四人、小姓、立廻りの人數大勢。

本舞臺四間の間、高足の二重、本緣付、書院梯子を掛け、正面紗綾形の襖、軒に丸に二つ引の紋附けたる幕を張り、すべて問注所の體、爰に侍○△羽織袴股立ちにて、左右に控へてゐる。此の見得、時

の太鼓にて幕あく。

侍○　唯今のお太鼓は巳の刻、最早御裁斷に間もござるまい。

侍△　左樣でござる、執權職にも程なく御出席でござらう、勝元樣には御出仕も之無き樣子。

侍○　平生御精勤の勝元樣には、何故遲刻なさるゝぞ。

侍△　今日はあらかた落着と相見ゆれば、是非々々御兩公の裁きでござらう。

ト八つの時計にて、奥より山名宗全ふけたるこしらへにて着附長上下、子役小姓二人刀を持ち附添ひ出て來る。是にて侍○△こなしあつて平伏する。

侍○　式日に事變り、仁木渡邊の爭論に付き御裁斷。

侍△　萬事油斷なきやう、

兩人　申付けてござりまする。

山名　兩人共に今日の役目、大儀々々。

兩人　ハツ。

ト平伏する。

侍○　それに付、双方とも、今朝より相詰めましてござりまする。

山名　勝元上使の御用に付き。今日は此の山名が一人にて裁断致す、双方共是へ呼び出せ。

兩人　ハツ。

ト東西に向ひ、

侍○　鬼貫方の一列。

侍△　鶴喜代方の一列。

兩人　双方共是へ出ませい。

皆々　ハア――。

ト時の太鼓にて下手より外記左衛門、山中鹿之助、笹野才藏、上下大小なり、上手より仁木彈正、鬼貫、銀兵衛、同じく麻上下大小なりにて、双方舞臺へ來り平伏する。

侍○　鬼貫、仁木、渡會銀兵衛。

侍△　渡邊、山中、笹野才藏。

兩人　双方相詰めましてござりまする。

山名　双方共よく承れ、天下の政道は法を以て人を匡し、道を以て教ゆる。さるが中にも此度の訴、再度の評定未だ理非明白ならざるを以て、又候今日の對決に及ぶ、僞り飾らず、實正を申

上げい。

皆々　ハツ。

ト山名座席を見廻す。

外記　恐れながら、今日の御座席には、勝元公には、

侍○　今日勝元様には、御上使のお役目。

侍△　それ故今日の御裁斷は、山名樣お一人にて、

ト立役三人顏見合せ、

山名　恐れ多くも君命を蒙り、大役を勤め事を糺すに、私の依怙なきこそ職分の第一、訴へ方より申上げい。

外記　ハツ、先達て申上げし賴兼身持放埒の儀、まつた近習の者を以て遊里へ勸め剩へ義政公國阿上人へ寄附ありし、伽羅の木履を廓通ひに穿かしめ、其上遊女高尾を身請させ、袖ケ浦の別座敷へ押籠め同然の致し方。鬼貫公彈正の兩人が奸計なる事明らかなるを、此程より存ぜぬと申す條、篤と御吟味下さりませう。

彈正　コレサ外記、今日は何事を申上ぐるかと思へば、相變らず賴兼身持放埒の事ども。此程より申

す如く、そりや重役の某を譏り、誰か告ぐる者がなければならぬ、身共は一向存ぜぬ事、殊には寄附の伽羅の下駄、廓通ひに穿かれしとて、執權職にて木履の事迄差配がなるものか、又遊女高尾を身請の事、某嘗て存ぜぬ事だわ。

鬼貫　頼兼を押込んだは、身持放埒の事共上へ聞えを恐れ、お咎めのなき内隠居致させ、鶴喜代にて跡目を立てんとは、此伯父たる鬼貫が、國家を思ふ故なるわ。

銀兵　近習の者の勸めにて、主人を遊里へ勸めしとは、餘人は格別、此銀兵衛は知らぬ事だわ。

彈正　コリヤ何か執權職を嫉んで、某を罪におとさんと、誤なき身に奸計などゝは何を以て申すや、言ふ事あらば申して見よ。

山名　ヤア控へぬか彈正、又しても水掛論。して外記が申す條、それには何ぞ證據があるや。

外記　ハツ、證據と申すは、ソレ。

鹿之　證據と申すは、此の書面。

山名　それ讀み上げい。

ト鹿之助の出す手紙を侍渡す。

侍○　「手紙を以て申上候。然らば兼頼公心を懸けられし、遊女儀身請を致し、愈々身持堕弱に仕立

て、それを越度に押縮め申すべき手段に致し候間、御安堵下さるべく候。月日。鬼貫公へ彈正。」

才藏　かやうな證據があつても、知らぬと申立て、

兩人　めさるゝか。

山名　其の書面是へ。（ト侍山名へ書面を渡す。）こりや彈正より鬼貫方への書面。彈正、其方覺えがあるか。

彈正　イヤ存じませぬ。定めし彼等が企事。拙者毛頭覺えがござりませぬ。

外記　左樣潔白なる心を以て、鬼貫殿へ加擔なし、若君を毒殺なさんと計りしぞ。ハツ、此儀何卒御詮議下さりませう。

鬼貫　コレサ〱外記、左樣な儀は此の鬼貫一向に夢にも知らぬ事だぞ。

山名　默れ、主人を毒殺などゝ、汗潤に外記が訴へ出ようぞ。

彈正　イヤ恐れながら、山名公の御意ではござりますれど、先主頼兼袖ケ浦別座敷へ移されし後は、義政公の御差圖にて鬼貫公には鶴喜代の後見、何を不足に毒殺の企なさんや。

外記　イヤ左にあらず、某毒殺の儀に付き、御殿に於て、現在御身の妹八汐、惡事露顯の其折か

ら、政岡が手に掛り相果てたるが確な證據。

鹿之　それのみならず、御座の間近く、鳶の嘉藤太といふ者を語らひ忍びに入れ、

才藏　覺えないとは、

三人　言はれまい。

彈正　ソリヤ兄弟のこと故、同心とも思はつしやらうが、妹は妹にて毒殺の惡事故、政岡が手に掛り相果てたるは其身の科、此の直則は忠義第一、女の企みに一味なさうか。莫迦な事を。

ト外記こなしあつて、

外記　恐れながら此書狀御覽なされませう。

ト懷中より書翰を取出し侍へ渡す。侍山名へ取次ぎ、山名開き見て、

山名　なに〳〵。「御紙面下され忝く拜見致候。然らば御國の名產金海鼠一折貴意に掛けられ、忝く奉存候。猶貴顏の上萬々御禮申上ぐべく候。月日、渡部外記左衛門殿へ、仁木彈正。

外記　其の紙面彈正が自筆なるか、お問合せ下さりませう。

山名　彈正こりや其方が自筆に相違ないか。

彈正　如何にも、拙者が外記左衛門へ遣はしたる禮狀に相違ござりませぬ。

山名　外記、彼が自筆ぢやと申すが、どうぢや。

外記　それが彈正の自筆でござりますれば。山中氏。

鹿之　ハツ。

ト懐中より密書を取出して、

「豫て相賴み申候通り、先達密に奪ひし毒藥密書を以て藥種を買調へ、密計肝要に候。大場道益殿へ、彈正。」印形据えし此密書、篤と御吟味下さりませう。

ト侍〇手紙を山名へ取次ぐ。山名見て、

山名　彈正覺えがあるか。

ト彈正思入あつて、

彈正　ヘテ淺はかなる企事。是れ皆、僞書僞筆でござる。

外記　イヤ僞筆とは言はせまじきは、彈正が自筆のそれなる禮狀と、二通の密書と引合せ、御裁斷下さりませう。

彈正　何かと思へば反古に等しき其の禮狀、如何に老衰致したとて、近頃以てかたはら痛い、恐れながら、是にて外記が胸中、御推察下さりませう。

外記　辯に任せて紛らすとも、其書面と引合せ、密書の手鑑、確かな證據。
山名　默れ外記、僞筆を拵へ、某が眼を欺く不屆至極の佞人共、科なき鬼貫忠義の彈正が身を拒み、跡方もなき虛說を訴へ、上を誣る憎い奴め。

トキツと言ふ。此時バタ〳〵になり。花道より以前の渡邊民部、走り出て來り、直に舞臺附際まで來て平伏なす、

侍〇　ヤイ〳〵、室町殿の問注所なるぞ。
侍△　殊に御大老の列座をも憚らず。
兩人　下れ〳〵、下りおらう。
民部　恐入つてはござりますれど、親人樣へ申上げたき儀がござりまして。
外記　コリヤ〳〵倅、山名樣の御前なるわ。無禮者め、下れ〳〵下りをらう。
民部　ハツ恐入つてはござりますれど、證據となるべき密書の書面、測らず唯今手に入りしが、奪ひ合ふ機に二つに千切れ、名宛はなけれど確かな證據。
外記　ナニ、證據となるべき密書とナ。サ、、是へ持て〳〵。
民部　ハツ。

ト以前の密書のちぎれを出す。外記見て、口の内にて讀むことあつて、

外記　ハツ、山名樣へ申上げまする、唯今お聞きに入れし如く名宛はちぎれござらねども、證據となるべき此の一書、今一應御吟味の程願はしう存じまする。

山名　名宛もござらぬ此の書面、コリヤ證據にはならぬわえ。

ト手紙を丸めて外記へ投返す。

外記　スリヤ、此の書面は證據には。

山名　斯樣なものが取上げならうか、控へてをらう。

トキツと言ふ。

外記　ハツ。

ト平伏し、右の密書を懷中する。民部、鹿之介、才藏本意なき思入。

山名　ソレ、鬼貫始め三人の者へ、帶劍を與へい。

侍〇　ハツ。

ト敵役三人へ大小を渡す、彈正思入あつて、

彈正　天道誠を照すの譬、虛名の晴る、上からは、鬼貫公、嘸御滿足でござりませう。

鬼貫　言ふにや及ぶ、是も偏に山名公の御眼力、全く以て此身の安堵。
銀兵　今となつては嘸後悔、其身のお祟り待つてをらう。
山名　役にも立たぬ此の密書。
　　　　ト密書を火鉢の中へくべる。掛焇硝パッと立つ。
　　憎い奴め。
　　　　ト立役皆々見てびつくりなし、
外記　ヤ、、、、證據となるべき密書をば。
三人　山名公が。
山名　火中致したが何とした、但し身共が依怙贔屓を致すと申すか。
三人　サア、それは。
彈正　但し外に證據があるか。
三人　サアそれは、
皆々　サア〳〵〳〵。
山名　エヽ、きり〳〵立て。

侍○　立ちませい〳〵。

ト侍二人嚴しく言ふ。立役三人おど〳〵して立たうとする。敵役三人思入。此時花道ばた〳〵になり、勝元麻上下小刀のこしらへ、跡より小姓刀を持ち附添ひ出て來る。花道にて舞臺の體を見て、

勝元　ヤア仰々しい、控へぬか〳〵。

ト花道にて留め、立役皆々控へる。

此の處を何れと思ふぞ、室町殿の問注所なるぞ。殊に御大老の御前をも憚らず、慮外とや言はん無禮至極、ア、流石は遠國の育ちの者共、裁斷の儀は辨へざると相見える、先づ今日は差許す、以後をきつと愼しみをらうぞ。無禮者めが。

山名　是れは〳〵思ひがけなき勝元殿、シテ貴殿今日は。

勝元　如何にも志賀友明參府に依つて、御上使の役命ぜられ、裁斷の席延引なさんと存ぜし故、即刻相濟ませ、唯今是迄參つてござる。

山名　先づ〳〵。

勝元　然らば。

ト太鼓謠になり、勝元小姓の刀を取り本舞臺二重へ通る、立役皆々顏見合せて安堵の思入。敵役皆々

ギヨツとせしこなし、

山名　勝元殿には、今日の御用定めて遅からんと存じ、拙者一人にて公事裁斷致した。

勝元　新役の某故、御大老のお裁き、後學の爲と存じ、急ぎ參上致せし所、あの者共が無禮の口論、見るに忍びず拙者が高聲、無禮の段眞平御免下さりませう。

山名　イヤ／＼其御挨拶には及び申さぬ、然し勝元殿、折角御出席召されたが、最早裁斷明白に、事落着致してござる。

勝元　扨々それは殘念千萬、シテ何れが理分、何れが非分と落着致しましたナ。

山名　お聞きなされ、是迄は外記方がどうやら理分のやうにござつたが、今日に至り彈正が僞書をしつらへ彼等を罪に落さんと企みしを、此の山名が眼力にて見破り、事速かに外記を始め兩人の者共則ち罪に服してござる。

勝元　先は事落着致しまして、拙者におきましても大慶に存じまする。

ト立役三人に向ひ、

ハテさて不屆なる者共、僞書を構へ上を僞る大罪人、憎き奴め。

外記　御意の程恐れ入つてはござりますれど。

民部　彈正が手蹟に紛れなき、

鹿之　大事の書翰を、

四人　山名樣が。

ト言ふを、

山名　何と致した。

トキッと言ふ。立役三人言ひ兼ねる思入あつて、

外記　恐入つてはござれども、先刻悴が持參なせし、證據になるべき密書の片割れ、細川公の御覽にて。

ト此時勝元重ねかけて、

勝元　默れ〱〱默りをらう。僞書を構へ出づる條、一旦山名公の裁斷にて、落着なせし儀を、又候再吟味を願ふなどとは、裁斷を破る不屆き者、きつと蟄して罷りをらう、彈正左衞門、是迄の一件、心配の程推量致す。落着と相成り滿足であらう。

彈正　ハツ、御意にござりまする。

勝元　安心左こそと存ずる、勝元心得の爲。其方に尋ねたき事があるわえ。

彈正　何かは存ぜねど、お尋ねの趣、拙者覺えの儀にござれば、逐一申上げるでござりませう。

勝元　イヤ餘の儀ではない、十五ヶ條の內、賴兼淫酒の二つに長じ、放埒の廓通ひ、其方存じをつたか、但し知らぬか。

彈正　其儀は先刻是にて申上げし通り、拙者表役を勤めますれば、賴兼何事も包み隱しまする故、一向存じませぬ、其れをあの者が某が計ひなどと申立て、斯々の訴へ、お上へ對し御苦勞を掛けまする段、恐入つてござります。

勝元　默れ。

彈正　ハツ。

勝元　第一其職にあつて、主人の行跡知らぬとは如何の儀ぢや、尤も重役の其方故、ソリヤ鬼貫を始め其方共へ包み隱す儀もあらんが、淫酒に耽りたる主人の行跡朝夕身近に勤めねばとて、是を知らぬ存ぜぬとは、是卽ち汝が怠りと申すもの。臣たる道を失ひ、其役を失脚なす事、其罪大いならずや。

ト彈正ムツとしたる思入にて、

彈正　コハ、片手落ちなる御仰せ、拙者一人內外の儀を取計らひませうや、此儀については存ぜぬ事

何卒御賢察下されませう。

勝元　ナニ、其儀は一向に存ぜぬと申すか、大家の執權を勤める程ぢやに依つて、大器量者と承つたが、知らぬとあらば愚者にして言聞かさん、例へば鎌倉殿より、數の重器の內、其一つを汝に預けるに、汝是れを如何致しおくや。

彈正　大切なる品にござらば、寶藏へ秘めおき、きつと守護仕りまする。

勝元　さもあらん、然るに若し盜賊あつて、其の器物を盜み取られ、その申譯にては相濟むまじ、寶藏の內になきは、誰が誤ぞや。如何致して申開き仕るや。

彈正　左樣な儀もござらば、草を分つて詮議なし、知れざる時は切腹致す迄と存ずる、才に長けたる勝元公、是等の儀は御賢慮もござりませう。

勝元　スリヤ右預かりの品紛失の跡は、切腹致すと申すか。

彈正　御意にござりまする。

勝元　確と左樣か。

彈正　ハツ。

勝元　成程、こりやさうなうては叶ふまじ、彈正左衛門、よく承はれ。既に其身執權の職は、上に

も、お聞濟みあられ、大切の主人守護の役仰せ付けられしは、五十四郡といふ天下の重器を其方に預けおかるゝに、其の預かつたる藩主賴兼、淫酒に性根を奪はれ、晝夜を分たぬ廓通ひ。其行跡を存ぜぬ知らぬと生面下げてよくも評定所の席へ出でたるよナ。器物の類ですら切腹致すと申したに、況んや主人の身持放埓、假令何者が僞書を構へ作るとも、己れの職の怠りを思はゞ、何故切腹致して相果てぬ。

彈正　サアそれは。

勝元　何故死を以て諫めぬのぢや。

トキッと言って氣を替へ、

人は見掛けに寄らぬ愚かしい者ぢや。ウワツハヽヽヽ。コリヤ雜談ぢやが、聞かす話があるぢや。彼の虎は猛獸の司にて、多き獸の王ぢやが、或時彼の虎が一匹の狐を得て、唯一嚙みに取つて喰はんとするを、彼の狐の曰く、汝我れを喰はんと言ふは僻事ぢや。天帝我れをして百獸の靈長と言ひ、恐らくは獸の長ぢや。我れが言ふ事を僞りと思はゞ、そちが先へ立つて行く程に、我れが勢を見られよなどゝ言つて、何が虎の先へ立つてゆる〳〵と行くぢや。諸々の獸路より虎の來たるに恐れわなゝき、頭を垂れて身動きもせなんだとある。全く虎めが愚かしさ

に己れに恐れる事を知らず、遂に狐の爲に欺かれたとある。汝如きは虎の威を借る狐ぢや。其の狐の言ふ事をよい事ぢやと心得て、深き穴へ陷るを知らず、うか〳〵狐に騙さるゝとは、虎は大きなたはけ者でござる、ハヽヽヽヽ。

山名　長たらしい虎の講釋、退屈致してござる。

勝元　これは〳〵御老職の前をも憚らず、失禮の段眞平御免下されい、イヤナニ彈正、唯今の如き事を、山名公のお尋ねのないは、其方が仕合せと申すもの。然し裁斷の儀も勝利と相成り、嘸滿足であらうナ。

彈正　ハッ、有難い仕合せに存じまする。

勝元　然らば賴兼隱居たる上は、幼稚の鶴喜代を以て家督の儀を願ふであらうナ。

彈正　御意の通り、よろしく御推擧願ひ奉ります。

勝元　なれども幼少の鶴喜代、後見なうては叶ふまじ。

彈正　其儀は伯父鬼貫を以て後見の儀、願ひ上げ奉りまする。

勝元　然らば執權の其方一人にてよい。家督の願ひ書を、是にて認め差上げい。コレ、料紙硯を、彈正へ遣はせ。

侍〇　ハツ。

ト硯箱を彈正の前へ置く、立役皆々ハッと思入。彈正願書を認め、

鬼貫　高木風に折らるゝと思へば、最早鶴喜代の後見、御免を願はんと思ひの外、又候此儀辭退もならず。ハテ迷惑千萬な儀でござる。

銀兵　ハテそれが御緣の始めと申すもの。

外記　ハツ、一旦虛名に沈むと言へども、正しき道と思ひの外、勝元樣の仰せと言ひ、賴みの綱も切れ果てしか。

民部　我々が身は罪科に服すとも。

鹿之　若君の御身の上が。

才藏　何とも以て心許なし。

トキッと言ふ。此內彈正願書を書認めて差出す。侍〇取つて勝元の前へ置く。

勝元　彈正、實印致せ。

彈正　ハツ。

勝元　早く致せ。

ト又侍〇取次ぎ、彈正の前へ置く。懐中より印形を出して押さうとして、立役三人に見えぬやうに、小鬢の毛を抜き、印形へ當て、押して出す。又侍〇勝元の前へ出す。勝元是を見て、

外記、唯今申せし、ちぎれたる書面を是へ。

外記　ハツ。

ト以前の密書を差出す。勝元見て、

勝元　彈正、此願書は其方の手蹟ぢやな。

彈正　如何にも、唯今御覽の如く。

勝元　スリヤ此の印形も、其方の實印ぢやナ。

彈正　コハ異なる事のお尋ね。それとても拙者が實印、毛頭相違はござりませぬ。

勝元　左すれば其方が積惡を、相糺さねばならぬわえ。

彈正　恐れながら身に取りまして、積惡などゝは思ひもよらぬ儀でござりまする。

勝元　イヤ何程陳じても、遁れぬ所は此の密書。

ト密書を出し、

「豫て相頼み置きし通り、貴僧の法力を以て、鶴喜代調伏の儀を丹精抜んずべく候。鶴喜代呪

咀調伏の儀は、貴僧仰付けられし通り、櫓稲の藁を以て人形を作り、御殿の床下乾の方へ埋め置き候間、瀧祈念怠るべからず。満願成就の上は、願ひの墨付宛行ふもの也。修験者奇岩院へ、仁木弾正直則判。」印形据ゑし此の密書は、某是へ来かゝる途中駕籠訴なしたる者あつて、某持参の密書の切端、外記が所持の此密書と、しつくり合ひし文字の割符。今認めし其方が願書の手蹟、寸分違はぬ同筆同印。ナント是でも僞書と申すか。

弾正　コハ怪しからぬ御仰せ、僞書を構へ謀判を致す者が、それと一目に相分るやう、何とて企み申すべき。其願書と拙者が印形。よく／＼お改め下さりませう。

勝元　ヤア人面獸心とや言はん。國賊とは汝が事。コレ見よ、此密書を僞書なりと言はせまじき此印鑑。今手盥に取つたる願書の名宛に押したる印形へ、引目を入れし即座の企。おのれの鬢髪を引抜き、白紙へ載せ、印形なしたる此文字と、きれ／＼に分らざるやう、某の眼を晦ます大罪人。此所を何れと思ふぞ。室町殿の問注所なるぞ。ナント是でもあらがふか。

弾正　サア其れは。

勝元　但し其方が實印でないか。

弾正　サア其れは。

勝元　何故白紙へ引目を入れしぞ。

彈正　サアそれは。

勝元　惡事の密書、いよ〱僞書と申し切るか。

彈正　サアそれは。

勝元　ドヽどうぢや。

ト勝元席を打つてキッと云ふ。彈正思入あつて、

彈正　此上は是非に及ばぬ。外記と某相拷問仰付けられ下さるやう、願ひ上げ奉りまする。

勝元　默れ彈正、總じて侍たるべき者、一度獄卒の手に渡り、拷問にかけらるゝ時は　弓矢取る身の恥辱ぢやぞや。假令此方より申付けたりとも、只管赦面を願ふべきに。（ト思入あつて）ハ、ア、察する處、其方拷問を怺へ、老衰の外記相果てなば、其時己れ生き殘り、勝利を得ん企みであらうが。

彈正　サアそれは。

勝元　詞を巧みに表を飾り、主人の家を圖りし罪免がれんとなす大罪人、此の勝元が眼力を以て、邪正を糺す汝が積惡、最早天命院れぬ所ぢや。

彈正　サアそれは。
勝元　弓矢に換へても、拷問願ふか。
彈正　サアそれは。
勝元　罪に服すか。
彈正　サア。
勝元　サア。
兩人　サア〱。
勝元　恐れ入つたか。

ト勝元キッと云ふ。彈正無念のこなし。

彈正　恐れ入つてござりまする。
勝元　さうなうては叶ふまじ。外記左衞門。
外記　ハツ。
勝元　倅民部。
民部　ハツ。

勝元　山中鹿之助。

鹿之　ハツ。

勝元　笹野才藏。

才藏　ハツ。

勝元　此程よりの心勞思ひ遣らるゝ。先づは其の甲斐あつて重疊〱。

外記　既に虎穴に陥りしを、天の冥加に我々が。

民部　實心顯れ、此上はござりませぬ。

鹿之　是も偏に、

三人　勝元樣の。

勝元　アイヤ、鬼貫始め兩人の者、科は脱れぬぞ。

山名　アイヤ勝元殿、彈正が罪に服する上は、餘人はその儘、ハテそこが公、室町殿の御仁情。

勝元　惡事に荷擔の者共を。（ト立役の方へ思入あつて、）コリヤ立て〱。

侍　立ちませい〱。

ト是にて立役三人辭儀をして下手にはひる。

勝元　不忠の罪脱れぬ處、刑罰の御沙汰を相待ちをらうぞ。

山名　アイヤ勝元殿、刑罰の儀は室町殿へ伺ひを以て、罪の輕重を取り行はん。先づ其迄は身共が彈正を預かり、きつと糺明。

勝元　其儀は兎も角も然るべきやう。然らば兩人を、引立てい。

侍　鬼貫、黑澤、立ちませい〳〵。

ト時の太鼓になり、敵役二人惰れて立上る。侍○附添ひ上手へはひる。

山名　扨々貴殿にはよき所へ心付かれ、潔白相分り拙者も祝着。

勝元　是と申すも、全く御老職の御丹精、某とても役儀の表、相立ちましてござりまする。

山名　それに附けても其の密書。

ト山名取りに掛る。勝元手早く、

勝元　ハテ恐ろしい企みではござらぬか。

ト此時七つの時計鳴る。

最早申の上刻。

山名　ナニサマ、先刻より勝元殿にも、御役目御苦勞千萬。

勝元　御老職にも、書院へござつて御休息、

山名　左樣ござらば勝元殿。

勝元　先づ〳〵。

ト時の太鼓にて、山名奧へはひる。

誠や人職に立てば、又其上に立たんとするとも、今眼前にこれ皆鬼貫が企みし事共。さるにても彈正左衛門なか〳〵才に勝れし者なれども、遂に其身の惡業にて、忽ち命を落すと言ふも、唯一心の、（ト思入あつて、）置所ぢやなア。

ト知らせに付き、此道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面大紗綾形の襖折廻し杉戸、よき所に誂への大對立。此前に外記硯箱を置き、手紙を書いてゐる。時計の音にて此の道具留る。と手紙を書き終つて、封じかけると、奧より民部出て來り、

民部　モシ親人、是迄の永き心勞、一時に晴るゝけふの落着、

鹿之　理分と相成り、貴殿にも此上もなき、御悦びで、

三人　ござりませう。

外記　是と申すも、全く勝元公の御眼力、我々が申し條相立ち國家の納まり、我々までが身の安堵、それ故國許の家老共へ、吉左右の書翰、早飛脚にてお知らせ下され。

鹿之　いかさゝ、御尤もなる思召し、善は急げと申しますれば、

才藏　拙者も山中氏と同道して、よしなに取計らふでござりませう。

外記　又倅には此書翰を上屋敷なる乳人政岡の許まで、使を以て、

民部　委細承知致してござりまする。

外記　然らば萬事相賴み申す。

三人　心得ました。

ト是にて三人下手へはひる。外記思入あつて、

外記　チエ、忝い。是と申すも、本國鹽竈明神の感應ましますにや、御家の納まり我等が武門の譽れ、まつた御名君たる勝元樣の御慈愛、實に五十四郡の守護神と崇め奉らん。御恩德の程は蒼海よりも深し。來世に殘る國家の礎、悅ばしやなア。

ト天を拜し悅ぶ。此時下手より彈正憎れて出て來り、

弾正　外記左衛門殿。

　ト外記弾正を見て思入あつて、

外記　そちや弾正。

　ト云ひながら脇へ顔をそむける。

弾正　暫くお待ち下さりませう。

　ト合方になり、

サア御尤もなる御立腹、誠に天の憎しむ處、諸神必ず是を誠と見ませうや。一つの心の誤より、遂に此身を亡ぼす事、主君の御罰恐るべし。（ト思入あつて、）イヤ外記左衛門殿、貴殿には此直則を、一寸試しに斬られましても、なか〳〵飽きはござりますまい、餘儀なき武士の義に絡まれまして、是迄呉越の思ひをなせしは。

　ト手を突き思入、外記取合はぬこなし、

拙者如何程申せばとて、斯くなる上はお取上げもござるまいが、御立腹は御尤も至極、先非を悔んで、善心に立歸りましたる證、徒黨の連判、其許へ置土産仕らん。

　ト懐中より連判を出し、外記の前へ置く。

外記　ムヽ、スリヤ積悪の罪を悔んで、一味の連判を某へ。

ト外記受取つて開き見て、

弾正　如何にも、コリヤコレ伯父鬼貫を初筆として。血判据ゑし徒黨の連判、今管領の御前にて、白状するは易けれど、申さば主君の片割たる鬼貫殿の身の上に、拘らんことを思ふ故、理を非に曲げて爭ひ申した。まだ／＼申したき儀様々ござれば、まさかの時は豫てより、是に認め罷りある、一書内見の上、勝元様へ執成あつて、せめての事に武士らしく、切腹御免下さるやう、偏にお頼み申しまする。

ト弾正懐中より立文を出す。

外記　人の將に死なんとする時、その言ふ事よしと、何かは知らず披見の上、切腹の儀は身に替へても。

弾正　チエ、忝い。（ト思入、）然らば竊に御内見。

ト弾正外記の側へ寄る。

外記　ドレ。

ト弾正懐中より文を差出す。外記取らうとするを、弾正立文の中に仕込みし短刀を引抜き、外記の腹

へ突き通す。此時中の舞の合方になり、外記よろぼひながら立ち、扇をもつて受身になり立廻りよろしくあつて、トヾ外記危くなる所へ、民部鹿之介才蔵出て来り、此體を見て、彈正を抱き留める。彈正振り放すを、外記すかさず彈正の腹へ一刀突立てる。

大悪人の仁木彈正、天命思ひ知つたるか。

ト外記彈正を抉る。彈正苦しむ。白刃を抜くと共に倒れる。外記のしかゝつて止めを刺し、

外記　嬉しや、御家の。

ト外記心弛みしこなしにて、がつくりとなるを、民部驚き、

民部　親人、心を確かに。

ト肩衣にて外記の疵口をしつかりとくゝる。管絃になり、此時勝元銀張りの茶碗を袱紗に載せ持つて出て来り、後より小姓附添ひ出る。民部外記を介抱する。

勝元　オヽ出来した外記、其方達が働き故、役柄の者へ對し、彈正が過ち故に、鶴喜代殿へお咎めなし。物數ならねど細川勝元、其方が忠心を感じ薬湯を與へん。心靜かに服薬致せ。

民部　ハツ。親人、忝くも勝元公より、御薬湯を下し置かれまするぞ。

ト耳の側にて云ふ、外記心付き、

外記　我々しきへ、恐れ多くも、勝元様の御手づから、お薬湯を賜る事、冥加なき仕合ながら、血汐の穢れでござりますれば。

勝元　イヤ苦しうない。サヽ、苦痛を脱れい〳〵。

ト茶碗を差出す、民部是を受取つて、外記に介抱して飲ませる。勝元彈正の死骸を見て、

誰かある。彈正が死骸、門前へ取捨てい。

近習　ハア、。

ト近習四人下手より出て來り、死骸を疊へ載せて持つてはひる。

外記　有難く頂戴仕つてござりまする。

勝元　斯かる忠義な者共を、扶持せらるゝ鶴喜代殿は、果報とや言はん。まつた果報つたなしとや言はん。既に家名の沒せんとせしを、死を顧みぬ臣あつて、是を苅るが故にこそ、無事に家督を繼目の畢附。

ト懷中より立文を出し、

イザ、有難く頂戴致せ。

外記　ハヽ、ハツ。

ト盟附を受取る。

勝元　外記、嘸安堵致したであらうナ。

外記　鶴喜代が家門を開くも是皆以て、勝元公の御計らひ。

民部　有難く存じ奉ります。

勝元　オヽ、さこそあらん。

外記　然らば此儘御暇を、

民部　デモ此深傷では

外記　大事ない。假令此儘相果つるとも、管領の御前に於ては。

ト立たうとするを、勝元よく〳〵見て、

勝元　然し其儘歩行も心許ない。勝元が乗物を持て。

ト此時奥にて大勢ハヽアといふ。

民部　勝元公の御指圖にて、お乗物を。

外記　ナニ御乗物を。管領職の御館、餘りと申せば。

ト外記苦しきこなしにて立上るを、勝元見て、

勝元　ハテ勇しき。痛手に屈せぬ健氣な振舞、惡人亡び鶴喜代の家は萬代不易の門出、めでたく壽ぎ祝うて立ちやれ。

ト勝元謠にて、

「一張の弓の勢ひたり。」

ト謠ひ、外記を見て、

附けい〳〵。

外記　「東南西北の敵を、やす〳〵亡せり。」

ト扇を持つてよろしく立上り、バッタリ下に座る。民部介抱する。

勝元　めでたい。

ト扇を開くを木の頭。

めでたい〳〵。

ト愁ひをかくす思入。双方よろしく見合つて、

ひやうし　幕

先代萩（終り）

國性爺合戰
こくせんやがつせん

國性爺合戰（二幕）

發端　　肥前平戸海岸の場

役名　漁師和藤内、和藤内老一官、漁師四人。和藤内妻小むつ。

本舞臺一面の浪幕、太鼓入り大漁の唄にて幕あく。

〽祝へ大漁平戸の濱へ、山は鯨か鯆の土手に、追込む磯は鯛ひらめ、

ト此唄へ太鼓入りにて、花道より漁師一先きに、片手に大太鼓を持ち叩きながら、後より同じく漁師二、三、四大びくへ魚を一ぱい入れしを、擢にて擔ぎ、出て來り、花道にて、

漁師四人　大漁ちや〳〵〳〵。

一　イヤ、けふは夕方のそこりぢやから、いゝ加減にして上つて來たが、どのくらゐ漁があるか、實に數が知れぬではないか。

二　この生洲を平戸の明神樣へ供へて、大漁の御祝ひを申さねばならぬぞよ。

三　もつと大漁を、觸れてくれさつせえ。

四人　大漁ぢや〳〵。

ト　わや〳〵云ひながら舞臺へ來りびくをおろし、

一　時に今見えた珍らしい船は、何であらうか、鯨舟でもなし、赤く塗つた形を見ると、唐の茶舟か唐人の遊山舟かど、此の日本へ流れて來たのではござらぬかの。

二　さうぢや、楫は折れ、艪櫂はなし、何でも唐人舟の難船が、こちへ流れて來たに違ひござらぬが、波六どんのいふには、能い女子が乗つて居たといふことだ。

三　馬鹿ア言はツせえ。それは貴様かつがれたのぢや、何であの異國船に女子が乗つて居て、爰迄生きて來られるものだ。

四　イヤ、さうでござらぬ、おらが舟へ沖でぶツつかつた時に、ちよつと目にかゝつたは痩せおとろへた、よい器量の女子で、楊貴妃の幽靈の樣でござつたが、なりといひ髪形ちといひ、畫に書いた唐の后の樣であつたわえ。

一　そりや妙ぢやの、まあかういふ事の分るのは、村の和藤内殿の所へ、此頃異國から來られた父御に聞いたがいつち早いわ。

二　ヲヽ、さうぢや〳〵、大明とやらの御方ぢやといふから、こりや地頭様などへいつて聞くより、いつちそれがよからうわえ。

三　さういへば和藤内殿初め、爺御の老一官とやらいふ人や、内義の小むつ殿も、最前濱邊へ出て行つたれば、其唐人船を見に行つたかも知れぬわえ。

四　是を明神様へ供へたら、和藤内殿の所へ、尋ねて行つて見ようではござらぬかえ。

一　ヲヽ、それがいつち近道ぢや、そんなら皆の衆、ドレ、明神様へ。

四人　お供へ申さうわえ。大漁ぢや〳〵。

トわや〳〵云乍ら太鼓を叩き、右の唄にて、四人上手へはひる。知らせに付き、波幕を切つて落す。

本舞臺向ふ一面の海原、下手より沖へ突出たる岩山の書割、上手中足程の岩山、磯頭の松、深山にあり、下手芦原の目褄り、すべて肥前平戸海岸の體、波の音にて道具納る。と鳴物打上げ、大ざつまになる。

大ざつま　〽それ緜蠻たる黄鳥丘隅に止まる、人として止まる所に止まらずんば、鳥に如かざる可しとかや、爰は肥前の松浦潟、波路遥に磯千鳥、見渡す干潟すき返し、貝とり〳〵の面白し。

ト文句の切れ、賑やかな鳴物波の音になり、漁師和藤内大縞の着附、前帯、繻子の脚絆わらざうり、腰蓑にて岩に腰かけ、煙草を呑み、此前に大蛤、相引にて口をあいて居る。爰へさしがねの鴫一羽飛び居る。是を和藤内見込み居る見得にて、舞臺眞中へせり上げる。

うた〽和藤内きつと目を附け、

和藤　ハテ面白し。

ト謡への合方になり、

我父は大明國の忠臣、大爺鄭芝龍といツし者なりしが、くらき帝を諫め兼ね、自ら長沙の罪をさけ、此日の本へ筑紫潟、老一官と名を改め、此の和藤内に唐土の兵書を教へ、我も専ら軍法に心ゆだねしが、此鴫蛤の爭ひに依て、軍法の奥義一時に悟りたり。

トぢつと見やり、

蛤は貝の質堅きを頼んで、鴫の來るを知らず、まつた鴫は嘴の鋭きに誇つて蛤の口を閉づるを知らず。ムヽ、イヤ挑むわ〳〵。

〽取る人ありとも白泡の、たゞ一ト啄と覘ひ寄る。

ト此内鴫は蛤の口へ嘴を入れる。是にて蛤口をしめるゆゑ、鴫飛ばらとして動かれぬこなし。

ム、、貝は放さじ鴫は放れんとして、前へ氣を漲つて後を顧みるに隙なし。爰に臨んで、我手も濡らさず、二つを一度にひッ攫むに最易きは、是ぞ兩勇戰はずして其虚を討つといふ軍法の秘密。幸なるかな父一官の生國大明韃靼は、今鴫蛤の國爭ひ、合戰最中と聞及ぶ、是より唐土に渡り此理を以て彼の理を押さば、大明韃靼兩國を只一呑に我日の本の名を上げん。ハテ、幸先の能き事ぢやなあ。

〽天を拜し、地を拜し、國の譽ぞ勇まし〻。

ト立上り、鴫蛤を後ろへ蹴返し、よろしく思入、大ざつまの上げ、本釣鐘を打込み、少し闇くなる。爰へ幕あきの漁師一擢を持ち窺ひ出て、

二 怪しいやつめ。

ト打つて掛るをちよつと立廻つて突きやる、此時上手半腹、立木の間へ老一官、異國の着附劍を附け、沓、竹の子笠をかざし、下手蘆原より和藤内妻小むつ、着流し前帶片褄はしをり、手拭を吹流しにして出て、三方一時の見得。本釣鐘誂らへの合方になり、兩人は和藤内を曲者と疑ひ寄る。此間へ漁師擢を持てからみ、だんまりの立廻りあつて、ト〻三人夜目に顔をすかし見やり、

小む ヤ、こちの人か。

老一　ヲヽ、悴であつたか。

一　何を。

ト打つてかゝるを、和藤内ちよつと立廻つて、ポンとかへすを、木の頭、

和藤　イヤ、びつくりしたわえ。

ト此のもやうよろしく、波の音一セイにて

ひやうし　幕

上の巻

獅子ケ城樓門の場

役名　和藤内。老一官。下官、珍澤山。下官、三河良。下官大勢。錦祥女。和藤内の母。唐女數名。

竹本連中

本舞臺正面、朱塗り高欄付きの樓門、扉、上下とも出はひり。東西高き狹間付きの石の練塀。高張提灯、鉾、大旗並びよく立て、日覆より松の釣枝。朧月を出しあり、すべて獅子ケ城の體。時の太鼓にて幕

あく。と上手より、三河良、腰に異風なる提灯を差し鉦を叩き、時廻りの心にて出て來る。下手より下官珍澤山割竹を持ち、これも見廻りの心にて出て來り、互ひに行きあひ、

三河　ヤア、珍澤山ではないか。

珍澤　三河良か。

三河　オイヤイ、なんと今夜も、きつウ冷える晩ではないか。

珍澤　イヤモウ、僅かな祿を頂戴して、時毎に三度宛城外を見廻りも、辛い事ではないか。

三河　辛いの何のと、孫子の末まで武家奉公させぬ事。世にある時は炬燵よ行火よ温石よと、榮耀榮華な事もいつたけれど、今ぢやア雲泥の違ひ。體もどこも冷え凍るわ。おまけに大きな睾丸まで、コレ梅干のやうになつてゐるわえ。

珍澤　そりやアお互ひの事よ。然しかういふ晩には、濁酒でもやらずばなるまい。

三河　それは何よりの樂しみ。したが、肴はあるかよ。

珍澤　言ふな。狆ころりがあるわ。

三河　莫迦を言ふな。狆ころりでは飲めぬ〳〵。

珍澤　それでも今となつて、買ふ事がならぬわ。

三河　オットそこはぬからぬ三河良、齋應寺の天麩羅で極くうまい肴があるから買つて來た。旨い物なら彼處に限るテ。

珍澤　われ持つてゐるかよ。フウ〱。

ト鼻で嗅ぐこなし。

三河　オヽ、おはすとも〱。これを見やれ。

ト股倉から竹の皮包みを出し、

われ〱が食物なら、豚の脂身か象の煮付ぢや。餘人に他言は無用だが、合點か。

珍澤　これは結構。象の煮付なら、文字は違へど、藏入り〱。吉左右々々々。

兩人　これは妙々。

ト兩人悦び、思はず鉦を叩き立て踊る。この音を聞きつけて下官四人出て、

皆々　ナンウン〱。

兩人　何でもハウ〱。

ト竹の皮包みをかくす。

下一　コリヤ〱かくすな〱。珍澤山、三河良、旨い物なら、おらにも喰はせろ。コレ、おれも今

唐丸を閉めて置いた。早く行つてわれも閉めろ〳〵。

珍澤三河　それはほんまか。エンライ〳〵。

ト行きかけるを留めて、

下一　イヤ、それはさうと、今御番頭の仰せには、此度日本船來國によつて、もし此處へ亂入すれば、手柄次第に捕るべしとの仰せなり。

皆々　ケン蓮ツ〳〵。

トキヨロ〳〵する。

下二　この上は生捕らば、數多の御褒美、錦の卷物、黃金を下し置かるゝ。

下三　もし又日本人と知つて助け置かば、國法に執行ふとのお觸れ。

下四　何れも手柄に任せて、出世の雲が棚引きまするぞ。

下一　何でもその氣で、働け〳〵。

皆々　合點々々。

下一　それがよければイコライ〳〵。

皆々　ハイラウ〳〵。

ト賑かなる鳴物になり、皆々門の内へはひる。鳴物打上げ、床の淨瑠璃になる。

へ仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず。慈ある父も益なき子は愛する事能はず、日本唐土様々に道の巷は別るれど、へ迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人巡り合ひ、我が聟とばかり聞及ぶ、伍將軍甘輝が館、獅子ヶ城にぞ着きにける。

ト唐樂になり、花道より老一官、白髪かづら唐衣裳、着込みの拵のなり、杖を突き、次に和藤内の母、好みの着附同じく、次に和藤内厚綿衣裳丸ぐけ胴丸の着込み、垂れ草鞋長大小にて連立ち出で來る。

へ聞きしに勝る要害は、まだ冴返る春の夜の、霜に閃めく軒の瓦、鯱鉾天に鰭振りて、石疊高く築上げたり、濠の水藍に似て繩を引くが如く、末は黄河に流れ入り、樓門堅く鎖せり、城内には夜廻りの鐘の聲喧すく、矢狹間に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはといはゞ打放さんその勢ひ和國に目馴れぬ要害なり、一官案に相違して、

ト各々よろしくこなしあつて、

一官　亂世といひ、斯る嚴しき城門、事々しく夜中に敲き、聞きも慣れぬ舅が、日本より來りしなんどいふとも、誠と思ひ取次ぐ者もあるまじ、假令娘が聞きたりとも、容易く城内へ入れん事難かるべし。ハテ如何致したものであらうナ。

ヘ如何はせんとぞ囁きける。和藤内聞きもあへず、

和藤　今更驚く事ならず、一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、遂に見ぬ舅よ聟よと、親しみ立して不覺を取らんより、賴まれうか賴まれぬか一口商ひ、否といはゞ即座の敵、二歳で別れし娘なれば、我等とも行逢姉。彼奴孝行の心あらば、日本の風も懷しく、文の便りもあるべき筈、賴まれぬ心底。我れ竹林の虎狩に從へし、島夷の軍兵を元手にして、切靡ける程ならば、五萬や十萬の勢手間暇入らず。何の人賴みせんより此門を蹴破り、不孝の姉が首捻切つてくれべいか。

ヘ躍り出づれば、母縋りつき押止め、

母　その娘御の心入れは知らねども、夫につれて世の中の、儘にならぬは女の習ひ、父とは親子、御身とは胤一つ、他人は自分一人にて。

ヘ海山千里を隔てゝも、繼母といふ名はのがれず、

娘の心に親兄弟、戀ひ慕ふまいものでもなし。その所へ斬込んで、日本の繼母が妬みなりと言はれんは、我が恥ばかりか日本の國の恥、御身不肖の身を以て、韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代にかへさん事、大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て、我が身の無念を堪忍し、人を懷け從へ、一人の雜兵も味方に招き入るゝこそ、軍法の元と聞く、聟の甘輝は一城の主人、一方の大將軍。これを味方に頼む事、大方にてなるべきか、心を納め案内せよ。

〽と制すれば、和藤內、門外に大音上げ。

和藤　伍將軍甘輝公へ、直談の申したき事あり、開門〳〵。

〽開門々々と敲きしは、城中響くばかりなり。當番の兵士聲々に、

ト門の內より○△□の官人塀より半身出して、

官○　主君甘輝公は大王のお召によつて、昨日より出仕あり、何時お歸りとも計られず、お留守といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、いふ事あらばそれから申せ、お歸りの節披露して取らすべし。

〽と呼ばゝりけり、一官小聲になり、

一官　イヤ人傳に申す事ならず、甘輝公の留守ならば、御內室の女性に直に逢うて申すべし、日本よ

り渡りし者と申せば合點のある筈。

〽言ひも果てぬに城中騒ぎ、

官△　ナニ、日本人とや、ソレ者共、油斷致すな。

皆々　ハ、ア。

官□　我々さへ面も拜まぬ御臺所。對面せんとは不敵者。殊に日本人とや、油斷するな。

〽油斷するなと高提灯、銅鑼鐃鈸を打立て〳〵、塀の上には數多の兵士鐵砲の筒先揃へ、石火矢放して打ちみしやげ、火繩よ玉よと犇きける。

ト鉦、鐃鉢の音になり、官人四人の外に、下官大勢、何れも唐人のこしらへ、塀越しに半身出して身構へる。

〽奧へかくやと妻の女房、樓門より見下して、

ト錦祥女見事なる唐女の裝束にて、誂への臺、唐團扇をかざし、同じく子役の唐子二人、柄の附きし雪洞を持ち、唐衣裳の腰元手箱鏡など、好み通りの道具を持ちて附添ひ出る。錦祥女こなしあつて、

錦祥　騒がしい、方々、鎭まられよ。

ト音樂になり、

聞き馴れぬ和言といひ、卒爾ありては國の恥、鐵砲無益に用ひまいぞ。ナウ〳〵、門外の人々へ物申さん、伍將軍甘輝が妻、錦祥女とは我が事なり。天下悉く韃靼大王に靡き、世に從ふ我夫も、大王の幕下に屬し、此城を預かり、守り嚴しき折も折、夫の留守の女房に、逢はんとは心得ず。さりながら日本とあれば懷しゝ、身の上を語られよ。

〽聞かまほしやといふ内にも、もし我が親か何故尋ね給ふぞと、心許なさ危なさに、懷しさも又先立つて、

コリヤ兵共、麁相すな。

〽むざと鐵砲放すなと、心遣ひぞ道理なる。一官も始めて見る、娘の顏も朧月、涙に曇る聲を上げ、

ト一官思入あつて、

一官　近頃卒忽の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍。母は當座に空しくなり、父は逆鱗蒙り、日本へ身退く。その時は二歳にて、親子名殘りの憂き別れ。辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん、我れこそ父の鄭芝龍。日本肥前の國、平戸の浦に年を經て、今の名は老一官。日本で設けし弟はこの男、まつた是なるは今の母。竊に語り頼みたき事あつて、替り果てし此

の姿、恥をつゝまず來りしぞ。

〽門を開かせたべかしと、しみ〴〵口說く詞の末、思ひ當りて錦祥女、扨は父かと飛び下りて、縋り付きたや顏見たや、心は千々に亂るれど、さすが一城の主人甘輝が妻、下々の見る所と涙押へて、

錦祥　成程、一々覺えあり。

〽さりながら、證據なくては胡亂なり。

自分が父といふ證據あらば、聞かまほし。

〽いふより雜兵口々に、

皆々　證據を出せ。

一官　ハテ親子といふより外に、かはつた證據もなし。

官△　ソレ曲者よ、油斷すな。

ト各々鐵砲を差向ける。

〽鐵砲の筒先、一度にばらりと突懸くるを、和藤內かけ隔て、

ト和藤内きつとなつて、

和藤　ヤア、無用の鐵砲。ポンとも言はさば、撫切りだぞ。

官□　こざかしやつめ、共に逼すな。

皆々　ハア〳〵。

ト大勢は鐵砲を差向ける。

〽火蓋を切らんと取圍み、

皆々　證據々々〳〵。

〽證據々々〳〵と責めかけて、既に危く見えけるが、一官兩手をあげて、

一官　アヽコレ〳〵、證據は其方にある筈。一年唐土を立退く時、成人の後形見にせよと、我が姿を繪に寫し、乳母に預けおきつるが。

〽老の姿は變るとも、面影のこる繪に合せ、

錦祥　ナウその詞が、はや證據。疑晴らし給へ。

へ肌に放さぬ姿繪を、高欄に押開き、柄付の鏡取出し、

トこれにて袱紗に包みし一官の姿繪を取出し、又腰元へこなしあると、誂への臺にかけし鏡を取出す事よろしくありて、

へ月に映らふ父の顔、鏡の面ちか〴〵と、寫し取つて引較べ、引合せてよくよく見れば、繪にとゞめしは古への、顔も艶ある翠の鬢、鏡は今の老寠れ、頭は雪とかはれども、かはらで殘る面影の、

目もと。

へ口許その儘に、我が影にもさも似たり。父方讓りの額の黒子。

親子の證疑ひなし。

トこの内文句のかゝりに、取出せし姿繪と一官の顔を鏡に映し見較べる思入色々あつて、

へ扨は誠の日本とやらに、父上ありとばかりにて、便りを聞かん知邊もなく、東の果と聞くからは、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を開き。

トこの内手箱の内より世界の圖を出し、開き見る事よろしくこなしあつて、

これは唐土、これは日本。

〽父は爰にましますよと、繪圖では近いやうなれど、三千餘里のあなたとや。

この世の對面思ひ絕え、もしや冥土で逢ふこともと。

〽死なぬ先から來世を待ち、歎き暮し泣き明かし、二十年の夜晝は、我が身さへ辛かりし、よう生きてゐて下さつた、父を拜むは有難やと聲も惜しまぬ嬉し泣き、一官は咽返り、樓門に縋り付き、見上ぐれば見下ろして、心餘りて詞なく、盡きぬ涙ぞ哀れなる、武勇に逸る和藤內、母諸共に伏沈めば、心なき兵も、こぼす涙に鐵砲の、

ト各々よろしく思入。トヾ上官下官の唐人殘らず聲をあげて泣く事。

〽火繩も濕るばかりなり。やゝあつて老一官、

一官　我々これへ來る事、聟の甘輝を偏に賴みたき一大事。先づ〳〵御身に語るべし。門を開かせ、城門へ入れてたべ。

錦祥　なら仰せなくとも、是へと申す筈なれども、この國未だ軍半ば。韃靼王の掟にて、假令親類緣

者たりとも、他國の者は城中へ、堅く禁制との掟なり。されどもこれは格別。兵共、如何せん。

〽如何せんとありければ、料簡もなき唐人ども、

官□　イヤ〳〵、思ひ寄らぬ事。ならぬ〳〵。

官○　歸去來々々々、ぴんくわんださつ。

皆々　ぶおん〳〵。

〽又鐵砲を差向ければ、人々案に相違して、呆れ果てゝぞ見えけるが、母進み出で、

母　尤も〳〵、大王より掟とあれば力なし。さりながら年寄つた此母に、何の用心入るべきぞ。あの姫に唯一言、物語りするばかり。妾一人通してたべ。まこと浮世の情ぞや。

〽手を合せても、聞き入れず。

官□　イヤ〳〵女とて宥免せよとの仰せはなし。しかし我々が料簡を以て、城内にある內は、繩をかけて縛り置かん。

官□　繩付にして通せば、韃靼王へ聞えても、主君の言譯我等が身晴れ、急いで繩をかけられよ。
官○　それが厭なら、此方も。
四人　歸去來々々々。
皆々　びんくわんださつ。ぶおん〳〵。
〽と睨めつける。和藤内眼をくわつと怒らし、
和藤　ヤイ毛唐人めら、うぬらが耳は何處について何と聞く。忝くも鄭芝龍一官が女房は身が母、姫のためにも母同然、それに何ぞや、犬猫を飼ふやうに繩付けて通さんとは奇怪千萬、日本人はそんな事聞いては居ぬ、小むづかしい城内へ、入らいでも大事ない。サア、ござれ。
〽引立つれば母振放し、
母　それ〳〵今言ひしを忘れしか、大事を人に頼む身には、幾度かさま〴〵の憂目もあり恥もあり。繩は愚か、足枷手枷かゝりても、願ひさへ叶はゞ、コレ。
〽瓦に黄金を換えるが如し。
小國なれども日本は、男も女も義は捨てず、繩かけ給へ、一官殿。

〽恥ぢしめられて力なく、要心の腰繩を取出し、高手小手に縛り上げ、親子が顏を見合はせて、笑顏をつくる日本の、人の育ちぞ健氣なる。錦祥女も堪えかぬる、難儀の色を押包み、

錦祥　何事も時世にて、國の掟は是非もなし。

ト　この内老一官、腰の下緒を取り母を縛る。この内門を開き、下官兩名出て來る。錦祥女こなしあつて、

母御は自らが、預かる上は氣遣ひなし。何事か存ぜねど、お願ひの一通り、御物語承はり、夫甘輝に言聞かせ、何とぞ叶へまゐらせん。此の城の廻りに掘りたる濠の水上は、自らが化粧殿の庭より落つる遣水の。

〽末は黄河の川水と、流れ入る水筋なり。

夫の甘輝が聞入れて、御願ひ成就せば、白粉溶いて流すべし。

〽川水白く流るゝは、目出たき證と思し召し、

勇んで城へ入り給へ、又願ひ叶はずば、紅を溶いて流すべし、川水あかく流るゝは、叶はぬ左右と思召し、母御を請取りに門外まで、お出であれ。

ヘ善惡二つは白妙と、唐紅の川水に、心をつけて御覽ぜよ。

母　そんなら我夫、悴。

和藤　母人。

一官　必ず吉左右。

和藤一官　相待ち申す。

錦祥　おさらば、

母皆々　さらば。

ヘさらば〳〵と夕月に、門の扉さつと押開き、伴ふ母は生死の境、

トこの内樓の上へ出し侍女、門の内より出て、下官附添ひ、門の内へはひる。

ヘ菩提門に引き替へて、これは浮世の無明門、貫の木ちやうとおろす音、錦祥女は目もたえ〴〵、弱さは唐土女の風、和藤内も一官も、泣かぬが日本武士の風、大手の門の閉開に、石火箭放つ韃靼風、一つに響く石火箭の、音に、

トこの時門内にて本鐵砲の音はげしく、和藤内門の内へこなし。下官各々支へる。和藤内ムウと思入。これにて下官各々ホウ〳〵と、尻へにどうと海老折れになる。これに構はず、一官、和藤内花道

へかゝる。唐樂にてよろしく、

幕

伍將軍甘輝館の場

下の卷

役名 和藤內。伍將軍甘輝。下官大勢。錦祥女。母。唐女。唐子。

竹本連中。

幕引付けると誂への鳴物になり、和藤內─よろしく花道揚幕へ振つてはひる。後唐人囃しのつなぎにて引返す。

本舞臺三間の間奥深に高足の二重四枚飾り、正面大模樣の襖。異形の瓦燈口。上手前へ一間の障子屋體。双方とも誂への蝦夷錦の緞帳。異風なる明り窓。此前に芭蕉、蘇鐵の植込み、取合せよろしく。本屋根、軒に誂への燈籠をかけ、蹴込み通り一面に石の組上げ。雷紋形唐草など好みの書割。欄間びいどろ入り。此道具極彩色、朱塗り、見事に飾り、爰に唐女腰元七人、一人は燗銅壺にて酒の燗をしてゐる。其外の腰元は大廣蓋の上に、ギヤマン酒道具、いろ〳〵の器物を置並べ、酒宴の支度の模樣にて、三絃入り唐樂にて幕あく。と直ぐに上の方、竹本連中の太夫座のあほりを返し、太夫三絃居並び、

へ夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の緣、恩愛の綱結び合ひ、結ぶ餘りの縛り繩、かゝる例は異國にも、稀に咲き出す雪の梅、色香は同じ鶯の、聲にぞ通事入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ持成す有樣は、天上の榮華とも、又高手小手の縛めは、十惡五逆の科人とも、見る目いぶせく痛はしく、樣々に宮仕へ、誠の母と勞はりし、心の内こそ殊勝なれ、腰元の侍女寄り集り、

腰一　サア〳〵、御酒のお燗はもうよい〳〵、出來たぞえ。

腰二　これはまあ南面女殿の忙しない。なんぼ日本人ぢやというて、女子は短氣な事もござんすまい。丁寧にして上げたがよいわいなア。

腰三　さうぢやわいなア。急いては事を仕損じ勝ち、お叱りを受けようより、萬事ゆるりと氣をつけて、とはいふものゝ氣心知れぬ日本人。思へばひよんなお客樣。

腰四　珍味佳肴の品々の、お加減の違はぬ内、上げようではあるまいか。

腰五　それがようござんす。サア〳〵御膳のお支度をしませうわいなア。

腰二　マアそれよりは、酒から先にせにやならぬぞえ。

腰三　こりやお前の指圖の通り、なんぼ日本人でもお腹をこやした其上では、御酒宴にならう筈もなし。

腰一　そこらは我國の機轉をきかせ、燗となう急のですと、私が急いだはどうぢやいなア。

腰五　ほんにこれは南面女殿の機轉は又格別。

腰六　御酒宴ならばそのお肴、私が持つて參りませう。

腰一　それはさうと、あのお客人の日本の女子を見たが、目も鼻も變らぬが、をかしい髪の結びやうといひ、變つた衣裳の縫ひやうぢやわいなア。

腰四　さればいなう、若い女子もあの通りであらう。

腰一　何ぢややら、裾も褄もほら／＼となるであらう。風が吹いたら太股まで見えさうなものであるまいか。

腰三　さればいなア、日本人の着物は夏着には、よい都合でありさうなわいなア。

腰四　それ／＼日本は東の果とあるゆゑ、どうでも日の近い所だけ、寒い事はないと見える。ナア皆さん。

腰五　オヽそれ〳〵、夏は素肌でゐるといなう。

腰七　エヽ又當推量な事ばつかり。

腰一　したが、よう聞かんせや、あのやうな衣裳を着たならば、ほら〳〵と風が通つて、得ならぬ匂ひもするであらう、日本人になりたいなア。

腰五　そりやまあ、如何いふ譯ぢやぞえ。

腰四　恥しい事ぢやなう、わしや日本人の女子に生るゝは、

皆々　いやぢやわいなア。

腰六　さうして南面女殿が日本人になりたいといふは、何ぞ譯のある事かや。

腰一　ハテ、日本は大きく和ぐ大和の國といふげな、何と女子の爲には、よからうではないかいなア。

皆々　エヽ、そりや何を言やるぞいなう。

腰一　でも、こちや兎角好もしう思ふわいなア。

〽目を細めてぞ悦びける、一と間の内より錦祥女、物案じたる屈し顔、ひそ〳〵と立出で給ひ。

ト錦祥女奥より出る。後より子役の唐子二人附添ひ出て、

錦祥　コレ〳〵面白さうに何言ふぞ、一間にござる珍客は、自分とは生さぬ仲の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれども、國の掟に詮方なく。

〽縛りからめるおいとしさ、韃靼王へ洩れ聞え、連合に咎めあらうかと、宥免もなりがたく、

難儀といふは我が身一つ、推量してたもひなう。

腰二　サアあの御老母樣のお身の上、一伍一什を承はり、我が身のやうに思はれて、

皆々　ほんにお笑止な事でござります。

〽笑止な事やと打しをれ、各々詞もなかりけり、錦祥女ひとり戀しく。

錦祥　いやとよ、母樣へ御馳走と申すには、其方よきに賴むぞかし。

腰三　イニモウそれに如在はござりませぬが、何につけても日本は食物も皆違ふ事なれば、どうしてよろしからうやら。

皆々　私どもには分りませぬ。

錦祥　成程、コリヤさうありさうなもの。兎に角お口に合ふ物を、伺うて進ぜてたも。

ヘと宣へば、

腰一　今日の御膳部はお料理に念を入れ、龍眼肉の御飯に、お汁は家鴨の油揚、豚のこくせう、羊の濱燒、牛の蒲鉾、虎の一鹽、樣々にして上げても、

腰四　なう忌々しい、そんなものはいやとばかり御意なされまする。

腰五　何にも外に召上らず、縛られて手も叶はぬ事なれば、つい握飯をしてくれと御意なさるゆゑ、

腰二　その握飯といふ食物は、どのやうな物であらうぞと、南面女殿に問合せましたところ、

腰一　私アつく〴〵考へるに、日本では角力取を結びと申すげな、其故方々尋ねても、折も悪うお歯に合ひさうな角力取が切物でござりまする。

ヘ評議とり〴〵する所へ、表に轟く馬車。

○御歸館。

錦祥　ナニ我夫の御歸館とあれば、この品々を一と先づ取除けてしまや。

皆々　心得ました。

ト銘々臺の物を片附ける。

ヘ歸館なりとさゞめけば、唐櫃先に舁入れさせ、優々たる絹傘に、さすがは猛

き伍將軍、甘輝と名に負ふその物體。

ト謠への唐樂になり、花道より下官笛を吹き、下官兩人太鼓を擔ぎ、これを下官打ち、後より下官銅鑼を携へ、各々唐樂を奏し、歸去來下官兩人唐櫃を擔ぎ、後より幟二本二行に並び、官人四人左右へ警固して、伍將軍甘輝唐冠見事なる裝束軍配を持ち、中通りの官人絹傘を差しかけ出づる。若杏の臺共に持つ下官大勢附添ひ出る。各々舞臺へ來ると、鳴物打上げる。錦祥女こなしあつて、

錦祥　何とて早き御退出、先づ〱。

トこれにて舞臺よき所へ住ふ。下官謠への床几、結構なる煙草盆などを甘輝の前へ持ち行く。皆々下座へはひる。

我夫、御前は何と候ぞや。

甘輝　されば〱、韃靼王叡慮深く過分の御加增、十萬騎の旗頭、散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠裝束賜り、大役を仰付けらるゝ、家の面目これに過ぎず。

へとありければ、錦祥女笑みを含み、

錦祥　それはお手柄、お目出たう存じまする。家の吉事は重なる物、日頃慕しい床しいと申し暮せし

父上、日本にて設け給ひし母兄弟頼みたき事あるとて、門外まで來り給へども、お留守といひ嚴しき國の掟を憚り、男子は皆還し母上ばかりを留置きしが、猶も上の聞えを恐れ、繩を懸けてアレあの、奧の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩懸けて置きましたも、悲しい事でござります。

へ悲しさよとぞ語りけり。

甘輝　ナニ繩懸けしとはよい料簡。上へ聞えて言譯あり。隨分ともに粗略なきやう持成せよ、イザ先づ我も對面せん。案内申せ。

へといふ聲の、洩れ聞えてや褄戸の内。

母　なう錦祥女、甘輝殿がお歸りとや。こゝは餘り高上り、妾はそれへ。

へ立出づる形はいとゞ老木の松の、しめからまれし藤葛、起居苦しきその風情甘輝見る目も痛はしく、

甘輝　誠世の中に子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ。

へその甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし、それ女房お手が痛むか氣をつ

けよ。優曇華の客人、聊か粗略を存ぜず、
何事なりとも此の甘輝が、身に相應の事ならば、必ず心置かるゝな。
へ必ず心置かるゝなと、世に睦じく待遇せば、老母が顔色打解けて。

母　オ、頼母しい、忝い。その詞を聞くからは、何しに心置くべきぞ。頼み入りたき一大事。
さりながら、他聞を憚る事なれば。
ト皆々へこなし。

甘輝　いかさま。ソレ。
ト錦祥女へ思入。

錦祥　腰元共には、暫く次へ。

皆々　ハア、。
ト音樂にて、皆々奥へはひる。甘輝後を見送り思入あつて、

甘輝　サヽ、お心置きなう。

母　イザ、それへ。
へひそかに是へと小聲になり。

トこれより木琴、びんざゝら入りの合方になり、

なう我々此度唐土へ渡りしは、娘床しいばかりでなく、去年の初冬肥前の國松浦といふ所へ、大明の帝の御妹栴檀皇女小船に召されて、御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと等しく、父は素より明朝の陪臣。我が子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を滅し、昔の御代に飜し、姫宮を帝位に即けんと、先づ日本に殘し置き、親子三人。

ヘ此唐土へ來れども、淺ましや草木までも、皆韃靼に從ひ靡き。

大明の味方に志す者一人も候はず、和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし。

ヘ偏に頼みまゐらする、老が頼みも眞實心、額を膝に押下げて、唯一筋の志し、思ひ乞うてぞ見えにける、甘輝大きに驚き。

甘輝　ムウ、扨は聞及ぶ日本の和藤内と申すは、此の錦祥女とは同胞、鄭芝龍一官の子息に候とな。ムウ武勇の程唐土までも隱れなく、頼もしき思ひ立ち、尤も斯くこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下。帝亡び給ひてより、頼むべき主君もなく、韃靼の恩賞蒙り、月日を送る折柄、

望む所の御頼み、少しく存ずる旨あれば・急に返事もなしがたし。とつくりと思案の上、
へお返事を申したきが、と言はせも果てず、

母　ア、そりや御卑怯な、詞が違ふ。これ程の一大事、口より出せば世間ぞや、思案の内に洩れ聞えて不覺を取らば、悔んでも返らぬ。お恨みとは思ふまじ、成る成らざるの御返事を、サア唯今。

へと責めつくれば、

甘輝　ムウ、急に返答聞きたくば、易い事〳〵、いかにも伍將軍甘輝、和藤内が味方なり。
へ言ふより早く、錦祥女が胸許取つて引寄せ、劍引拔き咽吭に差當つる。老母は周章て飛蒐り、二人が中へ割つて入り、持つたる手をば振放し、娘を背に押遣り〳〵、仰向に重なり臥し、大聲揚げて、これ情なし何事ぞ。

ト甘輝劍を拔き、錦祥女を劍にて刺さんとするを、母錦祥女を庇ひ、隔て留めるこなしよろしくあつて、

母　コレ情ない何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習ひか。心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁あるゆゑと心腹が立つての事か。但し狂氣召されたか。

へたまたま初めて来て見たる、母親の目の前で、殺さうとする無法人、日頃より思ひ遣られた。

味方をせずばせぬまでよ。今迄と違うて親のある大事な娘。コレ怖い事はない。母にしつかと取りつきやいなう。

へ隔ての垣と身を捨てゝ、かこち歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難さ。

錦祥　怪我遊ばすな。

へとばかりにて、共に涙に咽びけり、甘輝飛退つて。

ト甘輝剣を取直し、キッと見得よろしくあつて、合方きつぱりとなり、

甘輝　オヽ御不審な尤も。全く某無法にあらず、狂気にも候はず。昨日韃靼王より某を召して、此頃日本より和藤内といふえせ者、少乏下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け、大明の世に覆さんとこの土に渡る。彼が討手誰ならんと、数千人の諸侯の中より、この甘輝を選出され、五騎将軍の官に任じ、十萬騎の大将を賜る。然るに和藤内は我妻の弟なりと夢に

も知らず。彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出で、朝比奈辨慶とやらんが勇力あるとも、我又孔明が腸に分け入り、樊噲項羽が骨髓を打つて、一戰に追つて追ひまくり、和藤内が月代首提げて來らんと、廣言を吐きし某が。

へ一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬく／＼と味方せば、

アレ見よ、伍將軍甘輝、なか／＼日本の武勇に聞怖ぢするものでなし、察する所女に絆され、緣に引かれ腰が拔けて、弓矢の義を忘れしと、韃靼王の雜口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し。

へ恩愛不便の妻を害し、女の緣に引かれざる、義信の二字を額に當て、さつぱりと味方せんため。

ヤイ錦祥女、とゞむる母の詞には慈悲心籠る。殺す夫の劒の先には忠孝籠る。親の慈悲と忠孝に、命を捨てよ、コリヤ女房。

へ理非をかざらぬ勇子の詞。

錦祥　オヽ聞分けた。身に適うた忠孝、親に貰うたこの軀。

へ孝行のため捨てる命は惜しいとも思ひませぬ、母を押しのけツッと寄り。

サア、お手にかけて下さりませ。

甘輝　オヽよい覺悟。

へ胸押明くれば引寄せて、見る目危ふき氷の刃、なう悲しやと駆隔て、押分けんにも詮方なく、退けんとするに手は叶はず、娘の袖に喰付いて、引退くれば夫が寄る、夫の袖を啣へて引けば娘は死なんと又立寄るを、口に啣へて唐猫の塒をかゆる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋りつき。

ト三人よろしく働きあつて、

錦祥　一生親知らず、終に一度も孝行なく、何で恩を送らうぞ。死なせてたべ母上様。

へ口說き歎けばわつと泣き。

母　なう悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥土に親三人、殘る二人の父母は産み落した大恩あり、中に一人のこの母は、憐みかけた恩もなく、

へうたてや継母の名は削つても削られず、今こゝで死なせては。

日本の繼母が、三千里隔てたる唐土の繼子を憎んで見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりか、普く國々に日本人は邪險なりと、國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし、
〽唐を照らす日の影も、日本を照らす日の影も、光りに二つなけれども、日本は日の始め、仁義五常あり、慈悲專ら、神國に生を享けたる此母が。
〽娘殺すを見物し、そも生きてゐられうか。
願はくば此繼が、日本の神々の注連繩になれよかし。
〽我を縛り殺し、
屍は異國に曝すとも、
〽魂は日本に導き給へと聲を上げ、道もあり情もあり、哀れも籠る口說き泣き、錦祥女は縋りつき、母の袂のもろ涙に、甘輝も道理に至極して、そゞろ涙に暮れけるが、やゝあつて席を打ち。
甘輝　ハヽア是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵味方。老母をこれに止め置きては人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して、所を尋ね送り參らせよ。

〽とありければ。

錦祥　いやとよ、この遣水より黄河まで、よき便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎ひにお出ある筈、イデ紅を解いて流し知らせん。

甘輝　其れ屈竟の思ひ立ち、時刻移さず、早く〳〵。又客人には暫時の間も無慙の縄目、嘸かし御手の痛からん、さりながら國の掟の是非もなく、又門外へ出る時は、再び縄目に懸るとも。暫く縄解き寛ぎ得させん。

錦祥　妾は紅をとく〳〵と、イザ門外へお知らせ申さん。

〽いざ紅溶いて流さんと、一間の内へ入りけり。

ト錦祥女思入あつて、上手の緞帳の内へはひる。

〽母は思ひにかきくれて。

母　思ふに違ふ世の中を、立歸りて夫や子に、何と語り聞かせんぞ。

〽思ひやる方涙の色、老母はきつと心を定め。

ヨシ〳〵、この儘歸り何とて面が合はされう。今一度娘に逢うて、オヽさうぢや。

〽駈け入らんと息込むを、甘輝隔てゝ立塞がり、

甘輝　老母、いづれへ行かるゝぞ。マア待たれよ。

〽いたはり止むる伍將軍、智仁兼備の大將と、言はねど知れし形相なり。

ト　これにて正面へ緞帳を振おろし、甘輝母の兩人をかくす。

〽甘輝が詞是非なくも、化粧殿より城外の、二人へ見する叶はぬ知らせ、涙と共に押流す、紅より先の唐錦。

〽錦祥女は瑠璃の鉢、紅溶き入れて携へ出で。

ト　唐樂になり、上手の緞帳を卷上げる。錦祥女銀張の紅鉢を持ち、こなしあつて、

〽これぞ親子が渡らぬ錦中絶ゆる、名殘は今ぞと夕波の、泉水にさら〳〵落せば瀧津瀨の紅葉と、浮世の秋をせき下し、共に染めたるうたかたの、紅くゞる遣水の、落ちて黃河の流れの末、哀れ果敢なき有樣なり。

ト　錦祥女件の瑠璃の器より紅を流すこなしよろしく、これにて舞臺前の波板へよろしく流るゝ仕掛好みの通り。波の音のあしらひよろしくあつて、トヾ文句一杯に屋體へ緞帳をおろす。知らせにつき、本舞臺へ誂への錢の餘金入りし、唐門の幕を振下す。

本舞臺一面に左右切石疊みへ瓦燈口の如く、上へ獅嚙みの鑄物形嚴重たる唐門、彩色せる書起しの道具幕になる。本舞臺眞中へ和藤内、厚綿衣裝繻物の丸ぐけ、荒事のこしらへ。竹笠をかざし松明を振り照らし、吉例の扮裝よろしく、石橋の上へ立身。前なる流れへ紅流るゝ模樣。これを見込みし見得。賑かなる鳴物にてせり上がる。

〽和藤内は岩頭に、簑打被き座を占めて、赤白二つの河水に、心をつけて水の面。

ト和藤内波をちつと見込みし思入あつて、

和藤　南無三、紅が流るゝは、扨は望みは叶はぬよな、味方もせぬ甘輝めに、大事の母人預けておかれぬ。イデ踏込んで。

〽踏出す足の早瀬川、流れを留めて駈け行く折柄。

ト駈出さんとする。文句へかぶせて早笛になり、唐人大勢揚幕より出て、

皆々　ハア〳〵。

ト取卷く。

〽出で逢ふ軍卒かけ隔て、やらじと組付く下官ども。

ト唐人囃子早めて、皆々和藤内をやらじと支へるを、大太鼓入り鳴物にて、大まくしの立廻りよろしくあつて、

〽右と左へ人礫、目覺ましかりける次第なり。

ト和藤内皆々を打ちのけ〱、トど右の鳴物早笛にて、皆々を追ひ、よろしき見得にて、揚幕へはひる。橋をせりおろし、知らせにつき、道具幕切つて落す。

本舞臺、元の唐居舖に戻る、爰に段切にかゝりしなりに、上手に甘輝、以前のこしらへにて住ひ、唐樂にて道具納まる。

〽はや時移る館には、主人の甘輝謹然と座を占めて打守れば、母は漸く顔を上げ、

母　コレ甘輝殿、母が願ひぢや程に聞分けて、味方について下されいなう。

甘輝　イヤ何程お願ひあらうとも叶はぬ事ぢや。聞く耳はござらぬ。

母　スリヤ、どのやうに願うても。

甘輝　アヽくどい事ぢや。

母　ハア、。

ヘ鋭き詞に言ひ放され、思案途方に暮れゐたる。折もこそあれ俄かに城内騒しく、荒に荒れ來る和藤內、堀を飛び越し塀を乗り越え、籬透垣踏み破り、甘輝が城の奥の庭、見ぬ唐土の阿房宮。珊瑚のゆき桁馬瑙の梁、錦の帳瑠璃の柱、金銀珠玉を鏤めて、あたり閃めく有樣に、しばし呆るゝばかりなり。

ト早笛になり。花道より和藤內、以前のこしらへ股掛けにて走り出て來る。これを以前の唐人下官の內四人程ちよつと支へるを蹴り退け、立廻つて皆々を投退けキツとなり、

ヘ母の縛め繩引きちぎり、甘輝が前に立ちはだかり。

ト和藤內走り寄つて母の縛めの繩引ちぎり、甘輝へキツと詰め寄りて、

和藤　伍將軍甘輝といふ髭唐人は和主よな。天にも地にもたつた一人の母に繩懸け、己れを己れと奉つて、味方に頼まん爲なるに、いゝゝゝもつてうすれば方圖もない、味方には此大將が不足なか。第一女房の緣といひ、其方から從ふ筈。サ、日本無双の和藤內が、直に返答聞かう、いかに〳〵。

ヘ柄に手をかけ突立つたり。

ト和藤內見事の見得、

甘輝　ヘヽハヽア。オヽ女房の緣といへば縮ならぬ。御邊が日本無双なれば、我は唐土稀代の甘輝。

ト誂への鳴物になり、

女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る所もなし。病死するまでべん〳〵と待たれまい。追風次第早や歸れ。但し置土産に首が置いて行きたいか。

〽空嘯いて吹く煙。

和藤　イヤサ、日本の土産に汝が首を持つて行く。

甘輝　イヤ、其方が首おいて行け。

和藤　何を小癪な。

〽兩方拔かんとする所、一間の内より錦祥女聲をかけ、

トこの前に綴帳巻上げ、錦祥女窺ひゐて、

錦祥　なう〳〵早まり給ふな。病死を待つまでもなし。唯今流せし紅の水上を見給へや。

トいひながら、ツカ〳〵と眞中に出て、

〽衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐劍、乳の下より肝先まで、横に縫うて刺通し、朱に染みたるその有樣。

ト錦祥女兩肌脫ぐと、自害せし體にて、血に染り苦しき思入。

〽母はこれはとばかりにて、かつぱと伏して正體なく、和藤内も動顚し、覺悟を極めし夫さへ、そゞろに驚くばかりなり。錦祥女は苦しげに顏をあげ。

これにござる母上は、日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜しみ、親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と、かくなる上は女に惹かさるゝ、

〽人の誹りはよもあるまじ。

ナウ甘輝殿。親兄弟の味方して、力ともなつてたべ。父にもかくと告げてたべ。もう物言はせて下さるな。

〽苦しいわいのとばかりにて、消え〳〵にこそなりにけり、甘輝涙を押しかくし。

甘輝　オヽ出來した〳〵。自害を無にはさせまいため、此場に於て甘輝が誓言。

〽和藤内が前に頭を下げ、

某先祖は明朝の臣下、進んで味方申すべき身の、女の緣に迷ひしと、俗難を憚りしに、我が妻

唯今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方、大將軍と仰ぎ、諸侯になぞらへ御名を改め、延平王國性爺鄭成功。

ヘと號すべし。裝束召させ奉らん。

者共、用意。

トこの時與にて、

皆々 ハ、ア。

ヘ武運開くる唐櫃の、二重の錦、羅綾の袂、緋の裝束、昆龍朱雀彩糸に、黄金綾どり、燕紫の纈纈紅、恥づる錦繡つ、花に薫りも深見草。

トこの内唐人皆々、旗、差物、鐵砲、弓、矢、鉾をめい／＼持ち出て後に並ぶ、この内唐人の内皆々謡への裝束を持ち出て、和藤内裝束の着る。甘輝もこゝにて裝束を改める事、好みの通りあるべし。

前の文句につゞき、

ヘ章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き。

ト兩人裝束着けよろしく、この内に舞臺上下へ謡への椅子へ虎の皮を掛けしを持ち出て、よき所へ直す。すべて謡への通り飾りつけ、謡への飾りつきし絹傘を二蓋持ち出でて、よろしく警衛する事あつ

て、和藤内甘輝兩人冠裝束誂への通り着し終る。

ヘ絹傘さつと差しかくれば、十萬餘騎の軍兵とも、幢の旗旛の旗、吹拔楯鉾弓鐵砲、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の、再び出でたる如くなり、母は大聲高笑ひ。

ト母うれしきこなしあつて、

母　ア、嬉しや本望や、あれを見や錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此劍は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害、この上母が存らへては、始めの詞虚言なり、再び日本の國の恥を引起す。

ヘ娘の劍をおつ取つて、咽へがばと突立つる、人々これはと立騷げば。

ト母錦祥女が貫きし懐劍を取上げ自害する、皆々思入。

ア、寄るまい〱。ナウ甘輝、國性爺、母や娘の最期をも、必ず歎くな悲しむな。韃靼王は面〱々の母の敵妻の敵と、思へば討つに力あり、氣をたるませぬ母の慈悲、この遺言を忘るゝな、父一官が在すれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫めをなし、父は存らへ教訓せば、世に不足なき大將軍、浮世の思ひ出、早これまで。

〽肝のたばねを一抉り切りさばき、あへなき息も絶え〳〵に、
サア錦祥女、この世に心殘らぬか。

錦祥　何の未練が殘りませう。

〽言へども殘る夫婦の名殘、親子手に取り引寄せて、國性爺が扮裝を、見上げ見おろし嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。

ト母、錦祥女兩人よろしく、思入あつて落入る。

〽鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む伍將軍、涙に眼は眩めども、母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國性爺は甘輝を恥ぢ、甘輝は又國性爺に、愧ぢて萎るゝ顔かくす、義勇劣らぬ英傑の、涙を含む鐵石心、泣くに優りし思ひなり。

ト甘輝和藤内この內愁ひの浮みし顔をそむけ、思入あつて、思はず落涙しかけ、ヂッと怺へし思入。

大オトシよろしくあつて、

〽甘輝心を取直し、

甘輝　心合する上からは、

和藤　國家へ盡す、

兩人　忠義の首途、

和藤　御身が軍慮は、如何に〳〵。

甘輝　ホヽウ我が出陣の手始めに、

　　ト軍配を取り思入あつて、

〽黄河の境に陣をしき、右龍左龍虎先鋒とし、六千餘騎の隊伍を分ち、魚鱗鶴翼龍蛇の備へ、千變萬化と攻付けて、雲門關を乘取らば、

　　ト物語よろしくあつて、

〽是にて鄭成勇み立ち、味方の勝利幸先よし。

和藤　ムヽ、ムヽ、ヘヽ、ヽ、ヽ、面白し潔し。

〽我はもと日の本の、頭を照す旭影、旗差物も翩翻と靡かば、敵にも手段やあらん。

〽孫呉が奇計の虛々實々、赤洞城を一騎駈け、粉灰微塵と踏破り、勝鬨あげんな目のあたり。

アラ心地よや、嬉しやなア。

へと勇み立つ。

ト和藤内キツと見得。甘輝こなしあつて。

甘輝　生死二つを一道に、

和藤　母の遺言釋迦の經、

甘輝　此虚に乘つて韃靼王の、

和藤　髭首引拔き。イデ物見せん。

甘輝　ハア〳〵潔し〳〵。

へ玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず、かゝる勇者の出生す、國々たり君々たり。

日本の麒麟これならん。

へ異國に武德を照しけり。

ト和藤内上に、甘輝下にて立身。これへ絹傘を差しかけ、皆々引張りの見得よく、唐樂をあしらひ、

幕

後シャギリ

國性爺合戰（終り）

御所櫻堀川夜討

御所櫻堀川夜討（辨慶上使、堀川夜討――一幕）

第一、三段目の切　　侍從太郎邸の場

役名　侍從太郎、武藏坊辨慶、卿の君、侍從太郎の妻花の井、お物縫おわさ、娘信夫、腰元。

本舞臺三間の間、向う銀張り襖、常足の二重。上手九尺塗骨の障子屋體。日覆より櫻の釣枝。下手一間の綠張りの杉戸。此脇に柴垣。こゝに腰元吉野外三人居並び、色々の進物を調べゐる見得。すべて侍從太郎邸の體。琴唄にて幕あく。

〽天ざかる鄙にはあらぬ卿の君、雲井を出でゝいつしかに、御乳人侍從太郎が館にて、さゞめき渡る賑しさ

腰一　なんと皆さん、卿の君樣も雲井をお出で遊ばして、義經公の北の方。お目出たい御懐妊お腹帶。

腰二　そのお祝とて諸侯からの捧げ物。なんと見事ぢやござんせぬか。
腰三　ほんに御祝儀の人々で、御門前は市をなす様子。色々の贈り物。
吉野　このお目出たのお祝ひに、こちらも此處で天井抜け、なんぞ面白い事をして、お姫様のお慰みに御覧に入れようではあるまいか。
腰一　イエ〱、姫君様のお腹帯も濟んだれば、おしつらひの出ぬやうにと、御平産までは此お舘にて御介抱。
腰二　それに何ぞや、お慰みにでもなる事なればよけれども、私らが慰んで、ひよつとお血でも上つたら、何としやるぞいなう。
吉野　そんなら大きな聲もならぬかいなア。私や又お目出たゆゑ、何事もお許しが出ようと思うたわいなア。
腰三　エヽモ、ひよこすかと何を言やるぞいなう、こなさんぢやら〱と、言はしやんすにも困るわいなア。
吉野　イエ〱、ぢやら〱ぢやござんせぬ。かうしたお目出たがあればこそ、御門の人出入りの賑かな事、それぢやによつて都々逸とつちりとん、端唄の一つ位よいぢやござんせぬか。

腰一　エヽまた、そんな事言やつたら、お上からお目玉が出ようわいなア。

腰二　オヽ怖や〳〵。お叱りの出ぬ内に、取散してある物を片附けてしまはうではござんせぬか。

皆々　それがようござんせう。

〽取片附ける折柄に、お次の間より奥使の女中立出で。

ト此時下手より、奥使の女中出て來り、

女中　皆さん、唯今お次へ信夫殿の母御、おわさ殿が御機嫌伺ひに見えられましてござります。

吉野　ナニおわさ殿がござつたとは、それは幸ひ、お姫様にもお待兼ね。

腰一　早うこれへ、呼ばしやんしてはどうでござんす。

腰二　それがようござんせう。

吉野　そんなら私が、呼びませう。（ト花道の揚幕へこなしあつて）お次に控へし、お物縫のおわさ殿、御前へ早う。

皆々　お上りなされませいなア。

ト此時揚幕の内にて、

わさ　畏りました。唯今それへ上りまするでござりまする。

〽ハット答へて表の方、おわさと言うてお物縫、悧潑らしうてしやんとして、怪我にも憎氣のない風情。

トこの淨瑠璃にておわさ、世話女房のこしらへにて小風呂敷を提げ出て、直に舞臺へ來り、

これは〳〵、どなた様にもお揃ひで、御機嫌よろしう。

腰一　ほんにお前は、信夫殿の母御さん。

吉野　お物縫のおわさ殿。

皆々　ようござんしたなア。

わさ　イヤモ、大きに御無沙汰致しました、お上様にも御機嫌よろしう。ちよつと御機嫌伺ひに上りませう〳〵と存じましても、何や彼やに取紛れまして、やうやくのことで上りましてござりまする。

腰三　そりやまあ、ようござんした。信夫殿も今奥でござんす、ちやつとこの事を奥様へ。

吉野　アイ〳〵。合點でござんす。奥様へ申上げます。お物縫のおわさ殿が、見えられましてござりまする。

花の　ナニ。おわさが見えしとナ、ドレ、それへ行て逢ひませうわいなア。

〽侍從太郎が妻の花の井、卿の君、しづ〳〵と立出でたまひ。

ト花の井、裲襠衣裳にて出る、上手の障子をあけると、こゝに卿の君廣振袖姫のこしらへ、脇息にもたれ褥に座し、傍に蒔繪の煙草盆、紙置臺を並べてある。

花の　オヽようぞ〳〵上られしよな。今日は殊なうお淋しさうゆゑ、誰をがな御伽と思ひし折に、嬉しう思ひます。

わさ　これはまあ奥樣の有難いお詞で、痛み入りましてござりまする。

花の　イヤモウ、挨拶は後でのこと、サア〳〵御前へお目見得しやいなう。

〽と取りなせば、卿の君は面映ゆげに。

卿の　ナウ珍しや、此程は何として見えざるぞ、定めて四方の花見には、あなたこなたと嘸面白き事ばかり、羨しい事ぢやなう。

〽と宣へば、傍から吉野は差出で。

吉野　ほんに、こりや面白からう、サア〳〵四方山の話をば、早う聞かして下さんせ。

花の　エヽ、又しても姫君樣の御前、差出てばつかり、控へてゐやいなう。

吉野　ハア。

花の　サア〳〵、姫君樣の御意に叶ふやう、少しも早う。

〽と勸められ、頓智のおわさは進み出で。

ト謠への合方になり、

わさ　さらば、お話致しませう。イヤモウ、御意の通りでござりまする。吉野の山の花盛り、嵐山から稻荷山、わけて今年は清水の花盛り。いつ〳〵よりも見事な事と世上の噂、ほんに〳〵針のみゝずで聞くばかり、あなたからは早う來い、こなたからは疾う來いと、參る〳〵もお仕立物やら絹糸の。

〽色々ついで縫ふ程に、お武家方より陣羽織。

こちらからはお姫樣のお下着のと、ほんにそれに引替へて。

〽座頭の坊には腰袴。

仕立物にて夜が晝やら分らずに、皆奥樣方の晴小袖。

〽色香こぼるゝ色達の、花見遊山の羨し。

口は廻れど手は廻らず。唯私がいら〳〵と。

〽短か羽織を脱ぎ捨てゝ。

直紅の糸の縫ひほどき。

〽針目を通すはり山に、丈長尺の親子連。

成程譬にも言ふ通り、京に田舎の破れ世帯。いつそ氣樂に捨事も。

〽やがて目出たう睦じう、仕立てゝお目に止れかし。

それは〳〵賑かな春でござりますげな、これと申しまするも、義經樣が京にお出で遊ばす故ちやと申すを聞けば、弓も引きかた判官贔屓、嬉しいやらお目出たいやらのお悦びに上りたいと、今日よあすよと思ふ内、娘の方から帯のお祝ひも濟んだに、何故お悦びには上らぬと、知らしておこしました故、文も碌に見るや見ず、何が捨置きまして取敢へずお悦び、何んぞ上げたいと思ひましたれど、結構な物はあなた方には有り餘る程なれば、せめてものお土産、お恥しうござります。どなたぞお盆をお貸しなされて下さりませ。

〽と手かしこく、小風呂敷より取出し、盆に捧げて差出す。

これは海馬と申して、文字には海の馬とやら書くげにござります。イヤモウ希代なお產の御呪ひ。私の祖母が十九人、母が劣つて十三人、母から私が手に傳へ、あの信夫を產みます迄に。唯の一度不覺な產をせず、滿足に產み並べた腹覺えのある捧げ物、追付け御產の月滿ちて、やす／＼と御平產。

吉野　オギヤア／＼／＼。

わさ　この海馬にひらりと打乘り。

吉野　ハイヒンドウ／＼。

わさ　大手の御門を、

吉野　サツと開き、

わさ　やす／＼と御誕生。檢非違使五位の尉、源の義經樣の若君とは我なりと、出立ち給へば、

吉野　下にゐろ／＼。

わさ　御丈夫な事は申すに及ばず、御位は益々上り、御家は長久萬々歲。ヘ、、、、ホ、、、、、お目出たう存じまする。ほんにつべこべと長口上、息がはずむやうな。どなたぞお茶一つ。

〽口も八町手際よく、綻び口もなかりけり、皆々をかしき御機嫌にて。

卿の　ほんに氣輕な、わさ〳〵と物言やる。おわさとは、よう附きやつたなう。

ヘ袖打拂ふ折からに、當番の侍走り出で。

ト花道より侍走り出て、花道に控へ、

侍　申上げまする。鎌倉よりのお使者として、武藏坊辨慶樣。唯今これへ。

花の　ナニ、武藏殿が見えられたとナ。

腰二　サア〳〵、女嫌ひの武藏殿がござるといなう。

腰一　ほんに、濡れかけて厭がらさうではあるまいか。

腰三　それがようござんす、何も姫君樣へのお慰み。

女中　これはよい思召し、兎角お氣が晴れいではなう。

吉野　そこは拔からぬ、まづ一番に私から、持遊びにしてやりませう。

花の　アヽコレ〳〵、如何致したものぢや。我君よりのお使者なれば、いつもとは違ふぞや。

皆々　畏りました。

花の　コレおわさ殿、辨慶といふ人御覽じたか。まだならそこにゐて見やしやんせ。

わさ　ハイ、まだでございます。左樣ならば私も、お次へ參つて辨慶殿に、お近付きになりませう。

皆さん後程お目に懸りませう。
〽と次の間へ、いそ〳〵おわさは立ち、
どなたもお暄しう。
〽入りにける。
ト これにて、おわさ下手の杉戸の内へはひる。
花の　コレ〳〵皆の衆、君よりのお使者なれば、必らず粗相を致すまいぞ。
皆々　畏りました。
〽待つ間程なく入來るは武藏坊辨慶、いつに勝れて、へりぬり取つて打ちかづき、大紋の袴踏みしだき、上座へ通り。
ト 大小入りの鳴物になり、花道より辨慶烏帽子大紋大小にて出で、花道に留り、
花の　これは〳〵武藏樣には、御役目御苦勞。まづ〳〵これへお通り下さりませう。
辨慶　然らば御免下され。
〽目禮式禮上座に直り。

花の　見ますれば、館の主人侍從太郎殿には、如何召された。夫侍從太郎は病中ゆゑ、妻の花の井お出迎ひ仕りまする。

辨慶　ナニ、侍從殿には御病氣とナ。ハテ、氣の毒千萬な。

吉野　これは〳〵、ようお出なされました。サアお煙草を召上りませ。

ト吉野煙草盆を持ち行く。皆々又無理に茶を吉野に持たせ突き遣る。吉野こなしあつて茶を持ち行く。

お茶一つお上りなされませ。御用の筋は何なりとも蒙りまして、女子一通りの御用なれば、何事によらず心得てをりまする。

ト吉野辨慶の側へ寄添ふ。

辨慶　ヤア、べり〳〵と何を申す。辨慶女は嫌ひでござる、とつと、こゝを立たつしやれ。

吉野　それでも、お使者樣へのお持成を。

花の　これはしたり、如何致した事ぢや。お使者へ對し、粗相があつては濟まぬぞや。

吉野　ハア。

花の　そなた衆には用事はない。暫く次へ立ちやいなう。

皆々　畏りました。

〽皆打連れて、お次の間へぞ入りにけり。

ト腰元下手へはひる。

辨慶　オ、存じたとは違うて、御顏色もみづ〳〵と御機嫌の體、先づは安堵。これと申すも御夫婦衆の御介抱、大切になさるゝ御苦勞の甲斐が見え、祝着に存ずる。

花の　これは〳〵有難いそのお詞、御平産あるまでは、此所へ預り申す卿の君樣、殊に御存じの如く御母君には、御平産祈りのため、伊勢參宮のお留守中、お附添ひ申す心遣ひ、御推量下され、御前よろしくお執成を。

辨慶　イヤ〳〵執成に及ばぬ。物事とりなすといふは、八合な事を十分に言ふが執成、辨慶はそれ嫌ひ、見た通りを罷り歸り眞直に申さば君にも嘸かし御滿足、これは御夫婦の衆へ話すではない。後學のため卿の君へのお物語り、總じて勇士の戰場へ赴く時は、三忘と申して、忘るゝ事三つあり、國を出づる時家を忘れ、境を過ぐる時妻子を忘れ、敵の陣へ臨んで我身を忘るゝ。婦人の懷胎も先づその如く、一氣腹に宿る時は、取りも直さず勇士の國を出づる時、御腹帶をなさるゝ所が勇士の妻子を忘るゝ所。既に月滿ち、すは御產の紐を解かるゝは、勇士の敵陣へ驅入つ

て首を取るか取らるゝか、よい子を產むか得產まぬか、生きるか死ぬるか生死の境。こゝをよう御合點なされや。豫て無き身と思召さば、その期に及んで不覺は取るまじ。左樣ではござらぬか。

花の　仰せの通り、女の身には一生の大事、卿の君樣にもよう御合點でござりまする。

辨慶　ム、、こりやさうでござらう、しかし打物持つた武士だに戰場に臨む時は、兎角遲れの出るものでござる。

花の　そりや常の女子の事、姫君樣には源氏の御胤。

辨慶　實に尤も。まだ申し談ずる御內意ござれど、此處は端近。

花の　御內意とあるからは、委細は奧の一間にて。

辨慶　樣子聞かねば。すは出產の後に及ばゞ、豫てなき身と知りながら、

花の　エ。

辨慶　必ず未練が出るものではござらぬか。

花の　成程、夫持つ身の豫てのたしなみ。

辨慶　兎斯う言ふ間に正午の刻。

花の　何かは奥で、

辨慶　つぶさに語らん。

花の　イザ、御使者には。

辨慶　然らば奥方。

花の　サ、、御案内致しませう。

へ妻が案内に武藏坊、打連れてこそ入りにけり。

ト双方立上り、奥へこなし。よき程に管絃を冠せ、知らせにて、此の道具ぶんまはす。

本舞臺一面通し常足の二重。花の丸欄間。見附御簾襖通し。上手給心に九尺塗骨障子。下手一間落間。杉戸出這入りあり。調べにて道具納まる。とこゝに以前の腰元居並ぶ。

腰一　コレ皆さん。何事かは知らねども、御内談とあるからは、定めしお暇が入らうも知れまい。

腰二　それ〳〵、お杯でも出さずばなるまい、お肴の手當があるかいの。

吉野　御酒の御趣向なれば、差詰御獻立は私の役、いづれへ申付けませう。此の近邊の事なれば、八百善か、大七、馬道の富士屋はどうでござります。甘口でようござりませう。

女中　イエ〳〵、まあそれよりは煮花の用意が肝腎ぢやござんせぬか。

腰三　そんなら私やお煮花の支度にかゝりませう。

吉野　私やどうでも御酒の方に、止めを刺すわいなア。

女中　何ぞといふと吉野殿は酒々と、お前の酒にも後引で困るわいなア。

吉野　イエ〳〵何故と言はしやんせ、酒は勤めの憂晴らし、なんと浮世の玉箒とは、よう言うたではござんせぬか。

腰二　エヽモ、この忙しいのに、洒落どころではござんせぬ。

腰三　サア〳〵早う支度をせねば、又叱られうぞえ。

腰一　オヽ怖いこと〳〵、サア皆さん、奥へ行てお料理の支度にかゝらうではあるまいか。

吉野　それがようござんす。サア皆さん、ござんせいなア。

〽皆打連れて立つて行く、一間の襖押明けて、立出づる腰元信夫。

信夫　今様子を聞いたれば、母さんが来てぢやげな、どうぞ逢ひたいもの。

〽娘は母を戀ひ慕ふ。母は娘を尋ねんと、ひそ〳〵出でゝ見合はす顔。

わさ　ヤア、そなたは娘ぢやないかいの。

信夫　ほんにお前は母さん、よう尋ねて來て下さんした、此頃はついにお顏も見ず、お懷しうござりました。

わさ　オ、そなたも息災でようゐやつたなう、明暮側に引寄せて、見れども飽かぬ一人子を、手放して置く親心、親懷しいと思ふより、

〽百千倍とは知らぬかや。

假令御前の御意に入るとも、必ず〳〵傍輩衆を袖にすな。陰口を嗜んで、諸事を內端に控へ口に、出かし立てして猜まるゝな。

〽林の中でも高い木は、風が枝をば折るぞとよ。

一人寐覺の度毎に、逢はゞどう言はうと斯う言はうと、溜めて置いた數々も、逢へば嬉しうて〳〵、口へは出ませぬわいなう。何を言ふも彼を言ふも、身を大事に煩うてばしたもんなや。

〽手を取りかはし撫でまはし、心を盡くす親と子の、わりなき風情ぞ道理なる、やゝあつて侍從太郎、奧より出る屈托顏。おわさ目早く。

トこの間奥より侍從太郎、裏付袴大小にて出て來り、互ひに見合はし、

これは〳〵侍從樣。お顏の色も惡く、お眼の内も潤んで、お氣の浮かぬ御容體、御内談と申すは何ぞお氣遣ひな。

太郎　イヤ〳〵氣遣ひのきの字もござらぬ、又氣の浮かぬ事は微塵もござらぬ、心が浮き〳〵、杯を待兼るやうでござる。イヤ信夫、其方はこれへ參つて、いつものやうに肩を揉んでくりやれ、おわさは暫く次へ參つて、休息しやれ。

わさ　アノ　左樣なら私は。

太郎　ハテさて、參れと申すに。

わさ　ハイ。

〽と立兼ねる、胸の思ひを押かくし、一間の内へ入りにける。

トおわさ是非なきこなしあつて、下手杉戸の内へはひる。

太郎　ナント信夫、身は此處にてとろ〳〵と睡眠が催したいが、これへ參つて身が肩を揉んでくりやれ。

信夫　畏りました。

ト胡弓入りの合方になり、信夫思入あつて、侍從太郎の肩を揉みにかゝる。

太郎　モシ旦那樣、きつうお肩が張りましたなア。

太郎　オヽ、さうもあらうかえ。姫君お越しあつてより、色々の心遣ひで、肩も腰も張らうわえ、もそつと强う揉んでくりやれ。

信夫　ハイ〳〵、かうでござりますかえ、（ト强く揉む）

太郎　オヽさうぢや〳〵、寬いでよい心持ぢや。時に信夫、なんと身が申す事を、何事によらず聞いてはくれまいか。

信夫　これは又、何を御意遊ばすかと存じましたれば、改まつた事をおつしやります。このお館に御奉公致しまして、御恩になる旦那樣の事、身に叶ひました事にござりますれば。

太郎　聞いてくれうと申すか。

信夫　左樣にござりまする。

太郎　それは重疊、それで身も落着いた。なんと信夫、そもじに惚れた。

信夫　エ。

太郎　女房になつてはくれまいか。

信夫　エヽ。

ト信夫びつくり飛退き思入。

何事を御意遊ばすと存じましたれば、まあ御座興も事によりまする。

太郎　イヤ惡い合點、座興ではない、大眞實。

信夫　イエ〳〵、そのやうな事を御意遊ばして、奥様へ聞えましては。

太郎　イヤ〳〵大事ない〳〵。應とさへ申せば、花の井は離別致して、今からそもじを女房ぢや、奥様ぢやが、どうぢや〳〵。

ト手を取りこなしある。

信夫　アヽ勿體ない事御意遊ばせ。日頃よりそのやうな事おつしやつた事もないに、猥らな事は御免なされて下さりませ。

太郎　ハテさて、これ程にまで思うてゐる侍從太郎、應とさへ申せば、幸ひおわさも參つてをれば、申聞かせて直ぐに婚禮、サア、ちやつと返事をしやいなう。

信夫　それぢやと申して、御無理な事を。

太郎　然らば身共が、申す事は。

信夫　ぢやと申しまして、どうしてまあ。
太郎　聞入れぬか。
信夫　それぢやと申して。
太郎　厭か。
信夫　サアそれは。
太郎　應か。
兩人　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
太郎　夫信、返事をしやいなう。
　　ト信夫當惑の思入。此時おわさ茶を汲み持ち出でゝ、ツカ〳〵と、
わさ　旦那樣、お茶を上りませ。
　　と太郎これにてびつくりせしこなしあつて。
太郎　エヽ、びつくり致した、おわさであつたか、イヤ〳〵、是へ參つたこそ幸ひ、なんと物は相談ぢやが、そもじの娘を手前は大執心、なんとくれまいか。

わさ　これは〳〵、旦那樣とした事が、何をぢやら〳〵と御意遊ばしまする。

太郎　アヽコレ〳〵、そのやうにさまして貰ふまい。是非〳〵今日八つ迄の內に貰はねば、此方の工面がぐわらりと違ふ、今奥の時計を見たが、九つ過、半にはまだならぬが、なんぼ春の日でも、八つになるは手間暇入らず。サア應というて貰ひたい。時忠の執權侍從太郎、年に不足もない男、浮氣でない、虛言も申さぬ。サア下さるか下さらぬか、サア〳〵どうぢや。

〽眞面目になれば、けら〳〵と嘲り笑ひ。

わさ　ホヽヽヽ。ほんに有難いと申しませうか、お忝い申さうか、大山の斧のこけら屑、誰も取上げる人もなく、徒らに埋もれる私の娘を進ぜましたら、何となされます。

太郎　ハテ知れた事、女房にしますわいの。

わさ　アノ花の井といふ、美しい奥樣のある上へ。

太郎　イヤ〳〵花の井には暇やつて、信夫を奥樣にするわい。侍冥加、愛宕白山かけて、僞りないといふ證據を見せう。

〽と後に立聞く花の井が、嚇とせき上げ走り出で、顏は上氣の爪紅に、赧らむ胸を押抱き。

トこの以前より上の障子より、花の井出て是を聞きをり、此時ツカ〳〵と出て、

花の　もうし、花の井には暇やるとは何の越度で暇下さるゝ、それには樣子がござんせう、サアその儀をば承はりませう。

〽問詰められて侍從は居直り、

太郎　ハテ知れた事。昔より今に至るまで、夫が女房に暇やるに、何の遠慮仔細なけれど、厭きたればこそ暇を遣はすわ。

花の　そりやもう殿御の効驗ぢやもの、離別さるゝは無い事ぢやござんせぬが、みす〳〵後へあの信夫を。

太郎　ヤアしやらくさい、おのれが何知つて、今日よりはさつぱりと古床仕替へて、新の春に畳替えぢや、さば〳〵と致すわえ。

花の　エ、そりや聞えませぬ、お胴慾でござりまする。なんぼ自分が行屆かいでも、人もあらうにあの信夫を奥樣とは、これ見よがしのなされ方、こりやどうでも貴方は、御本心ではござりませぬな。

太郎　オ、本心だ、ぐつと本心だ、當時執權職を相勤める侍從太郎虚言があつて濟まうと思ふか。

花の　エヽ、そんなら、アノ何事も。

太郎　ハテ知れた事、よう物を思うても見やれ、十年十五年添うた古臭い女房と、今新しく持つ女房同じぢやと思ふか、衣服さへ着替へれば、ソレ身の内がさつぱりと致すではないか。白痴者め。

へ空うそぶいて落着きし顔、花の井はせきのぼせ、

花の　エヽ、そりやまあ實の事でござんすかいなア。唯一通りで去られては親里へ濟みませぬ、サア私も武士の娘、品によつたら其儘には、捨置きませぬぞ。

太郎　ヤア小癪な一言、女賢うして牛賣り損ふとはおのれの事、何を知つてその譫言。とつとゝ此處を出てうせう。

花の　そのやうに言はしやんすりや、出て行きますぞえ。サア暇取つたぞえ。そんなら見事、あの、信夫を。

太郎　オヽ、持つて見せる。あすとも言はず、たつた今。

花の　アノ奥様に。

太郎　ハテ侍冥加、二言はないわサ。

花の　そんなら眞實、こなさんが。

太郎　くどい、尋ねるに及ばぬ事。

花の　どのやうに申しても、あの信夫を。

太郎　おんでもない事。

〽負けず劣らず爭へば、見兼ねておわさは押隔て、

わさ　マア〳〵お待ち遊ばしませ、太郎様には呆れて、いつそ手が付けられませぬ、マア〳〵奥様、お慮外ながら假令如何やうにおつしやればとて、あなた様を御離縁させて、そんならさうと、娘を進ぜさうなおわさぢやと思召しまするか。女御后になるとても、道ならぬ榮華を悦びますやうな私ではござりませぬ、お氣遣ひなされずとも、早うお仲をお直しなされませ。

太郎　とんと氣違ひの沙汰で、ござりますわいなア。

　　スリヤ、氣違ひのやうに見ゆると申すか。

わさ　イヤモウ見ゆる段ではござりませぬ、ほんまの氣違ひでござりますわいな。

〽ハット夫婦が顔身合せ、暫し詞もなかりしが、やゝあつて花の井。

花の　オヽ氣違ひ狂氣と見ゆる筈。心はとうから、コレ、氣違ひになつてゐるわいの、サヽその譯はなう、此度鎌倉より梶原平三を使者として、義經公は叛逆人、時忠の娘卿の君を妻と定めゐる

からは、謀叛一味に、サ、相違なし。左なくば妻の首を唯今討つて渡せと、鎌倉殿の御難題。御幼少から育て上げたる姫君様、そもやお首が斬られうぞ、どこへ刃が當てられう、殊に御懐胎の御身なれば、辨慶殿も斬り兼ねて、とつおひつ思案の上、お身替りを立參れ、オ、それぞよろしき御分別、そのお身替りは誰彼と思案の內、オ、それよ、年の頃顔貌相應したあの信夫、執心なといひかけて、無理に女房にお貰ひなされ。そこで私が悋氣する。エ、マア、憎い奴ぢやと私に暇を出し、サア信夫今から女房ぢやと、我が女房となるからは、其方が爲にもお主の身代り、死んで呉れよと退引きさせず、命をお貰ひなされぬかと、不調法な談合も、御主の命が助けたさ、これ思ひ遣つて給ひなう。

〽かつぱと伏して泣きければ、夫も坐したる膝を改め。

太郎　浮世の中の無心といふに、これに上越す無心はあるまい、その代りには夫婦の者を、八裂きになされてもちつとも惜しまぬ、惜しみはせぬ、命二つあるなれど、一つも今のお役に立たぬ本意なさ無念さ悲しさを、推量してたべ、おわさ殿。

〽はら〳〵と泣きければ、聞くより信夫進み出で。

信夫　扨も〳〵、神ならぬ身の情なや。さういふ事とは夢にも知らず、年に似合はぬ恥知らずと思ひ

侮り、十年二十年の宮仕へも、たつた一日御奉公申しても、お主樣に違ひはない、その御恩儀がなんと聞いてゐられうか、私のやうな者の首でも、お役にさへ立つ事なら、願うてもお身代りに立ちたい。サア首切つて御用に立てゝ下さりませ、モウシ母さん、四年後の大煩ひ、お前の精力たつた一つで助かつたれど、その時死んだと諦て下さんせ。私や御身代りに死にまする。

〽聞きもあへず飛びかゝり、抱き締め〳〵、

わさ　コレ、つか〳〵と物言やんないの、默つてゐようぞや、これ〳〵此子はな、一人で出來た子ではござんせぬ、顏も知らず名も知らねど父御がござんす、その人を尋ねて渡すまでは、指も指さす事ぢやござんせぬ。卒爾さんしたら聞く事ぢやござんせぬ。

〽目許うろ〳〵涙ぐみ、身を縮めてぞ詫びにけり。

太郎　コリヤ〳〵、如何に狼ゆればとて、母御ばかりで出來る子が三千世界にござらうか、その上顏も知らず名も知らぬ、父親を尋ね手渡しするとは、何を證に尋ねるぞ、僞り者の卑怯者めが。無理にお身代りに立てようとは申さぬわ。子心にさへ主從の道を辨ふるに、見限り果てたる女め、娘を連れて早や歸れ。心も急けば、とつとゝ此處を歸りくさらう。

へと立上がる。

わさ アヽコレ申し、お待ちなされて下さりませ。偽り者と言はれては、親ゆゑ此子が面よごし、顔も知らず名も知らぬ夫を尋ぬる證は、コレ、これを御覽じて下さりませ。

へ上の一重を押脫げば、右は替らぬ詰小袖、左ばかりが振袖の、濃き紅の染模樣、へ橘ならぬ袖の香の、昔ゆかしく忍ばるゝ。

これを御覽なされても、仔細を言はずば御合點參るまじ。娘が手前も恥しき昔話し、お聞きなされて下さりませう。

ト合方になり、

私が産れは元西國の、在所の産れでござんすが、親は所のなにがし、十八年以前、頃は夜さへも長月の。

へ廿六夜の月待に。

私が所は諸方の入込み、誰れとは知らず袖を引かれて、あのゝものゝと言ふ間もなく。

へ松と松との若綠、露の契りや緣のはし。

暗がり紛れのつい轉び寢。お話し申すも辛けれど、人の足音に驚きて。
〽起きる袂を引く拍子、斷れて我手に殘りしはこの振袖、假の契りの情は薄けれど、妹背の緣や深かりけん。
その月より身も重く懷胎し、友達衆の介抱にて、產み落せしはこの信夫。父なし子を產んでは家の恥、子を捨てゝ嫁入りせよと、親々の異見。御尤もとは思ひながら、二人の褄は重ねまじ、緣あればこそ子まで成したる事なれば、此袖を知るべに。
〽尋ねて逢はんと國を出で、十七年のその間、水兒を抱へさまよひて。
さま〲の憂き艱難、この年まで育て上げても、此子が緣の薄いのか、今に尋ね逢はねども、この上まだ〲五年が十年でも、これこそ娘よ父よと名乘りおほする其迄は、蚤にも喰はせぬ大事の娘・相應に物の道理も、忠義も知つてはをりますれど、お役に立てぬは右の譯、卑怯でも未練でもござんせぬ申譯、お許しなされて下さりませ。
〽お許しなされてとばかりにて、前後不覺に泣き詫ぶる、泣入りながら取直し。
長々と嘸お氣がせきませう。サアお入りなされて下さりませ。コレ娘、立ちや。お暇申さう。

立ちやいなう。

〽と言へど娘は立兼ねる。

サ、立ちやいなう。

ト無理におわさ信夫を引立て、花道の方へ行きかゝる。侍從太郎花の井顔見合せ思入あつて、

太郎　ア、コリヤ〳〵待て〳〵、最前よりの一部始終聞入れぬにはなけれども、かゝる大事の場所なれば、かほどに事を別けて申しても、聞入れられぬか。

わさ　サアどのやうにおつしやつても、此事ばかりは、

太郎　ならぬと申すか。

わさ　サアそれは。

太郎　サア。

わさ　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

太郎　どゞ・どうぢや。

〽と手詰めの切羽、これはとばかり逃出づるを、太郎は隙かさず拔放し、刃の

光に母親は、我子は殺さぬ〳〵と隔て隔つる後の方、思ひがけなく一間より、信夫が背中襖越し、ぐつと刺したる一刳り、うんと悶ゆる苦しみに、侍從夫婦は呆れ果て、暫し詞もなかりける、襖をさつと武藏坊、血刀提げ、茫然たるその有樣。

ト文句の通りあつて、太郎は花の井を引戻し信夫を目がけて切りかける。花の井隔てながら立廻り、二重へ上り信夫を圍む。この時正面の御簾の內より刃出て信夫を斬る。これにて襖を引拔き、こゝに以前の武藏坊辨慶刀を提げ立身にて思入。この時同時に正面座敷の遠見になる。花の井、太郎思入あつて、

太郎　ヤア、殺したは武藏坊。かゝる狼籍心得難し。いかに〳〵。
　　へと詰めかくれば、母は泣く〳〵氣は狂亂。

わさ　こりや、扨は夫婦の衆とぐるになつて殺しやつたの。聞えぬ〳〵。元のやうにして返しやいなう〳〵。
　　へ取付き縋り、泣くより外はなかりけり。

辨慶　コリヤ〳〵、聲低に物を申せ。
わさ　イヤ〳〵、高う言ふわいなう、何科あつて娘をば斬りやつたぞいなう〳〵。
辨慶　それには段々仔細のある事。マア手負をいたはり介抱せよ。
わさ　何ぢやいなア。いたはれといふ程なら、何故に斬りやつた、斬りやつたぞいなう。
辨慶　マア〳〵待て。そちに見する物あり。
〽と肌押脱げばこは如何に、下着の衣は紅に、大振袖の伊達模樣。
サアこれを見たか、この片袖は其方にあらうが。播州姫路の福井村、十一兵衛が所の月待。
わあ　さうして、お前のお名は、
辨慶　書寫山の鬼若丸。
わさ　そんなら其時の、お稚兒さんかいなア。
辨慶　廿六夜の假寢の、女はそちであつたるか。
わさ　お前でござんしたか。
辨慶　アノ、そちで、
わさ　アノ、お前で、

辨慶　そちで、
兩人　あつたよなア。
〽思ひがけなき夫の名乘り、あされて詞はなかりけり、聞く嬉しさも今更に、
又思ひ出す涙なり。
わさ　オ、そんならあの辨慶さんかく〳〵。辨慶さんであつたかいなア。さすればお前は娘が父でござんしたか。どうした譯で、その父御が、娘をば。
辨慶　オ、殺したは御身代り、お主の役に立てるわやい。
わさ　アノお役に、ハア――。悲しいけれどもそれなれば、恨むる事はござんせぬ。これなう娘、日頃尋ねたこなたの父御といふは辨慶樣、御對面申上げやいの。
〽抱き起せば起されて、
信夫　母樣、なんぞおつしやるさうなが、耳が聞えぬ。もう目が見えぬ。必ず辨慶が側にゐて、お前も殺されて下さんすな。ア、術ない、苦しいわいなう。
〽言ふ聲も次第々々〳〵にせぐり來て、早や玉の緒も切果てゝ、此世の緣は絕えに

けり。

わさ　ア、悲しや〳〵。最早息は切れた、とても生きはせぬわいなう。
〽聞いて皆々立騒ぎ、見れどもほとぼりばかりにて、その甲斐更になかりける、
母は膝に抱き上げ。
扨も〳〵淺ましい、如何なる因果な生れぞいなう、父御を尋ね初めたは五つの時、申し母樣、餘所の子供衆には父樣もあり、母樣もありながら、何故父樣がござらぬ、逢はせて下されと、
〽せがみ立てられこの母も、甲斐なき戀路と思へども、忘れ方なく懐しく。
一年々々智惠のつくに隨ひ、譯を聞いては猶逢ひたいとせがむゆゑ、在所にもあるにあられず、其夜は都の衆もござつたゆゑ、もしやと、都へ上つて逢はせてやると、
〽いうたも若しや戀人に、尋ね逢はんを力草、途次の間も問ふ人に、添ふ心ぞと樂しみに、肌を放さずこの小袖。
知れなんだも道理、こなさんでござんしたもの。可愛やこの子は、一生父御を戀ひ慕ひ、一生物を思ひ詰め、今日といふ今日尋ね逢ひ、せめて一時半時でも、我が子か父樣かと、一緒にも

ゐる事か、詞も交さず、しかも父様の手にかゝり、辨慶が側にゐて、母様殺されなというて死んだ心の内。

〽いぢらしいやら可愛いやら、どのやうにあらうぞいなう。

如何ばかり苦しからう、父御の然もむごたらしい、同じ殺す道ならば、互ひに親よ娘よと、顔を見たり見せたりして、納得させての上ならば、是程には思ふまい。ヤレ娘よ。父御前はつれなくとも、母には恨みあるまいに、たつたま一度母様と、言うてたもひなう。

〽空しき死骸を抱き締め〳〵口説き立て、聲も惜しまず泣きければ、辨慶も諸共に、咽ぶ涙を押しかくし、

辨慶　よしない母が悔み事、話を聞くと等しく、扨は我子と飛立つばかり、生面も見たかりしが、生中見せては未練な心も起らんかと、生きぬやうに刳りしもの、一たまりもこたへうか、辨慶とても、木竹ではなし、生れてより此年まで後にも先にもたつた一度、ほててんがうな事をして、

〽生れし我子と聞くよりも、

憎からうか可愛かるまいか。そのやうに泣くを見て、泣くより泣かぬ苦しさは、こりや。

〽鳴く蟬よりもなか〳〵に。

泣かぬ螢の身をこがすと。

〽子唄も我身に知られたり。

これにつけても親の恩の深き事、今取分けて思ひ知る。唐土の樊噲が母の小袖を母衣と名付け、戰場まで持つたりといふ、それを學ぶにあらねども、この下着は母の手づから縫ひ仕立て下されしもの、汝に片袖取られたれども、亡き母に添ふ心地して、縫ひも直さず。

〽振袖の此儘に、四國九州へ押渡り、一の谷へも押立て〳〵。

危ふき難をのがれしも、これぞ誠に親の蔭。

〽歳月重ね、肌身離さず持ちしゆゑ、

名も知らず顏も知らぬ、親と子の證となつて、十七年後に廻り逢ひ、

〽主君の絶體絶命の、大事のお役に立つたる事。

偏に亡き母の此の小袖に手を通し、親子を一緒に引合はせ給ふか、ハヽア廣大。

〽無邊の親の慈悲、子故に親は名を上げる、よう死んだ、コレ出來したなア。

とはいひながら息ある內、これこそ尋ねた父ぢやわやい。親も一生子も一生、言初めの言納め。せめて一口父樣かいのと言うて呉れ。これぱかりが殘り多い。

〽生れた時の初聲より、外には泣かぬ辨慶が、三十餘年の溜め涙、一度にせきかけたぐりかけ、侍從夫婦も貰ひ泣き、四人の涙八つの袖、八つの時計を打交ぜて、悲しい事の數々を言盡すこそ果しなき、辨慶はツと心付き。

南無三寶、歎きに紛れしか。半時の時計も聞かざりし、早や八つ。御首討つて渡さんと、梶原に契約の刻限、時移つては事むづかし、サア太郎殿、卿の君の首討つて渡されよ。これより我は檢死の役目。

〽席を改め坐しければ、

太郎　實に〳〵、公事に私の歎き換へがたし、唯今卿の君の御首討ち申す。

〽と身繕ひ、信夫が死骸引寄せて、敢なく首を打落し、

サア、受取られよ。

〽返す刀を我と我が弓手の小脇と突き立つる、物に動ぜぬ武藏が驚き、妻は慌

て、縋り付き、

ト信夫の首を辨慶の前へ置き直し、一腰抜き、侍従太郎わが腹へ突立て、こなし。皆々びつくりこなし。

花の　こりや、さあ狂氣か、どうせう何とせうぞいなう。

太郎　ア、コリヤ／＼騷ぐまい／＼。ナント武藏殿、御合點が參るまいが、一通り聞いて下され。

ト竹笛入の合方になり、

如何に武士の習ひとはいひながら、切腹致すが手柄でもござらねど、眞を以て贋となし、贋を以て眞となすが軍慮の習ひ、貴殿が細工の此の卿の君の顏、面影は似たれども、實は雲の上人天上人。それゆゑ何とて下人の產れの色香とは似ても似付かず、邪智深き梶原が見咎めては一大事、鷺を烏と言はさぬ爲の此の切腹。某を卿の君の乳人とは、鎌倉殿にもしろし召したるこの太郎が首添へて渡さば、天地を見抜く梶原も、造り花とは申すまじ。

〽誠の花と見たならば。

信夫に犬死させまい爲、御邊が細工に添へてやる、心ばかりの色香ぞや。

〽覺悟は實にも潔し、妻はあるにもあられず。

花の　コレモウシ、こちの人、あなたは覺悟の切腹でも、自らは後に殘つて何と致しませうぞいなう。

太郎　ア、コリヤ、泣くな女房、何吠える、これまで御存じない事を、泣いて奥へ知らす氣か、未練な奴の、萬事は武藏殿の指圖を受け、おわさと仲ようして、御平産の後々まで心を付けよ。それが夫への貞節ぞや。コレ、心得たるか。

〽と血走る眼に勇氣をふくみ、きり〳〵と引廻し、一息吐いて。

サア武藏殿、時刻が移る、早や立寄つて首討たれよ。

辨慶　覺悟の切腹とは申しながら、何と此の儘、首が討たれうぞ。

太郎　ヤア、未練なり、何を猶豫。

辨慶　サアそれは。

太郎　サア。

辨慶　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

太郎　心置きなく介錯頼む。

辨慶　オヽ、その詞を聞く上は、辭退は申さぬ、觀念あれ。

〽ひらりと拔きし刀の蔭、首は前にぞ落ちにけり、信夫の袂押し切り〳〵、二つの首を包むに餘り目にもるゝ、涙の歎き果しなく、首を左右に掻抱き、曇りし聲を張り上げて。

〽館へ響くうなりごゑ、これなう暫しと取付いて。

卿の君の御首級、侍從太郎が首諸共、辨慶確かに受取つたり。

花の　せめて未來の、約束せん。

わさ　親子一世の憂き別れ。

兩人　どうぞ名殘りに、今一度。

辨慶　ならぬ〳〵。

兩人　そこをどうぞ。

辨慶　ならぬ。

〽と出で行くを、泣けど慕へど焦るれど、心強くも振捨て、見せぬも辛し見ぬも憂し、歸らぬ道に憧るゝ、夫の別れ子の別れ、二つの歎きを一筋に、見捨

て丶御所へ歸りける

ト辨慶信夫と太郎の首を抱へ行くを、おわさ信夫取縋り、名殘りを惜しむ事によろしくあつて、段切にて、

幕

第二　四段目の切　義經館の場

役名　磯の藤彌太義治。源の判官義經、磯の禪司娘、靜。靜老母、磯禪司。信夫實は卿の君。腰元、初音。同、若菜。同、小櫻。同、山吹。鎌倉の軍勢。

本舞臺四間の間高二重。角柱。竹の節の欄間。御簾卷上げあり。正面大形金張り附の瓦燈口。錦の緞帳を掛け、塗框三段のびやくろくをおく。下手一間杉戸。花道の揚幕に杉戸を取附け、花道より舞臺を一面に薄縁を敷詰め。幕の内より此處に腰元六人居並ぶ。すべて堀川館の體。琴唄にて幕あく。

〽天下泰平長久の、弓も袋に納まれば、矢竹心の武士も、敵に後を見せ、戀に心をぬかしたり、名におふ靜が一奏、秘曲の底を堀川の、御所は酒宴の表座

敷、いつに勝れて賑はへり。

初音　ナント、皆さんいつぞや迄は鎗薙刀をひらめかし、陣鐘太鼓のどんぢやんで、夜の目も寢られず。どうなる事かと案じてゐたれど、我君樣のお手柄にて、

若菜　奢る平家を切鎭め、かく泰平の御代となり、今日は御酒宴あすはお花見と、戸さゝぬ御代となりしも、目出たい事ではないかいな。

小櫻　左樣〳〵。それゆゑにこそ上の御懇も目出たく、この堀川へお舘を構へ、洛中洛外の非常を戒め、御威勢は朝日の登る如く、

山吹　私共に至るまで、ほんに肩身が廣いわいなア。

腰元　さうでござんす。もう此頃は陣立や弓の稽古、御馬の稽古もなく、ほんに樂々寢られるわいなア。

若菜　さういふ内に我君樣の、御入りに程もあるまいわいの。

腰元　御入り。

〽御酒の機嫌も義經公、一間の内より立出で給ふ。

ト琴唄になり、正面の瓦燈口より義經先に靜御前、女小姓兩人出來る。これにて以前の腰元みな〳〵

二重へ褥を直し、脇息、紙置臺、刀掛などよろしく直す。義經眞中に住ふ。靜はその脇、腰元は左右へ控へる。

義經　サ、此處にて一獻酌まん。サア、酌致せ。

ト前に並べある三方の土器を取上げる。

腰元　畏りました。

義經　イヤモ、いつ見ても美しき器量につるゝ琴の音色、皆の者、なんとさうは思はぬか。

腰元　ほんにもう、お心立なら御器量なら、何に一つ申しやうなき、

若菜　調べの爪音雲の上、天津乙女が來給ふも、

小櫻　かくやとばかり心耳を澄し、たえ入りまする。

山吹　ましてやいつもの一奏、けふは取分け今樣に、

皆々　又一入、お見事でござりまする。

義經　ましてや今日よりは、義經が北の方と昇れば、琴の調子も一際勝れ、十三の琴位の高さ、母を呼寄せ悅喜をさせいと申付けしが、まだ母は來らぬか。

初音　御意にござりまする。禪司樣は最前よりお次に、

皆々　控へをられまのする。

義經　然らばこれへ、召寄せい。

山吹
小櫻　ハツ。

ト平舞臺へおり、下手へ向ひ、

お次に控へし礒の禪司樣、御前のお召し。お早う御前へ。

ト花道の揚幕にて、

禪司　ハア――。

〽重き御意に召寄する、面の皺も敷波の、礒の禪司が年並も、都に名うての扇の指南、夫に離れて髱もなき、ひつこき髮の二つ折、色はなけれど、香は殘る、昔は思ひやり梅の、花の姿のあたらしき、惜しや老木とひねぬらん。

トこの文句よろしく、三味線入り亂れになり、花道より禪司、白髮かづら切髮、褊襠衣裳のなり、これを女の童烏帽子裝束入りの袱紗包みを持ち出て來る。靜はこれを見て、二重より下り出迎ふ心にて下手へ控へる。

靜　オヽ母樣、お上りなされましたか。御前樣のお待受け。サヽ早う。

〽水入らず親子の取次ぎ、禪司御前に手をつかへ。

禪司　ハツ、磯の禪司、お召しによつて、唯今参上仕りました。

ト　この時よろしくあつて舞臺へ來る。

〽手をつかうれば義經公、

ト序の舞になり、

義經　アヽ堅いは〱女の三つ指、物に例へて見る時は、延紙に書いたる一筆啓上、堅いも理、神代以來承らぬ、女の名に禪司、その形見を取置いて、向後は義經が姑御寮、マヽ、かうばかりでは合點が行くまい。そちも知りやる通り、兄頼朝の咎めにより、あつたら花の卿の君、散らされた閨の淋しさ、靜を今より北の方と定めねば、鎌倉の疑ひ晴れぬと臣等が勸め、けふよりしては予が奥ぢや。この目出たさを言聞せ、老の身の悦びに重々の悦びを、靜、話して聞かせい。

〽それと言はねど謎の帯、解けぬ心のなまめかし、

靜　もうし母様、私が身の上は、冥加に餘る君のお情。まだ此上のお情は、あなたの勘當遊ばした、兄磯の藤彌太様、縁といはうか、卿の君様の御母君が伊勢參宮の下向道、梶原が見咎めて、危

き所身に替へて、此類もなき大手柄、お怪我もさせず御供して、此お館へお歸りなされ、顔見た時の嬉しさ、思掛けなき對面も兄妹の深き緣、母樣お悅びなされて下さりませ。

〽聞くに驚く禪司。

禪司　フム、何と言やる、兄の藤彌太が、此館へ來てゐやるとや。

靜　アイ、お越しなつたはつい一昨日、此度の働きも底の心は勘當が赦されたさ、我君も感じ給ひ、親子の仲を取結べと、お腰の物まで下さりました。

禪司　なんぢや、お刀まで賜つたか。これは〱冥加ない。シテ其の兄は何れにゐまする。

靜　サ、兄さんは刀の冥加、武士に歸つた身の喜び、神詣でして來るというて、お出でなされて今はお留守、追付け御下向なされう程に、勘當赦して上げて下さりませ。

〽靜が願へば義經公。

義經　靜が願ひも尤もなれば、藤彌太が勘當赦し、對面致してやれ。

禪司　ハヽア、恐れありや、我々しきの倅が勘當、あいと申す筈なれど、お聞きなされて下さりませ。

ト合方になり、

抑々この母が磯の禪司と申す名は、死別れし夫の本名、連合も昔は武士の數にも入りし人、あの兄が惡黨にて武士の性根を打忘れ、家を外なる傍若無人、手慰み、世間を嘘で言ひ掠め、その禍が親にもかゝり、浪人さした不孝者、片輪の子は猶可愛いと、親の貧苦は厭ひもせず、七年前の臨終にも念佛は唱へもせず、こののらめは何處に居る、性根が直りなば、父が勘當悔みをろと、名を呼べば夫婦此世にゐるも同然、心さへ改めなば、兩親一緒に赦すも同然、オヽさうぢや、嬉しうおぢやると、それで浮世の思ひを晴らし、迷はず唱念大往生。連合に約束の詞も反故にはならぬゆゑ、女にあられぬ男の名、磯の禪司と謳はれ、今樣指南の營みに、靜は育上げたれども、兄は性根がまだ直らぬか、詫言にも何故來ぬと、待ちに待つた母なれど、立歸つて見る時は、詫の仕樣が氣に入らぬ。靜何故というて見や、御前のお側へ御奉公申せしも、そなたや母へつながる緣。何かはさし置き、先づ母が方へ來て、今一應の身の詫を、かう〳〵と言うたらば、わしが叱らうか。待つ所へは來もせいで、お館へ來て手柄顏。殊には禪司が上るを存じて、此處にゐぬは出逢うたか。なんぼ父の遺言でも、性根を見ねば赦されぬ。かう念入るもそなたが大事、又彼奴めが不實意出さば、兄に掛つてそなたまで、君に愛想もつかされうかと、あなた。

〽こなたを思ひ子の、性根をしかと見るまでは。
御返事暫く、御容赦なされて下さりませ。
〽磯の禪司と男名を、呼ばるゝ器量と知られたり。
トこれにて義經尤もといふこなしあつて、

義經　ホヽウ母が詞、尤々。この義經に言はれざる挨拶より、世に落ち果てし昔語り、席も滅入つて氣も浮かぬ。今言ふ通り靜は本妻、姑の磯の禪司が久々にて、舞ひをしたくも望まれまい。なんと此座をわつさりと、某一さし扇の所望致したい。

禪司　アヽつがもない。この年寄が舞うたとて謡うたとて、何がさつぱり致しませう、是非御所望なら裝束して、衣裳で化も老の舞、此處ではお許し下さりませ。

義經　イヤ〳〵裝束の舞は奥で見る、年寄ればとて捨てられぬ。伊勢物語業平は、九十九夜さの姿とさへ、寢られた例もあり、平に。
〽平に〳〵のお詞に、靜も側から。

靜　モウシ母様、御辭退あるは却つて慮外、サア〳〵一さし。

禪司　アヽ是非がない。そんならこれにて舞ひませう。色も香もなき此母が。

〽扇をさして座をかまへ。

トよろしくあつて禪司住ふ。これより下座へ取り。唄になる。

〽建永の昔御時に、國の譽れに隱れなき、巨勢の畫さし淺澤の水の杜若、あだしあしたの花の粧ひを、顏世花とは名付けたり。雨にしほるゝ豌豆の、かん寒梅を打拂ひ、草の雫やあら逢ふよ。

トこの唄にて、禪司扇にて舞ふ事よろしくあつて納まる。

これにて御免下さりませ。

静　母樣、有難う存じまする。

初音　私共に至るまで、一入。

皆々　興を催しましてござりまする。

禪司　イヤモ、お恥しう存じまする。

義經　イヤ〳〵禪司、舞振り老とは更に見えぬぞよ、静とは事替り、又一興でありしぞよ、この上は

奥へ參つて今一獻。サ、靜も來やれ。

靜　ハイ。私はちと用事もあれば、後より御前へ上りまする。

義經　然らば心に任すべし、後より老母同道しやれ。

靜　後より母を召連れ上りまする。

皆々　我君には、

禪司　先づ、

皆々　お入りあられませう。

〽心浮立ち義經は、打連れ奥へ入り給ふ。

トこれにて義經先に、禪司殿元皆々奥へはひる。後に靜殘りこなしあつて、

靜　テモマア母樣、お出では知れてあるに、この兄さんは何故遲い。

〽氣を揉みあせる後より。

ト奥より卿の君、殿元のこしらへにて出て、

卿の　モウシ北の方樣、靜樣。御前が召しまする。

〽腰元姿みすぼらしく、立出で給ふ卿の君、靜はハット恐れ入り。

靜　御臺様、

卿の　ア丶コレ。

ト卿の君の手を取り、上手へ敬ひ、靜は下ってこなし、

〽涙と共に御手を取り、

靜　卿の君様ともあらう身が、鎌倉殿の聞えを憚り、信夫と名をば假初に、腰元姿の御窮屈なさ、御身の爲とはいひながら、淺ましい靜が上に立ち、信夫どうせいかうせいと、人目を繕ふ主従の、ましてやお身の唯ならぬ、お腹にござるやゝ様を、安く出産遊ばすまでの御辛抱、堪忍なされて下さりませ。

〽涙と共に詫び給ふ。

卿の　何の斷りに及ばうぞ、辨慶の心つれなくば、鎌倉殿のお怒り厳しき故、今は世になきわらはが命。誠をいはゞ尼法師とも姿を替へ、先立さし信夫が跡を弔ふが追善供養、輪廻捨い女の心。

〽昔の事を思はれて、いとゞ衣をしく雫、しのぶ心ぞいぢらしい。

それまでは得い思ひ諦め、かうして殿のお側にゐるも、皆の衆の御情忘れはせぬ。遠慮をせずに、コレこなた。信夫どうせいかうせいと、お安う頼むぞや。

〽互ひに悲しむ戀の義理、睦じくこそ見えにけり。

卿の　かういふ内も人目あり。

靜　このお心根が猶ほいとしい。上々様には苦はないものと思ひしに、降つて湧いたる今度の災難。お館にては人目も多いに、しのぶとは誰が付けて、今では北の方様の御身をしのぶ。

卿の　世をしのぶ。

靜　ハテ忌はしき名ではあるわいなア。

〽返らぬ事を口說き立て。

○　藤彌太様のお歸り。

〽遣戸口より咳拂ひ。

ト豐後下り端になり、花道より藤彌太、厚綿、羽織、着流し、大小、緑り緒の草履、櫻の枝に瓢簞を結び付け、これを擔ぎ出で、直に舞臺へ來る。靜卿の君と入替りこなしある。

靜　兄上には、先づ〳〵これへ。

藤彌　ア、〳〵。

ト頷にて横柄にこなしあつて上手へ通る。

〽さも横柄に立歸る、靜は色目覺られじと。

靜　コリヤ信夫、兄上樣のお歸りありしを、母樣へお知らせ申しや。—

卿の　アイ。

〽といらへて立給ふを、藤彌太は聲をかけ。

ト卿の君を引留めて、

藤彌　ア、コレ〳〵、まづ待つた、信夫殿。母への詫言は遲うても早うても、否應言はさせぬ義經公の執成で、理屈臭い母人も、今度の鼻が手柄を聞いては、四も五も言はず合點であらう。

靜　イヽエお前や私の思ふやうに、合點なりやよけれども物事に念の入る母樣、假令大將の御詞がかゝらうと、どんな手柄をなされうが、それには乘らぬ日頃の氣質。ぬらりくらりの間に合ひ者、心の直つたをとつくりと見屆け、其上の事とおつしやつたわいなう。

藤彌　ハテ小むづかしい。心が直るの直らぬは、嗅いで知れるか、見て知れるか、その片意地に懲り果てゝ、今朝からの神參り、上加茂下加茂祇園の社、南無母の片意地止め給へと、祈る程にける程に、日脚も傾く腹も傾く、幸の二軒茶屋、立寄る鼻も元豆腐屋の田樂串から出世した、二本差の身祝ひにたらふく飲んで、謠「山寺の春の夕暮來て見れば」などゝ、ゆらり／＼歸り來れば、遙か後よりオヽイ／＼と呼ぶ者あり、何者やらんと見返れば、聞きやれ、差付けぬくやしさは大小忘れ、大恥搔いてのけた。ハヽヽヽヽ。コレ信夫殿。コヽへお出でなされ。ハテさて、お出でなされと申すに。（トキッとこなし。）

卿の　ハイ。

ト合方になり、卿の君恥しきこなしにて藤彌太の側へ行く。

藤彌　コレ信夫殿、このやうに身の恥を打明けて話す正直男。恥の序に心の思惑恥かゝさうとかゝすまいと、信夫殿の御返事次第。この館へ來てちらりと見るより、首ツたけ惚れてをる。これ信夫殿、御返事はどうでござる。

〽ふはと抱付き振袖の、肌へ手を入れしなだるれば。

ト藤彌太卿の君へ寄添ふを、靜支へる。藤彌太は乳房を探るはずみに、腹帶を引出し目をつけ、

藤彌　ヤこの腹帯は、

靜　コリヤ兄さん、常談ばかり、勿體ない。

藤彌　イヤ、常談ぢやない大眞實。妹が使ふ腰元に、兄が惚れたが何んで勿體ない。

靜　サ勿體ないと言うたはナ。

藤彌　サア、その勿體ないと申したは。

靜　サアそれは。

藤彌　サア。

へ問ひ詰められて驚きしが、左あらぬ體。

靜　エヽとが／＼しい。その勿體ないと言うたはナ。オヽそれ／＼、親の勘當のお詫を願ふ身で、その訴訟は外へやり、脇道の小いたづら、親の冥加につきようと、それが勿體ないというたのが誤りでござんすかえ。

藤彌　ハテ、モウよいではないかいやい。

トこの時、大小の舞の合方をあしらふ。

靜　アレ母樣は奧の間で、御所望の今樣の一さし。お裝束も出來たやら、笛も鳴る鼓も調べる。お

前も餘所ながら拜見して、今樣も濟みし其上で、目出たう親子の對面なされませ。私も信夫も
三絃の役なれば、心も急けばお先へ行きます。サ、信夫おぢや。

へ言紛らして奥に行く、後に藤彌太思案顔。

ト靜信夫を連れ奥へはひる。藤彌太こなしあつて、

藤彌　今兩人が詞の端々、フム。

へぐつと呑込む面魂。

鎌倉よりの忍びとも。奥にはしら髪の母の舞。

二上りへ寢卷の衣の肌薄き、辛いぞ憂いぞ何とせう。

淨へ藤彌太は獨り言。

藤彌　扨は靜の君を信夫にして、信夫が首を遣りをつたナ。ム、、けうといく。やつちやしてこい
やつちやしてこい。此通り鎌倉へ注進、さうぢや。

へ駈出せしが待てしばし、まだ暮切らぬ御門の出入、見付けられては事むづか
し、ハテどうしたらよからうな。

ムウ、此上は奥へ踏込み、大將の首芋刺に。

〽又駈出せしが、アヽイヤ〳〵、彼奴も氣早の大將、もし仕損じては鈍臭いと、心で頷き、

かういふ時の候べく候、梶原殿へ、オヽさうぢや。

ト獨吟になり、

唄〽見るにつけ聞くにつけ、胸にせまりし數々の、袖もかわかぬ沖の石。

靜〽唄の唱歌に引かへて、一筆知らせの硯石、床の料紙を幸ひと、蓋押し明けてする墨より、歪む心を試さんと、三絃携へ靜御前、空醉つくる千鳥足、醉ふたとさ〳〵、土手の細道浮雲合點ぢや。あぶない〳〵。

ト藤彌太硯箱を取出し卷紙へ思入あつて認めにかゝる。此内奥より靜謎への三絃を持ち出て、後より藤彌太の體を見て、酒に醉ひしこなしあつて、

靜　兄さん、何書かんす。

〽と聲かけられてびつくり、あたふた袖に狀押しかくし、

ト藤彌太びつくりして、認めかけし狀を後へかくし、どぎまぎこなしあつて、

藤彌　そちや三絃の役ではないか。それに此處へ來ては間が缺けう。サア〳〵、奧へ〳〵。

靜　イヽエ大事ござんせぬ。母樣の舞も一番濟んで、我君の御恐悅にて、御酒宴が始まり、靜一つ飲め飲めと無理に强ひられ。

〽酒の擧句にざゞんざと、心亂るゝ片男波、彼方へさらり此方へさらり、さらりさつと、

ト生醉のこなしあつて、

書かしやんした今の文、匿すはひがごと、それ見たい。

藤彌　アヽこれか。ナニこれは、かういふ譯ぢや。かの信夫に、思ひまゐらせそろべく候。

〽いよし御げんと書いたるは、ほだしの種の萩薄、ほんに誓文。

靜　戀ぢやあるまい、慾と見た。

藤彌　慾とは妹、何と見た。

靜　まだお前、蓄らぬ心と見た。人には洩らさぬ同胞仲。サア、有りやうに言はしやんせ。

藤彌　假令同胞の仲なりとも言はぬ。先づそちから言へ。

靜　わしに言へとは、そりや何を。

藤彌　やア、とぼけまい。信夫といふは卿の君。戀慕に事寄せ乳房といひ、腹帶まで慥に見た。

靜　それ見付ければ、どうしやんす。

藤彌　オヽ知れた事、梶原殿へ注進する。

〽駈出すを押止め、

靜　ウム、扨は勘當の詫と言はしやんしたは。

藤彌　オヽ嘘だ。梶原殿と心を合せ、伊勢路から付込んで、靜の兄が味方顏、釋迦でも喰はす鹽梅よし、かうした思案は又田樂、義經の首芋刺し、待つてをれ。

〽奥を目懸けて。

靜　エヽ曲がない兄さん。惡事に與して身が立たうか。恐しい企の段々、聞いた者は妹ばかり、外には聞かぬ奥の囃子。鼓や唄に紛るゝが、お前の仕合せ親の慈悲。サア舞の終らぬその内に、惡心を飜し、善心になつて下さんせ。

〽と兄を思ひの眞實心、涙は詞に先立てり。

藤彌　兄が出世の邪魔ひろぐな。

〽行くを靜が立塞がり、

靜　イヤ遣らぬ〱、どこへも遣らぬ。

藤彌　ナニ、小癪な。

〽ずはと拔いて切りかくれば、得たりと紫檀の延棹にてはつしと留め。

靜　妹を殺さうとは、人でなしの猫の皮。

〽不孝の上塗りばち當りと、拂ふ刀を又切込む、太刀筋血筋の遠慮もなく、兄は强力刃物わざ、妹はかよはき無刀のあしらひ、亂れ散つてぞ。

ト兩人引留め爭ふ事あつて、氣味合ひの見得より、大小入り誂への鳴物山颪しになる。藤彌太一刀拔き斬りかくるを、靜携へし三絃にて留める、立廻りにかゝり、

〽爭ふ内に三絃折られ、にげる靜を膝の下、ぐつとも動かせず。

ト此内山颪しの唄にて、三絃と太刀の立廻り好みの通りあり、トゞ三絃を切折り、藤彌太靜を引敷き

キツとこなしあつて、

藤彌　サア、此の兄と同心するか、否と言へば突殺さうか。

靜　サア、それは。

藤彌　サア。

靜　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽胸に刀を差付くる、物音奥へ聞えてや、母は裝束脫ぐ間もなく、走り出で、拔討に、兄が肩先すつぱと斬れば、うんとのつけに反返るを、起しも立ず。

ト此以前より磯の禪司男舞のなりにて出て、靜の高き聲を見て、太刀を拔き、後より藤彌太を斬下げる。これにて藤彌太アツと苦痛に堪え兼ね前へへたる、母は引付けキツとなり、

禪司　おのれに聞かす事がある。

〽髻摑んでぐつと引寄せ。

コリヤ此刀を拔かば、命がないぞ。

〽涙と共に怒りの聲。

アノ、こゝな不孝者めが。

ト床と下座打合せの合方になり、

眼もいまだくらまずば、この親が扮裝を見よ、烏帽子水干男の裝束、母と思ふな、父親の磯の禪司殿なるぞ。エゝ、おのれは淺ましい。本心に立歸らば、草葉の父を恨むであらうと、母に禪司の名を讓り、待ちに待つたる甲斐もなく、惡事に惡事を積み重ね、現世後世を迷はすゆゑ、磯の禪司が蘇生して、手にかけたるを覺えたか。

〽烏帽子裝束かなぐり／＼、藤彌太が襟上摑んで打据ゑ／＼。

これまでは父の役、禪司といふ名を力にて、思ひ切りは切つたれど、母が身にもなつて見よ。現在我子を手にかける、母も因果おのれも因果。憎けれども佛になりをれやい。

〽わつとばかりに泣きいれば、靜も共に憂き思ひ。

靜　言うて返らぬこの有樣、せめては最期に心を改め、親子兄妹睦じく、詞を交して下さりませ。

〽取付き歎くその聲の、耳にや入りけん、手負はむつくと起上り。

藤彌　ハ、ア誤つた／＼、親を親とも思はぬ我を、親は我が子と思召し、父の名を母に讓り勘當を赦

さんとの、御恩を無下にするのみか。

〽天の冥罰兩親の、御手にかゝる不孝者。

この身の出世と慾心發し、この館へ入込みしが、悍頭と心を合せ、舞の君の實否を糺し、大將の首取らば、大名に取立てくれんと、慾に心を迷はされ。

〽御手にかゝりし今此時、一生の非を改め善心になつたれば、最期はせめて寸志の忠義。

これ靜今宵鎌倉武士共が、夜討にせん仕度ありと、義經公へ申上ぎや、さすれば母人にも御安泰、われも君の御身に添ひ奉り、主君の鬱憤お晴らし申さん。必ず油斷なさるゝな。

〽と始め終りの物語。

禪司　エヽ情ない、その根性を何故一時早う直してはくれなんだ。辨慶殿の御御は、女なれども父の手にかゝつて忠義の死。そなたも母の手にかゝり、死ぬるに二つはなけれども、根性の直りやうが遲いゆゑ、犬猫同樣のこの死態は何事ぞ。不孝者ゆゑ猶不便ぢや。

〽子ゆゑの闇に繰言を、聞く藤彌太は悔み泣き。

藤彌　ヤアその悔み返らぬ事。我れより出でし不孝の酬ひ、總角の頃よりも、父上母上に我儘無法を言ひ通し、友傍輩にも疎れて、身の勘當を幸ひに、なほ〳〵募る惡事の天罰恐しく、五常の道を背き、罪科閻魔の帳へ乘るとても、冥府の父になり替り、勘當赦して下さりませ。

禪司　その心開く上からは、父の遺言、赦さいで何としませう。

藤彌　妹。

靜　兄さん、

靜藤彌　忝い。

〽わつとばかりに取亂す、なみだ〳〵に嵐山、三つ瀬に流るゝ堀川の、水嵩增るばかりなり。

〽歎きに時を移せしが、三人は心取直し。

禪司　思へばこれまで、家の流義を舞はずして、

靜　せめて此世のお名殘りに、裝束なりと召まして、

藤彌　差す手引く手は狂ふとも、一さしなりと、

禪司　わらはが着けてやりませう。

ト靜は手早く母の裝束を藤彌太に着せ、烏帽子を冠せ、中啓を持たせ、磯の禪司後向きになり、謠を謳ふ心。藤彌太こなしあつて、これより下座へ取り謠になる。靜は鼓を調べる。

謠へ千代に八千代のためしをも、まのあたりなる藥の水、誠に老を養うたり。

ト藤彌太扇を搆へ、苦痛の體にてちよつと小舞ある。よき程に遠寄せ聞える。

禪司　ヤ、あの物音は。

藤彌　正しく夜討と覺えたり。母人には君のお側へ少しも早く。

禪司　それぢやと申して、この儘に。

靜　こゝ構はずと。

禪司　これが別れか。

藤彌　ヘテ、未練千萬な。

へ母は泣く〳〵入りにけり、後に藤彌太靜に向ひ。

ト遠寄せをかすめて、

この上は殘りつ一さし。（ト思入あつて、）鼓。

静　ハアー―。

ト太鼓を打つて下座の謠になり、

謠〽巖となりて苔のむすまで、

謠〽榮え榮ふる松梅の、二た葉に竹の節をこめて、老となるまでも結ぶぞ樂しかりけれ。

トこの謠にてよろしくあつて、烈しく遠寄せを打込む。

淨〽折から響く鐘太鼓、きつと遙かを打見やり。

静　ハテ心得ぬ、あの太鼓は。

藤彌　あれこそ夜討の合圖、こゝ構はずと門を固めよ。

静　いかに方々、直宿の衆はおはさぬや、夜討が入りて候、出合ひ給へ、お出合ひなされ。

ト長押にある薙刀を取つて身拵へする。此時下手後より軍卒静にかゝるを、ちよつと立廻つて静は二重よりおり、下手より軍卒藤彌太の方へ立ちかゝる。

〽堀川の夜討に静が働きと、末世にいふも隱れなき。

ト兩人の軍卒を投返し、静は花道へ甲斐々々しくはひる。

藤彌　假令手疵は負ひたりとも、ナニ、これしきに氣遅れせんや。

軍卒　何を。

ト立廻りよろしくあつて、瓦燈口の緞帳を切り、腹帯に締め、立廻り。

〽腹帯しつかと、

トこれにて上下より軍卒槍を構へ窺ひ出で、双方より突いてかゝり、誂への鳴物になり、小短き立廻りあつて、藤彌太キツと眞中から見得にて、道具幕を冠せる。この幕外、花道より袴、十德、鉢卷、槍を持ちし軍卒八人出て來り、どん／＼のあしらひ、

軍一　いかに方々、われ／＼鎌倉より仰を受け上りし所、

軍二　この堀川館を、十重二十重に取圍めば、

軍三　蟻の通ふ所もござるまい。

軍四　左樣仰せはあるものゝ、軍慮にかけては賢き大將。

軍五　殊には附添ふ音に聞えし四天王、

軍六　大力無双の武藏坊、策をかまへて討入らねば、

軍七　如何なる手立あらんも計られず、

軍八　イヤ〱、門を固めてある上は、臆病風に誘はれるな。

軍一　左様々々、土佐坊殿へ申上げ、表門を打破り、

軍二　一時に夜討をなすならば、何の手間暇、

軍三　目指すは判官義經なれど、

軍八　分捕り功名手柄は仕勝、御油斷あるな。

七人　心得ました。

ト軍卒思入あつて、上手へはひる。鳴物打上げ、床の淨瑠璃なる。

〽喧すく堀川御館の追手の勢、隊伍の備へも打破られ、戰ひ更に果しなく、中に藤彌太必死の働き。

トよろしくあつて、道具幕を振落す。

本舞臺打拔き奥庭、櫻の林、同じく櫻の釣枝、上下櫻の植込みの見切。莫大なる石の井筒井戸あり。この脇に雪見形の石燈籠、丈夫向きに据ゑあり。すべて堀川館庭前の體。太鼓入り誂への鳴物。バタ〱にて道具幕を振落す。トこゝに以前の藤彌太雨肌を脫ぎ、腹帶を締め水入りさばきかづらにて、刀を構へ、軍卒大勢槍を突きかけ、からみし見得にて幕落ちる。銘々好みの立廻りあつて、トゞ藤彌太息

の切れし思入にて、釣瓶繩を取上げ、水を汲上げて呑まんとするを、軍卒呑ませじと組付く。立廻り内、又一人斬つてかゝる。刀を取り、三人になり、繩釣瓶をかせに好みの仕抜きあり。又藤彌太の手を取り、下の石燈籠の側へ引き行き、立廻りの仕組にて、この上へ上る事などあり、トヾ鳴物替り、大まくしの立廻りになり、皆々を斬り倒し、殘りの人數斬立てられ、花道へ逃げてはひる。これを追ひかけ花道まで行く。この時舞臺より軍卒二人出て、藤彌太に組付く。立廻りながら舞臺へ戻り來る。早打にて兩人を斬り捨て、タチ〳〵となる。早めし鳴物にて靜御前、兩肌脫ぎかけ、蒔繪の薙刀にて兩人の軍卒と立廻りながら、出て來る。薙刀にて兩人を投退け、藤彌太と互ひに見合せ、ホツとこなし。

靜　兄上なるか。

藤彌　妹、シテ〳〵君には。

靜　敵を十分惱まし給ひ、裏御門より落ち延びました。

藤彌　チエ、忝い、コリヤ其方も、君の御後に附添ひて、此處を早く落ちのびよ。

靜　それぢやというて、最期を見捨て、

藤彌　未練な事を、早く〳〵。

〽と切つて捨てたる此世の別れ。

ト以前の軍卒兩人にかゝるを、藤彌太軍卒を引付け立廻り、切返してその上へ跨り、藤彌太腹へ刀を突立てる。靜は花道へ行きかけ、こなし。

〽切つても切れぬ兄妹に、靜は泣く〳〵出でゝ行く。見送る兄も斷末魔、これぞ此世の暇乞ひ。

ト藤彌太刀を引廻し、苦痛の體、靜行き惱み戻りて愁ひの仕組み。踏敷きし軍卒へ血滴り、藤彌太次第に落入る。靜愁ひの仕組。

〽哀れ果敢なき、

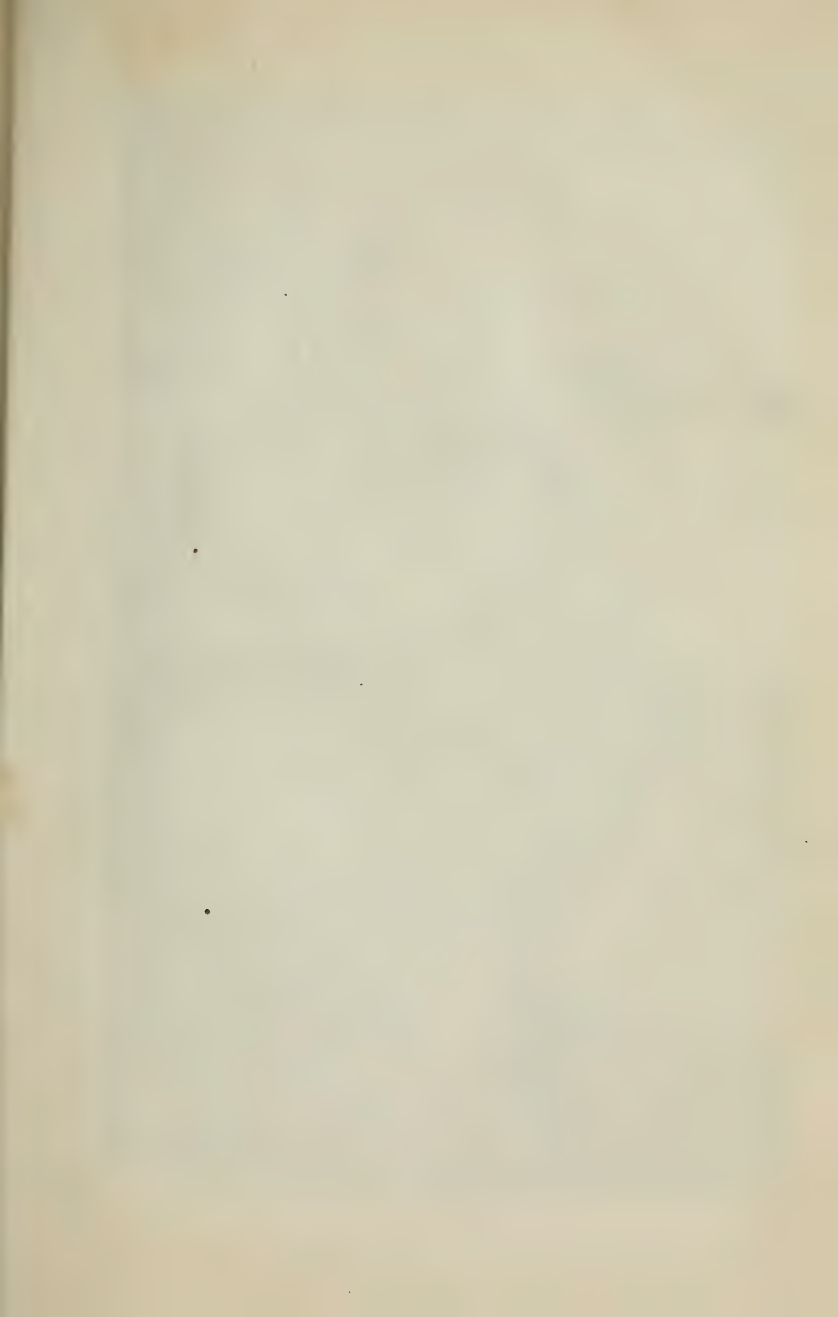
ト三重にてよろしく

幕

堀川夜討（終り）

辨慶上使

倭假名在原系圖
やまとがなありはらけいづ

蘭
蘭平

倭假名在原系圖（蘭平物狂の段＝一幕）

蘭平物狂の場

役名　在原の行平。百姓與茂作、實ハ大江の音人。奴、蘭平、實ハ孔雀三郎。蘭平一子、しげ藏。伴の七郎。下部、民平。同、時内。同、逸平。盗賊。立廻り大勢。賤女松風、實ハ與茂作妻、おりく。行平御臺、水無瀨御前。腰元○△□等。

本舞臺三間の間常足の二重。正面金張付けの瓦燈口。緞帳を懸け、三面黒塗り竹の節欄間、これに御簾を卷上げあり。上の方に松の大樹。此前に松の臺みき。下の方網代塀。前に柴垣。舞臺前に井筒井戸。紅葉の釣枝。すべて在原舘の體。幕の内より下部民平、時内、逸平、繻子奴一本差しのなり、手桶竹箒を持ち掃除をしてゐる。白囃子にて幕あく。

ト直に直の浄瑠璃になる。

〽庭前の松の位に在原卿の御臺水無瀬御前、褥に御座を敷島や、歌にやはらぐ腰元の、料紙硯と書き散らす、落葉の掃除奴ども。

民平　ときに時内、奥庭から段々掃除はしまうたから、一服やるべえか。

時内　さうすべえ〳〵。ナント、逸平ものまぬか。

逸平　オヽ、おらも一服燻らすべえか。

民平　サア時内、打たねえか〳〵。

時内　イヤ、おらは盗人火打は持たないわ。

兩人　ナンダト、盗人火打とは。

時内　ハテ、すりも盗人も同じことぢやわえ。

三人　ハヽヽヽ。

時内　オヽよし〳〵、あるぞ〳〵、こゝにお煙草盆がある、これでサア喫まぬかい。

民平　ときに二人の者、おらがお旦那行平様、先達播州須磨へ左僊の御身。此度御歸洛の悦びに直に

參內あるべき所に、この綾の小路のお館へ、お歸りより御病氣にてお引籠りなさつて、いまだに參內の沙汰もないとは、どういふ事だなア。

時內　されば、おらもとんと知らないが、何だか行平樣のお預かりの太刀とやら寶劒とやらが紛失と、サアどうでもこれを持つて行かなければ、參內がならぬと思はるゝ。

逸平　何をいふやら。お旦那の御病氣は、戀だといやい。

民平　ナンダ、戀だとは。

逸平　オヽ、その寶劒の事はないでもないが、此度の御病氣の因はといへば、何かお屋敷で美しい女ばかりに取巻かれて、榮耀榮華の御身を須磨へござつて、褌ひとつで海へ飛込む、海士の女が日に照らされて、眞黑になつてゐる汐汲み女ばかりの所へござつて、如何に女好きのお旦那も、呆氣にとられてござつた所を、松風といふ汐汲女が戀慕し、夜も晝も引ついてゐて、いとしほがつてゐたといやい。

兩人　ハテ憎らしい、イヤ、可愛らしい奴ぢや。

逸平　サア、そこでお旦那樣にも、何が淋しい折柄なれば、モウ〳〵都の事も打忘れ、夜晝なしに契りを結びをつたとよ。

兩人　エヽ、羨しい話ぢやなう。

逸平　そこで御歸洛あつた所が、その松風の事ばかりを言つてござつて、それからうつら〳〵と御病氣だとの事。

民平　ハヽア聞えた。そこでけふ朋輩の蘭平めが、奥樣の御意だとぬかして、松風殿を呼びに行つたとぬかしたが、おらア又、お菓子を取りに行きをるのだとばかり思つた。

逸平　兎角世の中は、色事ぢやナ。

時内　イヤ又その内にも、おらがお旦那行平樣の弟御業平樣、お兄弟とも色事は好きぢやテナ。

民平　イヤ、旦那ばかりぢやない、おらも大好きぢや。

時内　おらも又、飯よりも好きぢや。

逸平　誰が又あれを嫌ふ者があるものか。

三人　ハヽヽヽ。

〽笑ひ催す折からに、行平卿の御臺水無瀨御前、腰元諸共立出で給ひ。

ト琴唄の合方になり、水無瀨御前かいどり衣裳、後より腰元○△□附添ひて出來り、二重へかゝりて、奴三人心附き控へる事。合方。

水無　ナウ下部共、兎角禍は下からと、用なき事を口さがなう言ふまいぞ、掃除しまひなば、部屋へまゐりて休息しや。

三人　ネイ。

〽打連れ部屋へ入りにける。

ト調べにて、奴三人は下手へはひる。あと合方になり。

腰〇　御臺様のお慰みに、今を盛りのお庭の菊。

腰△　あまり見事にござりますゆゑ、一枝づゝ手折らせましたを、

腰□　折からの御一興。これにて御覽遊ばしませ。

ト銘々花筒へ入れたる菊を、水無瀬の前へ出す。

水無　梅を花の兄といひ、菊を花の弟と呼ぶ。春と秋とにもてあそぶ、兄にもまさる劣草、又一入の詠めぢやなア。

三人　御意に叶ひし御詞。お嬉しう存じまする。

水無　この菊の美しきを見るにつけても、我君様須磨の浦邊にゐらせられ、手活になされし賤の女に、御心殘りて御煩ひ、その戀人を少しも早う呼寄せて、君のお心お晴らし申したいわいなう。

腰〇　紅葉殿、お聞きなされたか、下々と事變り、御悋氣遊ばすお心なく、その戀人をお舘へ呼び迎へたいと御意遊ばす。
腰×　上つ方とて美しき御臺樣のお心を、足らはぬながら私どもまでお褒め。
三人　申し上げまする。
水無　サア、悋氣嫉妬は女のたしなみ。そち達も夫を迎はゞ、よう愼んだがよいぞや。
三人　有難う存じます。
水無　それはさうと、妾が申付けたこの蘭平は、まだ戻らぬかや。
三人　左樣にござります。
水無　テモ待久しいことぢやなア。
　　〽待詫び給ふその折から、四人引かせ立出づる、奴の繁藏しづ〳〵と、恐れげもなく歩み來る。
　　ト調べになり、下手より伴の七郞、百日かづら丸ぐけ太綿着附木綿纏にかゝり、これに黑四天捕手附添ひ十手にて圍ひ出て、後より繁藏、綺麗なる奴にて附き出で、下手へ住ひ。
繁藏　御前是にござりまするか。此者は大きな科人なれば、栲問に掛くべきや、お伺ひ申上げます。

水無　イヤ／＼繁藏其方は知るまいが、此程吟味にあらまし樣子は白狀せしが、いまだ詮議は殘つてある。コレ／＼、そなもの。今聞く通り、少しにても僞り匿さば、手痛き拷問に掛ける。その苦痛を見んより、サア有りやうに白狀しや。

七郎　イヤモ、背を斷割り、鉛の熱湯、切身に鞭の拷問でも、滅多に白狀しめえと思つたが、斯く顯れし罪科、迚も命はなきものと覺悟は極めし上なれば、此間もいふ通り、外に匿す仔細はねえわえ。

〽迫に素性あらはして、詞少なにいひ放せば。

水無　オヽ、潔きその一言。さりながら尋ね問ふべき仔細あれども、御病氣に事繁ければ、後ほど篤と詮議せん。先づそれまでは繁藏、奧庭へ引据ゑ、キッと張番申し付けい。

繁藏　畏つてござりまする。ソレ、引立てい。

七郎　やかましいわえ。

〽繁藏は繩とりに引き立たせ、後に續いて入りにける。

ト時の太鼓になり、繩取附いて七郎捕手繁藏上手へはひる。

〽折しも奴の蘭平が、須磨より松風伴ひて。

トこの内蘭平、繻子奴、衣裳一本差しにて、ツヽカケになり出て、直に舞臺下手に控へ、

蘭平　ハツ、御前樣是れにござりまするか。仰せ付けられましたる松風同胞を同道仕つてござりまするが、これへ呼出しませうや。

水無　オヽ蘭平、待兼ねました。その松風とやらこれへ〳〵。

蘭平　ハツ。それに控へし松風同胞の者、御前のお召し、これへ〳〵

トテンツヽになり、花道より松風實はおりく屋敷風のなり、この上に浴衣を上張り、平ぐけ、旅のなり菅笠、甲斐絹の風呂敷を背負ひ、與茂作、石持、やつし、藁づとを背負ひ出て、

りく　オヽあそこに蘭平殿がゐらるゝ、急いで行きやれ〳〵。コレ奴殿。そこへ行ても、大事ないかや。

蘭平　オヽ大事ない〳〵、則ちこれに奥樣がござる、お目見得をさして落着かさう。二人共にこゝへござれ〳〵。

トこの内おりく與茂作下手へ控へゐる。

へイ御前樣。則ちこれが、夫の兩人の者でござりまする。

水無　スリヤ、そなたが聞き及んだ、壬生の與茂作とやらぢやの、又こちらが松風によう似たとある妻のおりくとやらか、樣子は初めて聞いたであらうが、我君の御病氣慰めの爲、蘭平に言附け呼寄せしに、早速見えて滿足なるぞ。何事も君のお心に入るやう、おりくとやら、品よう頼むぞや。

りく　これはまあ、お氣の毒なお詞、在所育ちの私が、いかに似たとてお馴染の、松風樣とは不都合な事ばかり。恥しいやら怖いやら、どうも心が落着きませぬ。こりやいつそ、止しにしませうかいの。

ト迷惑の思入。

與茂　これはしたり、それはどうしたものぢや。又それを口にするかいなう、家でもいうて聞かした通り、ハテ何をいはうと、唯はい〳〵と間を合はしたがよい。もう須磨のお話などお尋ねあらば、日頃見た名所記の通り、尤もらしういうたがよい。ナウ、奴殿。

蘭平　オヽさうだ〳〵。そこらが機轉才覺だ。兎角ちよい〳〵此形見をいん出して紛らかし、君の事が忘られぬ〳〵と、しなやかに泣くのが肝腎ぢや。又外の事をいうたら、唯あい〳〵左樣〳〵と申したらよい。必ず忘れさつしやるな。

りく　そんなら、アイ〳〵左様々々と、申したらようござんすかえ。
蘭平　オヽ、さうぢや〳〵。
　〽奥へかくと通じさせ、寢所の樣子如何ぞと窺ふ折から。
　　トこの時瓦燈口の内にて、
行平　ナニ、須磨より松風が來りしとナ。それへ參つて對面なさん。
　〽寢所の床を上げさせて、行平卿は病の床、夢の覺めたる御心地、褥、脇息にかゝらせ給ひ。
　　ト管絃にて、奥より行平卿、御寢卷、丸ぐけにて出る。みな〳〵頭を下げて會釋。
ヤレ松風か、なつかしや。近う〳〵。
　〽扨は誠の松風と、見まがひ給ふと思へども、どうやら心恥しく、たゞ。
りく　アイ。
　〽アイとばかりに、うろ〳〵としてゐたりける、折柄奥庭騒がしく。
　　トバタ〳〵になり、上手より菖蒲革の侍走り出て、

侍　ハツ、申上げます。引据ゑ置きし最前の科人、縛の繩を切り、逐電いたしてござりまする。

ト言捨てゝ上手へ引返す。

行平　ナニ、科人が逃げ失せしとナ。エヽ折悪しう金剛太郎は西國へ赴き、ア、誰を追手。（ト思入あつて）ホヽウそれ幸ひ、あれなる蘭平が悴、繁藏に申付けん。ヤアヽ繁藏、はや参れ。

ト上手にて、

繁藏　ハアー――。

へハツとばかりに繁藏は、白洲にこそは手をつかへ。

ト繁藏走り出て下手へ手をつかへ、

御用にござりまするか。

行平　ホヽウ、そちを呼出したは別儀でない。いまだ若年なれども、かねて武藝を心懸くる其方なれば、重き役儀を申付ける。最前の曲者繩を切り、逃げ失せしとあるゆゑ、汝に追人の役を申付くる間、はや打止めよ。

繁藏　ハツ、畏つてござりまする。

ト繁藏行かんとするを、蘭平引止めてこなし、

蘭平　ア、こりや〳〵、忰、待て〳〵。（ト思入あつて）恐れながら申上げます。縛を切つて逃ぐる程の曲者。なか〳〵繁藏如きの小腕にては叶ふまい。此儀は拙者めに、仰せ付けられ下さりませう。
行平　ヤア愚かや蘭平、汝が骨柄人に勝れて逞しく見ゆれども、刃物を見ると忽ち亂心となる難病ならずや、是非とも此儀は、忰繁藏に申し付くる。
蘭平　ア、それは一途の御料簡。そこが下世話に申す氣違ひ水を濺さずとやら。假令刃物は見たりとも、一心に打たうと思へば、仕果せぬ事ござりませぬ。此儀はひたすら拙者めに。
繁藏　イヤ父さん、御主人のお指圖を受けながら、此方をやつてはわしが卑怯者になりまする。
トいふを、蘭平繁藏を下手へ連れて來り、
蘭平　ハテサテ、片意地な。又父がいふ事聞かぬか。
繁藏　イヤ、さうではなけれど、
蘭平　そんなら、まあ待て。
行平　蘭平控へイ。
蘭平　デモ、此儀は。

行平　主の詞を背くか。

蘭平　イヤ、全く以て。

行平　左樣でなくば、控へてをらう。

蘭平　ハツ。

行平　サ、繁藏はや行け。

繁藏　ハツ。

〽いひつゝ凛々しく身を固め、後をしたうて走り行く。

ト繁藏花道の揚幕へ走りはひる。後蘭平心遣ひの思入にて、花道中程に座りゐる。鳴物管絃になり

行平　イヤ、最前から問はう〳〵と思うてゐたが、それなる男子は何者ぞや。

與茂　ヘイ、私は松風が兄でござります。失禮をも顧ず、これに控へてをりまする。イヤモウ、ずんと御遠慮のない者でござりまする。

行平　イヤ〳〵、兄なれば窮屈々々。松風に打解けて話しもなるまい、次へ立つて休息しや。

〽不興に見ゆれば、御臺も遠慮の心附け

水無　御前、後程御機嫌伺ひませう。

ト管絃にて水無瀬、腰元を連れて奥へはひる。

〽しづ〳〵立つて入り給へば。

行平　イヤナニ、與茂作とやら、用事はない、立て〳〵。

與茂　へイ。

〽與茂作も手持なく、天窓掻き〳〵立上り、勝手へ行くふり二足三足、何思ひけん振返り、木部屋へそつと身を忍ぶ。

ト與茂作思入あつて下手の柴垣へはひる。隔平やはり向うを見詰めてゐる、

行平　サア松風、こゝへ〳〵。扨何から言はうやら、先づ都へ歸ると共儘迎ひに遣らうと思うた、嘸かし待兼ねてゐやつたであらうなう。

りく　ハイ、左樣々々。

行平　但し、忘れてゞもゐやつたか。

りく　ハイ、左樣々々。

行平　これはしたり、いぶかしき返事の仕やう。ア、聞えた。そなたを此處へ呼寄すからは、其の形

見はもう入らぬ。戻さうと思うても、持つて來たを手に取りもせなんだゆゑ、左樣〳〵か。

ハヽヽヽ(ト思入あつて)コリヤ蘭平、この形見こゝへ持て。

ト いへども蘭平一心に向うを見詰めゐる。

ヤイ蘭平、その裝束と烏帽子、これへ持て。

〽見向きもやらず一心不亂。行平卿は威猛高。

ト返事せぬゆゑ、松風いろ〳〵心遣ひの思入。

ヤア言語道斷、憎い疋夫め。辛に慮外も顧みず。忰を庇ふ不忠者。手討になさん。

ト行平キツとなり、枕刀を拔き、

〽枕刀押取つて、すらりと拔いて振上げ給へば、アッと叫んで仆れ伏す、氣も絕え入るよと見えければ、おりくは傍へ立寄つて。

ト蘭平ちよつと氣絕のこなし、行平件の刀を持ちこなし、おりく蘭平の介抱をする。

りく アヽこれ〳〵、奴殿。蘭平殿いなう。

〽呼びつゝ介抱する內に、むつくと起きてあたりを見廻し、

蘭平　ナンダ〳〵。おりや此處へ何しに來た。オヽさうぢや〳〵。アレ〳〵〳〵。嫁入ぢや〳〵。ハヽヽヽヽ、成程な。一世一代の祝言に此形では行かれまい。幸ひ此處に裲襠綿帽子もこれにあり。

ト前なる烏帽子裲襠に思入あつて取上げ、

〽これを着ませといふ儘に、しどろもどろに引纏ひ。

ト烏帽子手裝束を引かけ、中啓を以て前へ出て、

アレ〳〵〳〵、彼處に君が待つてぢや〳〵。

〽言ひつゝ駈け出すを、おりくは向うへ立塞がり。

ト蘭平ツカ〳〵と上手へ行くを、おりく留めて、

りく　オヽけうと。何を見付けてキョロ〳〵と、どこに人がゐるぞいなア。

蘭平　ソレ〳〵そこにわれが待つてぢや。

りく　だれがいなア。アリヤ、アリヤ松ぢやわいの。

蘭平　何ぢや。松ぢや。どれ〳〵、ほんに。

〽松ぢや。

ヤイ、そこな浅松め。わしと花見に行くがをかしいか。

〽笑ふ人こそ法界悋氣、羨しうはなるまいぞ、主さんごんせと先に立ち、小褄からげてしやな〳〵と歩み振り。

ナント見事であらうが、エ、美しう咲いた〳〵。よう咲いた。

ト華やかなる鳴物になり、振事になる。

〽咲いた櫻になぜ駒つなぐ、ヨウイナ、駒が勇めば、ヤンレ、花が散る。

アレ〳〵、駒さへ勇むに、そこにそもじは、何故浮かぬ。

〽おりくが顔を打詠め。

ト蘭平おりくの顔を覗き、

ア、聞えた、そんなら今の唄が氣に入らぬか。そんなら拍子にかゝつてやつてくりよ。

〽浮かそ〳〵と辛氣な顔を浮かせ、浮いたる物を取りては、鵜川の鵜舟に魚が浮いてうン呑んだ、龍田川には紅葉が浮けば、吉野川には櫻を浮かし、桂川には筏を浮かす、まだも浮かずば瓢簞腰にかッ付けて、鯨川へ飛込んで、エ

エぬるり〳〵〳〵〳〵、うつぽり〳〵浮いて來た、誰も浮れたかいの、やつさ〳〵。

りく　コリヤ、やつさ〳〵。オツト待つたり〳〵、大事の殿御に引別れ、とてちやん所ぢやござんまい。

〽あら戀しやさるにても、又何時の世に逢ふべいぞ。

蘭平　ハ、、、、女子だてらに逢ふべえとは、何ぢやぞいなア。

りく　何ぢやとは、何ぢや。

蘭平　ほんに、なりに似合はん奴さんぢやテ。

オ、。

〽奴々何すべえ、お草履摑んで尻振るべえ。

イヤ、これわい、扨な。

〽あれはい扨な、供先かたよれ、すつくり姿詞もあやもなく、狂ひ狂ひて伏轉び正體なくぞ見えにけり、行平始終御覧あり。

行平　ナント松風、見やつたか。座れついたる難病とはいひながら、思へば不便なものぢやなア。

ヘ拔身を納め給ふと等しく、蘭平むつくと起上り、あたりきよろ〳〵見廻して。

ト行平刀を納め、おりくと思入よろしくある。

ト蘭平起上り、

蘭平　こりや何ぢやナ〳〵。ヨウ勿體ない、お旦那の御裝束。何としてこのやうに。

ト つく〴〵考へ、おりくの側へ寄り、扨はと思入あつて、

ハヽア、扨は例の持病が起つたか。ヤレ〳〵〳〵松風樣。イヤ申し松風樣。もしや唯今これにて下郎めは、慮外はござりませなんだか。

りく　コレ、あつたぞえ〳〵。慮外の段は、君の御前で踊り狂うてナ。

蘭平　ハヽア、南無三、情ない病、アヽコレ。モシ〳〵あなたは旦那のお氣に入りなれば　そこを宜しう、お詫びなされて下さりませ。

りく　アイ〳〵、申上げて見ませうわいの。我君樣、唯今お聞きの通り、下郎めが慮外の段、お許されて下さりませうならば、有難う存じまする。

蘭平　段々の不調法、御許しなされて下さりませう。

ヘ面目づらに砂まぶれ、消えも入りたき風情なり。

行平　ホヽウ、慮外も恥も辨へぬ、性得病の業なれば許す〳〵、蘭平には用事はない、勝手へ參つて休息しやれ。

蘭平　ナニ、スリヤ唯今の不調法を許され、その上下郞めはあの部屋へ參つて休め、でごはりまするか。ネイ〳〵、有難う存じまする。

〽と立つ間遲しと我子を氣遣ひ、後をしたうて。

これわいさのさ。

〽急ぎ行く。

ト悅ばしき思入。一腰持ち、身ごしらへして、花道へ走りはひる。

行平　サア〳〵松風。こゝへおぢや。アレまだうぢ〳〵と、どういふものぢや。誠に須磨では賤の夫婦同然、兎角心易いを樂しみに、汐まで汲みに參つたではないか。それに暫く遠さかつたとて、ひぞらぬもの、サヽ近う〳〵。

りく　ハイ、そのお調べもお疑はしう存じまする。

行平　オヽその調べで思ひ出した。配所の內、枕の伽に夜のつれ〴〵、面白う慰めてたもつた事、

りく　今此處で、所望ぢや〳〵。

りく　ハテ、わつけもないお好み。不調法の私が爪音、お慰みにはならいで、結句お氣の障りにならうもの。

行平　イヤ〳〵、それが却つて、氣の障りならず。誰ぞ、琴を持て。

腰元　畏りました。

ト奥より腰元△□琴を持ち出て、二重よき所へ置く。

行平　サア〳〵一曲、是非とも所望ぢや〳〵。

りく　スリヤ、どうあつても。

行平　いかにも。

ト兩人思入あつて、おりくしぶ〳〵二重下へ控へ、

〽いやとも言はれずどうなりとも、お心任せと押直り、音色やさしき爪音に。

トこなしあつて琴にかゝる。

琴唄〽わくら葉に結ぶ妹背のなかの原、憎や二つに引別れ、巻けども解けぬより糸の、結ぼれ解けぬかた思ひ。

トよろしく唄ある。この内行平脇息にもたれ睡るこなし。下手柴垣より以前の與茂作、藁苞より一腰を出し、窺ひゐて、おりくに行平を斬れといふこなし。おりくそつと懐劔を抜き斬りかゝる。行平目を覺ますゆゑ、又琴にかゝり手ごとになる。與茂作あせりて二重へ上り、行平に斬り付ける。行平と立廻り、與茂作取つて押へられる。

〽與茂作は氣をあせり、そろり〳〵と窺ひ寄つて、後より斬付くるを引外して膝に引敷く折柄、蘭平親子首引提げて立歸る。

トこの文句の通り、繁藏蘭平、以前の件の七郎の斬首を持ち走り出て、

行平　ヤア、よい所へ蘭平、慮外の曲者、繩かけろ。

蘭平　ハツ。

トツカ〳〵と來り、與茂作を突飛ばし、腰の三尺にて縛る。

〽ハツと答へて蘭平は、親子御前にかッつくばひ。

ハヽ、伜繁藏、唯今の科人追駈け首打つて立歸りましてござりまする。

行平　オヽ出來した〳〵。予が推量に違はず、器量備はる繁藏、褒美として近藤の二字を取立て、武士となして召使はん。手柄の様子奥にも知らせん。繁藏に休息させよ。

蘭平　エヽ、スリヤ武士に取立て遣はさんとナ。伜、御禮申せ〳〵。
繁藏　有難う存じまする。
行平　オヽ嘸かし悦び、何は兎もあれ蘭平には用事もあり、繁藏は先へ參つて休息しやれ。
蘭平　ソレ〳〵御前樣の御意ぢや、早く行け〳〵。
繁藏　左樣ならば御前樣、後程伺ひまするでごはりまする。
〽手柄初めの身の面目、悦んでこそ入りにける。
ト繁藏思入あつて、上手へはひる。
行平　コリヤ蘭平、その與茂作とやら、油斷ならざる不敵の曲者。今予が微睡みしを忍び寄り、斬りかけんとせし奴、仔細ぞあらん白狀させよ。
蘭平　ハツ。君に敵たふ曲者、何者に賴まれた、眞直に白狀いたせ。
〽きめつくれば、與茂作驚く氣色もなく。
與茂　イヤ、全く行平公に慮外は致さぬ、暫く假睡み給ふ內、松風が琴を止めしゆゑ、叱るを不作法と嚇しの爲の此の刀、御覽じての御疑ひ、近頃もつて迷惑に存じまする。
蘭平　ヤアぬかすまい、うぬなか〳〵並大抵では有やうに白狀はせまい、おのれが御主人に敵たへば

あの松風も胡亂者。イデ、兩人とも。

トキット立掛るを、行平留めて、

行平　ヤレ待て、蘭平、彼が所存は豫て知る、予に刃向ふ仔細はあるまじ、其奴をきつと詮議いたせ。

蘭平　畏つてごはります。ア、コレ、痛い目せぬ內有やうに白狀いたせ。

與茂　如何やうに責めらるゝとも、白狀する覺えはないわ。

蘭平　イヤし太い奴の。

ト蘭平刀にて、與茂作をこぢる。

サアこれでもか〳〵。

與茂　ア、如何なる責にあふとても、知らぬ事は何處までも。

行平　ハテ大丈夫なる其奴が胸中、一筋繩ではよも白狀には及ぶまじ、庭の樹木に釣上げ、白狀させよ。

蘭平　ハツ、與茂作立たう。

〽哀れ催す戀の綱、われが契りは此世から、離れ〳〵の憂き思ひ、妻は覺えも荒くれし、苛責にかゝる苦しみは、氣も魂も厄難に、憂目を助け給へかし。

トこの内荒縄にかけ、與茂作を引立て〳〵、上手の紅葉の側へ引据ゑ、件の縄を紅葉の枝へ引掛け、蘭平は遙か下手へ來り、縄を次第に引上げる、與茂作はこれに隨ひ、よき所まで釣上がる。

蘭平　サアどうだ、まだまだ巻出さぬか、しぶとい奴だ、ぬかさにや斯うして。

トキッとなり、又手荒く引下げる。與茂作こなしあつて。

與茂　ア丶苦しや、たえがたなや、こ丶を少し弛めて下され。

行平　ソレ蘭平、白狀と覺えたり、縄を弛めい。

蘭平　ハツ。

〽畏つたと巻上げし、釣縄弛め引下ろし、御前に引据ゆれば。

ト蘭平手早くおろし縄を解き、よき所へ與茂作を引据ゑる。

サア、責は弛めた、白狀いたせ。

與茂　本望達するまではと包みしが、苦痛に絶えかね白狀いたす。元某は敵討、わが親與太夫といふ者、如何なる遺恨にや、大門通りに於て、行平卿の御手にか丶り、相果つる其節より、おのれ敵を討たんずものと、附狙ふその内に、行平卿には須磨へ流罪と聞き、殘念ながら是非に及ばず、無念の月日を送る内、此度の歸洛、天の與へと僞り、入込みし甲斐もなく、斯く成り果つ

るは運の盡。サア尋常に首討たれよ。

〽思ひ切つたるその風情、行平始終を聞し召され、

行平　ハテ心得ぬその一言、我一生に人をあやめし覺えはなし。汝が親の與太夫とやらんも知らず。定めしそれは人違ひならん。

與茂　ヤア、そりや御卑怯にござらう。今眼前に首打たるゝ場所に至り、僞を申さんや、尊きも賤しきも命惜しまぬ者はなし、上一人の掟より下萬民これに盡くるとは此の事。エヽ口惜しき世の有樣ぢやなア。

〽飽くまでさみする雜言に、行平暫く御思案あり。

行平　我身に覺えなけれども卑怯の名を取らん事本意ならず。ソレ〳〵蘭平、彼が一腰渡してやれ。

〽心ありげに件の一腰。

ト蘭平與茂作に刀を渡す。

今命を助かる上は、尋常に此所に於いて勝負して取らせんが、予が云ふ事よく聞け。先つ頃漂浪の身の上、其砌に大内には、御兄弟の御位爭ひの虛に乘じて、宗岡が秋定を害して大功成る。寶器の所在とても定かならず、それゆゑ參内だにも延引いたし、敵討も今は叶はず。御寶

器知れし其上にて、望の通り勝負して得さすべし、先づそれ迄は身が名代として、蘭平と勝負を決せさせん。

蘭平　イヤ〳〵我君。私めは例の難病、刃物と見れば忽ち亂心致しまする。何の役にも立ちますまい、此の役目ばかりは御免なされて下されませ。

行平　イヤ〳〵その又役に立たぬ者が、氣違ひ水を溢さずと、一心に討たうと思へば、仕果せぬ事はないと、最前そちが申したではないか。

蘭平　左樣ではござりまするが。

行平　最前のは僞りか。

蘭平　イヤ、全くもつて。

行平　然らば、勝負致すか。

ト蘭平思入あつて、

蘭平　成程委細畏つてござりまする。

行平　コリヤ〳〵、與茂作とやら、蘭平と、勝負を決し、此場を斬り拔け後日に來れ、その時には行平が勝負をして取らすべし。サア、松風は身と一緒に、久しぶりにて奥庭の紅葉を詠め、腰元

共に酌取らせ、一獻酌まん。兩人、其旨心得たか。サ、松風來れ。
〽打連れて帳臺深く入り給ふ。
トこれにて一面に御簾をおろし、二重の行平おりくをかくす。後に蘭平與茂作殘る。
〽跡見送つて蘭平が、

蘭平　エヽ蛙は口ゆゑと、猪口才な事をいうて、ひよんなお役目を言ひつかつた。かりそめながら命づく。コリヤ見事勝負するかよ。

與茂　エヽ、おれが事よりわれが事、刃物を見ると氣違ひになるではないか。その病氣を相手にするは大人氣なけれど、といつて助けてもおかれず、不便ながらも打殺して此場を立退き、後日に行平に出會うて勝負をするわえ。

蘭平　ハヽヽヽヽ。そのやうに手輕い奴さんぢやないわい、われが刀を拔いて斬りかかる内には、コリヤ此のお手が遊んでゐぬわい。

與茂　オヽさういへば面白い。われ見事勝負するかよ。

蘭平　われ亦腕れてみるかよ。

與茂　勝負せいよ。

蘭平　サア。

與茂　サア。

兩人　サア〳〵。

蘭平　まだぢやぞ〳〵。拔くなよ。拔くなら聲をかけ、聞かぬ内拔いたら卑怯だぞ。
〽双方一度に詰寄つたり、身繕ふ間も與茂作が、唯一討と氣を焦ち、拔かんと
する刀の柄をしつかと取り。

蘭平　ナント拔けるか。イヤ拔くまい〳〵。これからがこつちの手ぢや。
〽もんどり打たせ差込む手先、鍔でぐわつしり、續いて來るを身をかい潜り、
すらりと拔いて斬りかくる、どつこいまかせと腕首摑む、與茂作びつくり。
ト大小入りの鳴物になり、この文句の内、よろしく立廻りあつて、蘭平與茂作の刀を押へ、

與茂　ヤ、わりや刃物を見ても、氣違ひにはならぬか。
〽いへどもぐつとも返答せず、拔身の燒刃切先とも、ためつすがめつ熟々見て。

蘭平　コリヤこれ紛れもない天國の銘作（ト思入あつて）ムウ、ハテ心得ぬ。これを所持する其の方は。

與茂　それを聞いて、何とする。
蘭平　いかさま、迂闊に名乘らぬも尤も。この蘭平が帶する刀、これを見よ。
ヘすらりと拔いて差出せば、訝りながら篤と見合せ。
ト蘭平刀を拔き、與茂作も刀を出して互に見較べこなし、
與茂　ムヽ、コリヤこれ、同作の天國、しかも大小揃ひしは豫て聞き及ぶ、父伴の實澄殿讓りの二腰。
蘭平　オヽ幼き時より東國西國と互ひに隔て面はしかと知らねども、名前は豫て聞き及ぶ。
與茂　こなたは兄の、義雄殿でござりまするか。
蘭平　こちが弟の義澄なるか。
與茂　親の讓りの天國が、
蘭平　我々が守りとなつて、
與茂　遠國波濤を隔てゝも、
蘭平　互ひに通ずる肉身の、
與茂　思はず出逢ふ、
蘭平　此の場の名乘り、

與茂　あなたも堅固で、
蘭平　そちも無事で、
與茂　ハテ、不思議な對面、
蘭平　なす、
兩人　事ぢやなア。

〽絕えて久しき兄弟の、名乘り合ひしも血筋の緣、不思議々々々々とばかりにて、
悅び合ふこそ道理なり、蘭平猶も聲ひそめ。

ト兩人よろしくこなし、三絃入り音樂になり、

蘭平　先達御位爭ひの祈りから、實父紀の三位名虎卿に對面なし、養父實澄殿の臨終の事共一々聞き、その節大納言宗岡を討つて御寶わが手に入つたる上は、實父養父の恨みある、小野の篁在原の行平殿、先づ此家へかく姿を窶して入込みしも、折を得て行平を害し、預かりの寶劍を奪ひ取り、年來の恨みを晴さんそのため。
與茂　ム、お出來しなされた兄者人。某とても女房が、松風に似たるを幸ひ、近寄つて行平を、最前討たんとせし所見顯はされしゆゑ、敵討というたも僞り。

蘭平　ホヽウ、斯く兄弟心を合せる上からは、此場を品よく取繕ひ、日ならず本望達すべし、先づ其方は女を伴ひ、片時も早く、此場を立退かれよ。

與茂　イヤ〳〵、某夫婦此場を立退かば、其許様の。

蘭平　イヤ苦しうない、難病ゆゑ取逃がしたといへば濟む。

與茂　しからば萬事は追ての密談。

蘭平　何かは重ねて、

與茂　北嵯峨にて待合さん。

蘭平　弟。

與茂　兄者人。

蘭平　急げ、

與茂　ハツ、

〽言捨て奥と勝手口、別れてこそは入りにける。

ト蘭平は上手へ、與茂作は下手へはひる。これにて本神樂になり、上手より盜賊黒四天忍びの頭巾をかぶり出て來り、あたりへこなし。

盜賊　豫て蘭平と心を合せ、此處まで忍び入つたれども、勝手知れざる御殿の内。ハテナ、何は兎もあれ、行平が寢所へ忍び、オヽ、さうだ。

ト行かうとする。上手より以前の水無瀨御前、長刀を持ち窺ひゐて、

水無　怪しき曲者。そこ一寸も動くまいぞ。

盜賊　オヽ、誰かと思へば、小兒に等しき女童、身共を留めて何とする。

水無　何とするとは不敵の曲者、夜中に忍び入つたるは、敵方の廻し者なるか、但し金錢財寶に心を寄する盜賊なるか。

盜賊　女だてらに猪口才千萬。其處おツ開いて通しやアがれ。

水無　さいふ汝が。

トちよつと早き合方にて、兩人立廻りあつて、キツと見得。

盜賊　しみ執拗い女めだ。邪魔立すりやア不便ながらも打放すぞ。

水無　何を小癪な。

ト立廻つて、盜賊水無瀨を引付け討たんとする。此時上手より矢聲すると、盜賊首元を貫かれ、これにてウンと倒れる。

これは。

ト合點の行かぬ思入。此時上手奥にて、

行平　騷がれな、水無瀨御前。

ト これにて御簾を卷上げる。と三絃入り管絃になり、以前の行平卿弓矢を携へ出て來る。

水無　ヤ、我が君樣、此の體は。

行平　ホヽウ、如何なる異變もあらんかと。名虎大伴の餘類を見出さんため、疾より心を碎きをるわい。

水無　道理こそ御歸洛あつて、御病氣と披露して、參内も遊ばされぬも。

行平　オヽ、それぞ深き所存あつての事。

ト上手へこなしあつて、

ヤア〳〵蘭平、曲者一人捕へたり。早參れ。

蘭平　ハツ。

ト上手より、蘭平ツカ〳〵と出て、下手へ控へ、

ハツ、御用でござりまするかナ。

行平　オヽ歸洛いたせし砌より、いまだ參內せざりしが、今ぞ知れたる三種の御寶、此處へ出してしまやれ。

蘭平　エ。

行平　間者を入れて疾く知つたり、サ眞直に出してしまやれ。

蘭平　これは思ひも寄らぬ君のお詞。素中間のこの蘭平めが、大切なる其御寶とやら、なんで所持仕りませう。

行平　富樓那の辯にて言負けるとも、天理に背く紛れ者、眞直に白狀いたせ。

蘭平　知らぬ〳〵、オヽずんど知らぬ、但し此奴が奪取つたといふ、何ぞ確かな證據がござるか。

水無　オヽ、論より證據に、めんばれさす。

ト上手へこなしあつて、

與茂　それなる兩人早や參れ。

ト一挺入りの合方になり、以前の與茂作吾人となり長袴に着替へ、おりくは襠衣裳になり出て來る。

りく　ハア。

へはあと答へて夫婦の者、ありし姿に事變り、優美正しく詰寄れば、蘭平見る

より不審の思ひ、

蘭平　ヤ、、、、與茂作夫婦のその姿、こりやどうしたことだ。

與茂　ホ、ウ不審は尤も、我れ北面の武士なりしが、行平卿の命により、夙くより疋夫と姿を變へしも、御寶詮議のその爲に、弟といひしも僞りにて、誠は大江の音人とは我事なり。

りく　そちが詞に隨うて、松風と僞りて入込みしも、裏の裏行く御臺のお指圖。

水無　誠汝が弟といふは、最前繁藏が追駈けて、首討つたるが弟なるわ。

蘭平　ナニ、スリヤ最前の盜賊が誠の弟であつたるか、こりやどうぢや。

へ呆れ果てたるばかりなり。

與茂　かくあらんと察せしゆゑ、面體知らぬ女房を、松風と僞り、此所へ連れ來りしも。

行平　汝が素性を見出さんため。

水無　皆言合せの手段と知らず。

りく　打明したる汝が本名。

與茂　最早叶はぬ孔雀三郎。

行平　御寶渡して繩かゝるや。

蘭平　サアそれは。

與茂　但し踏附け、繩かけうや。

蘭平　サアそれは。

行平　本名明かすか。

蘭平　サア。

行平
與茂　サア。

三人　サア〳〵。

行平　サヽ返答は。

行平
與茂　ナヽ何んと、

蘭平　ムウ。ちえヽヽ、殘念やなア。

〽さしも不敵の蘭平もはッとばかりに返答なく、五臟六腑を込上げ〳〵、身を震はしてゐたりしが、やゝあつて氣色を正し。

蘭平　われ宗岡を害し御寶を奪ひ、まつた行平を恨む事非道にあらぬ一通り、語つて聞かせん、よッ

く聞け。

〽語り聞かせんとどつかと坐し、

ト肥前節になる、

元來我が父伴の實澄は、平城天皇四代の後裔、此在原も平城の孫。同じ血筋といひながら、應天門の燒討は、實澄が科なりと、行平篁が讒言にて、勅勘の身となり、大和の國柿の本に身退き、其折から我は良雄丸と呼びありしが、この鬱憤晴らさんため、大內へ近寄る內、いつぞや騷動の折から、紀の三位名虎公に出逢ひ、我が父は名虎公と知りし上、その實父の此世を去りしも、篁行平が業と初めて知る。一方ならぬ實父養父の二敵、うぬ等を殺した其上で、御寶を持つて高位口位を望まんと思ひしに、却つてわい等に見出されしか、殘念やなア。よしよし假令此身を圍むとも、所持なす御寶渡さうか。

〽詞鋭く言ひ放せば。

與茂　ヤア、飽迄根强きその雜言。者共、ソレ。

ト上手へこなし。ぢやん／＼になり、黑四天六人出て來て、關平を取卷く。

捕手　動くな。

蘭平　ならば手柄に捕つて見よ。
捕手　何を小癪な。
　　　　トちやん〳〵にて、捕手六人は鐺にて突いて掛る。ちよつと立廻りあつて、蘭平皆々を追込み、下手へはひる。
行平　此上は水無瀬おりく諸共に、奥殿に詰めたる力士の者に、館の四方を取巻かせよ。
水無りく　心得ました。
　　　　ト早舞にて、水無瀬御前おりく上手へ甲斐々々しくはひる。直にバタ〳〵にて、下手より以前の捕手二人出て來り、
捕手　ハツ。蘭平めを新手を入替へ取巻きますれど、我々の手に叶ひませぬ。此上は御加勢下さるべし。
　　　　ト兩人言捨て、直に下手へはひる。行平卿こなしあつて、
行平　スリヤ、組子の者の手に餘るとや。
與茂　シテ、我君の御所存は。
行平　コレ。

トこなしある。與茂作ツカ〳〵と行平卿の側へ行く。兩人囁く。

合點が行たか。（ト思入あつて）ナ。

ト與茂作に呑込ませる。

與茂　ムウ。

ト思入あつて、段へ長袴を踏みかけるを木の頭。双方こなしにて、道具幕をかぶせる。

本舞臺一面に筋塀の道具幕になる。寄せ太鼓にて納まる。と、捕手の皆々上手へはひる。知らせにつき道具幕を切つて落す。

本舞臺一面打拔き庭の遠見。上下紅葉の立木。同じく釣枝。正面に常足三間の二重、此上に一間餘の石の井筒井戸。此上にて立廻りある丈夫向きの事。こゝに綱釣瓶を置き、蘭平大童のなり、拔身を振上げ是を花四天の捕手總出にて、竹梯子を組上げ、この上へ蘭平上り目得。アリヤ〳〵バタ〳〵にて道具納まる。とちよつと立廻りあつて、キツと目得より、誂へ鳴物に替り、梯子を持ち、銘々仕拔きの立廻り、好みの通りあつて、又大小入り鳴物になり、綱釣瓶をかせによろしく立廻りあつて、トゞ蘭平繁藏を呼びながら、花道へ行き、立廻りあつて、本舞臺へ來り、花四天を相手にて立廻りあつて、

ト ゞ是を追込み、花道附際にて向うを見込み、キツト見得。この時上手にて

行平　ヤア〳〵、孔雀三郎義雄、在原の行平。

音人　大江の音人、今改めて、

行平
音人
水無
りく　見参〳〵。

蘭平　ヤヽ何んと。

トツヽカケになり、上手より行平卿、烏帽子直垂、弓矢を持ち、水無瀬袷袴衣裳にて長刀を持ち、下手より音人長袴大小にて、おりく袷袴衣裳長刀を持ち出る。蘭平これを見て、

チエヽ口惜しや、残念や、斯くまで我を計りしよな。此の上は是非に及ばぬ。片つ端から覚悟いたせ。

行平　ヤア覚悟弱はり事をかし、降参なすか、さなきに於ては、今行平が手を下さうや。

音人　アイヤ我君。御手下さるゝまでもなし、それがし屈竟の組子一人召連れたり、ヤア〳〵、巾附けたる組子の者、はゝ参れ。

ト花道へこなし、この時揚幕の内にて、

繁藏　ハア。

トヂャン／＼にて、繁藏四天丸ぐけ、蒲の鉢卷、鐵十手捕繩を持ち、ツカ／＼と出て來る。

〽ハツと言ひて繁藏が、濃き紅の鉢卷に、四糸組んだる花襷、さも凛々しげに立向へば、

蘭平　ヤ、、、わりや繁藏、こりやどうぢや。

繁藏　最前我君より近藤の二字を賜はりて、お側近く召さるゝ所、主君に敵たう嗚呼の曲者。親子とて容赦はならぬ。サア尋常に勝負々々、

蘭平　小癪なる小童め。假初ならぬ親の追人は推參なり。恩愛に溺れぬ義雄が刀の切味見せてくれん。

〽潔う口にはいへど心には、悲しみ餘る目に涙、くろめかねたる風情なり。

行平　繁藏、早や捕れ。

繁藏　ハツ。

〽ハツといつて立寄りしが、子として親に繩懸くるは、勿體なや冥加なやと、思へば持つたる捕繩も、忠孝二つに責からむ、稚心ぞいぢらしや。

音人　ヤア卑怯なり義雄。廣言にも似ぬその猶豫、サア斬らぬか。サ斬れ。サ、サア〳〵。

〽わざとはげます手だての詞、聞くより無念と立寄つて、振り上げは上げながら、我子の愛に引かされて、さしも不敵の三郎も、子故の闇に目も眩み、不覺の涙はら〳〵〳〵、思ひ直してどつかと坐し。

ト蘭平繁藏の側へ行き、刀を振り上げ愁ひの思入。音人おりく行平と顏を見合ひ、氣をかへキットとなり、繁藏を抱上げ投出し、

蘭平　百萬騎の强敵にも、おさ〳〵劣らぬ孔雀三郎。斬抜けんとは思へども、悴にや叶はぬ〳〵。サア立寄つて繩かけよ。

繁藏　サア、それは。

蘭平　ヤア未練な奴ナ。この親に繩懸けねば、御恩を受けし主命立たず、イヤサ、忠義が立つまい。狼狽者めが。とは言ふものゝ道理〳〵、汝が忠義立てさせくれん。繩に勝りし御寶をば、汝へ呉れん。奉公初めの手柄にいたせ。

ト懷中より錦の袋入りの御寶を出し、繁藏に渡す、繁藏取つて行平の所へ持ち行き控へゐる。

行平　オヽ出來したく。斯く御寶再び返らせ給ふも、昔藏が忠義故、今日より伴の家名を引起し、家督相續いたしてよからう。

蘭平　ナニ、スリヤ伴の家を再擧下されんとナ。エヽ忝や。猶も頼むは音人殿、伴が身の上、最早此世に用なき軀、いづれもおさらば。

ト腹切らうとするを音人留めて、

音人　ヤレ待たれよ。切腹とは粗忽々々。一子出家の功德には、九族天に通ずるとあれば、實父養父の爲なれば、道心堅固に召されてよからう。

蘭平　いかにも仰せに隨ひ、出家となり、父の菩提を弔はん、今よりしては大和の國、柿の本寺に引籠り、紀の僧正と改めて、佛道修行仕らん。

行平　三種の御寶揃ふ上は、君の御代萬歳。これより直ちに參內せん。

音人　帝都の守護は、小野在原。

りく水無　伴の家名も開くる優曇華。

蘭平　此の場はこの儘。

皆々　立別れん。

〽さらば〳〵と立別れ、大和路さして、〽出て行く。

トどんちやん、ツヽカケになり、皆々よろしく立並び、よき見得にて。

幕

蘭平物狂（終り）

彦山権現誓助剣
ひこさんごんげんちかひのすけだち

彦山權現誓助劒（毛谷村通し＝六幕）

毛利家庭先の場
同廣間の場
八幡宮社前の場

序幕

役者 毛利音成、吉岡一味齋、京極內匠、衣川彌三左衞門、同彌三郎、辻新左衞門、門脇義平、奴友平、春風藤藏、百姓四人、近習大勢、若黨佐五平、醫者左仙、大工三人、吉岡の家來、春風の家來、中間盆內。奥方眞弓、腰元お菊、他に腰元四人、一子彌三松、娘おその。

本舞臺正面庭遠見、上手一間の亭座敷、成たけ美しく飾りある誂へ、舞臺一面櫻の立木、諸所に石燈籠澤山あり、下手寄りに泉水、亭の横手に風雅なる門を置き、すべて毛利家奥庭の體。爰に床几二脚毛氈をかけ、此見得唄入りの賑やかな鳴物にて幕あく。と仕出し仙右衞門、磯八、十兵衞、太郎兵衞の四人、百姓のこしらへにて來り、

仙右　何と皆の衆、何處を見ても結構な事ぢやないかい、御泉水の石一ツでも大枚の小判道具と、噂に聽いただけ俺はたまげ果てた。御目出度ならこそこんな所を見られるは、長生の德といふものぢや。

磯八　今度の御目出度の根をとへば、久吉樣が、亂を鎭め泰平とさつしやつたは、きつい其身の大功であつたので、それで名を太閤樣といふさうだ。

十兵　その太閤樣が唐を取つた、軍の名代を此殿樣がさつしやつたも、軍に強いといふものぢや。

太郞　それで今日の御目出度ぢや、廣い日本が取足らいで唐まで取らうとは、武士の腹といふものは別なものぢやなア。

仙右　ヲヽさうぢや、あなたに限らず侍といふものは、よい敵見りやアあの首取り度い、よい國見りやアあの國取り度いが常、こちとらが女を見たやうなものぢやわい。

磯八　云うて見りやアそんなものぢや、然しそこらを見てぼつ／＼いなうか。

皆々　ヲヽさうしよう／＼。

ト皆々捨ゼリフにて下手へはひる、後謠への唄になり、奧方裲襠いせうにて、後よりおきく島田文金かつら、御殿もやうの着附、腰元八人附添ひ出て來り花道にて、

眞弓　コレ皆の者、今日お目出度の御祝ひに打揃うての舞振りも、面白い事ぢやないかいなう。

きく　御臺樣の仰せの通り、思はぬ氣晴しを致しました。

腰一　御傍に附添ふ私等も、思ひも寄らぬ御目出度にて、

腰二　命の洗濯致しました。

きく　何は兎もあれ御臺樣には、まづ〳〵あれへ、

皆々　入らせられませう。（ト舞臺へ來りよき所に住ひ、腰元皆々床几へ掛る。）

眞弓　此度久吉樣より我夫には、三韓征伐の代理を仰せ付けられ、其祝ひにて今日は百姓町人の者へ此庭を見せる祝ひ日なれば、そち達も慮外なく好める遊びをするがよい。

きく　お腰元衆、御臺樣より只今のお許し出たれば、思ふやうに樂しみを。

皆々　有難う存じまする。

眞弓　コレきく　そなたは私と一緒に奥庭を見て參りませう、腰元共は爰に殘り遊ぶがよいわいなう。

きく　左樣なれば御臺樣、斯う御越しなさりませ。（ト眞弓先に、おきく附いて上手へはひる。）

腰一　サア〳〵是からは私等の世の中ぢや、なア皆さん。

腰二　何をしたら面白うござんせう。

腰三　何よりも爰で、ほうろく調練を仕ようぢやないかいなう。

腰四　それがよろしうござりませう。

ト是にて撃劍の鳴物になり、いろ／＼面白き立合をする。よき程に合方になり衣川彌三郎出て來り。

彌三　コレ／＼腰元衆、あまりざは／＼騷がぬがよろしうござる。奧樣にもお待兼故早う奧樣の傍へお越しなされ。

腰一　是は／＼彌三郎樣、左樣なれば御免下さりませ。

ト是にて腰元皆々奧へはひる。彌三郎行からとする。おきく上手より出て來り彌三郎を見て、

きく　彌三郎樣、逢ひたかつたわいなア。（ト傍へ寄り添ふを彌三郎是を制し）

彌三　人目を忍ぶ互ひの身の上、見附けられてはどう云譯もならぬ故、氣を附けるがよい。

きく　サアそれは私も心得ては居りますけれど、掟きびしき此お館、逢ふ夜稀なる七夕の織姫樣も此やうに、思ひ焦れてござるか知らぬ。二人が仲の彌三松を生落したも四年前、姉樣のお世話になり古う勤める友平が里に預けて參つたれど、夫から後は奧樣の御傍放れず奧勤め、嘸ぞ可愛らしうなつたであらうと、尋ね問はうと思ふに付け私や一ぺん顏が見たうてならぬわいなア。

彌三　ヲヽそなたのさう思ふのは無理ではないが、まゝならぬは浮世の習ひ、緣と月日を待つがよい。

きく　申し彌三郎樣、あなたは男の事なればそのあきらめもつかうけれど、女子の心は狹いもの私しや顏が見たいわいなア。（ト彌三郎に寄添ふ、此時後ろにて、）

腰元　彌三郎樣〱々々。

彌三　ハヽ、只今それへ參りまする。

ト是にて彌三郎行きかける、おきくは彌三郎の袖をとらへるを振拂ひ唄になり彌三郎上手へはひる。おきく殘り、

きく　ドレ私も奧へ。（ト行かうとする。此時京極内匠袴なりにて出て來り）

内匠　おきく殿、お待ち下され。

きく　ヲヽ、誰かと思へば京極内匠樣、何ぞ御用でござりますか。

内匠　チトそこ元に話がござる、まアこれへお掛け下され。（ト床几へ掛ける）是おきく殿、出來ましたなう〱。

きく　出來ましたとは、なんでござりまする。

内匠　是は又きついお隱しやう、こつそりと子までもうけ、

きく　エヽ。

内匠　花も恥らふあでやかさ、引手數多は元より推察、日外からふつと見染めそれから今日まで思ふに瘦せた此京極、どうか叶へて下されい。（トおきくの手を取らうとするを拂ひ退け）

きく　めつそうな事仰しやりませ、御役柄の重き身にて不義徒らがあらはれては、貴方の御身にかゝはりませう。

内匠　ヲ、かゝはる合點、我心に隨へば是より直ぐに連れ退いて、東國なりとも都へなりとも立退く内匠が此心底、おきく殿何と憎うはあるまいがな。

ト又寄らうとする。此時一味齋繼裃のなりにて出て來り、此體を見て思入あつて、

一味　ヤイ娘、そちや何用あつて爰に居る、年若き男の傍、惡名受る基と知らぬか。御臺の傍へ早く行け。

きく　只今參りまする。

トおきく行きに掛る。内匠袖を取るを振拂ひ上手へはひる。内匠向うを見詰めて居る。一味齋肩を叩き。

一味　京極氏、これさ京極氏、貴殿と某は殿の御師範、國に二人の劍術使ひと人に知られし身を以つて、今のは何でござる。人無き折を幸ひに御異見申しに參つてござる。

内匠　コリヤ老人の御異見御親切は忝いが、此内匠御異見をば聞く氣はござらぬ。いやでござる。さう手前が知る上はもう隱さずと申し受くるわ。イヤナニ御息女のおきく殿、拙者が妻に申受けたい。

一味　默り召れい京極殿、掟を破り御法を背きし今の一言、上聞に達せばあすをも知れず腹切る御邊に、連れ添はず娘は吉岡持ち申さぬ。

内匠　スリヤ御承知は下さらぬか。

一味　知れた事、麒麟の子を鼠が目がけ妻にせうとは叶はぬ事だ、馬鹿〳〵しい武士でござる。

ト内匠は刀を拔き掛け、双方引張り、是を唄になり一味齋上手へはひる。内匠見て思入あつて、

内匠　もう此上はうぬが首、娘と共に添へて受取る。（ト行かうとする。此時春風藤藏、社袮にて出て來り）

藤藏　お待ちなされい京極殿。

内匠　春風藤藏殿。

藤藏　樣子は小蔭で承つた。御立腹は尤なれど今先生が手を下されては、戀の意趣討ち人聞悪し、恨みを晴らすしやうはさま〴〵。

内匠　實に尤、彼奴と御前の試合を願ひ、ぶち据へた上てつぺん押しに。

藤藏　サアさうなる時はおきくは奥方、一家となれば恨みはさらり、さうしてゆかずば又さま〴〵の工夫がござる。せく場所ではござらぬわい。（トいろ〳〵のみこませる。內匠思入あつて）

內匠　然らば是より御前へ願ひ、彼と試合の用意をなさん。

藤藏　然らば先生。

內匠　春風氏。

藤藏　後刻面談、

兩人　致すでござらう。（ト是より床の淨瑠璃になり）

〽しめし合せて兩人は奥と口とへ別れ行く。（ト是にて兩人別れてはひる。）

〽程もあらせず眞弓の方、數多の附き〳〵かしづいて、此方の亭へ出給へば、折から爰へ知らせの侍。

侍　ハ、申し上げまする。

藤藏　何事ぢや。

侍　今日御遊の折柄何卒忰が舞の一手、御上樣の御上覽に入れ度き望みとて、門前へ參り願ひます

るが那何計らひませう。

藤蔵　幸ひ奥様も是にござれば、一入の御慰み是へ通せ。

侍　ハヽ畏りました。サア通るがよい。

三松　はア。

〽斯くと披露に舞童子。

ト是にて頭三松猿のこしらへにて出て来り、後より友平猿廻しのこしらへにて是を使ひよき所に居て

〽五つばかりのうなひ子が髪も二葉の愛らしく、時の真似合猿廻し後に附添ふ男が高聲。

友平　これ〳〵何ぼ畳敷いたやうなお庭でも、さう走つて躓いたら、手や膝ぼん擂むきます、それ御前様ぢや〳〵。

〽と手を下げつくばふその顔を、一目見るより、

きく　ヤ、そなたは。

〽立寄らんにも御前の手前、差うつむいて泣いじやくり、友平は進み寄り。

友平　はい廻らぬ舌で申しまする、此小猿めは生れ落るから父御も母御も、アイヤ親猿の無い正眞の木から落た孤猿でござりまするが、もう〳〵夫は〳〵並大抵な世話ぢやござりませぬ。夫でも親子の縁といふものは深いものでござりまする。とゝ樣が見度い、母樣に逢ひ度いと、常々親を慕ひなさるそのいとしさ、今日は無禮講にて町人百姓へお庭をお見せなさるとの噺しでござりまする。さすれば多くの人の込入り、もしその中によう似た人もござりませうかと、夫故はい〳〵連れて參りました。只今舞せまするも、たつた三日稽古したのでござりますれば、無調法でござりませうが首尾よう舞おふせましたら、外に何にも望みはござりませぬ。御褒美には此猿めを抱いておやりなされて下さりませ。サア〳〵猿どの、これいなうさりとは〳〵きよろ〳〵した太夫ではあるわい。あの又見たがるも無理ではない、親御の傍にありながら、アイヤ〳〵母御によう似た小母樣があるは、子供といふものは扠ても〳〵目出度いなう。

〽秋津洲や黄金升にて米斗る〳〵、ひんだの踊りは面白や〳〵。

ト彌三松踊る事あつて

三松　べいよ、かゝ樣やとゝ樣に似た小母樣や小父樣はどこにぢや。

友平　これ無理云ふまいぞ、舞うて仕まうたら後で爺が云うて聞かす。サア〳〵早う舞うたり〳〵。

ト下座の唄になり、

へ夜さの泊りは何處が泊りぢや、俺がうちにはかぢ枕〱。

トいろ〱斷る事あつて、

眞弓　年端もゆかぬ幼子に、教へも教へ舞も舞たり、附きし男が詞に斯く並んだる其中に、よう似た小母があるとや。慕ふ子よりも慕るゝ親の心は嗟や嗟、ナウ彌三郎きく、そち達二人も今の間に似合の縁の妻夫、もうけるやゝの抱きならひ、抱いて見るもよからうわいなア。

へ情の底意奥深く、一間へこそは入りにけり。

ト眞弓思入あつて奥へはひる。後に腰元皆々傍へ寄り、

腰一　サア色もくつきり手足の尋常、年は幾つぢやえ。

三松　アイ。(ト指にて数へる。)

腰二　ヲヽ五ツか、さうして母様はどうしやつた。

三松　アイわしは父様も母様もない。よう似た小母様や小父様を見せるとてべいが爰へ連れて來た。

腰三　ヲヽ可哀相に孤子が。こんな子を産んだ母御なら、嗟よい器量であらうぞいなう。

腰四　さうしてよう似たとあるからは、定めて私であらうがな。

三松　いゝや。

腰一　そんならわしかや。

三松　いゝや。

腰二　そんならわしかや。

三松　いゝや。

腰三　そんならわしであらうがな。

三松　いゝや俺は外の小母様はいやぢや。アノ伯母様に抱かれ度い。（ト此の浄瑠璃にておきくと彌三郎の傍へ行く。）

〽いふも天然親子の縁、傍へ駈け寄り彌三郎。

彌三　利口な小猿め、抱いてやれと奥様よりお許しの出た上からは誰が咎めう、親とまがへて慕ふその小猿、心ゆかしにちつくりと抱いてやられよおきく殿。

〽云ふは抱きたさ百倍の、思ひも一つ兩の手に、引寄せ引〆め抱き上げ、親とも子とも名乗られぬ切なさ、餘所にかこつぞいぢらしき、傍に友平貰ひ泣き、

浮む涙を押ししづめ。

トよろしくこなし。此時友平前へ進み、

友平　親は子を思ふ子は親を思はぬとは、此お子から見れば譬の間違ひ、どなたもお聞きなされて下さりませ。仔細あつて此お子は人目を包む預りもの、親御が無いといふぢやなし、逢はせたうても見せたうても儘ならぬは浮世の習ひ、隠し育つる葛家の住ひ、脊戸の門をよその子が、母御や父御に手を引かれ抱かれて通りやけなりがり、べいよおりや父様や母様はなぜ無いのぢや。母様に逢せて父様の所へ連れて行けとだゝける子を、やう／＼すかし寝さすれば、お袋と思ひ違へべいめが乳の山撫つぶ、つまんで見ては目を醒し、母様々々と仰しやる時のいぢらしさ、イヤモウ是を思へば親子の情程切ない物はない。眞實の子のやうに思うてやつて下さりませ、コレぼん、日頃よりも晝も焦れさしやつた程、とつくりと抱いて貰はつしやれ。

ト云ふも眞身の友平が、切なき話傍に聞く腰元どもの思ひやる、貰ひ涙のこなたより、彌三左衞門御臺の賜物、手にたづさへてむづ／＼と歩み出で。

ト彌三左衞門白臺に卷物包み金をのせ持つて出て来り、

左衞　彌三郎、殿の召れる御用がある。おきく殿も、いづれも奥へ。

〽厳しき父の一言に、底氣味惡く彌三郎、その場を立ちて一同に、皆打連れて入りにける、彌三左衛門こなたに向ひ。

左衛　緋縮緬五巻、金子一包稚き者へ下さる、有難く頂戴せよ。

友平　ヘイ〳〵、有難うござりまする。（ト彌三左衛門の出す白臺を受取り、荷物へ入れる）

左衛　それ小兒、是へ。

〽膝近く召寄せて。

そちが名は何と申す。

三松　アイ彌三松。

左衛　ヲヽ、彌三松とか、顏を見せい。額から目の張りは父親めに生寫し、瓜實顏は母にそのまゝ、てもよう似た。誠の祖父が傍にならば嘸さういふであらうもの、それに引かへ見すぼらしい、可愛らしい顏を見たら嬉しうて恨めしからう。やもめでは果さぬ倅、早ら親へ打明け云ひ居つたら表向きから三々九度、可愛い孫を世間晴れ抱いてながめて樂しまう。ヲヽ可愛い孫が不便でも、云ひまげられぬお家の掟、大事に掛けて連れ歸れ。

友平　お情ありげなそのお詞、聞くに付けても私めは、ツイ祖父様と只一言。イヤサ云はぬが云ふにいやまさる。

左衛　それも互の身の愼み、時節を待つて實親に面會なすを樂しみに。

友平　その仰せを承はり、仕遂げる下郎の心の喜び。

ト此時彌三松を彌三左衛門の傍へ突きやる。彌三左衛門前に抱へ愁ひのこなしあつて、

左衛　他人の倅に用はない。（トそつとつきやる。友平引取り、）

友平　エヽ、とつとゝ爰を。

〽猿廻し、隔てる友平弓取りも、迷ふは血筋幼子を、連れて互に別れ行く。

ト此淨瑠璃にて別れる體よろしくあつて、上手よりおきく、下手より彌三郎窺ひ出て門人顏を見合せるを道具替りの知らせにて、よろしく三重にて此道具廻る。

本舞臺平舞臺上手大高の物見、正面板戸、爰にたんぽ槍木太刀杯かけあり、上手よりに幕張り、爰に近習四人居並び、すべて毛利家試合場の體、上手二重に褥脇息蒔繪煙草盆を置きある見得。時の太鼓にて道具留る。

近一　今日は吉岡一味齋殿京極内匠殿の試合に就き、

近二　我々早朝より相詰めしも、

近三　八重垣流と後塵流兩派の試合故、

近四　後學の爲め見物致す身の譽れ、

四人　いかさま左樣でござる。

　ト此時彌三左衛門繼裃にて出て來り

左衛　各々方には今朝よりのお役目御苦勞に存ずる、シテ兩人とも呼び寄せ置きしか。

近一　はア。お次ぎに控へさせてござりまする。

　ト是にて下手よりせいひつの聲になる、毛利音成羽織袴にて小姓附き添ひ出て來る。諸士大ぜい附添ひ、音成は設けの席につく。皆々平伏して。

音成　彌三左衛門、用意萬端調ひしか。

左衛　はア、それ呼び出せ。（ト近習に云附ける。近習下手に向ひ）

近一　吉岡一味齋殿、京極内匠殿、殿の御召し急いで是へ。

兩人　はアー。（ト兩人出る。跡に門脇義平、辻新左衛門、早川兎毛、桝本一學、附添ひ出て平伏する。）

一味　御召に依て吉岡一味齋。

内匠　京極内匠只今出仕、

兩人　仕りましてござりまする。

晋成　早速の出仕大儀。

兩人　はア。

晋成　吉岡一味齋、今日汝を呼出せしは外ならず、其方も兼て知る如く此度久吉公より命令にて、三韓征伐の代理を仰せ付られ強者の面々集る折柄、昨日是なる京極内匠より其方と試合の儀願ひ出せしに付き、よき折なれば此處に於て立合申附くる、左樣心得てよからう。

一味　はア、、有難き殿の御諚、委細承知仕つてござりまする。

左衛　御兩所とも勝負は時の運に任すものにて、必ず後へ遺恨の殘らぬやう致されよ、それ用意を。

兩人　はア。

ト白はやしになり、双方上下を取り襷鉢巻にて立廻り、よき處に一味齋内匠に笄を二本打つ事あり。面白き試合になり、よき程に彌三左衛門是を止め。

左衛　双方勝負は見えた、一味齋天晴々々。（ト是にて内匠ムツとしたるこなし）

内匠　未だ勝敗見えざる内、何故お止めなされしぞ。

音成　一味齋が勝利なるぞ。
内匠　コハいぶかしき殿の御上意、眼前見えたる試合の勝負、拙者が負けとはその意を得ず。
音成　ヤア京極内匠、今の試合を勝と思ふか、其身に纏ふ衣服を見よ。二太刀目には左の紋四太刀目には右の紋、一味齋が打ちたる笄、眼に當らば盲目ならん、咽へ當らば即座の最期、死骸となつても戰ひ度いか。
内匠　エヽ。（ト是にて門脇、辻二人立掛り内匠の袖を改め笄を二本出す、内匠是にて音成に向ひ）ハツ眞劍の勝負願はしう存じまする。（ト立腹のこなしにて云ふ、彌三左衛門進み出で）
左衛　其儀は相成らぬ、此度三韓征伐に就き勇士を集る折柄なれば、どちらを失うても叶はぬ故此儀ばかりは相成らぬ。（ト是にて内匠ぢつとなる。音成一味齋に向ひ、）
音成　ア、惜しむべきは一味齋、今少し年若ければ三韓攻めに一方の大將ともなす器量、ア、殘念や當座の褒美遣す程に、子々孫々に傳へてよからう。
一味　コハ有難き御仰せ、早速頂戴仕つるでござりまする。
音成　ヤイ京極内匠、其方師範致す身を以て今の振舞ひ、きつと蟄して罷り居れ。彌三左衛門よきに計らへ。

左衛　はア、、京極殿、屋敷へ歸り控へめされ。後より使者を遣はす間左樣心得召され。

近習　京極殿お立ち召され。

ト是にて内匠立上り一味齋を横目に見て花道へはひる。後より門脇、辻近習大勢附添ひはひる。音成思入あつて一味齋に向ひ、

音成　扨て一味齋、此度周防山口表へ八幡宮造營に就き、普請奉行誰彼と存ずれども當時致さす者之無故、其方へ普請萬端取計らひ申すやう申付る間左樣心得よ。

一味　身に餘りたる大役早速に承知仕る。然し拙者も最早老年にござりまする故、添役の儀願ひ奉りまする。

左衛　尤なる願ひ、殿よろしく御賢慮を願ひ奉りまする。

音成　其儀は承知致した、春風藤蔵に添役申し附くる。それに就き申付くる儀もある間、今日は其方勞れもあらう故屋敷へ歸り、明日出仕致すがよい。

一味　はゝア、仰せに從ひ一味齋、退出御免下さりませ。

音成　ヲヽ。（ト嘆息をつくを木の頭、此見得よろしく）大儀々々。

ト合方にてひやうし幕。道具出來次第引返す。

本舞臺正面石清水八幡宮の裏手を見せたる飾り付け、下手足場を掛けあり、上手大工普請小屋などの大木、所々に杉松の植込み。後ろ山の遠見、すべて周防の國八幡宮普請小屋の體、賑やかなる鳴物にて幕あく。ト大工大勢煙草を呑み居て、

嘉助　此度の御宮普請本社から拜殿、神樂堂、繪馬堂までが格好よう出來たではないか。他國は知らず、此國にはこんなお宮はあるまいな、藤七。

藤七　ヲヽ嘉助の云ふ通り、こちとらの手を放れるも大方あすの內一ぱい、スリヤ御遷宮もお近い內、其時は嘸賑はしからうなア。

文藏　ヲヽサ、そこは拔からぬ此文藏、思ひ附いた趣向がある。まづ一番に眞赤な猩々緋の纏、その次が提灯、揃ひの浴衣、藤七は太鼓方ぢや。音頭は今度大阪から下つた、小間醫者から習つた通り、俺が後から遣つて行くのぢや。

嘉助　待て文藏、上から下つて居る醫者とは、何處の醫者ぢや。

文藏　それ眉は黑毛の刷毛見るやうな、口はくる〳〵のしつかい達摩の、

藤七　むゝ、柴佐仙の事か。

文藏　サア其人に習つた音頭、妙音でちつとばかり聞し度いけれど、又意地惡な春風樣が追付來る時

分、目附られたらお目玉貰はう。一ト働きして後の事さ、サア〳〵こい〳〵。

ト皆々仕事に行かうとする。上手より柴佐仙醫者のこしらへにて出て來る。文藏見て、

ヲヽ、佐仙樣、何處へお出でなされました。

佐仙　何處とて俺が事だ、宮守の連歌俳諧繪馬もほつこり見飽いて仕舞うた。つくねんとして居た所此お宮の普請奉行、吉岡一味齋樣から使が來て、將棊の相手に今までなつて居た所ぢや。さうして番頭はとつくり固まつたか、爰の仕事を仕舞うたら夕方から稽古に來るがよい。

文藏　ヘイ、どうか御頼み申しまする。

佐仙　拙はもう歸りまする。

文藏　もうお歸りでござりまするか。

佐仙　皆もゆつくり。

ト行かうとするとたん、文藏に行當り佐仙うんと氣絶する。皆々びつくりして

文藏　コリヤ目が廻つたさうな。

皆々　佐仙樣、お醫者樣いなう〳〵。（皆々呼び活ける。佐仙氣が附き）

佐仙　扨もはかなき世の中ぢやなア。昨日までも今日までも醫者や藥師と敬はれ、餘所の病と眺めし

が今日は我身に巡り來て、犬猫の子かなんぞのやうに小屋の軒端に倒れ伏し、誰か哀れと見給ふや、これ皆の衆、拙はもう本服は叶はぬわい。

文蔵　氣の弱い、めつたに死んでよいものか、めつさうな事云はつしやるな。

藤七　こなたはめつたに死なさぬ〱。

皆々　さやうぢや、死なさぬ〱。

佐仙　いやもう俺やどうしても叶はぬ〱。サア一通り聞てたべ、蜜柑の皮の色づくと藪醫の顔が青くなるは一時とは誰が知らせた。冬枯の療治はひまなり金はなし、内證とても曾我殿の五郎十郎のたつきさへ、錢に盡きたる足らず勝でおのづと悪顔、吉岡の下郎が見えて氣色が悪けりや是なと喰へとわしにくれたる竹の皮、中には黒い一トかたまり扨ては氣附か、耆婆扁鵲なれば常々推量の積の虫、よく知つたり醫者拾り黒砂糖をなめんと、何の差別もめつた喰ひ呑込だればなう悲しや、砂糖にはあらで是泥川の陀羅助で有つたわいな。是は山參りの土産にする、陀羅助で有つたわいなア。それが毒ではなけれども、痩馬ならでやせ骸に過ぎたのが此身の害、アイタヽヽヽ、此腹の痛さではどうで命は續くまい。八萬地獄へ落つるとも日頃近しうしたそなた、後から死んでござるのが五年十年遅るゝとも、必らず〱死出の山、地獄の釜い際で

こなたの來るのを待つて居るぞや。

ト男泣きに泣く。文藏皆々びつくりして、

文藏　これ〳〵佐仙さん〳〵。爰で死なれたら掛り合ひになるといひ、

藤七　第一地獄の釜の際で、待つて貰ふがおりや悲しい。

嘉助　氣を先へ死なさずと分別がある聞つしやれ。此方は平常端好き故常々文藏が習つて置た音頭を爰でやらかして、拍子に乘つて歩いたら歩けぬ事もあるまいわい。

藤七　コリヤ一ト理屈ぢや、石積んだ地車でも、きやりの聲で行く道理、まア一ト口、

皆々　試みに、

文藏　ヲヽ、サ合點だ。（ト腰よりさいはいを出しふりかざし）阿波の海まで十郎兵衛が、

皆々　ヨイヤサヨイヤンナ。（ト此聲を聞き佐仙立掛り）

佐仙　ヤア〳〵こいつアえらいわ、俄に正氣〳〵、氣が治つた、猶も大工殿頼むでござる。

文藏　哀れなるかな此醫者殿は、

皆々　ヨイヤサコイヤサ。

文藏　砂糖代りに陀羅助呑れ、あせりもがいて腹いたや。

皆々　ヨイヤヨイヤレサ、エンヤラヤレコラセ。サア思入やらんせ〳〵。

ト是にて皆々連立て下手へはひる。後合方になり一味齋、春風藤藏ぶつさき羽織野袴なりにて家來を連れ出て來り。

藤藏　誠に此度御宮普請相役と申すは名ばかり、皆そこ元様のお蔭故、かやうな大役首尾よく相勤めしは、いかばかり大慶至極に存じまする。

一味　是は又痛み入つたる御挨拶。

藤藏　イヤ眞以て御恩に着まする、それに就き先生へいつぞはお詫び申さうと存じ居つたる處、願うてもなきよき幸ひ、定めて拙者を人畜のやうに思召してござらうと思ひ廻せば面目ない。あの人非人の京極め、あゝいふ奴と露知らず、只只管の招きに依つて思はず入門致せしは今での後悔。若者の後先に心も附ず、破門致せし其段は幾重にも御料簡下され、此上は以前の通り弟子となされて下さらば此上もなき悦び、何卒先生偏へに願ひ奉る。

ト詫びることなし。一味齋思入あつて、

一味　イヤもう誤つて改むるに憚る事なし、元高弟のそこ元なれば末々の門弟の衆へ稽古の差配、且は代稽古、此方よりお頼み申す。

藤藏　スリヤお聞屆け下さるとな、ハヽ忝う存じまする。(ト此時花道より佐五平ふけたる拵へにて出て)
佐五　ハツ申上げます。
一味　ヲヽ佐五平、何か急な用事でも出來致したか。
佐五　ハア御國元よりお愿樣、お見舞として只今旅宿へお着きなされてござりまする。
一味　娘が見舞に參つたか、ハテ扨て女の身にいらぬ事を。シテ道中で怪我は無かりしか。
佐五　隨分御機嫌よろしう、眞黑に日にお燒けなされてお越しにござりまする。
一味　ヲヽそれは滿足、然らば歸つて左樣申せ。かよわき身にて餘程の道程さぞかし草臥つらん、身も暮方には歸るから、休息致して待つてゐよと云聞せよ。
佐五　ハヽ畏つてござりまする。(ト花道へはひる。一味齋思入あつて)
一味　孝心にしてくれるはよけれども、結句哀れで苦にやむわい。(一寸愁ひのこなし。藤藏是を見て)
藤藏　御息女お出でとあらば、是より直〻に御旅宿へ。
一味　いかさま、然らば御同道致しませう。
藤藏　ハヽア手前はまだ私用もござれば、先づお先へ。
一味　然らば御免下され。(ト一味齋家來を連れ上手へはひる。藤藏思入あつて)

藤藏　兼ての手立も手强き親父め。中々素手では行まいと思ひの外の工合よさ、然しかうしたからは手段も仕易し。

ト行かうとする。花道より深編笠を冠り浪人のこしらへにて京極内匠出て來り。

内匠　アイヤ暫らく、それへ參るは毛利家の御家中、春風氏ではござらぬか。

藤藏　身が名を知つたる御浪人は何人でござる。

内匠　名乘るも今更面目ないが、他聞を憚り申し兼る。何卒暫時御家來を。

藤藏　いかにも承知仕る。身共は是に用事もあれば益内一人是に殘り餘の者は先へ歸れ。

皆々　ハア。（ト是にて皆々下手へはひる。藤藏小聲になり傍へ行き）

藤藏　貴殿は京極内匠殿ではござらぬか。（ト是にて笠をぬぎ辭儀をなし）

内匠　如何にも左樣。某國を去つてより一まづ上方へ志ざせしが、心殘りは一味齋恨みの一太刀報はんと思ふ折しも、此防州へ普請奉行に來りしと聞くと等しく、シヤ屈竟の時節なりと取る物も取敢ず下りしが、いよ〳〵それに違はずや。

藤藏　此度の宮普請も殘らず彼奴が差圖次第、何か諸家中の受はよし門弟はふへまするし、威勢追々よくなるまゝ、イヤモウ共むやくしさ、折を見合せ討うとは心はやれど中々我等の手に合ふ奴

内匠　にあらず。思はず貴殿に逢うたは幸ひ、何卒彼奴を欺し討に。
氣遣ひあるな諸事は内匠が胸にある。そも一味齋めに意趣といふはあながち劒道一通りの筋ではなく、娘おきくを妻にせんと申込めば酔のこんにやくのと承引せず、あまつさへ御前にて面耻かゝされ此風體。思へば〳〵口惜しく、彼奴切さいなんでも腹はいぬ。

藤藏　先生氣遣ひはござらぬ。仕やうはかう。（ト囁く。内匠思入あつて）

内匠　スリヤ此所に一味齋め。ムヽ。（ト駈け出さうとするを止め）

藤藏　きつそう變へて何處へ。

内匠　ハテ知れた事、一味齋めをまつ二ツ。

藤藏　イヤお待ちなされ京極氏、一味齋を切る氣でも傍には數多の家來もあれば、中々容易に討つ事あたはず、常々貴殿も云はれた通り多勢の中へ切込んで老ぼれ一人討つたとて、後で貴殿の命が無いぞや。

内匠　イヤ命は元より捨て居るわい。

藤藏　それは器が小さい〳〵、敵一人に百年の命を果すは不覺々々。氣を靜めて拙者が云ふ事お聞きなされ。一味齋がいつも歸るは此裏道、供は中間わづか一人、そこを窺ひ討つならば本意を遂

げるは手間隙入らず、討つには最上飛道具。（ト此時笈内挟み箱の中より小筒の種ヶ島を出し）

笈内　その品是に。

藤藏　噂に手練の内匠殿、百發百中疑ひなし。

内匠　みぢん流の奥儀をふるはゞ。

笈内　闇夜の烏もたつた一討。

藤藏　氣遣ひ無用まツ此の通り。（ト笈内を切り殺し）密事を人に洩らさぬ神文まづ此通りに御手柄を。

内匠　云ふにや及ぶ。（ト上手を見て駕籠の來るといふ思入、藤藏も見て一味齋なりと知らせ、）忍ばつしやれ。

ト兩人見得にて内匠は上手の松の木へ登る。藤藏は下手へ忍ぶ。誂への鳴物になり上手より一味齋乘物にのり出て來る。よき處にて一發打つ、本鐵砲の音する。一味齋乘物より出て苦しみ落入る　兩人は窺ひ出て止めをさす、兩人思入あつて、

まづ是にて片附いた。身共は一ト先西國へ落延び申さん。

ト向うを見る。足音する故兩人驚き小隱れする。花道より誂への合方になり、お園屋敷娘のこしらへにて、佐五平旅なり弓張提灯を持ち出て來り、舞臺へ掛る。内匠窺ひ出て藤藏は佐五平の持ちし提灯を落す。是にてさぐり合ひになり内匠は花道へ行く。藤藏は上手、お園は内匠に手裏劍を打つを木の頭。此もやうよろしく見合つて。

二幕目

吉岡邸出立の場

役名 毛利音成、衣川彌三左衛門、衣川彌三郎、春風藤藏、若黨佐五平、奴友平、近習、侍仲間。吉岡後室お幸、同娘おその、同おさく、同弟三之丞、乳母福榮、腰元、幼兒彌三松、小姓。

本舞臺常足の二重、見附小模樣の唐紙、上手一間半折廻しの障子家體。下手一間式臺附きし玄關、此見附矢張り小模樣の唐紙、いつもの所對、玄關に長柄の槍をかけ、爰に腰元青柳、立花、菊野、紅梅、腰元のなりにて控へ、進物臺いろ／＼並べ、合方調べにて幕あく。

青柳 ヤレ／＼心どや／＼、何ぼうあるか知れぬ御家中御禮者の取次ぎ、お座敷内の御百度詣り、大抵な事では無いわいなア。

立花　それといふのも日頃から、お人受のよい旦那樣、其上武術の御弟子も多く、廣う御附合なさる程、御物入も餘計の御祝ひ。

菊野　又お二人の孃樣を、お目當になさる御家中も大方あるでござんせうなア。

紅梅　そりや知れた事云はしやんせ、花にたとへば桃櫻、何れ劣らぬ御姉妹のお孃樣を、當込みに弟子入る人もあるとの事、寄るとさはると取沙汰ぢやぞえ。

青柳　お妹御のお菊樣は御殿へお上りなされたに、此程御病氣にて御歸り遊ばし御養生、お上勤めも大抵な御氣苦勞なものでござんすなア。

立花　お姉御樣には旦那樣をお迎ひにお越しなされ、今にお歸り遊ばされず、お目の不自由な姉樣とお菊樣の御しつらい、奥樣には嘸御心勞でござりませう。

菊野　それはさうと私などは一日でも、お姉君お園樣のやうになつて見たいわいなア。

紅梅　そりや又、

皆々　何故にえ。

菊野　サイなア、御器量といゝ爪はづれ、殊更武藝の達人にて、其くせ力がお強うて人好きのする御愛嬌、あんな體になつて御覽じろ、第一には押が利く、モシ殿御でも持つたなら、夫婦喧嘩す

る時にも無理八百が云へやうわいなア。

青柳　ほんにそりや菊野殿の云やる通り、殿御の方から無理云へば日頃の手練でずんでんどう、此方の方から云ひたいがい。

立花　思ふ存分殿御いぢめが出來やうなア。

菊野　ほんにそりや面白からうなア。

皆々　ホヽヽヽ。（ト笑ふと合方になり、上手より福榮出て）

福榮　是はしたり腰元衆、怪しからぬ高笑ひ、お園樣はお留守でも此頃御病氣にて下つてござるお菊樣の、お居間へ對して箇拔けの雜談、ちと愼みなさんせ。

青柳　是は／＼福榮樣、お禮者方の取次ぎに、ほつこり致すやう草臥やすめ。

立花　寄集つての雜談に思はず知らず高笑ひ、

菊野　お許しなされて、

四人　下さりませ。

福榮　御家中方よりのあの進物、お二人は奧樣の御居間へちやつと御持參遊ばせ。

二人　畏りました。

ト青柳立花は進物を持ち奥へはひる。是より唄になり花道より衣川彌三郎麻裃大小のこしらへにて出る。後より仲間附いてくる。

彌三　それ案内致せ。

仲間　はア。（ト玄關へ行き）賴みませう。

福榮。どうれ。（ト福榮玄關の前へ來り）どなた樣でござりまする。

彌三　衣川彌三郎でござる。

福榮　是は〳〵衣川樣でござりましたか、先づ〳〵是へ。

彌三　ヲヽお乳人でござつたか、御免下され。

福榮　腰元衆、ちやつとお菊樣へ此事を。

二人　畏りました。

彌三　コリヤ其方は後より迎ひに參れ。

仲間　はア。（ト仲間下手へはひる、腰元は奥へはひる。）

彌三　久々にて面會致すが、御自分樣にも御壯健にて祝着に存ずる。シテお妹御の御病氣は。

福榮　有難うござりまする。餘程御快氣にござりまする。あなた樣にもいつも〳〵お變りなく、お健

さうにお見受し、私よりもお菊様が、

彌三　ヱヽ。

福榮　イヱナニ、お菊様にも此程は、餘程御息災にござりまする。

彌三　それは何より重疊々々々、御姉上にも御不在中、何かと老母のお心遣ひ、御推察仕る。

福榮　有難うござりまする。

ト是を合方になり、上手よりお菊娘のこしらへにて三之丞羽織袴前髪のこしらへにて、目の悪きこなし。お菊に手を引かれ來る。

きく　是は〳〵衣川様、ようまアお越し遊ばしました。

三之　いつとてもお變りなく、お目出たう存じまする。

彌三　コハ御兩人の御挨拶恐れ入りまする。（ト行儀をかまへ）先づ以て當日は端午の御祝儀、御親父一味齋殿には御用繁多の勤務中恙なく、御家内の御祝ひお目出たう存じ奉りまする。

三之　誠に師弟の儀を重んじ、いかばかりか、なア姉様。

きく　おゝお悦びなさらいで何とせう、お顔見れば嬉しくて云ひたい事もたんとあらう、ノウ福榮。

福榮　はい〳〵左様ぢやさうにござりまする。

三之　コレ乳母、そちは衣川様お越しの由を母様へ。
福榮　はい〳〵お知らせ申して參りませうが、後は三人人目もなし、―
彌三　ヤ。
福榮　イヱお知らせ申しませう。（ト福榮奥へはひる）
彌三　三之丞どの、御親父の御不在中と申し、取わけ御身の御眼病、一しほうつとうしくござらうが、今日は祝日なり氣もはれ〳〵と致しませうな。
きく　そりやもうはれ〳〵仕ませいで、何と致しませうぞいな。
三之　幸ひ今日は菖蒲酒、何はなくとも彌三郎様へ御酒一献、申し姉様一ト間でお上げなされませ。
きく　それはよう氣が附きました、申し彌三郎様、爰は端近まづ奥へ。
彌三　それでもどうも厚皮な。
きく　ハテお目出度い酒でござんすわいなア。
三之　是非とも一口。
きく　あれあの通り、あの子の粹さ。
彌三　然らばお詞に隨ひ、頂戴いたすでござりませう。

きく　サアからお越しなされませ。

トおきく彌三郎を連れて上手へはひる。奥より母お幸着附被布のこしらへにて出て來り。

お幸　三之丞爰に居やつたか、彌三郎樣のお越しとあつたが、爰に見えぬはどうなされた。

三之　はい只今姉樣が菖蒲酒を、一ツ上げると仰しやつて。

お幸　ム、そりやよう氣が附きました。コレ三之丞爰へおぢや〳〵。（ト合方になり）是三之丞や、今日はそなたの大事の節句、此間我夫からお事多き其中にて、參りしお文の其中にも、隨分節句は賑やかにしてやれとの事故に、目出たう今日の祝日、それもそなたが目かいが見えず、苦に苦を病んで煩はぬやう彥山の權現樣を始め、ありとあらゆる神佛へ祈らぬ方もない程に、本復するは今の內、必ず氣をば病まんなや。

三之　有難うござりまする、左程不便がられる程此身の冥加、武術の家に生れながら小太刀一本槍一筋、取得ぬのみか苦勞をかけて不孝の罪を思ふにつけ、いつそ死にたうござりまする。

お幸　ア、わけもないなに云やる、今日は取わけ目出度い日柄、そなたも云やんなや母も云ふまい。コレ乳母は居ぬか、何處に居やるぞ、乳母や〳〵。（ト奥にて）

福榮　ハイ只今、それへ參りまする。（ト福榮出て來り）はい、御用にござりまするか。

お幸　三之丞を奥へ伴ひ氣を慰めてやつてたも。

福榮　はい〳〵畏りました。イザ坊樣御一緒に。（ト手を取る）

三之　イヤ乳母、手には及ばぬ。（ト云ひながら立上りひよろ〳〵とする。）

お幸　あゝそれ〳〵、危い〳〵。

三之　幼い時から馴れた家、氣遣ひはござりませぬ。

お幸　それでもとぼ〳〵してゐやるもの。

三之　申し母樣、冥土の闇に迷ふのは此やうなものでござりませうな。

お幸　あのおとましい、なに云やるやら。（ト内にて）

呼び　旦那樣のお歸り。

お幸　ナニ我夫樣の、

三之　お歸りとな。（トひよろつくを）

福榮　あれまア危い。（ト手を取る。お幸立上るを知らせにて）

お幸　氣を附きやいなう。（ト道具廻る。）

本舞臺通し二重、上手床の間違ひ棚、是に五月節句の軍人形節句道具色々飾り付けある。續いて銀

襖、上手障子家體、杉戸など、よろしく、合方にて道具納る。ト直ぐ竹本になり。

〽今日は端午の祝儀とて、祝ふ人と菖蒲酒、此家の姉姫その名さへ、ちやうどにお園がかぐ山の、衣ほすてふ白妙の、顔さへ朱に照添ひし、五月の花の衣紋さへ、振りしどけなき千鳥足。

ト此浄瑠璃にてお園文金島田矢がすりの中振袖のこしらへ、禰襠にて少し酒に酔ひたるこなし、後より腰元、前場の四人附いて出て來り

皆々　お危なうござりまする。

〽と立寄るを突退けて。

お園　キツと寄るまい〳〵。危いとは何が危い、酒に酔うたか何ぞのやうに立騒いで不行儀な。エヽ、奥へいて母樣を、是へお呼び申してたも。

〽しかつめらしく三ツ指し、云うてよいやら惡いやら、もじ〳〵するを。

エヽ、何をもじ〳〵、歸宅の由をお知らせ申しや。

〽叱り散され次の間へ、顔見合せて立て行く、後打見やり

ト是にて腰元皆々元の所へはひる

人の心も知りもせで。

〽あゝ辛氣やと轉び寢も、やらでしほるゝ奥の方、腰元共の取次に、心いそいそ立出る、老母はそれと見るよりも。

お幸　ヲゝ娘か。

お園　只今歸りました。

お幸　ヲゝ娘か待兼ねました、定めて我夫にも御一緒であらう。大方歸國の目見得にそれで先へ戻りやつたか。

お園　はい左樣なやうな、物のやうな物でござりまする。

お幸　ア、此子とした事が、ついにない酒機嫌、どなたで酒を喰べやつたぞいなア。

お園　はい御祝儀を酌みかはした、其お話をお聞きなされて下さりませ。（トメリヤスになり）父樣のお供して上つた所が端午の御祝儀、直ぐさまお表へお禮に上り、東雲樣の御前にて白藤のお局に無理强ひに强ひられ四杯のみ、夫から四の宮靜馬樣の奥樣へ參つたればなア、四合入りのお盃

で強ひ殺されて居る所へ、篠田黒案樣が。

〽によつと見え、

白髮頭を振立てゝドリヤ私が配劑せうかと、お年に似合ぬ強いお酌に、申しそれではいよ〳〵死まする、死ぬる面白い、死ね〳〵〳〵とめつた酌、コリヤ堪らぬと座敷を外し四疊半の圍の内へ、死んだやうにして居たれば、信樂樣まで出て見えてゆり起され、盛殺さう〳〵と止めをさゝれました。足もしどろにやう〳〵と歸りし事は知つて居たが、後の始末は知らぬ〳〵。

〽知らぬ〳〵と卷舌の、詞は酒の科なりし。

お幸　あれ此子とした事が、常の行儀に似もやらず、今日は取分けしいの字盡し、モウそんな事云うてたもるないなう。

お園　はい〳〵、左樣なれば申しますまい。替りには母樣にお願ひがござりまする。

お幸　なに、わしに願ひとは。

お園　外の事でもござりませぬが、急に殿御をお持たせなされて下さりませ。

お幸　ハヽヽ、是は又園とした事が、是まで數度も云ひ出しても聞入れぬ堅いそなたが、殿御を持

ちやると云やるからは、定めて心當りがあらうなう。

お園　アイ、イヽエ。

お幸　ヲヽそんなら兼ねて噂に聞く、豐前の國毛谷村の百姓、身は農民に埋もれても天晴な文武の勇者、師匠吉岡一味斎殿へ仕官させたき夫の願ひ、ならう事ならその人を。

お園　アノ申し〳〵母上樣、殿御を持せて下されませと、お願ひ申すは私ではござりませぬ。

お幸　そんなら誰に。

お園　妹のおきくに。

お幸　エヽ。

お園　どうぞ持せて下さりませい。

お幸　イヱ〳〵、其願ひは聞入れませぬ。家を繼ぐべき三之丞は所詮本服叶はぬ眼病、さすれば家の名跡は姉のそなた、そなたに極つた聟もない内、妹に聟はどうも持たされぬ。

お園　コリヤ御尤でござりまする。左樣ならば母上樣に逢はせたい者が、コレ乳母その子是へ。

ト福榮下手の内にて、

福榮　畏りました。

〽抱いて出たる稚子が、すや〳〵寝入るをお園は抱き取り。

ト此浄瑠璃にて彌三松を抱き出る。

お園　大儀であつた休息しや。

福榮　はア、。

〽はつと答へて立つて行く、後にお園は傍へより、

お園　申し母様、それと云はれぬ此稚子、園が子にして。

〽吉岡の名跡を繼すれば。

私が繼ぎしも同じ事、お許しなされて下されて、妹に殿御を持たせて下さりませ。

〽深き思ひを押し隱し、抱きし儘にさし付れば、母はつく〳〵稚子を見るより

扨は聞及ぶ、孫とは知れどさあらぬ體。

お幸　コレ園とした事が、何を云やる、系圖正しき此家を餘所胤には繼がされぬ、物堅い我夫の御氣質もそなたはよう知つての筈、道に背いたその願ひ、叶はぬ程にもう云出して下されな。

お園　もう此上は是非もなし、妹菊と彌三郎樣、人知れず忍び合ひ中にもうけた此彌三松、サア云は

ば眞身の初孫故、あなたの口から父上へお聞屆けのあるやうに。

お幸　心盡しのそなたの願ひ、叶はぬならぬと親甲斐にも、云ふに云はれぬ譯ある故。

お園　そりや母樣聞えませぬ、血を分けた親子の仲、明されぬとはどうやら譯ある、樣子を聞いた其上では私も云はねば成らぬ譯、胸にせまつて心がせく、申し母樣其譯を、サア〳〵聞せて下さりませ。

〽問ひ詰られて母親は、暫し詞もなかりしが、やう〳〵に思案を極め。

お幸　今は是非なし、お園からうぢやわいなア、先奧樣にはそなたを生落し直ぐに其場であへない御最期、連添ふ一味齋殿にはやもめ暮しの不自由に、私を後妻に娶られて間もなう設けしはあのおきく、後に設けし三之丞、夫婦が老の樂しみと心嬉しく今日までも、包み隱せしそなたの事、先奧樣へ義理もある故、妹や孫に此跡を相續はさゝれませぬ。譯といふはかうぢやわいなう。

〽明す越方聞くにつけ、味氣なき身のお園は悲しく。

お園　今の今まで眞實の母上樣と思ひしも、さういふ事でござりましたか、私の願ひ叶はぬ上は差

し當り、母様に、申さにやならぬ事がある、そのお乘物、その儘爰へ持ておぢや。

佐五　はア、。

〽はつと答へて若徒が、手がきにしたる乘物を、お園が前にかきすへる。

ト此淨瑠璃にて若徒佐五平は下手より一味斎の死骸を入れし乘物を供の若徒四人にかゝせ、出るを、お幸是を見て思入。

仰せに隨ひ、かきすへましてござりませる。

〽お幸はそれと見るよりも。

お幸　我夫待兼ねました。

〽としや遲しと立寄つて、あへなき死骸を見てびつくり。

ヤ、、、何者が手に掛けた、娘様子はどうぢやぞいなう。

〽とせき立つお幸奥の間に、聲聞きつけて駈け出す姉弟、空しきからに取縋り、前後正體泣き沈めば、母はお園の傍へすり寄り。

ト奥よりおきく三之丞出てよろしく泣く。

コレお園、様子は定めて知つて居やらう、様子はどうぢやぞいなア。

〽様子如何にとせき立つ詞、姉の思ひは百千の、劒に胸をさゝるゝ苦しさ、詞も出でず歯を喰ひしめ、無念涙に佐五平が。

佐五　御尤でござりまする。山口の御用首尾よく調ひ御下城の其折柄、小松ヶ原にて何者の仕業にや飛道具を以て卑怯の振舞ひ、聞くとひとしく宙を飛んで駈付けしが、早やお旦那様にはあへなき御最期、お傍に附添ふ若徒佐忠太共に深手に苦しみ乍ら、旦那様の仇敵は京極内匠、無念とは思へども其甲斐なく、悔んで歸らぬ其場の仕儀、奥様口惜しうござりまする。

〽悔み涙ぞ誠なる、お園はやう／＼顔を上げ。

お園　今佐五平が申す通り、飛道具にて仕留し上。

〽止めをさゝれてさしもの父さん、叶はぬ痛手に無念の御最期。

直ぐに追かけ親の敵討んものと、心は逸れど妹といひ三之丞、いづれ跡目を立てた上本望遂げ度いばつかりに。

〽すご／＼歸り此譯や。

妹の願ひを取まぜて酔た顔してはしたなう、酒にまぎらす切なさを、母様コレ妹。嘸口惜しからうなう。

〽海山越えてはる〱と。

お迎ひに行つた此姉が御遺言の一句も叶はず、いかめしさうに亡骸をお供申した味氣なさ、推量なされて下さりませ。

〽推量してとばかりにて、始めて明かす切なさを、母は聞にもあられぬ思ひ。

お幸　コレ我夫一味齋殿、嘸御無念にござりませう。卑怯未練の京極内匠、たとひいづくに忍ぶとも、尋ね出して修羅の妄執を晴させませう。

お園　母様の仰しやる通り、倶に天を戴かぬ、

きく　父上の仇。

佐五　イザ御願ひの御用意を。

〽詞ばかりは勇むれど、身はしほれ伏す袖袂、立上る折からに。

ト此時下手より取次の侍出て、

侍　へツ申上げます、御上使として衣川彌三左衛門樣、春風藤藏樣、只今是へお越しにございます。

お幸　ハテ心得ぬ俄かの御上使、何にもせよその乘物、奥の佛間へ早う〳〵。

へ淚と共に亡骸を抱き抱へて主從が、佛間へこそは入りにける。

ト是にて乘物を手がきにて上手へ皆々はひる。後にお幸殘り居ると、上手より腰元四人裲襠を持て出來り着せる。

呼び　御上使。

へやゝ時移る表の方、程なく入來る春風藤藏、衣紋のゆきも麁忽の人體、續いて衣川彌三左衛門、善と惡とをないまぜの、使者は上座へ押し直る。

ト花道より衣川彌三左衛門、春風藤藏付なりにて出て來る。

お幸　是は〳〵御上使として衣川樣、春風樣にも御苦勞千萬、まづ〳〵是へ。

佐衛　然らば老母、罷通る。

藤藏　まづ〳〵。

へ衣紋正して押直れば、老母はやがて手をつかへ。

お幸　お役日とは申し乍ら御苦勞千萬、何卒御上使の趣き仰せ聞られ下さりませうなれば、有難く存じまする。

左衛　思ひ掛なき今日の仕儀さこそ〳〵。一味齋殿不意の横死愁傷申す詞もなく、夫に就き殿樣より下し置るゝ上使の趣き、春風氏。

藤藏　イヤその儀は此藤藏申し聞さう。一味齋劍道を敎へる身を以て人手に掛り、相手を仕止ず暗々と山口にてのめり死、左程未熟の手練を以て八重垣流の奧義極めたが事をかしい、御殿を欺き年を重ね喰潰した穀盜人、死首を押はね妻子從類死罪の御沙汰もあるべき筈、餘り不便にお慈悲の御沙汰、親子四人命は下さる、屋敷は取上げ阿房拂ひ、その上意の趣き有難いと三拜して、片時も早う此家を立退け、ぐづ〳〵致さば下部に云ひつけ割竹にて叩き出す、塵くた一ト筋枝一本くすねて出る事相成らぬ、しかと申渡したぞ。

〽云ひ並べたる雜言に、むつとはすれどさあらぬ體。

お幸　御上意の趣き恐入てござりますれど、我夫一味齋手練はともあれ御用の役先き、家來も數多召連れば、敵にいか程手並あるとも、よも皆殺しには相成りますまい。扶持を與へる主人の腹心、左程の大事を告げ知らさず、死骸も未だ參りませぬに、人に討れしなぞとは、後方もなき世の

風說。

藤藏　默れ女、馬鹿な家來にや馬鹿がなる、役目終つて一味齋、阿房鳥のきよろ〳〵と海を眺めて磯傳ひ、歸るを見濟し種ヶ島小筒を以て只一討、脇腹より脊骨をかけ矢狹の如くぶち拔かれ、膽も腰も立つ事か、よろめく所をぐしや〳〵芋差しに差殺され、小氣味よい死ざま、一寸一分違ひはあるまい、是でも風說が僞りか、返答あらば云へ聞かん。

〽きめ付けられて詞なく、又伏沈み泣居たる、彌三左衛門威儀をつくろひ。

左衛　一味齋の横死はさる事なれど、そこが彼の欺すに手なし、名に負ふ相手は八重垣流の達人、太刀打にては叶ふまじと飛道具にて仕止しは、天晴智慧ある曲者ではござらぬか。

藤藏　如何にも左樣、骨と皮とに相成つても悔り難き一味齋飛道具こそ屈竟、然かもそれは二ツ玉。

左衛　スリヤアノ、二ツ玉で吉岡を、

藤藏　覘ひはづさず胸板かけて、

左衛　何の苦もなく打拔れたか。

藤藏　イヤモウ、犬猫にも劣りし死ざま。

左衛　其折柄貴殿の骨折、

藤藏　家來もあまた見えたれど、かくと見るより主人を見捨て。
左衛　命惜しむは匹夫の習ひ。
藤藏　念なう仕おふせ安堵の胸。
左衛　貴殿も手傳ひ召れたか。
藤藏　命を的に拙者の働き。
左衛　扨こそ荷擔人春風藤藏。
藤藏　ヤア。
左衛　問ふに落ねど語るに落ると、我と我が自身の白狀。ム丶ハテ、笑止千萬なハ丶丶丶。
藤藏　ヤア、何で身共が左樣な事を。
左衛　云ふな春風、馬鹿な家來に馬鹿がなると、殿を嘲る今の一言。
藤藏　ヤア。
左衛　それのみならず一味齋が横死の砌、其場に居らぬ其方が何故委しく存じて居る。
藤藏　サアそれは。
左衛　白狀するか。

藤藏　サア、

左衛　サア、

兩人　サア〳〵。

左衛　內匠に荷擔の春風藤藏、何とのがれはあるまいがな。

藤藏　手もりを喰うたか、ム、。

〽討て掛るを衣川が、襟上つかみ引付ける、一間に窺ふ友平が、それと見るより走り出で、

ト藤藏は彌三左衛門に切つて掛るを身をかはし引摺へる、所へ奥より奴友平好みのなりにて走り出で、

友平　內匠に荷擔の春風藤藏、主人の敵腕廻せ。（トきつとなる。）

左衛　出かした友平、それ。

〽切込む切先友平が、鋭き手練に切立られ、彼處をさして。

ト兩人立廻りよろしく有て藤藏は受太刀になり、切結びながら兩人下手へはひる。

〽跡に老母は思案を定め。

お幸　先刻のやうに申せしは、心よからぬ春風が手前、實は夫の亡骸も其場の樣子も承はり、思へば不意の此最期、武藝未熟とあつて妻子の者を御追放とござりましては、修羅の妄執も思ひやられ親子が悲しみ、わらの上より一味齋、貰ひ置いたる此稚兒、附上りました事乍ら、邸は此儘暫しの年月お暇下し置れませうなら、首尾よく敵を討ち果せ、立歸つて後彌三松に御恩送らせ御奉公を。

へと皆まで云はせず。

左衛　そりやならぬ。

お幸　とは又何故でござりまする。

左衛　されば一味齋は殿の御師南番、眼前相手に薄手も負せず討れたるその恥は、其身ばかりと思うて居るか、未熟な藝をうか〳〵と習うた主人は猶恥辱、是皆一味齋の罪ならずや。其罪ある者の妻子の願ひ、彌三左衛門此取次は得致さぬ。

お幸　コリヤ衣川樣には異なお詞、四海の武將も運盡きて人手にかゝりし例もあり、義朝公は長田に討たれ、小田春永は光秀に亡されたではござらぬか。四國九州に知られたる夫、日にさへ掛らば鬼神も討には安き身なれども、手利き手だれも叶はぬは弓鐵砲の飛道具、それを不覺の罪科

に敵討の取次せぬとは、弓矢の家の道に暗きか、但しは女と侮つて取次せまい御思案か、サア彌三左衛門様御返答が承り度い。

〽老のいら立衣川の、傍に詰寄る有様を、見るよりお園は走り出で。

ト奥よりお園おきく出て、

お園　ア、申し母様、お年寄の一徹に、あなたの詞が過ぎまする。

きく　あなたのやうに仰しやつては、叶ふ願ひも叶はぬ道理。

お園　まア〳〵お待ち、

二人　なされませ。

お幸　イヤ留めるな、無理も云はず慮外も致さぬ。サア衣川様、御返答は如何でござりまする。

〽いらつ母親引留め。

お園　サア常のお氣にも似合ひませぬ、父上の御最期ありしより亂心せしと笑はれん、サア出過ぎたやうぢやが私がお留め申します。まア〳〵お待ち下さりませ。コレ妹、何をうろ〳〵氣の附かぬ。それ母様を奥へ早う連れませいなう。

きく　サア母様、奥でお氣をお休めなされませ。

お幸　それでも此儘。

きく　ハテまア、お出なされませ。

〽無理に伴ひ入りにける、後にお園は物願ひ、人前作る笑ひ顔。

トおきくはお幸を連れて奥へはひる。お園は笑つて、

お園　ホヽヽヽ、母様とした事が、御心安いは常の事、今日は御上使、重きお役目不調法も女童、お許しなされて下されて、只よきやうに御前の執なし。

左衛　ムヽ、敵討の出立を願うてくれよといふ事か、一旦追放との御上意、倫言ならねど再び歸らぬ、片時も早く屋敷を明け、親子諸共早く立去れ。

お園　サア其お怒りは御尤もにござりますれど、母が無禮は幾重にも。

左衛　上意を違せば死罪になるぞや。

お園　スリヤ如何やうに申ましても。

左衛　ならぬと申すに。

〽にがり切て取合ず。

お園　オホヽヽヽ、罪無うて配所の月を眺めんと歌に詠れしためしあり、科なき科に追拂はれ、他國にさまよひ命を捨て、親子諸共お國の土になるが望み、何とて此家は動かうや。

左衛　ヤア女と思ひ詞を盡せば猶と附け込む不敵もの。誰かある、それ引立よ。

　　へ腰に据へたる大丈夫、彌三左衛門大いに怒り。

組子　はゝア。（ト是にて組子六人殴立を取り、十手を持つて出て）

　　へ下知より早く驅出る組子、難なくお園を押取りまき。

　國境まで早く行け、行け、行かずば我々引立てようか。

皆々　なんと〳〵。

　　へなんと〳〵と詰寄つたり。

お園　テモ仰山なおさん方。（トノリになり）女一人を相手に取り立騷ぐとはお笑止な、大方内匠の弟子と見た、習ひ込んだるお流儀の微塵にならぬ用心しや。

　　へおこがましやといふ間もなく、打くる手首引摑み、七八間もゐのころ投げ、

つゞく二番手三番手、脇の柵みしつかと取り。

ト此淨瑠璃の内いろ〳〵立廻りある。

男といへど私からは手並も餘程青侍、もそつと稽古をはげまんせ。

〽とたん拍子に投付けられ、コリヤ堪らぬと組子ども、皆散々に逃げ去りたり、

透を窺ひ彌三左衞門槍押取つて立向ひ。（彌三左衞門長押の槍を取つて向ふ。）

左衞　上の組子に手向ふ狼藉、女と云へど許し難し、此衣川が手練の槍先受けて見よ。

お園　手向ひ御免。

ト是にて跳への鳴物にて、いろ〳〵立廻りよろしくあり、よき處にて、

左衞　手並は見えた天晴々々。ト此時正面の襖の内にて、

〽知らせと共に大領音成、後に續いて彌三郎、御供なして入給ふ。

呼ビ　お成り。（ト是にて近習烟草盆など持出る）

ト是にて音成着附羽織袴にて、彌三郎麻裃にて三方に願書を載せ持出る。小姓刀を持ち近習二人、麻裃の侍四人附添ひ出る。

〽恐れ敬ひひれ伏せば、音成卿座に着き給ひ。

音成　彌三左衛門大儀々々、日頃忠勤怠りなく師範なしたる一味齋、横死を聞くより胸苦しく、定めて汝等親子の者敵討望ましからん、天晴討て日の本に名を取らせんと、彌三郎に案内させ参りし音成、委細つぶさに見聞せり。

左衛　疾より御免はあつたれども夫と明さぬ殿の上意、御身の手並を試みんと願ひを叶へず言をはげまし、立向ひたる衣川が手練の槍先受止めし、流石は吉岡一味齋が忘れがたみ、天晴々々。

音成　手練の力者が圍みを破るその手並、たとひ京極いかほどの鬼神たりとも、よも討得ぬ事はあるまじ。親子兄弟心任せに出立致せ、彌三郎。

彌三　はア、殿より赦免の下りし文、有難く頂戴あれ、イザ父上。

ト彌三左衛門受取り立身にて御書差出し。

左衛　吉岡親子へ下さるゝ御書、首尾よく本意を達せられよ。

音成　さるにても一味齋は知行を與へ置たれども、奥儀を讓りし我師匠、京極づれの太刀先に百年の壽命を斷たんとは、思はざりしに殘念さよ。

〽殘念さよとばかりにて、悲歎の涙にくれにける、一間に立聞く三之丞、探り

乍らに立出て、肌に隠せし腰刀、抜くより早く我と我腹へがばと突立れば、
音に驚きし母娘。

ト三之丞下手屋體より出て來り切腹する。此時母おきくの兩人出て來り。

きく　ヤ、弟には何故の此生害。

お幸　時も時折も折、

きく　ひよんな事して、

兩人　たもつたなア。

〽取附き縋れば三之丞、苦しき息をほつとつき。

三之　見苦しい母樣姉樣、お殿樣のお傍なるに、必ず泣いて下さりますな。

〽今際の身にも居並びし人目を恥ぢるいぢらしさ、母はあるにもあられぬ思ひ

お幸　コレ三之丞、御殿樣のお情で父上の敵討お許し下された故、そなたも一緒に連れ立たうと思う
て居るに、何が不足で此生害。

〽恨み歎けば三之丞。

三之　勿體ない事仰しやりませ、只有難いは御殿様、けなりいは母様姉様、私一人は男に生れし甲斐なく敵討のお供もならず、目かいの見えぬ口惜しさ。

〽弓矢神にも見放され、せめて門出の血祭りにと、此世からなる盲目の、晴れぬ地獄へ落るとも。

首尾よく敵を討果せ、くゆらす香の手向けをば、草葉の蔭から待ちまする。

〽云ふも苦しき息使ひ、太守も不便と目たゝきし。

音成　それ。

彌三　誰かある、春風が首是へ。

友平　ハア、。

〽はつと答へて友平が、憎さも憎しと春風が、首引提げて馳せ來り。

ト友平首をさげ駈けて出る。

上意に依つて春風が首を刎ね、持參仕りましてござりまする。

音成　罪は今更擧ぐるに及ばず、重々憎き彼が仕業、敵の片割れ冥途の門出、豫讓が裂きし衣にも勝

る父への手向け。それ、お園彼が首を是なる三之丞へ土産に致せ。

お園　はア、。（トおその友平が持参せし春風の首を取つて、三之丞の前へ持行き、）

〽はアと答へて春風が、首受取て手負に向ひ。

これ三之丞、御前様の御恵み有難う思やいなう。

〽首さし出せば、苦しさ忘れ手に取上げ。

三之　嬉しや殿様のお情けにて母様姉様より、先へ手柄をさせて貰ひました御厚恩、殿様衣川様、モウお暇申しまする。母様姉様、皆様おさらば。

〽いふが此世の断末魔あへなく息は絶えにけり、わつと一度に聲を立て、涙は死出の山道へ、五月の雨とぞふり流す、彌三左衛門聲をはげまし。

左衛　よしなき歎きに時移る、此上は猶豫は恐れ、一味齋、三之丞二人の死骸は彌三郎よきに取置き、後とひとむらひを怠りなく致してよからう。

彌三　其儀は某後に残り、弔萬端致しますれば出立召れ。

お幸　ハツ仇討お許し下さる上は、何れに心残しませう、早出立の用意しや。

〽勇むる内も妹が、暫しの別れと憂き思ひ、打連れてこそ立上れば、傍にかしづく友平が。

友平　ヘイ〳〵、奥様お園様へ下郎がお願ひには、何卒主人が敵討の出立にござりますれば、いはゞ下郎が爲にも御主人の仇、何卒敵討のお供の儀を。

佐五　お許しなされて、

兩人　下さりませ。（トこなしあつていふ）

お園　そりやなるまいぞや。

友平　ヱ丶そりや又、

兩人　なぜでござりまするぞ。

お園　サア一緒に行かば人目もあり、我々迚も敵を覗ふ其道筋は別れ〳〵、供は叶はぬさりながら、敵の在家尋ね出すは其方達二人が忠義の手初め、大儀ながら旅の支度をしてくりやれ。

友平　畏つてござります。

お幸　左様ならばお暇申します。

〽お暇申すと立上れば。

左衛　イヤ暫らく待ちやれ。（ト音成に向ひ）殿へ申上げ奉る。出立を祝す門出の杯、親子の者へ我君より、目出度く御取らせ下さりませう。

音成　よくぞ申せし彌三左衛門、出立のはなむけに杯取らすであらう。彌三郎よきに計らへ。

彌三　はア、。それ御近習。

近習　はア、。（ト銚子盃を持ち出て來る。）

音成　肴致さう。（ト謠をうたふ）謠〽老せぬや〳〵、薬の名をも菊の水、杯も浮び出て爰に逢うぞ嬉しき。

左衛　謠〽御酒ときく名も理りや秋風の吹けども〳〵、更に身には寒からじ、理りや白菊の〳〵着せ綿を温めて酒をいざや汲まうよ。（ト謠の内皆々杯を廻すことよろしく。）

お幸　有難く頂戴いたして、

皆々　ござりまする。（ト納杯あつて）

音成　園、近う。

お園　はア。

音成　それ。(ト扇を投げやる。)
お園　是は。
音成　開いて見やれ。(トお園開き見て、)
お園　此扇面に畫れしは波に戯る三ツの猩々。
お幸　老せぬ宿の門出に、
彌三　首尾よう本意を遂げし上、
きく　やがて目出度く歸る波、
左衞　勇んで出立。
皆々　はゝア。(ト皆々花道へ行きかける。)
音成　男勝りの大丈夫彌、三左衞門天晴の者ぢやなう。
左衞　御意にござりまする。
音成　ムヽ。(ト脇息にもたれるを木のかしら。)行け〳〵。
　　ト よろしくひやうし幕、幕引付けると謠になり、
〽萬代迄の竹の葉の酒、くめども盡きず呑めどもかはらぬ秋の夜の杯、影も

傾く入江に浪立つ、足元はよろ〳〵と、酔に伏したる枕の夢の、覺むると思へば泉は其儘、盡せぬ宿こそ目出度けれ。

ト三人幕外になり、思入あつてしづ〳〵花道へはひる。止めの木にて後シャギリ。

三幕目

眞葛ヶ原浪宅の場
釜ヶ淵返り討の場

役名　京極内匠、衣川彌三郎、下部佐五平、春風藤藏、所化西念、大工。下女おくろ、一味齋娘おきく、里の子。

本舞臺大和葺き常足の二重、竹椽附き、上手障子家體、向う床の間茶立口、いつもの所竹の簀戸、此外連子窓、二重の上に娘おきく若き女房にて鏡臺へ向ひ、抱子を抱き乳を飲ませて居る。下女おくろ身持のこしらへ前垂掛けにて、おきくの髪を撫でつけて居る。下手に佐五平石持肩入のやつしなり、木鉢へ團子の粉を入れ、手拭を片襷にしてこねて居る。門口外に大工印半纏大工のこしらへにて鋸引して板を並べゐる。所化西念坊墨の衣にて珠數をつまぐり居る。砧の入りし在郷唄にて幕あく。

佐五　西念様、今日はようお早うお出なされて下さりました。

西念　最前こちの旦那殿がお出故、直ぐに御回向に参りました。

きく　それはまア有難うござりました、さうしておくろ、そなた御佛前様の御みあかしは、しめりはしませぬか。

くろ　そりや私がつけるから、大丈夫でござりまする。

きく　そんなら貴方、御苦勞乍ら佛前へ入らつしやりまして。

西念　ドレ御回向を致しませうか。（ト西念茶立口へはひる。）

くろ　ほんにもうあなたのおぐしはおちいさい時より、打つて替つて此まア艶のよい事わいなア。

きく　何のまア此様にや、が出來ては、髪も形もどのやうにならうとそこ所ではなけれども、此所へ家移りしてまだまア半月になるやならず、御近邊の手前もあるゆへ、餘儀なう髪も亂しては置かれず、必らずよい氣な者ぢやと笑うてたもんなや。

佐五　まあそのやうな事を誰が何と申しませう、私は元よりそれなるおくろも子飼から大旦那様の御恩を受け、御譜代同様でござりまする、殊にまアあなたはお幾つだと思召しまする。

くろ　私かえ、私は三十一サ。

佐五　エヽこんたの事では無いわえ、アヽ世が世の時であらうなら吉岡樣の御息女と、御家來の者に取はやされて、彌三郎樣へ大振袖で御婚禮なされたら、それこそ門前に市をなし彌三松樣も表向き、お引取なされてお育て申さうもの、ぶつこつねえ此下郎と取り所もねえ下女ばかり。

くろ　何だえ佐五平さん、私の事を取り所もねえのなんのと利いた風な。

ト此時表より大工、道具を片よせ煙管を持ち内へはひり、

大工　どうぞお火を一つ、お貸しなされませ。

佐五　イヤモウ其煙草盆にある、持つて行かつしやれ。

大工　左樣致しては居られませぬ、まア棚を釣つてしまうてから煙草に致しませう。

佐五　サア是からふかすばかりだ。

きく　ほんにそなたの手一つで嘸大儀であつたろう。

佐五　まづお逮夜の事故、晩方迄に出來ればよいといふもの。

ト此内大工正面の下へ棚を釣らうとして、

大工　モシ女中さん、一寸爰へ來て是を押へておくんなせえ。

くろ　どうして〳〵、私は只ならぬ身體だよ。

大工　只ならぬ身體といやア、御公卿樣の娘か。

くろ　ヱヽ野暮な、ぼてれん國ぢやわいなア。

佐五　ぼてれん國といふのは紅毛の近所か。

くろ　紅毛ぢやない、はらんだのぢやわいなア。

大工　あゝそれで高い所へ手が上げられぬといふのか、早くさう云ひなさりやアいゝに。

佐五　あて事もねえ、奉公人の身で身持になつたの何のと、イヤ呆れたものだ。

きく　ハテ、何事も世になき夫婦が今の身の上、それを愛想もつかさず奉公してくれるもの、どのやうな不埒があつたとて、咎め立してよい物か。

佐五　何でもコリヤ父なし子と見えるわえ。

くろ　ヱヽよしてもおくれ、父有り子ぢやわいなア。（ト恥かしきこなし。）

きく　それなれば誰であらうと遠慮はない、産は女の大役、誰であらうと叱りやせぬから、いづくの人ぢや。いつて聞かしやいなう。

　トこのセリフの内大工見物に見えるやうに、刀掛の大小へ松やにをつぎ込む事あるべし。

くろ　其やうに仰しやつて下さりますから申しますが、アノ私が隱し男と申しまするはアノ春風

きく　藤藏樣、數へて見れば丁度十月、今月でござりまする。

佐五　ムウ、スリヤ何といやる、我身の隱し男と云ふは。

きく　アノ春風藤藏とな、道理こそ相手を云はぬと思うたが、それ聞いては大切な御主人方の御傍へはモウ置かれぬ、たつた今出てうしやあがれ。

くろ　ア丶是々佐五平殿、情ない事云はしやんす。私の母さんがお菊樣へ乳を上げた緣で小さい時からお相手に上り、三十一の今年まで勤めて居るしだらなし、又藤藏さんに心中立てする位なら、何でお菊樣やこなさんに、打明けて云ふものかいなア。

きく　成程小さい時から傍に遣うて、氣質は常から知つたと云ひ、藤藏が種を宿せしとても父上樣不慮の御最期遊されぬ前の事、あえて咎むる事は無けれども、ひよんな契りを結びやつたなう。

くろ　結んだとは云ふもの丶、外に五人や六人はござんした故。

佐五　イヤ呆れた物だ、それぢやア藤藏が子と極つた事もあるめえ。

くろ　それぢやといふて。

佐五　エ。

くろ　イエサ、大かたさうと思はる丶のぢやわいなア。（ト此内大工欄を釣りしまひこちらへ來て）

大工　イヤ成程、氣散じな女中だ、それはさうと先刻からのお話を聞いて居りましたが、お前さん方は遠方から引越してお出なされた御樣子でござりまするね。

佐五　エ、サ俺が旦那は元中國で、おれき〳〵であつたのさ。

大工　それははや知らぬ土地へ御出なさいまして、嘸御不自由でござりませう。

ト是にて櫛箱をおくろ棚へ上げる。棚バタ〳〵と落ちる。

きく　どうしやつたのぢやぞいなア。

くろ　オイ〳〵大工さん、今釣つた棚がもうおつこつた。

大工　落るはづはないが、大かた何ぞ乘せなすつたらう。

くろ　此櫛箱をサ。

大工　乘せちやあ落るは知れた事だ。

佐五　はゝゝゝ。後でわしがよいやうに直して置く程に、それに佛事がある故しまうて歸つて下さい。

大工　はい〳〵、それでは又明日上りませう、左樣なら御新造樣。

きく　大きに大儀でござんした。（ト此内大工門外へ出て、道具を片附けて）

大工　中國者で女房の名はおきく、ウヽそれ。（トこなしあつて下手へはひる。佐五平こなしあつて、）

佐五　今朝來た時からうさんな奴と思つたが、さては誠の大工でなし、もしや御主人方の、フム、一寸行つて見屆けて參ります。

きく　アヽコレ、必ず共に荒立てゝは。

佐五　御氣遣ひなされまするな、めつたな事は致しませぬ。（ト脇ざしを差し、門口へ出て、）コレ氣をつけてくれ。

ト唄になりきつそうして花道へ佐五平はひる。後合方彈流し花道より彌三郎着流し一本ざし、下駄がけにて牡若の花を下げて來り花道にて、

彌三　此まア日の永いといふ物は、とんと今朝の事を忘るゝやうぢや。家を出がけに西念殿へ寄つたれば、大方モウ回向に見えたであらう。アヽ此やうに空も長閑に晴れ渡り浮世の人は樂しみ暮す其中に、望みある身に心の曇り、晴る間もなき旅住居、はて何とした物であらうなア。大ぶ手間取つた、おきくが定めて待つてゞあらう、ドレ歸りませう。

ト唄にて舞臺へ來る。此内おきく、上手の屋體より抱子の布團枕を持ち出て、捨ゼリフにて下へ寢かし附けおきて添乳して居る。

今戾つたぞよ。

くろ　オヤ旦那様、お歸りでございますか。

きく　今までどこにござんしたやら、きつうお暇が取れたではござりませぬか。

彌三　ヲヽサ、此家を世話したくれた仁に逢うて、いろ〳〵話が有つた故大きに暇取つた。さうして西念殿は見えたかな。

きく　はい先刻見えまして今御佛前で、御回向してゞござんすわいなア。ヲヽそれはさうとおくろや、西念殿の御酒の支度をして置きやれ。

くろ　はい〳〵。アノ又西念坊主めは此節のお酒をがぶ〳〵と、正覺坊のやうに呑れては。

きく　アヽコレ、又しても其やうな事を。

くろ　はい〳〵、ドレ支度をして置きませうか。（トおくろ奥へはひる。）

彌三　いつも乍らがさつな奴ではある。小僧はよう寢附たやうぢやな。

トおきく抱子を寢かしつけ起上りて、

きく　はい〳〵、よう〳〵と寢附きましたわいなア。

彌三　聞きやれ、翌日は亡父の命日ぢやに依つて、滿願寺の彌陀堂へ參詣なして、後世の營み願うては來たものゝ、月日の駒に關守なく、丁度明日で一ト廻り、忌日は來たれど今以て、敵の手掛り

とてもなく、冥途におゝします舅殿の、嘸御無念にあらうと思へば、此胸板を張さく思ひぢやわえ。

きく　たとひ我身は此上の浮艱難もいとはねど、是程までにお前とても、心を盡して尋ぬれども、

彌三　いづくに忍び居る事やら、神や佛に祈誓を立て寢た間も忘れぬ仇敵、京極内匠の在所を知り首尾よく本望達した上、蛙丸の御太刀八重垣流の秘書の一卷取戻し、再び吉岡の家名を擧げ姉上おその殿をも呼戻し、目出度う歸參と思へども、何を云ふにも雲をあて。

きく　まだ此上にも月日を過しモシ敵の京極が、いづれの浦にか住居なし、わづらうてなぞ死んだなら、

彌三　此身の願ひも水の泡、寶の行衛の綱も切れ、

きく　私等夫婦姉さんも、

彌三　花咲く春に逢はずして、

きく　數代傳る吉岡の、

彌三　家名もいつか埋木と、

きく　案じ過して朝夕の、

彌三　食事も細るおもやせに。

きく　又案じるはお前の身體、

彌三　とにかく武運に盡き果てた。

きく　思へばはかない、

兩人　身の上ぢやなア。（ト兩人ちつとこなし。彌三郎氣を替へ〔〕）

彌三　アイヤ〳〵、不倶戴天の一心は石に立つ矢もある習ひ、尋ね出して日ならず本望。

きく　ヲヽほんにさうでござんす、心落ちては大事の妨げ。

彌三　今切つて來た此牡若、佛へ供へて夜と共回向を、

きく　私も一緒に、西念さんの戻らぬ内早うお花を。

彌三　サ、一緒にそなたも來やれ。

ト唄になり、おきく抱子を抱き彌三郎花を持ち奥へはひる。四ツ竹の合方になり、犬しきりに吠える。花道より春風藤藏そぼろなるなり、油紙へ目鼻を切り油紙の肩衣引かけ、破扇を持つてみそこしの三味線を持ち、犬を追ひながら出來り花道にて。

藤藏　シツ〳〵畜生め〳〵。（ト石を取つて投付ける。犬啼きやむ。）アヽ如何に時節なればとて、春風藤藏ともいはれた武士が、こんなざまになりやア犬までが馬鹿にしやアがる、いめえましい、ドレ又爰等を流してくれべい。

ト舞臺へ來る。此内奥よりおくろ出て髪を撫でつけて居る。藤藏門口より内へこなし、三味を彈きながら。

東西々々、此所相勤めまする太夫、大阪下り谷本萬太夫、三絃ひく澤ばち六、その爲め口上左樣。

くろ　ヱヽモ、手がふさがつてゐるよ〱。

藤藏　佳肴ありといへども食せざれば其味を知らず、たとへば飯を晝喰はず、夜はひだるくあばれ喰、テン〱チン〱、茶飯を度々にテンチン〱〱。

くろ　ヱヽいけ騷々しい、出ないと云ふに。

藤藏　べら棒め、呉れずば呉れねえでいゝわえ。つゝけんどんにぬかしやアがるな、乞食ぢやアねえわえ。

くろ　乞食でなくば貰つてあるきやアがるな。

藤藏　あろかうとあるくめえと、うぬが世話になるものか。

くろ　此盗人野郎め、利いた風な事をぬかしやアがるな。

藤藏　何だと、盗人だとぬかしたが、サア何を盗んだ。

ト面と肩衣を取捨て内へはひる。おくろもきつとなつて、

くろ　ヲヽ云つたがどうした。（ト互に顏を見て）マヽお前は藤藏さん。

藤藏　ヤヽわれはおくろぢやアねえか。

くろ　ヲヽ藤藏さん、逢ひたかつた〳〵わいなア。（トすがり泣く。）

藤藏　エヽ見たくもねえ、エヽ外聞が惡い、靜にしろ。

ト面目なきこなし。此時奥より西念酒に醉ひたるこなしにて出て來り。

西念　エヽ大きに馳走になつたわえ。時にあれから聞て居つたがおくろ殿、云替した男に逢つて嬉しからうの。

くろ　察して下さんせえ。（と顏を隱し恥しきこなし。）

西念　エヽ嬉し相な顏をして、ちくるいめ。（ト行きに掛るを藤藏見て。）

藤藏　そちや乳母が夫の子、惣次ではないか。

西念　ヲヽ和子樣、藤藏樣。

藤藏　そちが手紙で。

西念　アヽ是〻。（ト云つては惡いと云ふこなし。）

くろ　そんなら春風さんは。
西念　俺が女房の亭君ぢやわえ。
藤藏　西念といひ、おくろが爰に居るからは、さては此家は。
くろ　彌三郎樣お菊樣ぢやわいなア。
藤藏　それぢやアめつたに。（ト表へ出ようとする）
くろ　コレ〳〵待つて。（ト引留める）
藤藏　放しやアがれ。
西念　はてまアわしに。（トさゝへるを振切るを又留めて爭ふ。花道より佐五平急ぎ出て、）
佐五　すてきに足の早い野郎めだ、何處へうしやアがつたか影を見失つて仕舞つた、エヽいま〳〵しい。（ト云ひながら舞臺へ來て）ヘイ只今歸りましてござりまする。（ト云ひ乍ら藤藏を見附け）ヤ、うぬは春風藤藏だな。
藤藏　うぬは奴の佐五平めだな。
佐五　敵の手掛り。（ト掴み掛るを西念とめて）
藤藏　南無三其間に。（ト逃げに掛るを、西念佐五平を留めて、）

西念　コレ待たつしやれ。

くろ　待たしやんせ。（ト兩人佐五平にすがり留める。）

佐五　うぬ爰等にうせるからは、京極内匠も都の内にうせるは治定、骨をひしいで其所在を。

ト藤藏を蹴する刀へ手を掛ける。藤藏こなしあつて。

藤藏　ナレ〱待て〱〱待てくれ。たつた一言云ふ事がある。あらけなく手を出すな、前の春風藤藏と違つて二三日以前から飯も喰ず、夜はろく〱夢も結ばず人の軒下に寝ては打たれたり、叩かれたり犬に臑をかまれたり、アヽ昔の身なら人並に飯も喰べ夜は旅籠につかうものと、人のおめしを喰ふを見て羨しいやらひもじいやら、骨も枚るゝ憂艱難弱り切つた藤藏ぢや程に、何と云はれうとも。口惜しいともくやしいとも思ひもせぬが、京極の在所は知らぬ〱。京極と一ツなら此樣なざまには成らぬわえ。（トしく〱泣き乍らこなしあつて云ふ。佐五平せいて）

佐五　ヤアぬかすまい、彌三郎樣お預り蛙丸の太刀もうぬが仕業で内匠に荷擔し、親旦那を討つて立退き、まだ其上にお家の秘書までも。道は一筋敵の片割、サア眞直に白狀しろ。

藤藏　是さ〱是は又情ない、如何にもその蛙丸は身共が盗んだ。

佐五　扨てこそな。

藤藏　したが一味齋殿を討つた事は、身共は知らぬ〳〵。サ、其仔細は蛙丸さへ盜みくれたら、吉岡の娘おきくは云號の彌三郎を太刀紛失の科でおつ附け、する〳〵べつたりお身が女房に此内匠が受合ふとの、共口車に乘が來て、何の思慮なく蛙丸を盜みしは此藤藏が一生の誤り、面憎いは京極内匠、俺よりはうぬがおきく殿にあくまでうつ惚れ、俺をお先に蛙丸を手に入れた故音沙汰なし、その内惡事のあらわれに、内匠めは戀の遺恨と試合の遺恨、一味齋が歸りを待伏せ打つて捨てたは。あいつが業俺はちつとも覺がねえ、コレ佐五平、[illegible]放洗む俺が身を推量してくれいやい。

西念　成程わしも緣ある藤藏樣、筋の判らぬ和子でもあるまい、まア〳〵待て下さりませ。

くろ　早まつて下さんすな。

佐五　何は兎もあれ惡人の荷擔人、引くゝつて。（ト縛り掛る。藤藏身を縮めてこなし。此時奧より彌三郎出て）

彌三　佐五平待て、鷄をさくに何ぞ牛の刀を用ひん。

佐五　でも彼奴をば。

彌三　ハテまア、待ちやれといふに。（ト佐五平ぢつと控へる。）一別以來春風氏。（藤藏面目なきこなし。）

藤藏　彌三郎殿、面目もなき此面會、委細お聞き下されたか、今更何と貴殿に對し。（ト有合ふ出刃を取り）

僞りならぬ申譯、潔う此場に於て。

ト出刃にて我腹へ突立てんとする、西念おくろ留めて。

彌三　待れよ藤藏、鳥のまさに死なんとする時其聲悲し、人のまさに死せんとする時その云ふ事よしと古人の金言、先刻より樣子を聞くに先非を悔いし貴殿の詞、シテ蛙丸の一腰は如何召れた。

藤藏　サア只今も申す通り、その太刀を盜み取つて直に內匠へ。

彌三　アノ京極へ手渡しなして、

藤藏　それぢやに依て。（ト又出刃へ手を掛ける）

西念　コレ待つた、大方知れたこなたの惡事、善心に立歸り今捨てる命を生き延び、彌三郞樣へ言譯に蛙丸を詮議して何故返さつしやりませぬ。

藤藏　なんと。

西念　サ、こなたの盜んだ其太刀を取返すのが肝要ぢやわえ。

藤藏　一向存ぜぬ、神佛かけて、誓文眞實、何處に居るやら。

佐五　スリヤあのいよ〳〵。

藤藏　その疑ひを晴らす爲め。（ト又腹切らうとするを留め、）

彌三　イヤ藤藏殿、改めて其元へ此彌三郎が頼み入度き一儀がござる。

藤藏　ヤ。（ト思入。合方になり。）

彌三　サたとひ京極いかなる奸計邪智ありとも、よも天地の內は放れまじ、まこと善心に立返らば貴殿も共に在所を尋ね、一トまづ恨みの詞をひかへ矢張り一味と表を見せ、蛙丸の御太刀、又吉岡の秘書八重垣流の奥義まで、とくせんさく下されて其上にて是へ手引あらば首尾よく敵を討つて後お上へよしなに申上げ、貴殿も共々本國へ歸參あるやう、此彌三郎が刀にかけて取なし申さん

藤藏　スリヤ何國にても京極めに、廻り逢ても其の儘に。

彌三　荷擔と見せかけ二ツの品の、とくと實否を糺した上。

佐五　裏の裏行く旦那の計略。

藤藏　ヲ、天晴才智の衣川殿、然らば貴殿の指圖に任せ何れに隱れ忍ぶとも。

西念　草をわかつて、

佐五　敵の所在。

藤藏　承知致した、是にて胸が開き申した、其上拙者が歸參まで心附ある貴殿の心底、猶豫致さず此場より直ぐ此儘に暇申す。

西念　コレ和子樣、せめての事に今宵はこなたに。（ト立掛る藤藏を止め、彌三郎にこなしあつて）せめて一夜は裏の小屋にて。

彌三　斯くなる上は何のそれしき、心置なく。

藤藏　エヽ忝ない。

しろ　そんなら藤藏さんは。嬉しや〳〵久し振りにて、今宵はしつぽり。（ト彌三郎を見てこなし。）

藤藏　然し何方を心當て。

彌三　まづ差當るは東海道、諸國の人の入つどふ、江戸表を始めとして、出羽奥州より越路潟。

佐五　尋ね當らば飛脚にて、通達あらばお旦那が、

彌三　直樣駈行き舅の仇、

皆々　京極内匠。

彌三　さすれば貴殿も元の春風、

藤藏　アヽ忝い。

彌三　何は兎もあれ、奥の離へ。

西念　今宵一夜さ。

藤藏　彌三郎殿、

彌三　佐五平、皆を伴ひ、

佐五　サア、こつちへござらしやりませ。

ト唄になり、佐五平先に藤藏西念、おくろ彌三郎にいやらしきこなしあつて後より附いてはひる。後

彌三郎こなしあつて。

彌三　今春風が詞のはしぐ、虚實はしかと知れねども、心せく程今以て在所知れねば彼等をも、手立を以てなづけ置くも、敵を探らん苦肉の計略。どうぞ早う手掛りが聞きたいものぢや。

ト合方になり、奥よりおきく出て、

きく　モシこちの人、今奥で樣子を聞きましたが、アノ春風をかたらうて。

彌三　ヲヽサ、アノ藤藏以前の如く京極が一味荷擔と心を許させ、欺しすかして一品を。

きく　取得てどうぞ片時も早う、吉左右を聞いたなら、嘸嬉しうござんせう。

彌三　少しは手掛り知るゝと云ふ、神佛の加護でがなあらうわえ。

きく　ほんにさうでござんすなア。

彌三　コレおきく、茶を一ツくれ。

きく　アイ〳〵。

　トおきく茶を汲んで傍へ持つて行く。地藏經松蟲入りになり、花道より京極內匠つゞれごしらへ、頰かむりにて車に乘り片膝を布にて卷き、足をさすり乍らむしろをまとひ居るを、里の子大勢車の綱を引き花道よき所まで來る。

里子　サア〳〵向うが約束の家だ。

內匠　ヲヽ有難うござります、モウ〳〵是でよい、戾して下され。

里子　サア行かう〳〵。

　トやはり地藏經にて舞臺門口まで引いて來り、子供は捨ゼリフにて下手へはひる。後車の上にて內匠門口にこなしあつて。

內匠　難病の者、御助力をお賴み申す。（ト是にておきくこなしあつて、）

きく　ドレ〳〵手の內進ぜませう。（ト云ひ乍ら立つて門口をあけ紙捻の手の內を遣らうとして內匠を見て、）

や、そちは正しく京極內匠。（ト思はず盆の錢を落す。彌三郎聞附けて）

彌三　なに、京極とや。

　トツカ〳〵立つて車の上の京極が襟上を引摑み、門口より家へ引きずり入れ門口を立切る。おきく脇差を押取り詰かける。

ヤア珍らしや京極内匠、舅一味斎の敵、事の次第は云ふに及ばじ。

きく　ようも父上を欺し討になして迯げ去りしよな。

彌三　サア潔く、

兩人　勝負々々。（ト兩人刀を押取り、詰掛ける）

内匠　サヽ、心はやるは尤もなれど今某が申す事。（ト云ふを彌三郎たゝみ掛けて）

彌三　ヤア此期に及んで未練千萬、誠の武士の魂なくとも、迚も遁れぬ籠中の鳥。

きく　恨み重なる刃の切味。

彌三　首を洗つてそれへ直れ。

内匠　サヽ、それ故其許方の在所を尋ね、少しも早う討たれん存念。

兩人　ヤ、何んと。

内匠　サヽ事長くとも聞いて下され。（ト竹笛入の合方になり）因果は車のわだちの如く、是まで作りし積惡に、終には天の咎めを受け世に稀なる人面瘡といふ腫物をでかし、左の股へ人の顔に似たる物腫れ出し、瘡口へ食を入れゝば暫時の間は痛は去れど、日には幾度となく痛み出し、かゝる姿になり下り、おのれがたつきにさへ追はるゝに、足にまで養はねばならぬ業病、かくては果て

じと氣をはげまし、御兩所の在所を尋ね、敵と名乘り討たれなば此世の業も滿てる道理、未來の苦患を助りたさ。サ、一刻も早く拙者を討て、御親父尊靈へ手向けられ、修羅の妄執晴らして下され。

彌三　ホ、まだしも京極よい覺悟、惡に強きは善にも強しと、極惡無道の汝なれども、おのれが受し業病より身の置所なきまゝに、尋ね來りしものならんが、少しは武士の恥を知り、よくぞ來れり京極內匠。

きく　是に付ても姉上は、何處を尋ねてござんすやら、兄弟揃ひ敵を討て父へのお手向を。

內匠　サ、、某も左は存じたれどおその殿を待合す其內に、某病に相果てなば千日に苅つた茅、一刻も早う打れて此足の苦痛を遁れ助り度し、爰の道理を聞分けられ。

きく　ム、さうして蛙丸の一腰は。

內匠　サア其一腰もそもじを口說に屈强の物と、大事に所持して居たれども、かゝる姿に成下り其日其日も暮しかね、よぎなく道通りの中買に賣渡したれば、今はいづくに有りぞとも。

彌三　それとても本意を遂せし其上にて、草を分つて詮議なさば尋ね出すは治定せり。シテ又八重垣流の一卷は。

内匠　それこそ非人も同然の身の裸をいとひ、ヲヽあれ〳〵向うに見ゆる釜が淵の、松の根元へ箱に納めて埋置けば、誰も氣の附く氣遣ひなし。サヽ、それまで明かす上からはちつとも早く某を、此場に於て討たつしやれ。

きく　左はさり乍ら人の情に借家して、爰にて討たば恩を仇なる後の難儀。

彌三　ヲヽそれも尤、かゝる場所にて討たんより釜が淵へ同道なし、一巻手に入れ其上にて。

内匠　いかさま口でまだ〳〵申さうより、彼處へ參つてその許方に取出させ、一巻を手渡し心よう討たれなば、今際の際のそれぞ本望。

きく　そんなら是より。

内匠　御苦勞乍らあの車を。

彌三　ヲヽ心得た。（ト車を寄せ、彌三郎おきく介抱して、内匠を車に乘せる。）

内匠　彌三郎殿は元よりお菊殿の介抱うけ、車の綱手に引るゝも、よく〳〵深い是も因縁。

彌三　弘誓の舟にあらなくに、行くも奈落の釜が淵。

きく　折も折とて佐五平は乙女坂に心當りがあると聞き、裏口より出て行きしが。

内匠　何さま某昨日まで、彼處にさまよひ居りし故。

彌三　然し戻りには、彼の所まで來るは必定。

内匠　サア一刻も早う、御苦勞乍ら。

きく　あい〳〵、合點ぢやわいなア、（トおきく綱手を引き彌三郎後より車を押し花道へ行く。幕六ツ鳴る）

彌三　アリやモウ入相。

内匠　此身もやがて消えて行く。

きく　命の綱手小車の、

彌三　あの世へ急ぐ、

彌三　死出の旅。

きく　引るゝ者も、

内匠　引く者も、

彌三　移れば變る、

三人　世の中ぢやなア。

ト三人愁ひの思入。又地藏經になり、おきく綱を引き彌三郎介抱して花道へはひる。後早い合方になり藤藏、おくろ、西念、出て來り、

藤藏　何と與惣次、俺が手際はどうだ、おぬし達も感心だらうがな。
西念　アノ京極殿と云合せ、首尾よくいつた夫婦の奴等。
云ろ　どうせ私もかう成りやア藤藏さんと連立つて、どんな深山の奥までも。
藤藏　ヱヽよしやアがれ、手前のやうな奴を連れて行つて、糸瓜のこやしにもならねえやア。
西念　それはさうとあの佐五平めが乙女坂まで行きたれば、モシ釜ケ淵へ廻つて京極殿の邪魔になつては一大事だが。
藤藏　そいつア捨ては置れねえわえ。いつそ是から佐五平をおッ片附け。
くろ　アイタヽヽヽ、かう虫がかぶつて來ては、こりやアもう産れさうでござんすわいなア。

ト藤藏にすがり附く。

藤藏　エヽモ、それ所ぢやアねえわえ。
くろ　それでもお前が此やうな身體にして。
西念　今更そんな事を云つても追付かねえ。お前は早くあの奴を。
くろ　アイタ〳〵〳〵、もう堪らぬ〳〵。
藤藏　ドレ是から直に乙女坂へ。（ト行かうとする。おくろ取付くを西念引留めて）

くろ　お前をやつては。

西念　ハテまアおぬしは、

藤藏　後は此方に、

西念　ちつとも早く。

くろ　アイタ〳〵。

藤藏　合點だ。

ト曲彈きになり、藤藏は花道へ、おくろは腹の痛むこなし、西念介抱する。此仕組よろしく道具廻る。

本舞臺一面しゆろ伏土手眞中靑面金剛の石塚、後松の立木土手際の上下も同じ立木、向う打拔き七條河原の遠見、松の釣枝、すべて釜ケ淵の體。雨車、風の音にて納る。ト直ぐ竹本になり。

〽朧夜に、亥中の月の影高く爰も都の釜ケ淵、降り續きたる五月雨に水かさ增して物凄く、命もあすか京極が身に廻り來る業病を、片輪車に助けられ、お菊も共に彌三郎日頃の望果さんと、勇めど弱き女の力。

ト此淨瑠璃の內本釣鐘を入れ、花道より以前の京極車に乘りしをおきく先に綱を引き、彌三郎車の後より押して介抱し乍ら出て來り花道にて。

内匠　我惡心より事起り家を滅却するのみか、吉岡の家まで破滅させ、其天罰は忽ちに此身に廻る此姿、三惡に有りと聞く取も直さず火の車、今々思ひ當つてござる。

彌三　かく成行も約束事とは云乍ら、たとひ五逆十罪の罪人もその身の懺悔に罪消ゆと、佛說に說いたる如く惡念忽ち發起して、かく善心に成つた故、死後に汚名を殘さぬ道理。

きく　綱手は女子の甲斐ない力、はかの行かぬで、嘸ぢれつたうござんせう。

内匠　何の〳〵、羊のあゆみ屠所の駒、一足づゝにちゞまる命、とは云へ今の苦しみより。

彌三　此世の苦患をまぬがれて。

きく　永い未來で父さんに、

内匠　逢うて此身の詫致さん。

彌三　サヽおきく。

きく　アイ〳〵。

〽やう〳〵河邊に引止め。（ト本舞臺へ引いて來る。）

内匠　アイタ〳〵。きつう痛みが增し居つた。是に就けても早く苦患が助り度い。

彌三　ヲヽ尤至極、シテ一卷の埋めある、

きく　松の木はどれでござんすえ。
内匠　ムウそれ〳〵、其木の元でござる。
彌三　ハヽア是でござるかな。
内匠　ヲヽそれでござる。堀らしやるには此かいを貸して進ぜませう。
きく　ほんに是がようござんせう。
〽かい差出せば彌三郎、松の根元へ差掛るを。
ト彌三郎おきくかいを取り松の根元へ寄る。
内匠　アヽイヤ遂ひ申した、エヽコレ、月明り故しかと見とめが、それ〳〵そちらの。
彌三　是でござるかな。
内匠　イヤ〳〵お菊どの、此車をもそつと松の方へ。
きく　合點でござんす。
〽やう〳〵車押しやれば。
内匠　それ〳〵、そちらの二番目の。

彌三　はゝア此二本目のかな。

きく　モシこちの人、餘程深く堀らねば成るまいわいなア。

夫が堀れば甲斐々々しく、おきくも傍より手傳へば、折こそよしとかたへより寶劍取るより抜手も見せず、はつと一聲おきくが仰天、折から不思議や啼立つ蛙。

ト此淨瑠璃の内彌三郎おきく捨ぜリフにて松の木の元を掘りにかゝり、内匠其内に眞中の松の木のうつろより寶劍を出し、片手にて切下げ、彌三郎をしたゝかに切る。はつと苦しみ二重の下へころげ落ちる。彌三郎起上つて白刃を抜いて切つて掛るを、内匠二重へ上り件の白刃をふまへ石を打付け、我持ちし寶劍をさし付け見得。

彌三　重ね〳〵も卑怯な振舞ひ、かく計らはん其爲めに。足なへなりと僞りて。

きく　私等夫婦をおびき出し欺し討たん、

兩人　企よなア。

内匠　ヲヽいゝ推量だわえ。われが今云ふ其通りいざりと見せた口車、うか〳〵乘つて夫婦連れ爰まで死にうせるとは、見りやア見る程みぢめなざまだア。

彌三　ヤアたとひ手疵は負たりとも、やわか此まゝ討れうか。

きく　女作らも父さんの敵。

内匠　なに、猪口才な。

〽と左右より、切込む太刀を物ともせず、蹴上るはづみにお菊がひはら、ウンと斗りにもんぜつす、彌三郎は氣も張り弓と働けど、初太刀の疵によろめく足元、すきを附け込み打込む太刀を受損じ、急所の痛手にどつかと座し。

ト此淨瑠璃の內彌三郎おきく又切つて掛るを一寸立廻り、おきくを足にて蹴るはずみにウントもんぞつしておきく倒れる。是に構はず彌三郎と立廻り又したゝかに切下げる、彌三郎うんとへたり、あせるを肩先より胴中へ刃を貫き、青面金剛の臺石へどつかと腰かけ、火打を出し、內匠煙草を吞む。彌三郎苦しみ。

彌三　チエヽ口惜しや殘念や、心はやたけにはやれども、初太刀の深手に思はぬ不覺・云はゞやうなき大惡人、思へば〱おのれはなア。

〽髮逆立て怒りの顏色、皮肉破れて疵口より血はこん〱とほとばしる、折柄おきくは息吹返し。

ト此内おきくは息を吹返し、

きく　ヤ、こちの人をむごたらしう、モウ此上は。

〽はやれど甲斐なき女子の力、なんなく刀もぎ取られ。

ト おきく切つて掛るを立廻りて、刄を打落しその手を押へこたし、

内匠　コレおきく、手前は情ねえ者だぞよ。ぞつこん惚れたが俺が因果、うんと色よい返事をすりやア、今日から直ぐに京極様の奥様だわ。又いやだとぬかすが最後、アノ彌三郎同樣に是から先はなぶり殺し、性根を据へて返事を仕やれ。

きく　エヽ聞も中々汚らはしい、おのれ犬畜生へ、一太刀なりとも。

ト以前落したる刀を取り切つて掛る、一寸立廻り、内匠彌三郎を貫きし刀を拔取る。彌三郎よろぼひ〳〵立廻りては下に居る。此内大げさに一太刀切下げ、あつと苦しむ。

〽すきを窺ひ打込む刀、京極すかさず受止めて。

内匠　その手ぢやゆかぬ、われが手強い程猶執心、そちが親の一味齋を討つて立退いたも、元の起りはそもじに惚れたからの事。サア、おうと云うて抱れて寝るか。

きく　いやぢや〳〵〳〵、おのれのやうな大悪人に、何で肌身を穢さうぞ。

内匠　ヲヽいやだといやアわれが今、見て居る前で彌三郎をなぶり殺しにした上で、縛り上げても抱いて寢る、きり〳〵返事をしやアがれ。

きく　身體は千々に切らるゝとも、やはか此場を遁さうか。

内匠　ヲヽ逃げろと云つても逃げはしねえ。われがさう強情にぬかせば、彌三郎をかうするわ。

〽切るやら突やらめつた討、おきくは身もよもあられぬ思ひ、彌三郎も諸共に無念の齒がみ血走る眼。

彌三　チエヽ、いかなればとて主殿の一周忌の逮夜に當り、此身斗りか妻諸共非業の刄に死ぬるとは、神も佛も無い事か、チエヽ。

きく　モシこちの人、幾瀬の苦勞艱難して廻り逢うた甲斐もなう、かすり疵さへおはせず、此まゝ死なば父上に、冥途で何と云譯せう。

〽氣は萬石の女氣も、深手に弱る血の涙、おきくはやう〳〵顏さし上げ。

ア、是につけても彌三松が、嘸今頃は。

〽此父母を戀慕ひ、尋ね迷うてうろ〳〵と。

定めて泣いて居るであらう、それはともあれ現在の。

〽杖柱とも姫御前の、賴む夫は劍の難、親にも水難三惡の、はかない悲しい味氣ない世の憂事を身一ッに、受けたは何の因果ぞと、恨のこぶし握り詰め。

是といふのもおのれ故、チエヽ口惜しい。

內匠　おのれがあくまで彌三郎に情を立れば、可愛さ餘つて憎さが百倍。おきく、わりやア其顏で彌三郎を迷はせたか。

〽雪をあざむく面體も、忽ち替る血汐のくれない。

きく　つらからば只一筋につらかれと、殺しもやらぬ非道の刄、夫と共に草の露、鬼にも增りし業惡非道。

內匠　ヲヽもがくわ〳〵。今迄いとし可愛いと添寢の夢に引替へて氷の刄草の床、よくも內匠を嫌つたな、其返報は、是でもか〳〵。

〽殺しもやらぬなぶり切り、此世からなる地獄の苛責。

ト內匠刀にておきくの顏を切り、所々を切散らす。おきく苦しみ白刃を兩手にて摑む。

それ〳〵指が落ちるぞ〳〵。（内匠足をふんがけ刀を引取りウント來るを蹴返して）二人乍らくやしいか。口惜しいか。コレ業つくばりめら、耳をさらつてよく聞けよ。此彌三郎をしくぢらさうと此蛙丸を藤藏の間拔をだまして忍び込ませて盜ませたを、薄く氣取つた一味齋、歸りを待うけぶつ放し、八重垣流の一卷も其時手に入れ、コレ爰にぽつぽに入れてうま〳〵と、欺して爰へまで連出したのは、なぶり殺しにしようばつかり、追付け姉のお園を始め汝等二人が餓鬼までも、吉岡一家は皆殺し、親兄弟手に手を取り、三途の川や針の山死出の旅路で待合せろ。思やアみぢめな、くたばりざまだア。

彌三　チエヽ、かゝる事とも露知らず、やみ〳〵おのれが毒手に落入り、此儘かばねは朽ちる共、魂魄此土にとゞまつて。

きく　恨を晴らさで置べきか。

內匠　世迷言はそれぎりか、ドレ引導を渡してやらうか。

へおきくが胸へさし通せば、彌三郎は足ずりなし。

彌三　我目前にておきくまで非道の刄にはかない最期、是につけても佐五平が、乙女坂まで行つたりしが、せめて彼めが居るならば。おのれを此まゝ置べきか。佐五平ヤアイ〳〵。

〽呼べど答も川風に、行來とだへし釜ヶ淵。

ト よろぼひ乍ら彌三郎向ふを見て呼ぶ。内匠襟上を取つて引つけ。

内匠　エ、やかましいわえ、モウ相應にもがいたらう。京極樣のお情でわれも息の根止めてやらうわ。

彌三　殺さば殺せ、此無念、何あんおんに置べきか。

〽ぐつと一突き氷の刃、胸板かけて切下げれば、虛空を掴む斷末魔。

ト 内匠刀を逆手に持ち手拭を卷き、彌三郎が腹へ突通しゑぐり、刀を拔きかけ、我手を胸先へ入れ臓腑を引出し朧月にすかし見て、

内匠　われが無念口惜しいといふ膽は是か。くやしいか。（ト彌三郎苦痛の體よろしく）思やア非業な、いゝざまだなア。（ト件の膽を上手のおきくが落入りし顔へ打付け）

〽哀れはかなく。

へゝ。

ト 彌三郎につばを吐きかけ、肩にて笑ふを木の頭、本釣鐘を打込み、床の三重にて此仕組よろしく、

幕

四幕目　鎮守森瓢棚の場

役名　京極内匠、奴友平、角力取鼬川、百姓大勢、供侍、中間、吉岡娘お園。

本舞臺眞中より少し上手に古びたる小ぶりの祠、此左右松杉の立木高く、誂への瓢棚あり、すべて栗栖野鎮守森の體。爰に百性四人鋤鍬もつこなどを持ち、氣味惡き素振りにて左右へこなし乍ら立掛り居るもやう、風の音かすめたる合方にて幕あく。

百○　オイ〳〵兵作、早う行かぬかい。

百△　やかましう云うない、俺は行かうと思うて居るが爰まで歸つて來ると、何ぢややら知らぬが足が進まぬのぢや、お前先へ行つてくれ。

百□　臆病な奴ぢやなア、それでは俺が先へ歩行いてやる。（ト上手へ行きかけ後退りして）權兵衛、お前先へ歩行け。

百◎　ニ、俺一人先へ行けるものか、心持の悪い。

百○　皆がそのやうに恐ろしいと云うて、爰まで歸つて來て後へ引返すといふ譯にもゆくまい。此間から此鎭守の森に夜な〳〵色の白い凄い女が、すつくと立て居るとの事、夫は必らず化生の者に違ひないに依つて、所の相撲取川が遠からぬうち正體を見あらはし、生捕にすると請合つて居るぢやないか。然しその女の出るのは、もそつと夜更けてからとの事、宵の内には別條ない、サア先へ行け大丈夫だ。

百△　源右衛門、お前そのやうに大丈夫と思ふなら先へ行け。

百○　よし先へ歩行てやろ、何ぢやい、何奴も此奴も臆病な奴ばかりぢや。俺が先へ歩行てやらう。

（ト先へ行きかけ、氣味惡きこなしにて後ずさりして）やめに仕よう。

三人　どうしたのぢや。

百○　かうしよう、誰彼と云ふより皆が一緒に行かうぢやないか。

百□　それでは矢ッ張り、あのお前も。

百◎　一人先へは。

三人　よう行かぬのぢやな。

百〇　夫でも一緒に行けば、依怙ひいきなしぢや。
百△　何としよう仕方がない。
百□　夫では一緒に、
百◎　拍子を揃へて、
四人　一イ二ウ三イ。（ト上手へ行きかける。是より風音になり、四人氣味惡きこなし）ウワ――。
ト皆々恐ろしきこなしにて上手の方へ逃げてはひる、是より床の淨瑠璃になり、
〽元來し道へと引返す、薄を分くる秋風が吹送りたる乘物は、急ぐとせねどおのづから、栗栖野にこそ着にける。（ト花道より供侍二人附いて中間乘物をかつぎ出て直ぐ本舞臺へ來て）
侍二　ハヽツ、鎭守の森にござりまする。
〽引戸あくれば立出る、容儀器量も吉岡が娘と誰か夕化粧、作りやつして辻君こゝ、見せばや見せんその風情。
侍一　ハヽ、いつものお道具は、あれへ差置きましてござりまする。

侍一　又雨催ひにござりますれば、雨具は是へ差置きましてござりまする。
その　今宵は是に通夜すれば、明方に迎ひの駕籠、そち達は旅宿へ歸りや。
兩人　畏りました。
〽早う〳〵と追返し、四邊見廻し獨言。（ト供侍中間皆々はひる）
その　旅宿近邊の人目を憚り、毎夜愛まで乘物にて忍びきて、往來の人を試し見るも今宵で五ツ夜、それぞと思ふ者にも出合はさぬは神佛のお惠みの無いかと思へば悲しい此身、一味齋の娘ともあらう身が辻君に姿をやつし、辛苦をするも皆敵京極めが仕業ゆゑ、憎しと思ふ念力に尋ね逢はいで置くべきか。
〽男まさりのその魂、一腰かくし置く露の草の茂みに立ちつくす、大道一杯大股に足踏み鳴らし鼬川。
トおそのよろしくあつて刀をかくし手拭を冠りて向ふへ思入、竹本の切より誂への鳴物にて花道より鼬川道化師角力、好みのなりにて出て來り花道に止り、
鼬川　聞けば此頃此森に、凄い女が毎晩出るとの噂、化生の者なら生捕する、おんとうのよい權妻なら俺が儘にすると、村の奴等に受合うて見あらはしに來た鼬川、何でも一番手合せをしてやり

度いものだなア。

ト是を右の鳴物にて大手を振り本舞臺へ來たり、お園を見て上手下手に廻りよく〳〵眺める事あつて

はゝアよい器量だなア、化生であらうがあるまいが、是を見ては堪つた物ではない、一番俺が手合せをしようわい。

ト直ぐにおそのゝ前へ來り、おそのに突かゝつても少しも動かぬ故、びつくりしてこちらへ來り。

女に似合ぬどえらい力。今度は一番地取をして、めつたに負けぬ鯱川、待て〳〵。

ト是より太鼓入りかんから太鼓をあしらひ、鯱川着物を脫ぎ、締込み一つになり地取などよろしくあつて。

ヨイショヨハイヨウ、ヨイヤ〳〵〳〵。

ト無理に頭突をかます事あれどこたへず、おその體をかわすと鯱川無手に投げられ、びつくりして又立上りて。

ヨイショウアリヤ〳〵〳〵。

トまくりに掛るとおそのは手を延して突倒す。鯱川は地藏こけに橫倒しにどうとなつて叶はぬといふこなしにて。

皆來てくれ。

ト下手へ叫ぶ。是にて下手より百性大勢獲物を持ち出て來りおそのに掛る。誂への鳴物になり、おそのは大勢を相手に立廻り脊々を投げつける。

へかゝる折柄いツさいさい、來掛る奴も眞黒な、紺のだいなし判らぬ闇。

ト右の鳴物にて花道より奴友平走り出て來る。おそのに追はれたる百性は友平に掛る。友平是と立廻りごつちやになり、トゞ百性を花道へ追込む。

へむら／＼ぱつと逃げ散つたり。（ト友平は花道へお園本舞臺、大勢を追込み双方すかし見て）

へ怪しの姿窺ひ居て。

その　今の手並にこりもせず、居殘りて我を覗ふか、それに居るは何者なるや。

へ詰め問ふ詞に聞耳立て、

友平　さう仰しやるは、お園樣でござりまするか。

その　さう云ふ聲は、友平ではないか。

友平　お園樣でござりましたか。

その　ヲヽ友平であつたか。

友平　おその樣。
その　思ひ掛ない、
友平　變つた所で、
兩人　是はしたり。
　〽絶えて久しき對面に、悦び合ふこそ道理なり、友平は胸撫でおろし。
友平　ヤレ〳〵嬉しや、何が仰せ置かれましたる旅宿へやう〳〵着したる所、是に御座なさるゝと聞くや否、知らぬ路を闇雲に參る道にて今の騷動、何でも此奴狼藉者と、めつたやたらに投げ散らしましたが、計らずあなた樣にお目に掛り、かやうな仕合せはござりませぬ。
その　ヲヽ大儀々々、〳〵永々しい道中といひ女子供の初旅なれば、嘸かしそなたのいかい苦勞、よう介抱してたもつたなう、さうしてあの妹や彌三松は旅宿に休んで居やるかや。
友平　エヽ、成程坊樣は御旅宿で佐五平にきつと預け置きましたが、隨分御機嫌ようござりまする。
その　ヲヽそれで安堵しました。イヤモウ案じられるは妹が事、虛弱な上に持病の積、もしや途中で起りはせぬか、達者で有つたか、無事なかや。
　〽かきたくる程尋ねられ、答へに詞あら涙、川に淵なすばかりなり。

ト おその に尋ねかけられて、友平言譯なきこなしにてぢつとたる。

合點の行ぬ氣遣しい、さしうつむいて涙の體、どうやら胸が騒がれて心元ない、樣子を早う聞したも。

　へ何とぢやどうぢやとせりかけられ。

友平　ヱヽ無念、口惜しうござりまする。

その　ナニ口惜しい無念なとは。

友平　サア申上るも面目ない事ながら、お妹御おきく樣は。

その　妹きくはどうしやつた。

友平　そのおきく樣は。

その　持病の癪でも起りしか。（ト友平云ひ兼ねたるこなしにて）

友平　そのおきく樣は、人手に掛つてあへなき御最期。

その　ヤア。（ト驚く。）

友平　おゝお道理だ〱、お道理でござります、未だおきく樣ばかりぢやござりませぬ、彌三郎樣にもあへない御最期でござりまする。

その　ヱヽツヽスリヤ妹と云ひ彌三郎殿までが、ヤヽヽヽ。
へと仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出ず、暫し詞も無りしが、氣を取直し詰め寄つて。

友平　シテ〳〵それは何者の仕業、敵は何奴、早う云や、どうぢや〳〵どうぢやぞいなア。
お心急くは御尤もでござりまする、まア一通りお聞きなされて下さりませ。（トめりやすになり）此下郎めがお菊樣坊樣諸共、須磨の邊までお供致しましたが　永旅のお勞にて道捗らず私は駕籠を雇はんと後の宿へ引返し、又立戻る其折しも怪しき曲者、追かくる其足元にお痛はしやお菊樣、彌三郎樣には數ケ所の深手、呼びたけつても返らぬお命、まだ天道のおひかへか、和子樣にはお怪我も無ければ、悲しい中にも心をはげまし、此曲者は必定敵、追付て捕へんと思へどはるか時も過ぎ、方角知れねば詮方なく、御骸を取納め御記念にもと切取りし、此黒髪を御妹御と思召されて下さりませ。御歎きもお腹立も御尤もでござりまする。（ト懷中より黒髮を出しおそのに渡し）いしこらしくお供をしながら、此樣な目に逢はせましたは手を出してせぬばかり、矢張下郎が殺しましたも同じ事、坊樣は御旅宿にて佐五平へ慥かに預け置きましたれば、主殺

しの此友平、ずた〳〵になされたとて、決してお恨みはござりませぬ、サア突つしやりませ。
切り刻んで下さりませ。

〽忠義一圖の友平が、死を決したる一言に、不便と思へど泣く目を拂ひ。（トよろしくこなし）

その　アノ爰なうろたへ者めが、身の云譯をするに及ばぬ、少しなりとも手掛りになるべき事をなぜ云はぬ。うろたへたか、コリヤ友平。

〽云はれてそれと心付き。（ト友平懐中より守袋を出して）

友平　お二人樣の御襁褓の傍に殘りし此守り、中には臍の緒の書付けが。

〽と差出す守袋を手に取つて。（トおその守袋の中の書付を見て）

その　永祿九年五月十日の誕生とばかり。

友平　手掛りにはなりませぬか。

その　稚名さへも記してない此書付。

友平　スリヤ手掛りには、

その　ならぬわいなう。（ト投り出す）

友平　ハリヤあの、ム丶。

〽はつとばかりにどうと座し、思ひ極めし身の覚悟、おそのは形見の黒髪を、
撫つさすりつ肌に添へ。

ト兩人よろしく淨瑠璃通りこなし。

その　七度結んで姉となり。

〽六度結んで妹と、云ひかはしたる甲斐もなく、親の敵をうつゝとも、夢寐
へぬ幼兒に。

聴や心の引かされて、迷うて居やるであらうなう。

〽迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも、逢ひ度いわいのと聲を上げ、口説
こがれて歎きしが、やう／＼涙押し止め。

ヲヽさうぢや、此黒髪を添へたせば、姉妹寄添ひ居る心、妹きくが魂かもじ。

〽其小枕の事までも、未來へつげの櫛の歯に解きほどかれぬもつれをも、しの

ぎおふせて勝山と、緣喜祝ひし黑髮の色もつやく\烏羽玉の、闇こそ幸友平は腹存分に切あばき、一息ほつと月影の、出汐はおのが身の知死期、苦痛隱せどそれぞとは、悟りしおそのは氣を張り詰め。

トよろしく兩人淨瑠璃通り、おその型の如く黑髮を持ちこなし、友平は下手に向ひ切腹する。よき時分月の出になり、おその友平の切腹を悟りよろしく思入。

ヲヽ天晴健氣の切腹は、慥かにそのが見屆けた。此世にござる母樣はたとひ御容赦あるにもせよ、未來におはする父樣へは、命捨てずば云譯立つまい。ヲヽよう腹切つた、出かしやつたなア。

〽とは云ふものゝ不便やと、悔み惜めば友平は、一期の終り大聲上げ。

友平　はゝア有難や忝や、不甲斐ない奴めでも家來と思召せばこそ、お歎きなされて下さるゝ、エヽ勿體ない罰當り、申譯になる事なら下郎め如きのどん腹を、百二百切つたとて何惜しからう、よし御宥免あるにもせよ・此やうな不孝者が大切な敵討に、なんでお供が致されませう。エヽ淺ましい業さらし。

〽我と我身をかきむしり、五體をもめば疵口より、流るゝ血汐紅に草葉染なす血の涙、落たる守の臍の緒を、引摑んで眼を見開き。

ト友平よろしくこなしあつて、

エヽ思へば〳〵腹立たしや、主人の敵我身の仇、何國に隱れ忍ぶとも一念通さで置くべきか。

〽にらみつめたるその顏色、身の毛もよだつばかりなり。

その　あつたら惜しき忠臣を、今失ふも敵故。

友平　三世のお別れおその樣。

その　友平。

友平　はやおさらば。

〽さらばといふが此世の名殘り、はかなく息は絶えにけり、そのは涙にくれ居しが、かくては果じと氣を取直し。（ト友平よろしく落入る。おそのこなしあつて）

その　類ひまれなる忠義者、此儘此處に捨て置かば鳶や烏の餌食とならん、せめての事に亡骸を、ムム。

〽一人ごちつゝ立上り、あへなき骸をかたへなる葭の邊りへ魂よばい、送る心もそゞろなる、空に催す雨の足、濡れじと覆ふ菅ごもを、身にまとひたる武士の、目的はそれと森の道。

ト此浄瑠璃にておそのは落ちたる守袋を拾ひ取り友平の死骸を葭かげへ取片附る。是を雨音になり花道より前幕の京極内匠、着流しかちはだしのこしらへ、菅ごもを着乍ら走り出て來り花道にて本舞臺へこなし、きつとなつて。

内匠　急がずば濡れざらましを旅人の、あとより晴るゝ野路の村雨。太田道灌ハテよく詠んだなア。

〽四邊うそ／＼窺ひて、兼ねて知つたる鎮守の祠。

ト右の浄瑠璃めりやすにて内匠本舞臺へ來り、あたりへこなし、祠の縁の下より袋入の劍を取出し、押載いて腰にさすと、蛙しきりに啼く。

我家に傳はる蛙丸の名劍、世を忍ぶ身の上に此の祠に隠し置きしが、人目にも掛らずして無事に我手に入たるも、冥府にござる父の加護、チヱ、忝し。

〽押し戴き／＼劍を鞘に曲者は、納り返つて行く先に向へば除くる右左、付ま

とはれし蔦かづら、長さ契りを神かけて忘れぬ人を今更に、去なしはせぬと引止むる。

ト内匠下手へ行かうとするをおその立塞がり、よろしく附廻しあつて、

往來を妨げる、わりや何處の何者ぢや。

その　アイ私が生れは、永祿九年五月十日の誕生。

内匠　ヤヽツ、夫がまアどうして此處に。

その　ハテ私しや惣嫁ぢや。

内匠　ヤア惣嫁ぢやと。

その　サア惣嫁さうでなくば、傍へ寄つて見やしやんせ。自慢ぢやなけれど伽羅の香は、幾夜止めても止めあかぬ、きだんになる氣はないかいなア。

へもたれかゝれば。

内匠　有難い、初對面からはずんだせんさく、斟酌なしにつきあふからは、辭儀は急げぢや今此處で。

その　ヲヽしこなしやの、肌打あくるはお前の心中。

内匠　ヲヽ見たくば見せう、證據があるか。

その　サア覗んで見たいは此劔。（ト内匠の腰に手を掛ける）

内匠　イヤ危い事。よしにせい。（ト振拂ふ）

その　イヤ切るわいなう。

内匠　そりや誰を。

その　ハテ指を、わしから心中見せるのぢやわいなア。

内匠　最前より怪しい女、その指よりは汝が命を。

〽いふより早く劔の鍔際、物打しつかととり頭、渡せ渡さじ一二のせめ、帯取、笠ひしぐるばかり、捻じあひ引合ひ引取るはずみ、こぶし放れて夕顔の棚へはからず刎上れば。

ト是より床のメリヤスになり、お園内匠立廻り乍ら瓢箪棚の上に登り寶劔を奪ひ合ひ、又おその下へ下り瓢箪棚の足を切り是にて棚どうと傾き、家根の上に内匠下におその居てきつと見得、此もやうよろしく、

ひやうし　幕

五幕目

杉坂墓所之場

役名　杣六助、京極内匠、門脇儀兵衛、盗賊淸洲、盗賊若徒佐五平、樵夫四人、一子彌三松。

本舞臺三間の間常足の草土手、上手山の麓後遠黄幕眞中草葺き竹柱の小家、左右杉の立木、所々に小さき石塔有り、小家の内にも石塔、前に花筒樒を立て燒物の香爐薫火を供へ、傍に手桶、是にも樒二三本入れすべて杉坂墓所の體、爰に杣六助後ろ向きにて鉦を打ち回向して居る見得、此傍に焚火鉢三叉の自在竹に土瓶を釣し、盆に筒茶碗四ツ五ツ並べ有り、此見得よろしく、禪の勤めにて幕あく。と直ぐ浄瑠璃に成る。

〽見え渡る、高根々々に消え殘る、雪の吹雪の音さへも吹き荒したる松の風、いとゞ淋しき杉坂は村山里に亡き人の、名をのみ殘す石の數、邊りに立し竹

柱茅が軒端もそこ〳〵に尺にも足らぬ草莚、内に音する鐘の聲、毛谷村の六助が母に後れし其日より、明暮こゝに在すが如く、盡くす心ぞ殊勝なる。

ト此淨瑠璃よき程に花道より松十先に槙藏、樫六、稻八、何れも樵夫のなりにて皆々柴を荷ひワヤワヤ云ひながら出て來り、小家の前へ來て。

松十　六助どののどうぢやの、山を仕舞うて戻りがけ、皆の者が云ひ合せ。

槙藏　見舞ひに寄りました。

皆々　どうぢやぞいなう〳〵。

ト是にて六助振り返り、

六助　ヲヽ皆の衆、それは精が出ますの、まア煙草でも呑んで一服やツて行かつしやれ。

松十　そんなら皆の者一服せうかい。

皆々　ヲヽよからう〳〵。

〽よかろ〳〵と荷を下ろせば、

ト皆々荷を下ろし、火鉢にて煙草を呑む。六助内の土瓶の蓋を取つて見て、

六助　ヤア幸ひと今、入花がわいた程に一ツ進上しませうわい。ア、イヤまア〳〵初穗をば母者人へ、

ドリヤお茶湯を進ぜようかい。

〽お茶湯とりて墓の前、供へ置いて手をつかへ。

母者人御覽じませや、皆親切に見舞うて下さつたぞや、アヽ生きてなら喜ばしやらうになア、何を云うても片便り。（ト愁ひのこなしあつて氣をかへ）ヤア、今朝供へた母者人の好物、煎豆がご／す、是なと入れてお茶參れ。

ト煮豆のはひりし重箱、盆に茶碗土瓶など添へ持ち出てそこへ出す。

松十　コリヤ忝い、婆さまの相伴ぢや、皆もしやぶらぬかい。

槇藏　わごりよ取つて次へ廻しやいの。

松十　そんなら年役に俺から始めうかい。

ト重箱の煎豆を喰ひ、槇藏へ渡す。皆々捨ゼリフにて茶を呑み豆を喰ふ事よろしくあつて、

槇藏　時に松十樫六楢八もどう思やるぞ、死なれた婆樣は仕合せ者ぢやなう。

松十　ヲヽてや、一人も一人、がらと結構な息子を持たしやツた故、居られる時から生佛ぢやあツたによなう。

樫六　ヲヽさうだな／＼、死なれた處が矢ツ張り石佛に成られたわいなう、ハヽヽヽヽ。

楷八　さいなう、其の石佛に成ツても、アレ見やしやれ、矢張りあのやうに四十九日のけふ迄も、三度々々拵らへて据ゑ供へられるといふは、果報な婆樣ぢやわいの。

槇藏　ヲヽ樫六の云やる通り、六助殿の孝行は國中の大評判ぢや、シタガ其の孝行評判でおらはいかう迷惑するての。

松十　そりや又なぜにの。

槇藏　さればいなう、又してもこちの婆樣は伜は不孝者ぢや、アノ六助を見い、六助を見習へと云はるゝぢや。そこで昨日山を休んでナ、日比の孝行を一時に喰ひ物を拵らへた所喰ひ飽き處か、聞いて下され、其の孝行を喜びはせいで俺を傍へ呼び附けて、ヤイそこな野良め、仕事はせずに孝にも立ぬ錢を遣ひをると小言八百、イヤもう孝行を自由にさす事ぢやないわいの。

松十　ハテそんた事は云はぬ物ぢや、モウあた逆樣な事云はしやツても、兎角逆らはぬが直に孝行、親の有る中ぢや程に、皆も隨分大事にかけさんせ。

槇藏　ソレ〳〵何處も孝行がはやるかして、コレ六助殿聞かツしやれ、丁度こなたの樣な大きな侍が母親を負うて歩いて、村の者が噂聞きや、こなたの家を尋ねて居たげな。

六助　ムヽ、侍が母親を負うて此六助を尋ねて居たと云はしやるか。ハテナ。

樫六　ハヽ、聞えたわいの、どうでも其侍めが六助殿の孝行を聞き傳へて、なう楢八。
楢八　さうぢや〳〵、コリヤ孝行競べに來たと見えるわいの、コレ必ず負けまいぞや。
槇藏　イヤ負けまい次手に珍らしい事は、此間から端々に毛谷村の六助と試合して、勝つたならば知行五百石で抱へようと云ふ、殿樣より高札が建つたと云ふ。國中の取沙汰ぢや、なう皆の衆。
皆々　ヲヽさうぢや〳〵。
松十　何んでもコリヤこなたを殿樣が、家來にせうと云はしやツても家來に成らぬ故、大方腹立の事であらうぞや、なぜに又奉公はさツしやれぬぞ。
六助　サア其奉公せぬには、ちツと譯が有る事でござんすわいの。
松十　ハヽ奉公せぬには譯がござんすか、どうぞ其譯が聞きたいなア。
槇藏　どうぞ其譯が聞きたい、話次手に何んと其譯を。
皆々　話して聞かして下されや。
六助　こなさん方に問はれて話すぢやござんせぬが、俺ぢやとて侍に成り出世する事は萬更厭ではござんせぬけれど、元俺が此劍術を覺えたは高良明神の靈驗、汝に勝つ者あらばそれに從ひ奉公せよと神の戒め、破れば忽ち神樣の罰が當ると云ふもの、そこで何處から抱へようと云うて來て

も皆断りを云ひますぢや、何んと六助が奉公せんといふ因縁、合点が行きやんしたか。

ト皆々一度に手を打つて、

皆々　ア、謂れを聞けばぢやなア。

松十　時にこなたは、いつ迄こゝに居るのぢやぞいの。

六助　サア店でも喪に入るとやら云うて、三年も居る事さうなが、あすは五十日の念仏を勤めにやならぬ故、今度は行いんで其拵らへ、どうぞ皆の衆も明日は揃うて参つて下されや。

槇蔵　そりや御さうさぢやの、皆打揃うて、

皆々　参りませうわい。

松十　明日の御馳走を聞いて、がツくりとひだるく成ツた、六助殿喰べ立ぢやない聞き立に、モウいにまする。

六助　そんなら皆の衆。

皆々　六助どの。

六助　明日逢ひませう。

皆々　サア／＼皆ござれ／＼。

〽ござれ〳〵とそう〳〵が、柴荷てんでに打かたげ、麓をさして歸りける、六助は獨り言。

ト皆々上手へはひる。

六助　ホンに皆ねんごろな衆ぢやなア、シタが母者人はさぞやかましうごんせうなう。

〽立つや煙りも一筋に、姿には似ぬ香爐の薫、身は埋火の埋もれて、尾羽打ち枯れし浪人風、脊に老たる母と見え、六十路を越すや坂道を、漸くたどり墓近く。

ト此の淨瑠璃にて花道より京極内匠、脊流し浪人のなり大小にて母親を負ひ出て來り、

内匠　イヤ申し母者人、でくぼくの山道負はれてござつても嘸お勞れなされませう、チト是で御休息なされませ。

〽下ろして敷かす菅笠の、上にいたはり足腰を撫でつさすりつ介抱に、六助つくづく感じ入り。

ト此の淨瑠璃にて舞臺へ來り、二重へ菅笠を敷き母親を下ろしてはう〳〵を撫で色々介抱のこなし。

六助是を見て感心の思入あつて。

六助　母御さうながお年寄を連れまして、御奇特なお侍様、まアどれからどれへでござります。

内匠　是は〳〵お尋ねに預かるも他生の緣、拙者は元上方の浪人者、御覽の如く母一人、老年に耳は聞えず、何卒よろしき主取にても致し老母を育くむ種にもと、此程西國へ罷り下り申せ共、イヤハヤモウ微運の某、今に有付とても定まらず、御覽の通り斯くの仕合せ、見受けますれば其元にも御長髮の體・殊に新たなる墳墓と申し、卒爾ながら御親族にても。

六助　成程々々、わしも一人の母に別れ、五十日の其間墓の前でせめて香花取りまするばかりでござります。

内匠　それは近頃御愁傷察し入る、シテこなた樣の御在所はナ。

六助　此の麓の毛谷村で、六助と云ふ者でごんす。

内匠　ナニ毛谷村の六助殿とナ。

六助　如何にも。

内匠　アノ六助殿、ホイ。

〽吐胸をさしうつむく、顏打ち守り不審の六助。

六助　ム、六助と云ふ名を聞てお侍の濟まぬ顏色、何ぞ樣子でも有つての事でごんすかい。

内匠　成程樣子と申も面目も無き事ながら、仔細を云はねば叶はぬ時宜、チト折入て其元へお頼み申度き義がござるが、何んとお聞き屆け下されまいかナ。

六助　見る影も無き山樵風情の六助に、頼み度いと云はしやりまするはよく〳〵の事でごんせう、ハテ何事かは知らね共、樣子に依つたら頼まれまい物でもないが、まア其譯はどうでごんすぞ。

内匠　イヤモウ思召の程如何なれども、其仔細と申すは是なる一人の老母、ぶがんの上に百日の限り有る膈の病、せめて一日半日なり共安心に暮らさせ度く、仕官を望めど心ばかり、詮方盡きし折に、幸ひ當國に入り込み、見れば所々に立てたる國守の高札、毛谷村の六助に打ち勝つ者有らば五百石の知行宛行はんとの儀、見るに心は飛立てども聞き及びたる御手錬の程、中々我々如きが一流を立たり共未熟の及ばざる處、とあつて此儘打ち過ぎなば何日を春とて母人のお笑ひ顏を見る時節もなし、とや角やと思案の終り所詮義を捨て恥を捨て、勝負を負けて下さるやう無體の頼みせんものと、面押し拭ひ右のお頼み、是と申も老母の爲め、とは云へ武道に缺けたる我が頼み、弓矢神の冥加にも盡果てし腰拔け武士、人で無しとお下げすみもあらうなれ共、母故なればちつとも厭はぬ、六助殿拙者が心推量有つて何卒聞き屆け下さらば、御恩は死

しても忘れまじ、母だに見送る共上は国主へ今の仔細を申上げ腹かつさばき、其元の恥辱共の
時雪ぎ申さん、コレお頼み申す六助殿。

〽ひたすらお願ひ〳〵と、土に頭をすりよせて涙と共に頼みける、六助は物を
も云はず黙然として居たりしが。

六助　シタリ。（ト手を打って）天晴のお心入れ、六助め感心の致しました。イヤモウ恥を捨てゝの母御
へ孝心、それでこそ武士のきつすい、如何にも聞き届けました。

内匠　スリヤ只今の仔細を聞いて。

六助　如何にも試合に負けませう。

内匠　アノ試合にお負け下されうと、エ、有難い。

六助　イヤサ、御手練もござらうなれ共、恐らく此六助を打たん者は、まア近国には覚え無いぢや。

内匠　イヤモウ其の段は承り及びし故右のお願ひ、早速の御承知、盲亀の浮木と申しませうか、斯様
な喜ばしき儀はござらぬてや。

六助　親持ちし身は同じ事、お志を推量致し、異変無くこなさんにぶたれませうわい。

内匠　スリヤいよ〳〵御眞實に。
六助　ハテ、何をするもやつぱり母者人へ孝行でごんすわいたう。
内匠　ハヽア有難い〳〵、コレ〳〵母人、共々にお禮を〳〵。
〽云へど聞えぬ聾の悲しさ。
内匠　アヽ何を云うても斯くの仕合せ、詞に盡きぬお情けのお禮は重ねて。
六助　何の禮に及ぶ事、是もやつぱり親御の恩、隨分共に御大切に孝行怠り無い様になされませ。御出世有らば蔭ながら喜びませう、ヤかういふ内も人目に立たばかへつて妨げ、試合の願ひ濟んだ上互ひに逢ふは表向き、處は嫌はぬ御浪人。
内匠　ハヽ重ね〳〵深き御仁心、仰せに隨ひ直ぐ樣お暇、隨分共に御健固で願ひを立てゝ其時再會。
六助　靜かにお出でなされませ。
〽約束堅き胸と胸、割つて碎けしきつすい男、共に介抱母親を負はすも負ふも孝行信義、互ひの目禮浪人は、別れて歸る元の道、六助後を見送つて。
アヽ親と云ふ者は有難いものぢやなア、見ず知らずの侍なれど誠の心を感じた故、負ける試合

を請合うたれば喜び勇んで、生き〳〵としていなれた。ア、是を思へば親程大切なものは無いわいの、何をするも母者人の追善、時に今夜はいたねばならぬ、ドレ〳〵水など汲み替へて。

ヘ取出す桶は淺けれど、孝行深き若者の淸き流れに春の日も、傾く運のはかなさや何とてかゝる憂き難儀、吉岡一味齋が若徒、お菊がかたみ幼子の、年も漸々五つ六つ日足も七つ、杉坂越に差しかゝる。

ト此淨瑠璃の内花道より佐五平半合羽、脚絆、草鞋、一本差、旅のなりにて彌三松を脊負ひ出て來たり、後より盜賊○□の二人呼び掛けながら出て來り、花道にて入れ替り後前に挾んで、

盜○　コレ〳〵お侍、待たれい〳〵。

佐五　ム、、最前からヲ、イ〳〵と呼び掛けるは身共の事か。

盜□　ヲ、身共とも〳〵。

佐五　シテ何んぞ用でも有るか。

盜○　有るから呼ぶのだ、ぐつと用が有るのだ、ヲ、外でもねえ、見ず知らずのこんたに馴れ〳〵しいがちと無心が有る、それで二人が、

盜□　麓から附いて來たのだ。

佐五　見ず知らずの身共、無心とは何んの無心ぢや。
盗〇　コレ旅の侍、とぼけめえ、人絶えした山の中、山中で無心といや知れた事だ。
盗□　我れが懐にずつしり重みの有る事ア、見留めて掛つた此仕事。
盗〇　四の五の無しに其の路銀、きり〳〵コヽへ、
兩人　出しやアがれ。
　へ跡と先とを引ぱさみ、直ぐにはやらぬ荒縞の、横には太き仕かけなり。
佐五　ハヽヽヽ、扨てはうぬらは山賊めらぢやナ、わいらもきつう星が悪いなア、路銀というたら四五日の貯へばかり、酒手にも足らぬ端た錢、又よし有るにもせよ、われ達に呉れる金は持たぬわ、其處を退いて早く通せ。
盗〇　ムヽ、そんなら金はねえか、仕方がねえ、無い物を取らうと云ふのも盗人の誤りだ、なア清洲よ。
盗□　さうよ、路銀が無けりやア、おのれが着物をぬいで、丸裸でうしやアがれ。
盗〇　ハテいゝわえ〳〵、取つたつて高の知れた代物、そんな骨を折らうより。
　ト殺して仕舞へと云ふ仕方する。

盜二　ヲヽコリヤおらつちが目利き違ひだ、早く行かつしやれ〳〵、

佐五　ムヽスリヤ中分は無いナ。中分無くば罷り通る。

ト行き掛るを兩人有合ふ縫ぐるみにて出し拔けに打つて掛ること、一寸立廻る。トゞ兩人叶はぬこなしにて上手へ逃げてはひる。佐五平追駈け行く、此時門脇儀兵衛着流し大小頬冠り尻端折りにて窺ひ出て、後より拔き打ちに佐五平の肩先を切り下げる。佐五平ウンと倒れる。儀兵衛邊りを窺ひ心を附けることなし。佐五平起き上り、

ヤア欺し討とは憎い盜賊、高の知れたる下郞めとあなどつて不覺を取りしか、チヱヽ口惜しやなア。

儀兵　ヤイ〳〵、下郞とは慮外者めが、吉岡が若徒コリヤ門脇儀兵衛樣だ、忘れたか。

佐五　ナニ、門脇儀兵衛とナ。

儀兵　ヲヽサ門脇儀兵衛樣だ、京極殿に一味の科で追放されて今の浪人、切取りするは武士の習ひ、われが連れてゐる其の餓鬼は、アノお菊めが忘れがたみ衣川が胤に違えねえ、そいつぐるみ打ち殺しやア內匠殿も枕を高く寢られる道理、また〳〵そればかりぢやアねえ、お園を始め後家までも探りよつて返り討ち、段々後からやる程にゆる〳〵行つて三途の川、死出の旅路で待ち

合はせろ、思やア見じめなくたばりざまだなア。

佐五　エヽコレ、云はうよう無き大惡人、只兩人とあなどつて思はぬ不覺、さりながら敵の荷擔人、お主の仇、ナニ是しきのかすり疵、やみ〳〵一人死なうか、ウヌ冥土の供に連れ三途の川の瀨踏みをさせる、覺悟なせ。

儀兵　何をこしやくな、まづ其の小悴。

ト兩人一寸立廻り儀兵衞彌三松を取らへようとするを佐五平、儀兵衞を投げ退けて彌三松を小屋の内へ入れる。又掛るをよろしく引廻して、

佐五　手ぶしをかけると梨割だぞ。

〽氣は張弓と働け共、初太刀の疵によろめく有樣、隙を附け込み打込む太刀、受損じて急所の痛手だぢろぐ處を疊みかけ、切るやら突くやら滅多討ち、弄り殺しの折こそあれ、水汲入れて六助が戻りかゝりし此場の體、樣子知らねど飛びかゝり、二人が襟上引ッ摑み、力に任せて投附けたり、六助手負を引起し。

六助　コレ旅人氣を慥かに持たつしやれ、ホヽさて切りをつた〳〵。コレちつと早くばかうはさすま

いに、コレ旅人、旅のお人イなう。

〽呼び生けられ物は得云はず傍らの、家に指差し手を合せ頼む〳〵も口の内、深手の弱りがつくりと、絶入息ぞはかなけれ、以前の兩人起き上り。

盗○ ヤイうぬは何處から出てうしやアがつた、何で仕事の邪魔をするのだ。

盗□ ハ、ア聞えた、おらつちをポントやつて、金をうぬがくすねたナ。

盗○ さうはさせぬ。

〽しめに掛るを見向きもせず、二人脇つぽきやつとばかりに投入れたり。

六助 コレ旅人々々、アヽモウ息は絕えたか、いとしやなう、何んぢや知らぬが小屋の方を指差して拜んだが合點が行かぬ。

〽見やる小屋より稚子が、走り出て死骸の傍。

ト是にて彌三松小家の内より走り出て佐五平の死骸の傍へ行き、

彌三 コレベいよ〳〵、物云うてや。

〽べいよ〳〵と押し動かし、足ずりしたるいぢらしさ。

六助　ハヽア是ぢやな、べいよ〳〵と云ふからは定めて主の子といふやうな事。コレぼん、恐い事は無い、こなたは何處で、父樣の名は何と云ふぞ。

〽尋ぬれば、かぶり振つて泣くばかり。

アヽまだ辨への有るでもなし　思へば〳〵不便な事、袖振り合ふも他生の緣、佛をするも毋者人の菩提の爲、死んだお人必らず氣遣ひさつしやるな、此子は俺が預つて親御の手へ屆けます、サア〳〵ぼんよ、是から俺が連れていぬ、是はシタリ着る物まで血だらけだ。

〽云ひつゝ脫がす四ツ身の小袖、腰に挾んで稚子を懷へ抱き入れ。

ヲヽ逞しい男の子ぢや、ねん〳〵よねんねが守は、いとしや冥途へ行かしやつた。

〽すかす稚子後より、手並に懲りぬ門脇儀兵衞、武者振り附くを身の捻り前へどつさり起しも立てずづでんどう、胴骨しつかと泣など出す懷。

ト淨瑠璃に成りて儀兵衞窺ひ出て掛るを一寸立廻り、よろしく有つて儀兵衞を捻ぢ上げる。

彌三　母樣いなう。

六助　ヲヽ泣くな〳〵、ねん〳〵ころ〳〵ねんころや。

ト捻ち上げた手を戻す。此時盗賊兩人掛るを立廻り盗賊の首を捕へ盗賊を踏み附けて、

寝たら母さんへ連れて行かう、コレ旅人、こいつらも倶に冥途に連れて行きやれサ。

〽捻飛されて七轉八倒、

ト盗賊等振りどいて、其まゝ帶を持出し差し上げて、

ねん／＼ねんよ。（ト彌三松をいぶりながら）

〽ころゝんころりと谷底へ、投げ捨て。

ト上手の後ろ崖の谷底の心、差し上げし盗賊□を連雀にて斜に樂屋へ投込む。本釣鐘を打込む。儀兵衞出てウヌと掛るを立廻り眉間を打ち割る。儀兵衞うろたへ下手へ逃げてはひる。盗賊起き上らうとするをずつと踏む。起き上るを又踏み附ける。是にて〇咳はへ日にて血を吐き落ち入る。

〽てこそ、

ト三重になり六助、彌三松の拍子をいぶりながら見得よろしく。

ひやうし　幕

大詰

毛谷村六助内の場

役名　毛谷村六助、微塵彈正實は京極內匠、杣斧右衞門、荒木會平太、百姓、忍び、杣、若黨、中間、彌三松、岩淵軍八。一味齋妻お幸、同娘おその。

本舞臺三間の間高二重、上手一間の障子屋體、向う眞中暖簾口、上の方一間の戶棚、上に佛檀を取付け位牌佛具などよろしく、下手打廻し鼠壁こゝへ木太刀掛けある。二重下手へ勝手道具一式を置き、竈へ本釜を掛け手遊び箱へ手遊びを入れ置く事、二重上手に布團を敷き二枚折を建て置き平舞臺へ誂への臼を置き上手の所へ二尺四方ばかり切穴あける事、いつもの所へ門口、下手屋體外に紅梅の立木、是へ三ツ身の着物を竹竿へ通し干し置く事ある。門口外へ小さな石を五六ツ重ね此傍へ藪疊、此前に、一毛谷村六助に試合に打勝者は五百石を宛行ふものなりと記せし高札を出し置き、上手屋體前に白梅の立木ある。其內枝一本取れる仕掛ある。二重に侍兩人一本ざしにて控へ居る、平舞臺上手に彈正たすきがけ下手に六助、門口外に仲間一人挾箱を持ち控へ、すべて六助內の體、在鄕唄にて幕あく

軍八　コリヤ六助、今日の試合は微塵流の奥義を極めし彈正殿なれば、血氣の勇にはやらぬやう、卑怯の振舞無い相成らぬ、心得てよからう。

曾平　左樣々々、勝負は時の運、いづれに勝負あるとても後へ遺恨の殘らぬやう、此旨きつと心得られよ。

六助　委細承知致してござる。

軍八　イヤ何彈正殿、只今も申す通り隨分お心靜に立合の召されい。

彈正　委細承知仕つてござりまする。イヤ何六助とやら、今御兩所の仰せの通り私ならぬ試合なれど勝負は時のひやうりにあり、强きとて弱きに立ず又强いとて。ナ。それ賴み、イヤサ賴みにならぬ始終の勝が肝要ならん、隨分油斷なきやうに。

六助　其儀は兼て承知仕る、身不肖なる私なれど殿より仰せ出されし儀はもだし難く、止む事を得ずお相手仕らん、無禮は御容赦下さるべし。

軍八　とかう申さば時刻の遲れ、我々檢分仕れば、

曾平　イザ兩人、其支度めされい。

六彈　ハツ。（ト白はやしになり、白布にてたすき鉢卷をして）

彈正　イザ。
六助　イザ。
兩人　イザ〳〵〳〵。（ト試合ひの立廻りあつて、トヾ彈正六助を打据え）
侍二　勝負は見えた、彈正どのお手柄〳〵。
軍八　イヤ何先生、此上は衣服を召替へ召れ。
二人　イザ用意の品是へ。
中間　ハツ。（ト門口の中間挾箱より衣服大小を出し、三方へ乘せ持ち來り、彈正の前へ置き。）
彈正　コハ存じ寄らざる御賜物、辭退は無禮頂戴仕らん。（ト侍二人手傳ひ彈正着物を着替へる事あつて）
軍八　イヤモウ立會召さると早勝と見えましたは．何と曾平太どの逸つた物ではござらぬか。彼の城下で煤掃の時古疊を叩くやうでござる。
曾平　左樣〳〵、ぬり盆に乘せた蛙同然、見れば見る程馬鹿げたざまだ。
兩人　はゝゝゝ。
彈正　イヤ何そなもの、たとひ打負ればとて力を落すな。是から修行の所だから隨分出精致すがようござる。

曾平　コレ先生いらざる御教訓でござる、お構ひなされな。ヤイ、おのれ御領分の奴なればお慈悲を以て深きお咎めはあるまいなれど、以後はきつとたしなみをらうぞ。

軍八　サア先生お越しなされ。

彈正　イザ御同道仕らうか。（ト皆々立上り彈正六助を見やり尻目にかけ）世の諺にいふ通り目くら蛇物に怖ぢずとやら、匹夫下賤の身を以て我より外に勝れし者あらざりと高慢我慢、生もの知りの生兵法　打殺すともあきたらぬ奴なれども、匹夫を相人に大人氣なしと、今日の試合はあしらひ置いたぞ。然しかやうな奴は以後の見せしめ、六助面を上げい。

六助　はつ。（ト是にて彈正六助のみけんを扇にて打つ。疵つく）

曾平　それはさうと彼に構つて餘程の暇入り、それ家來、其乗物是へ。

中間　はつ。

彈正　アイヤ此まゝ歩行仕るでござる。

軍八　イヤ左樣でござらぬ、只今よりしては殿の御師範、我々の爲にも先生なれば、

兩人　平に〳〵。

彈正　でもござらうなれど、是が手前の勝手でござる。

倉平　然らば御隨意がようござらう。

軍八　何と倉平次どの、御覽なされい、人もなげなる高慢ものが一ひしぎに打据えられて、恥を恥とも思はぬしやツつら。

倉平　左樣々々、アヽまざ〳〵しいしやツ面で、蛙の面へ水とやらでござる、ハヽヽヽ。

ト兩人笑ひ乍ら門口へ出て

軍八　然らば先生、

彈正　イザ參らうか。

〽あくまで高ぶる高慢我慢、門弟引連れ彈正はゆう〳〵として出て行く。（ト皆々花道へはひる）

〽門送りして六助は、ずつと立つて獨り言。

六助　あゝ誰しも孝行はしたいもの、見ず知らずの人なれど、親御を大事に思うて、侍の云ひにくい事を打割つて賴ましやつた、其實心な所にどうもだし難なく、契約の通り打負けて進ぜた今日の試合、コレ必ず禮には及ばぬぞよ、是も矢張り親の威光故ぢやと思うて、存生の內に隨分と

孝行を盡さつしやりませ。おれのやうに死別れと云ふものは、とんと埒があかぬぞや、必ず大切にさつしやれや。

へ云ひつゝ見ゑる畑道、まつ黒になつて山がつどもすたく息せき走り付き。

ト花道より山がつ六人出て門口にて。

皆々　サアく六助どのや、へしやげたくくわいなう。こちの鼻がへしやげたわいなう。

六助　ハテやかましい、へしやげたとは何の事ぢや。

山一　何の事とは此方の事ぢや、六助に勝つたものは召抱へようと殿様から立置かしやつた高札を、奴共が皆引こぬいて行つたわえ。

山二　ぢやに依つてへしやげたわいなう。

六助　そりや何ぞあつちの勝手で、持つていんだのであらうわえ。

山三　イヤく夫ばかりぢやごんせぬわいなう。六助はほふげたとはきつい違ひ、打たれて居たそのいぢらしさ、大方背が砕けたであらう。

山四　イヤ今頃はあたまのかけを、泣くく尋ねて居るであらうのと、口々にぬかしてゆきおつたがこなさん本統に、

皆々　負けたのかいなう。

六助　イヤ嘘ぢや、殿様の御意ぢやから勝負はせうというては來たれど、こゝで立合つては晴にならぬ、小倉からお召なされたなら、何時でもいつて勝負せうと追戻したが、夫を腹立て惡口をいうたであらうぞいやい。

山一　ムヽさうかいなう。コレ六助どのさうしてこなたの額の疵は。

六助　ムヽ是か、是はそゝその、アノ着物を干しに出した時、それ〳〵、そこにある石に躓いてその竹垣で摺むいたのぢや。

山一　さうかいなう、夫でわし等は、

〽嘘も眞赤い血に染し、額抑へてくろめる言葉、澁々乍ら栗右衛門。

皆々　安心しました。

山一　コレ皆の衆や、こゝに謎が一ツあるがな。

山二　どんな謎でござるな。

山一　サア先生が今の詞とかけて、

皆々　何と解きますな。

山一　サア極めてある掛目よりたんとある干鰯と解く。

皆々　其心は何でござるなう。

山一　ハテ負けた聲ぢやと思はるゝぢや。

皆々　は、、、、。

〽苦り切つてぞ歸り行く。（ト皆々花道へはひる。）

六助　あいらがあのやうに云ふのも尤も、一手も習うた師匠ぢやと思ふからの親切、馴染の者等に愛想つかされても、人の爲めになる事ならいとひはせぬ、然し得心した事乍ら負けたと思やア力が落るといふものぢや、イヤ力が落ると云やア腹までが急に空いて力が落ちた、ヲツトよし〳〵、昨日庄屋から貰うた牡丹餅、鼠が引かずに其まゝあるわ、ドレ孤兒どのにも喰さうか。

〽表に出てそこらを見廻し。（ト門口へ來て一寸外を見て）

コレ孤兒どの戻らつしやれ、がけやなどへ落まいぞ、是は又何處に遊んでゐる事ぞ、孤兒どの〳〵、イヤ〳〵戻つたとて牡丹餅がなくば手持無沙汰、まづ有るか無いか見て置かう。

〽子供にさへも僞りを、いはぬ生得はへぬきさし、櫻と椿の大木を直ぐに住家の

門柱、立添ふ花も八重咲の、霞の屋根に蔦の壁、草の戸ぼそに佇む老母。

ト此内花道より老母お幸旅なり風呂敷を脊負ひ出て來り、花道に止り。

お幸　見渡せば園の梅ケ枝咲き初めて、行衞を知らぬ鶯の聲、爰は豐前の片山里、幸ひあれなる柴の戸へ一宿頼まん、さうぢや〳〵。

〽しづ〳〵と歩みより、内の樣子をさし覗き。（ト舞臺へ來り内を窺ふ）

見れば此家の一壁に、鐵砲山刀半弓なぞを掛けあるは、山賊にてはあらざるか、さるにてもかかる伏家の住居ぶり、ハテ奥床しい。

〽心に納めしとやかに。

妾は心願あつて國々の神社をめぐる年よりの一人旅、足を痛めて難儀至極、暫く宿を御無心申す。

〽とおとなへば、六助奥より立出でて。（ト此時六助奥より出て來り）

六助　見れば御老人の旅勞れ嘸御難儀でござりませう、宿はせずともゆつくりと休息してござらつしやれ。

お幸　それは〳〵忝し、左樣なればお許しなされませ。

六助　サア〳〵是へ。

〽いろりにくべるかんすの下、さしくべる木もほた〳〵と、心置なきその風情。

ト　お幸內へはひり、二重へ上り六助圍爐裏へ火を焚く。

お幸　イヤナウ御亭主殿、どうやらお獨住の樣に見受けまするが左樣かの、但しは御兩親でもござるかの。

六助　イヤ〳〵、母一人ござつたれど、近頃相果てまして、今ではほんのやもめ暮しでござりまするわいなう。

お幸　ヲヽそれは定めし御不自由でござりませう、何と物は相談ぢやが、私を親に持たしやらぬか、かう見た所が丁度よささうな親子では無いかいなう。

〽ずつかりした事いうた顏、どうやら小氣味惡洒落な。

六助　ハヽヽヽヽ、座興も旅の憂さ晴らし、テモ氣の輕いお年寄ぢやなア。

お幸　イヤ是、座興ぢやござらぬ、眞實親になりませう。

六助　とは又何故に。

お幸　サア、心ざかりのたくましさうな此方と見込んで來たものぢやもの、まんざら無手では來ぬわいなう、コレこゝに路用の貯へもあり、又其上に味い金儲けの相談もあるわいなう、サア親子になつて何も彼も、包み隱しの無いやうに、打あけて談合する氣は無いかいなう。

六助　ヲヽ、品に依つたら談合もせう親にもせうが、とつくりと俺の心の極るまでは退屈ながらアノ一間で、ゆツくりと待つがよいわいなう。

お幸　そんならとんと腰据えて、やんがて孝行受けませう。

〽互ひに探る肌刀、身内と知らで暫くは。

ト六助合點の行かぬこなし。兩人立上りお幸は上手へ行きかけ、

エイ（ト金包みを投げる。六助受留め）

六助　コレは。

お幸　些少なれども今宵の宿賃。

六助　ヲヽコリヤ金。ハヽア聞えた、山がつと見た故に金で面はる心よな、不自由はござらぬ、此金お返し申す。（トお幸に投げ返す。お幸受留め）

お幸　から受止めし修行者の、

六助　手の内鋭き稀代の老母、

お幸　それは唐土王祥が母、

六助　近くば山本勘助が母、

お幸　それは甲州、

六助　孝心の、

お幸　黄金の釜より堀出し息子、

六助　母と崇むか、

お幸　子と呼ぶか、

六助　まづそれまでは奥の一間で、

お幸　此家の御亭主、

六助　旅の御老母、

お幸　後程お目に、

六助　ゆつくりと休まつしやれ。

お幸　掛りませう。

〽疑合ひの破障子、引立つてこそ。（トお幸障子の内へはひる。床の送りになり出語りになる）

〽入にける、後には不審とつおいつ、思案吹き散る春風に、梅ケ香慕ひ鶯の
さへづる聲に法華經も、既に暮れぬと告げぬらん。

ト鶯笛になり、一ツ鐘を打ち鶯梅の枝に止る。

六助　ハテ刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た　いかさま鳥でさへ法華經とさへづるに身の忙しさに取紛れ、念佛もろく／＼得申さぬ。ア、勿體ないく／＼、イヤモシ母者人、如在ぢやごんせぬぞや、必らず叱つて下んすなや。

〽位牌に向ひ合掌も、ゐますが如き孝行を感ずる天の加護やがて、深き惠みも
有りぬべし、一心不亂に他念なく、打鳴らしたる鈴の音に。

ト六助佛檀に向ひ鐘を叩き合掌する事あつて、花道より子役彌三松出て來り、門の外にて石を拾ひ積上る事あつて泣き居る。

〽賽の河原を目前に、見やる六助こらへ兼ね、其まゝかけ下り抱き上げ。

ト六助平舞臺へ下りる。子役を抱きあげ、

六助　ヲヽ尤ぢや〳〵、尤ぢやわいヤイ、どうぞ逢はしてやり度さに何處ぢやと問へどわかちなく、勿論預けさしやつた其人は只一言も物云はず、直ぐに其場でがつくり往生、何處の誰の悴かは知らねど、いたいけにしほらしう、小父様々々と慕ふもの、どうまア是が。

〽餘所事に見捨てられうぞ可愛いやと、膝へすがるを抱きしめ。

彌三　コレ小父様、かゝ様はなぜござらぬ。かゝさまほしい〳〵。

〽かゝ様なうと泣きさけぶ。（ト子役うろ〳〵して泣く。六助は子役を抱きしめ）

六助　コレ〳〵、其様に親に戀焦れてわづらひなどしてくれなよ、ひよつと死んだら今のやうに。

〽賽の河原で石の數、一重積では父を慕ひ、二重積では母親を。

尋ねこがれて六道の、地藏菩薩に取縋り、

〽父よ母よと泣くといやい。

俺も二人の親に放れ女房も無ければ子供同然、ほんに親に逢はれる程なれば、賽の河原はまだな事、八萬地獄の底までも尋ねて行きたい物なれど、何辨へなき心から逢たがるのは無理ぢやない、ヲヽ道理ぢや〳〵道理ぢやわいなう。

〽抱き〆め〳〵聲立てて、男泣きに歎きしが、やう〳〵に淚を拂ひ。
ア、惡い孤兒どの、俺までをそゝのかした程にの、サア〳〵さつぱりと氣嫌直して、ソレ昨日買つてやつた團扇太鼓、それ〳〵是を叩いて遊ばつしやれ。
ト手遊び箱より六助太鼓を出して叩く、子役はかぶりを振り、
彌三　いやぢや〳〵、太鼓はいやぢや。
六助　何ぢや太鼓はいやぢや、ヲヽそんなら是ぢや。（ト外の手遊びを出して見せる、かぶりをふる）コンりやコリヤ〳〵。
〽是は天子の始めなされた神武飴、神武天皇は飴がお好きで、ねらしやりましたが、名物飴をば、こちも仕習うて。
からや嫁らが、
〽紅絹のたすきをしんどろもんどろ掛けて、しんどろりん、もんどろりんとねらしやりましたが、名物飴をば買ふなら今ぢや。（ト此文句につれて子役踊る。）
彌三　小父樣䀹たいわいなう。

六助 〽寢さしてほしいと稚子の、わやく顏も泣寢入り。（ト六助の膝にもたれて子役寢る）

ヲヽコリヤもう寢入たか、ハテ子供といふものはとんと罪の無いものぢや、アヽ佛樣ではあるわいなう、ドレ小父が寢さしてやりませう。

〽共に伏戸の草枕。（ト六助子役を寢かし付け、二枚折を圍ひ共に寢る）

〽折から走せ來る一人の曲者。（トバタ〱になり黑の忍び一人走り來り下手へ忍ぶ）

〽小蔭へこそは忍び入る。

〽折ふし竹の音もさへて、吹暮らしたる虛無僧の、宿求めんと。

ト鶯笛になり、花道よりおその虛無僧のなりにて出て來り、後より百姓一人窺ひ乍ら出て、花道よき所にてお園ふり返る。是にて百姓引返してはひる。

〽まがきに立寄り。（ト舞臺に來り表に干してある四ツ身に目をつけ）

お園 ムヽこゝに干してある此四ツ身は、慥かに覺えの此小袖。

〽とらんとするを後より。（ト下手より百姓三人出ておそのへ掛る）

百姓 盜人め。

〽コリヤ盜人めと二三人、摑み掛るをよせ付けず、振廻したる尺八のたけた手際にぶう／＼ども眉見肩先腕骨脊骨、ぶちのめされて散々に、皆我先と逃げ歸る。

ト三人を相手に立廻りあつて三人に打たれて逃げてはひる。六助内より此體を見て、

〽六助内よりきつと目を付け、

六助 見れば賣僧の僞虛無僧、餘ッ程味をやり居つたなア。

〽なじる詞を聞きとがめ。

お園 ナニ、僞虛無僧の賣僧とは。

六助 ハテ掟に違ふ身の廻りといひ、第一宗門の身で喧嘩口論ならぬ筈、又常人が理不盡を云掛けても、隨分如法に濟せよとは、コリヤ是本山からの戒めでないか、其上尺八の本手は吹かず、今時流行るざつゥな手を吹きあるくからは、僞者というたが誤りか、山がつしては居れど其位の事は知つてゐる。何とでごんすぼろんじ殿。

〽詞に一くせさる者と、見て取る此方も笠ぬぎ捨て。（ト是にて天蓋をぬぎ、

お園　其返答して聞けん。

　ヘずつと入るより替簡に、仕込みし短刀拔き放し。

家來の敵。（ト懷劍を拔き六助に切つて掛る）

　ヘ家來の敵と切掛るを、ひらりとかはししつかと押へ。

　　トおその二重へ上り、立廻りになる。六助二枚折りを取つて受留める。

六助　ム、ハ、、、、、、一寸見るから女子とは、悟つた故に咎めて見たが、敵と云はれる覺えはないぞ。

お園　覺えないとは卑怯な奴、杉坂のあたりにて五十有餘の侍を手に掛け、路金は勿論妹が、忘れがたみの幼子まで、奪ひ取つた山がつめ。

　ヘ許しはせじと振ほどいて鋭き切先無刀の六助、拔けつくゞりつあしらふ手だれ、退さじものと付け廻す、屛風の內より。（ト文句の通りよろしくあつて）

彌三　伯母樣か。

　ヘ駈け出る稚子見てびつくり、ふしん乍らも小脇にひんだき、心許さず身構へ

たり。

ト立廻りの内子役起上りおそのに取付き、お園抱へてきつと見得。

コレ小父樣、伯母樣が來てぢや、太鼓叩いて見せていなう。

六助　ヲヽ合點ぢや〳〵、合點ぢやが、後に〳〵。

彌三　イヽヤ今ぢや〳〵。

〽いやぢや〳〵とがんぜなう、廻せば廻る子可愛がり、遊手箱を引寄せて。

ト手遊び箱より太鼓を出し、

六助　ソレ今鳴らすぞよ、コレお女中よう聞しやれ、廿九日は母者人の四十九日、杉坂の墓所の戻りがけ泥棒めらが二三人、五十斗りの侍を突やら切やらなぶり殺し、見るに見兼ねて片端からのめらせ、介抱すれども物をも得云ず、其子を指さして拜んだばかりがつくり往生、目前敵の盜人めら踏み殺して谷へ蹴込み、連れ戻つてその子に問へど差別なし、そこでソレ、思付いたはアレあの着物、門口に干して置いたは其子の由緣を知らう爲、心が早う屆いたか、現在の伯母御に渡せば此方も安堵、ようまア尋ねてごんしたなう。

〽悅ぶ體に僞りなき、眞實見ゆれど猶も念を押し。

お園　何とその詞に違ひはないか。
六助　イヤ何が怖うて僞りいはうぞ、くどい尋ねにや及ばぬ事。
お園　シテこなさんの名は何といふ。
六助　ヲヽ六助といひますわいなう。
お園　ナ何んと。
六助　サア毛谷村の六助といふ、山がつでごんすわいなう。
お園　ムヽ、スリヤ八重垣流の達人と、音に聞えし六助様か。
六助　ヲイなう。
お園　エヽ。
〽とあきれて取落す、子はうろたへて逃げ込むとも、知らず構はずうつかり詠め見とれ居る。
トおその六助に見とれて、子役を落す。子役奥へ逃げてはひる。
六助　今のやうにいうても、疑ひ晴れず矢つ張り俺を敵にするか。
お園　エヽわつけもない、何の家來の一人や二人、どうなとしたがよいわいなア。

〽前に寄添ひ後に立ち。

テモまアよい殿御でござんすなア、まア何よりか落着いた、イヤ〳〵まだ落着かれぬ事がある
わいなア。モシお前、女房さんがござんすかえ。

六助　イヤ仔細あつて女房は持ちませぬ。

お園　有りやせまいがな、無いかえ〳〵、ヲ、嬉しや〳〵、それでほんまに落着いた、コレイなァお
前の女房は、私ぢやぞえ。

六助　ヱ、。

お園　サア〳〵女房ぢや〳〵、女房でござんすぞえ。

〽かきたぐる程今迄も、逢ひたう思うた重荷がおり、三衣袋も茶袋に、して見
たがりの水仕業、袈裟もたすきとかけ徳利。（トよろしくおそのいつもの通りあつて）

お前酒があるかえ。

六助　イ、ヤ酒はちつとも飲みませぬ。

お園　ヲ、さゝも上うし夕まゝも。

〽拵らへせうと釜の下、焚火のしめり燃え兼ねる、火吹竹はと尺八を取違へては

オホ、、、、。

〽をかしがり、一人御機嫌六助は、承知内儀のふり賣をもてあましたる。

六助　そりやまだ水が入れて無いぞえ。（ト釜を取り手水鉢の上へ置き）とんと譯が知れぬ、今日程けぶの日は無い、見ず知らずのわろ達が親にならうの、かゝぢやのと、押入女房の手引した其子もめつたに油斷はならぬ、全體こなさんはまア誰ぢや。

〽尋ねにはつと心づき、俄に行儀改めて。

お園　身の嬉しさに取紛れ、いふべき事も後や先、常々とゝさんの仰しやるには、豐前の國毛谷村の六助といふ者こそ劍術勝れし器量の若者、末々はそちとめあはせ吉岡の家を相續させんと、音信通じ置たるぞと、仰せを守る此年月、廿歳の上を越し乍ら、眉も其まゝいかな事。

〽鐵漿もふくまぬ恥かしさ。

御推量なされて下さりませ。

六助　スリヤ其許は吉岡一味齋どのゝ。

お園　ハイ、娘のそのでござりまするわいなア。
六助　スリヤ一味齋殿の、ム、、ヤ是はしたり。
〽手を取つて無理に上座へ押し直し。（ト六助びつくりして、おそのを上座へ押しやり）
まづ何は扨て置き、お尋ね申したきは御親父一味齋どのは、未だ御健勝にお勤めなさるゝや、又御老體の事なれば自然のお勞れにて、御病氣など起りはせぬかと、寢ても覺めても心掛りは是一ツ。
〽問はれてそのは涙ぐみ。
お園　いふもあへなき事乍ら、おいとしや父樣は、隣國周防の山口といふ所でなア。
六助　何とぞなされましたか。
お園　口惜しややみ〳〵と、だまし討れてはかない御最期。
六助　シテ〳〵その相人は、町人土民でもよもあるまい、假名は何と、いづくの誰。
お園　同じ家中で名を得たる、劍術師範の京極内匠。
六助　シテ此豐前へ來られしは、敵の在所を當所と知てか、但し知らずにか。
お園　サア母樣も姿をやつし所々方々と憂艱難、尋ね搜せど敵の行衞、今日が日までも知れませぬわい

なア。

六助　そんなら行衛は、ア、知れませぬか。ホイ。

〽はつとばかりにどうと座し、こぶしを握り悔み泣き。（トよろしく六助悔み泣く）

〽そのは取分け悲しさを、やるせ涙の。（ト此時忍びの者窺ひ出て）

忍び　六助觀念（ト六助へ打つて掛る。六助おそのゝ方へ突きやるをおその押へつけ、）

〽くどき事。

お園　ほんに浮世といひ乍ら。

〽身に憂き事のかくばかり、重なるものか父上の。

敵を願ふ門出に。

〽可哀や弟は盲目の、儘ならぬ身を悔み死、後に見捨て故郷を、出づるも散々

放れ〴〵。

在所を搜すその内に。

〽悲しや妹も劍の難。

父上のみかそもやそも。

〽二人三人が味氣ない、刃の霜と消え殘る、母と私が憂苦勞。

つらい。

〽悲しい。

恥しい。

〽なりもかたちもいとひなく、雨露雪の深山路や、野末にありし一つ家に。

もしや隱れて居ようかと。

〽人無き道に日を暮らし、さまよひあるく親と子が、便りなき身の上もなき、

便りの人にめぐり逢ひ。

私が心の奧底を明すは二世の我夫、必らず見捨て下さんすな。

〽可愛いと思うて給はれと、あまへ歎きて伏沈む。

ト此淨瑠璃の内おその忍びを使ひよろしくあつて、六助は聞く事あつて。

〽悲歎の涙六助は、かゝる憂きには猶更に、思ひ忘れぬ一昔。

ト六助傳書の内より一巻を取出し、

六助　我彦山の麓にて目馴れぬ老翁に見えしが、高良が神の使なりと兵法印可の一巻を下されし、其老翁こそ吉岡どのと察せしは、彼の巻の奥にあり〳〵と御姓名、書添られしはこなたの事、夫婦となつて吉岡の家名相續致せよと、六助如き拙き業。

へ尋ね聞れて有難や。

神の使と傳つて印可の奥へ其上に、汝に勝つべき者あらば夫に隨ひ身を納め、末長久に榮えよと教訓ありしは後々まで、我慢を押へる御情、例へん方もなき大恩、肉に染み骨に通つて忘られず、母だに見送る上からは、尋ね登つて恩を謝し師の御顔を染々と、拜せんものと思ひしも皆無駄事となつたるか、ニヽ殘念や口惜しや、せめてのかたみ師のかたわれ、あらなつかしのおその殿。

へあらなつかしやとお顔を拜し、血走る涙はら〳〵〳〵、腸を斷つ思ひにて、慕ひ歎くぞ不便なる、時に障子の内よりもしはぶきなして。

お幸　ホヽヲ、師匠を慕ふ誠こそ、はるかに遠き冥土より、閻浮へ歸る一味齋、對面せん。

〽と聞ゆれば、思ひがけなきおそのはびつくり。

ト以前のお幸上手より出る。おそのは見てびつくり、

お園　さう仰しやるは母上樣か。

〽嬉しさとつかは押開く内にいつてと以前の老母、柔和面に皺の波、裲襠着なして稚子の、手を引連れて立出づるを、見るよりはつと飛退り、

ト お幸子役の手を引いて出て來る。

六助　師の後室とは夢いさゝか、存ぜぬ事とて最前は無骨あしらひ無禮の段、偏へに御免下さるべし。

〽誤り入つてぞ平伏なす。

お幸　イヤナウ、先刻逢うた其時は、聟殿とも姑とも互ひに知らねば他人も同然、今こそ親身に泣寄りし親子が爲には黑鐵のたて通したる娘が操、不便と思うて睦じう夫婦になつて下さらば、本望遂ぐる疑ひも亡き我夫の此魂、是を當座の聟引手。

〽聟引手にとさし出せば。（ト大小を出す。）

六助　ハツ、コハ有難き師の御かたみ、辭退申さず頂戴せん。

〽と押戴きし献々の、杯三々九度からず、ひねた生娘今日よりは、手折らせ初むる花嫁御、母も悦ぶ其所へ。

ト銚子杯を出して祝言をする。此時花道より杣六人戸板に死骸を乗せて是を釣り、後より杣斧右衛門附添ひ出て、直ぐに舞臺へ來て內へはひり。

皆々　サアく來たぞやく、爰ぢやく。

〽爰ぢやくと杣仲間、遠慮亡骸、戸板に乘せ、どやくとかき込んで。

杣一　コレ六助殿聞しやませ、廿三日の事であつたがよ、此斧右衛門のお婆が見えぬとてなう。

杣二　仲間中が手分して何が所々方々と尋ねあるき、やうく杉坂の土橋の所で見附た所がよ。

杣三　見さつしやりませ、此やうにおかいこ絹を引ぱらせ、むごく殺して有つたのぢや。どうぞ敵を取つてやりたけれど。

杣四　何としてく、うら共には手に合ず、そこで仲間の者が受合うての。

杣五　ヲヽてやく、後に殘つた斧右衛門が不便故。

杣六　どうぞ敵を取つてやつて下さるやう、

杣一　そこで頼むは、
皆々　六助殿。
　へいふに駈けより死骸の傍、立寄てとつくと見て。（六助死骸を見て思入）
六助　スリヤ此死骸は、斧右衛門が母か。
皆々　ヲイナウ。
六助　あの是が、ム丶。
　へと眉に皺、思案の體に杣仲間。
杣一　コレ斧右衛門よ、そのやうにしめりふさがずとちやつと出て。
皆々　頼みやいなう。
　へ引起されてないじやくり。（ト斧右衛門前へ出て）
斧右　皆の衆の云しやる通り、どうぞ敵を取て下さりませ、アノ死なしやるはしか其晝間、あんばいよう出來た自慢の團子。
　へ棚からころり、其身もころり。

手でこねたとて手こねる物か、なんぼう杣が親ぢやて、かうしやちばつた枝骨を、おろさゞ桶へははひるまい。

〽はひりともない死出の山。

おぼつかなからう、なう婆樣。

〽婆樣々々と呼ぶこだま。

婆樣ア――。（ト谺へひゞく思入）ア、谺ぢやさうな。

〽谺にひゞき泣く涙、落込む谷に水かさの、いとゞ増さりて見えぬらん、始終とつくと聞すまし。

ト斧右衛門よろしくあつて、六助思入あつて、

六助　ヲ、氣遣ひすな、今の内に敵は俺が取つてやる。その死骸大事にして家へいんで香花でも上げてやれ、サア早う連れて行け〳〵。

〽六助が、詞に悦ぶ斧右衛門。

斧右　そのやうに云うて下さるのが、婆樣が為には。

〽お寺樣の御引導。

なう皆の衆。

杣一　ヲヽてや〳〵、アノ人が、

皆々　あゝ言はりや。

〽ちつとも氣遣ひ泣顏を、笑顏に直し歸りけり、後に六助無念の顏色。

ト斧右衛門を先に皆々花道へはひる。六助は無念の思入にて、

六助　さては斧右衛門が母をたらし込み、おのれが親と僞つて、孝行ごかしに六助を深い所へ遣り居つたな、エヽ、思へば〳〵腹立や、卑怯未練な微塵彈正、おのれ共まゝに置べきや。

〽胸もはりさく怒りの齒がみ、庭の捨石三尺ばかり、思はずふん込む金剛力。

ト無念の思入にて石をふみ込む。

お幸　なう聟殿待たしやれや、此方が腹を立さつしやる、相手の苗字が微塵とや。

六助　如何にもおのが流儀をそのまゝに、氏となしたる微塵彈正。

お園　ナニ流儀の名が微塵とや。

お幸　シテ其者の年配は。

六助　三十二三、至極の骨柄眼中さへ、左の眉に一ツの黒子、慥にあり〳〵左の腕に二の腕かけての刀疵。

お幸　同じ家中と云ひながら、おそのといひ此母も見知らぬ敵の人相書。

お園　まつた妹にめぐり逢ひし其砌り、書いて置たる此繪姿、まだその上に妹の死骸の傍にありしとて小栗栖村にて友平が、後の證據と渡したる此臍の緒の書附に、永祿九年五月十日の生れとある、年月くれば三十四年、人相といひ年の頃。（ト臍の緒と繪姿を出して）

お幸　割符の合ひしは尋ねる敵。

お園　親の敵妹が仇。

お幸　恨を晴すは今此時。

お園　母様御用意。

〽と勇み立つ。

六助　アヽコレ〳〵二人共にまア待た、慥に夫と知れたれば六助の爲にも師匠の仇、氣遣ひせまい敵は討たす、眞劍當てぬ其先に木太刀で試合の意趣返し、ぶつて〳〵打ちのめし、申受ての敵討、お袋、女房。

〽取出す破れ上下手傳うて、母は腰板當がふ紐、おそのが取つてしつかりと、
結び合ひたる妹脊の緣。
ト戸棚より上下を出し、兩人手傳うて着る事あつて。

彌三　コレ小父樣、坊にも敵討たしてや。
六助　ヲヽ出かす〳〵、ドレ行かうかい。（ト子役を連れて下へおり）
〽いふより庭へおり立つて一足飛び。（トお幸ノリになり、）
お幸　コレ〳〵聟殿、輕き相手と侮つて必ず不覺を取るまいぞ。
お園　さうとも〳〵、欺すに手なし、油斷なされなこちの人。
六助　ムヽハヽヽヽヽ、何さ〳〵氣遣ひ無用。一旦こそは得心にて負けてやつたるうづ蟲め、たばかり取つた五百石、抱へられたも我情、却つて足をつなぎしはもつけの幸ひ塞翁が、馬に出逢うた妻姑、恨は共に六助が。
〽天地に恥づる義の一字。
鬼神たりとて京極内匠、我見る目からは一つまみ、然し御知行頂く内は、殿の御家人討得難し、試合を願ひ勝つた上直ぐに仇討御免の訴訟、元首押へて討たす〳〵、討たしますぞ。坊に

討たしてやるわいやい。

〽實にも鋭き魂を、見極め置し吉岡が眼力違はぬ勇者なり、おそのは猶も勇み立ち、咲亂れたる紅梅の、花の一枝折取つて。（トおその下手の梅の枝を打ち折つて）

お園　なう〳〵我夫、梶原源太景季は平家の陣へ切入つて譽を上げし箙の梅、是は敵の[illegible]極へ勝色見する此花の可愛い殿御へ壽を。

〽云ひつゝ抱き付きたさも、親に遠慮の手はもぢ〳〵、母も同じく椿の一枝。

トおその紅梅の枝を六助に渡す。お幸上手の椿の枝を折つて、

お幸　本望遂げたその上ですぐに八千代の。

〽玉椿、變らぬ色の花聟どの、いざと打連れ三人が、中にかたみの彌三松が、ほんそ小倉の領内へ勇み。

ト六助立上る。此時忍び六助へ掛る。六助おそのゝ方へ突きやる。おその是をねぢ上げる。お幸は二重へ立身になる。忍びはくわへ目の玉出る。

六助　見事。（トおその忍びを投げる。忍び見事に返る）

〽進んで出で丶行く。

ト床の段切にて、皆々よろしく引張りにて

幕

毛谷村通し（終り）

大正十五年五月五日印刷
大正十五年五月十日發行

『時代狂言傑作集』第四卷　定價金參圓

檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
（電話大手五一、四二二〇番
振替東京一一六一七番）

河竹繁俊氏
濱村米藏氏　共編
渥美清太郎氏

歌舞伎劇大系（全三十卷）各冊

時代・世話狂言傑作集各十五卷

■四百頁乃至四百八十頁校訂
■嚴密解說詳細挿繪豐富
■定價　參圓、送料八錢
■春陽堂發行

世話狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衞。
第二卷（同　）　天竺德兵衞。幡隨院長兵衞。酒屋。清玄。
第三卷（同　）　八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七、
第四卷（同　）　唐人殺し。堀川。野崎村。五大力。
第五卷（同　）　女歌舞伎。殿樣勘次。來山。名工柿右衞門、鼓の里、裏表心曲尺。（榎本虎彥集）
第六卷（同　）　累物語。白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷（同　）　め組の喧嘩。三人片輪。上野戰爭。松田の仇討。（竹柴其水集）
第八卷（同　）　朝顏日記。二人新兵衞。廓文章。梅の由兵衞。
第九卷（續刊）　大經師。お妻八郎兵衞。千兩幟。かしく六三。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）

時代狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　義經千本櫻。石切梶原。陣屋熊谷。蓮生物語。卅三間堂。
第二卷（同　）　高野山。嫗山姥。玉三。義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷（同　）　阿漕。菅原。板額。山門五三桐。
第四卷（續刊）　先代萩、國性爺。辨慶上使。蘭平物狂。彥山權現、
第五卷（同　）　忠臣藏。小野道風。六彌太。娘景清。
第六卷（同　）　廿四孝。平家女護島。宅兵衞上使。鎌倉三代記。
第七卷（同　）　ひらがな盛衰記。伊勢物語。岸姫松、輝虎配膳。
第八卷（同　）　伊賀越。阿古屋。盛綱。安達ヶ原。有職鎌倉山。
第九卷（同　）　一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）

日本はし
春陽堂版